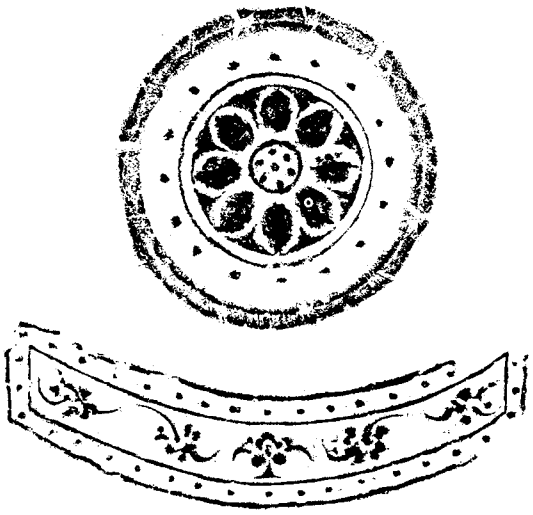
三重県埋蔵文化財調査報告　99－2

ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか



1992.3

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1．本書は平成３年度農業基盤整備事業にかかる松阪市ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡・下恵本遺跡と嬉野町宮野広遺跡の調査報告を第２分冊としてまとめたものである。

2．調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。

3．調査体制は下記によった。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査期間及び担当者　打田遺跡…平成３年４月22日～８月31日
主事　福田哲也　技師　泉　雄二

ヒタキ廃寺…平成３年６月７日～７月25日
主事　福田哲也　技師　泉　雄二

阿形遺跡…平成３年９月17日～平成４年１月11日
主事　福田哲也　主事　石川隆郎

下恵本遺跡…平成３年９月４日～９月12日
主事　吉澤　良

宮野広遺跡…平成３年９月24日～９月25日
主事　吉澤　良

4．調査にあたっては、三重県農林水産部農村整備課、松阪農林事務所、各土地改良区及び地元の方々、松阪市教育委員会に協力を頂いた。

5．ヒタキ廃寺の調査全般については、上原真人氏（奈良国立文化財研究所）の御指導・御助言をいただいた。また、瓦の文様の変遷については帝塚山大学考古学研究所主催の古代瓦の研究会の方々、建物については菅原洋一氏（三重大学）、山野善郎氏（三重短期大学）の御教示をいただいた。

6．本文で用いた遺構表示略記号は下記により、挿図の方位は全て国土座標第Ⅵ系座標北である。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＫ：土坑　ＳＥ：井戸　Ｐ：柱穴、小穴
ＳＨ：竪穴住居　ＳＸ：墓　ＳＤ：溝　ＳＺ：その他

7．掘立柱建物の柱穴を表記するのに以下の略号を用いた。建物の南東隅柱穴をイ１とする。

○ハ４　○ハ３　○ハ２　○ハ１↑
○ロ４　○ロ３　○ロ２　○ロ１
○イ４　○イ３　○イ２　○イ１
←

8．本書で報告した記録及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

9．各遺跡の整理・報告書作成は、調査担当者があたり、文末には報文の執筆者名を記し、文責を明記した。

また、以下の方々の御協力を得た。

足立　純子　　新井ゆう子　　石橋　秀美　　岩崎　道代　　柿原　清子

川方　裕美　　北山美奈子　　楠　　純子　　倉田由起子　　小池　洋子

小林佳代子　　須賀　幸枝　　杉原　泰子　　瀧川ひとみ　　武村　千春

豊田　幸子　　中村美智代　　中山　豊子　　西村　秋子　　浜崎　佳代

松月　浩子　　松本　春美　　森島　公子　　脇坂　栄子

前川　友秀（皇学館大学）　　水谷　芳春（立正大学）

山口　順也（奈良大学）

10. 本書作成以前に、既に現地説明会資料や年報等で中間的な報告を行っているが、それらと内容が異なる場合は本書をもって正式報告とする。

11.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．阪内川左岸周辺　位置と環境 …… 1
Ⅱ．松阪市阿形町　ヒタキ廃寺 …… 4
Ⅲ．松阪市岡本町　打田遺跡 …… 42
Ⅳ．松阪市阿形町　阿形遺跡 …… 85
Ⅴ．松阪市大河内町　下恵本遺跡 …… 187
Ⅵ．一志郡嬉野町　宮野広遺跡 …… 190

図　版　目　次

図版１　ヒタキ廃寺Ａ地区
Ａ地区瓦堆積層 …… 30
図版２　瓦堆積層軒先部
瓦堆積層軒先部 …… 31
図版３　瓦堆積層軒先部
瓦堆積層軒先部 …… 32
図版４　イ１柱穴瓦堆積状況
瓦堆積層鬼瓦出土状況 …… 33
図版５　ＳＢ１柱穴及び
瓦堆積層軒先部
ＳＢ１イ２柱穴断面 …… 34
図版６　ＳＢ１イ１柱穴断面
ＳＢ１ニ１柱穴断面 …… 35
図版７　出土遺物 …… 36
図版８　〃 …… 37
図版９　〃 …… 38
図版10　〃 …… 39
図版11　〃 …… 40
図版12　〃 …… 41
図版13　打田遺跡調査区東部
調査区中央部 …… 80
図版14　ＳＨ37・ＳＨ38・ＳＨ39
ＳＡ51・ＳＢ52 …… 81
図版15　ＳＢ86・ＳＢ96・ＳＢ87・ＳＨ83
ＳＢ89・ＳＢ90・ＳＢ91 …… 82
図版16　出土遺物 …… 83
図版17　〃 …… 84
図版18　阿形遺跡全景・南・中央・北東面調査区
北西面・ＳＤ103北側断面 …… 175
図版19　ＳＤ103遺物出土状況
ＳＤ103 …… 176
図版20　ＳＤ95・ＳＫ115・ＳＥ128
ＳＥ91・ＳＥ98・94・ＳＥ73
ＳＸ81・ＳＤ117石組 …… 177
図版21　出土遺物 …… 178
図版22　〃 …… 179
図版23　〃 …… 180
図版24　〃 …… 181
図版25　〃 …… 182
図版26　〃 …… 183
図版27　〃 …… 184
図版28　〃 …… 185
図版29　〃 …… 186
図版30　下恵本遺跡ＳＢ４ …… 189

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡地形図 …… 3
第３図　ヒタキ廃寺・打田遺跡調査区位置図 …… 4
第４図　Ａ地区遺構平面図 …… 5
第５図　瓦堆積地区周辺土層図 …… 6

第６図　ＳＢ１及び瓦堆積状況図 …… ７～８
第７図　瓦堆積状況図 …… ９
第８図　地区遺構平面図 …… ９
第９図　軒丸瓦拓影・実測図 …… 11
第10図　丸瓦拓影・実測図 …… 12
第11図　丸瓦拓影・実測図 …… 13
第12図　軒平瓦拓影・実測図 …… 14
第13図　平瓦拓影・実測図 …… 15
第14図　平瓦及び熨斗瓦拓影・実測図 …… 16
第15図　熨斗瓦及び隅切軒平瓦拓影・実測図 …… 17
第16図　鬼瓦等遺物実測図 …… 18
第17図　飛雲文変遷想定図 …… 21
第18図　瓦分布状況模式図（全調査区） …… 23～24
第19図　瓦分布状況模式図（瓦堆積層周辺） …… 25～26
第20図　打田遺跡遺構平面図 …… 43～44
第21図　ＳＨ45・ＳＨ94・ＳＨ95 ＳＨ36・ＳＨ37・ＳＨ38 ＳＨ39 …… 46
第22図　ＳＨ40・ＳＨ41・ＳＨ42・ＳＨ43 ＳＨ44・ＳＨ46・ＳＨ47・ＳＨ57 ＳＨ58 …… 47
第23図　ＳＨ70・ＳＨ71・ＳＨ74 ＳＨ83 …… 48
第24図　ＳＨ61 …… 49
第25図　ＳＨ54 …… 49
第26図　ＳＢ14・ＳＢ９・ＳＢ20 …… 50
第27図　ＳＡ51・ＳＢ52 …… 51
第28図　ＳＢ55・ＳＢ56 …… 52
第29図　ＳＢ89・ＳＢ90・ＳＢ91 …… 53
第30図　ＳＢ84・ＳＢ85・ＳＢ92 …… 54
第31図　ＳＢ４ …… 55
第32図　ＳＢ86・ＳＢ87・ＳＢ96 …… 56
第33図　ＳＢ93 …… 57
第34図　ＳＥ53 …… 57
第35図　ＳＢ80 …… 58
第36図　ＳＢ81 …… 58
第37図　ＳＢ97 …… 59
第38図　ＳＸ60 …… 59
第39図　遺物実測図 …… 65
第40図　〃 …… 66
第41図　〃 …… 67
第42図　〃 …… 68
第43図　〃 …… 69
第44図　飛鳥～奈良前期（１・２期） … 74
第45図　奈良後期～平安初期（３期） … 75
第46図　掘立柱建物（３－Ａ期） …… 75
第47図　掘立柱建物（３－Ｂ期） …… 76
第48図　掘立柱建物（３－Ｃ期） …… 76
第49図　平安前期～末期（４・５期） … 77
第50図　阿形遺跡調査区位置図 …… 85
第51図　弥生溝断面実測図 …… 86
第52図　遺構平面図 …… 87～90
第53図　ＳＤ103遺物出土状況 … 91～92
第54図　ＳＤ21及び溝上面出土遺物実測図 …… 96
第55図　ＳＤ36出土遺物実測図 …… 97
第56図　ＳＤ84出土遺物実測図 …… 98
第57図　ＳＤ95出土遺物実測図 …… 99
第58図　〃 …… 100
第59図　〃 …… 101
第60図　ＳＤ103出土遺物実測図 …… 103
第61図　〃 …… 104
第62図　〃 …… 105
第63図　ＳＤ103出土遺物実測図 …… 106
第64図　〃 …… 107
第65図　〃 …… 108
第66図　〃 …… 109
第67図　〃 …… 110
第68図　〃 …… 111
第69図　〃 …… 112
第70図　〃 …… 113
第71図　〃 …… 114
第72図　〃 …… 115
第73図　ＳＢ132・ＳＢ133・ＳＢ134 ＳＡ130 …… 133
第74図　ＳＢ136・ＳＢ137・ＳＢ138 …… 133

第75図　ＳＢ139・ＳＢ141・ＳＢ142
ＳＢ143・ＳＢ144 …… 134
第76図　ＳＫ115 …… 135
第77図　ＳＫ20 …… 135
第78図　ＳＢ135 …… 135
第79図　ＳＸ81 …… 137
第80図　ＳＫ74 …… 137
第81図　ＳＥ123 …… 138
第82図　ＳＥ128 …… 138
第83図　ＳＥ91 …… 139
第84図　ＳＥ94 …… 139
第85図　ＳＥ101 …… 140
第86図　ＳＥ73 …… 140
第87図　ＳＥ110 …… 140
第88図　ＳＥ83 …… 141
第89図　ＳＤ117集石遺構 …… 142
第90図　ＳＫ27集石遺構 …… 142
第91図　井戸平面実測図一覧 …… 143
第92図　出土遺物 …… 149
第93図　〃 …… 150
第94図　〃 …… 151
第95図　〃 …… 152
第96図　〃 …… 153
第97図　〃 …… 154
第98図　出土遺物 …… 155
第99図　地盤の比抵抗の測定原理 … 162
第100図　比抵抗の測定装置 …… 162
第101図　比抵抗探査結果 Ａ区 …… 163
第102図　〃 Ｂ・Ｆ区・ 164
第103図　〃 Ｃ区 …… 165
第104図　〃 Ｄ区 …… 165
第105図　〃 Ｅ区 …… 165
第106図　〃 Ａ～Ｆ区・ 165
第107図　遺構分布推定図 …… 166
第108図　地下レーダー探査測線位置・166
第109図　地下レーダー探査結果図 … 167
第110図　環濠の推定範囲 …… 167
第111図　試掘による出土遺物 …… 174
第112図　下恵本遺跡位置図 …… 187
第113図　遺跡範囲位置図 …… 187
第114図　調査区位置図 …… 187
第115図　Ａトレンチ遺構図 …… 188
第116図　ＳＫ出土遺物 …… 188
第117図　Ｂトレンチ遺構図 …… 189
第118図　宮野広遺跡位置図 …… 190
第119図　調査区位置図 …… 190
第120図　Ａトレンチ遺構図 …… 190

表　目　次

第１表　ヒタキ廃寺熨斗瓦の幅 …… 13
第２表　瓦の平均重量 …… 19
第３表　遺跡内全体の瓦類 …… 27
第４表　Ａ地区　地区別瓦分布 …… 27
第５表　Ｂ地区　地区別瓦分布 …… 28
第６表　瓦層　柱穴別瓦分布 …… 28
第７表　瓦層　柱穴別瓦分布 …… 29
第８表　打田遺跡竪穴住居一覧表 …… 60
第９表　掘立柱建物一覧表 …… 61
第10表　その他の遺構一覧表 …… 61
第11表　遺物観察表 …… 70
第12表　〃 …… 71
第13表　〃 …… 72
第14表　〃 …… 73
第15表　阿形遺跡弥生土器分類表１ …… 94
第16表　〃 ２ …… 95
第17表　弥生土器細部の名称 …… 116
第18表　弥生土器観察表１ …… 117
第19表　〃 ２ …… 118
第20表　〃 ３ …… 119
第21表　〃 ４ …… 120
第22表　〃 ５ …… 121
第23表　〃 ６ …… 122
第24表　〃 ７ …… 123
第25表　〃 ８ …… 124
第26表　〃 ９ …… 125
第27表　〃 10 …… 126
第28表　〃 11 …… 127

第29表　弥生土器観察表12 …… 128
第30表　〃　13 …… 129
第31表　〃　14 …… 130
第32表　〃　15 …… 131
第33表　掘立柱建物一覧表 …… 132
第34表　柵一覧表 …… 132
第35表　溝一覧表 …… 135
第36表　土坑一覧表 …… 136
第37表　井戸一覧表 …… 138
第38表　遺物観察表 …… 156
第39表　〃 …… 157
第40表　〃 …… 158
第41表　〃 …… 159
第42表　〃 …… 160
第43表　探査装置仕様 …… 162
第44表　測定数値表 …… 162
第45表　下恵本遺跡遺物観察表 …… 189

Ⅰ．阪内川左岸周辺　位置と環境

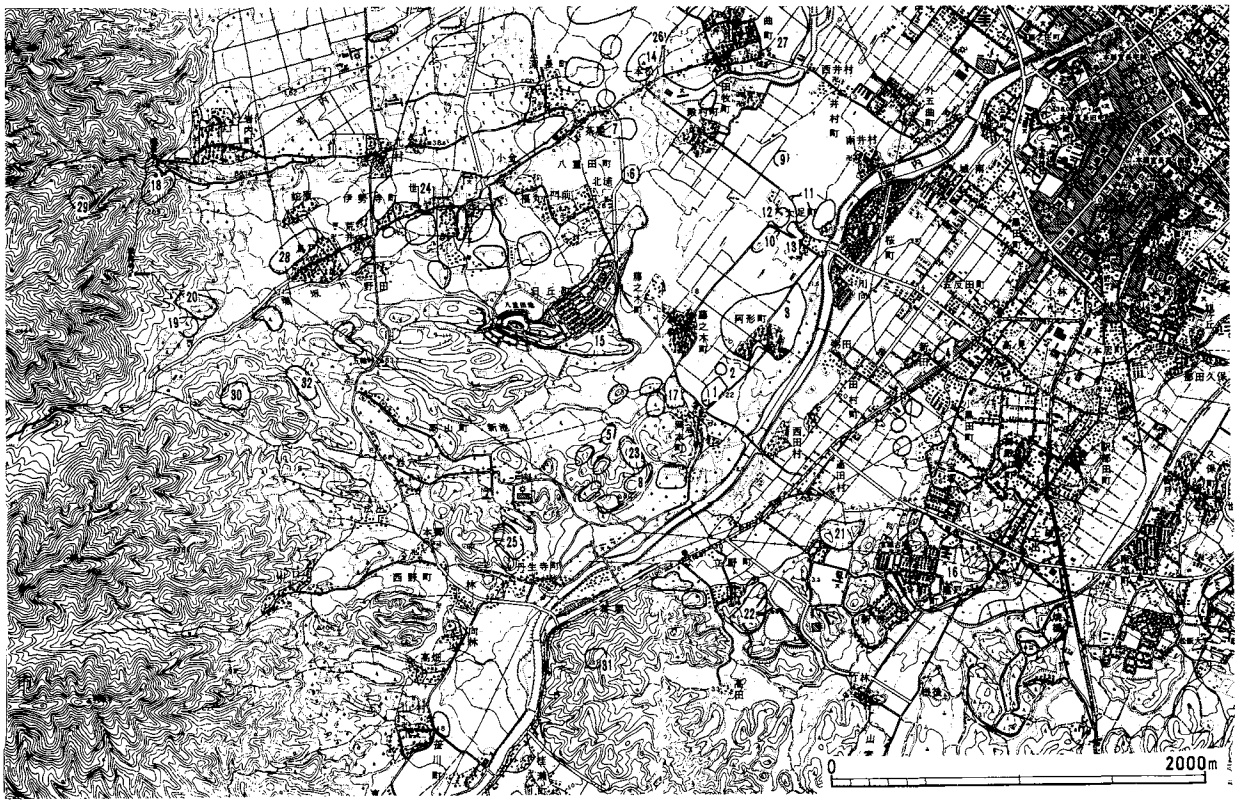
伊勢平野のほぼ中央部に位置する松阪市には、西の堀坂山系に源を発する中小河川が東流し伊勢湾に注ぐ。北から順に三渡川、岩内川、堀坂川、阪内川等があり、南北に長い複合扇状地を形成している。現在の松阪市街地西部にあたるこの地域には、多くの遺跡が分布し、早くから開拓された地域と考えられる。[1] 松阪の秀峰堀坂山とその南方の白猪山によって作られる谷筋に源を発する阪内川は扇状地を形成している。打田遺跡（1）、ヒタキ廃寺（2）、阿形遺跡（3）は標高20m程で、その扇状地の扇央部に位置している。主な地目は水田となっている。この地域を時代別に概観してみよう。

〔**縄文時代**〕阪内川の対岸には、前期の爪形文土器を採集する新田町遺跡（4）や、岡本町の山中には中期中葉の竪穴住居が検出された追上遺跡（5）などが見られる。[2]

〔**弥生時代**〕阿形町の北東、約5kmに一志郡三雲町の中ノ庄遺跡がある。この遺跡からは、県下で最も古い遠賀川系土器が出土している。この拡散ルートの影響か、中期になると遺跡数は急増する。田高田遺跡（6）、城垣戸遺跡（7）、後期には川井町遺跡やパレススタイルの壺形土器が出土した蛸遺跡などが付近にはあるが、特に岡本町にある川原表B遺跡（8）は後期初めの竪穴住居が6棟検出されている。[3] この時期の遺跡としては、草山遺跡が市内では有名である。阪内川の対岸約3kmにあるこの遺跡は、松阪南部を東流する金剛川水系の台地上に位置し、多数の弥生土器とともに、竪穴住居百余棟・小銅鐸などが出土し注目されている。[4]

〔**古墳時代**〕前期の遺跡として、阿形遺跡に隣接する大足町の大足遺跡（10）、角出遺跡（11）、ハサマ遺跡（12）、桜垣戸遺跡（13）がある。[5] S字状口縁の甕や二重口縁の壺形土器等が出土しているが、これらの遺跡は近接しているため一体のものであろう。近在する深長古墳（14）は、八重田丘陵を越えた堀坂川沿岸に位置し、二重口縁の底部穿孔の壺形土器が、墳丘の周囲に並んで多数出土している。[6]

中期になると八重田古墳群（15）や全長95mで伊



第1図　遺跡位置図（1：50,000）（国土地理院　松阪、大河内　1：25,000から）

勢国最大の前方後円墳を含む宝塚古墳群（16）、帆立貝式古墳のある高地蔵古墳群（17）などが造られる。規模の卓越した古墳が、この地域に集中していることは、かなりの有力者が存在していたことを想像させる。

後期になると、平野が望める丘陵部には、瑞巌寺（18）、上文珠（19）、下文珠（20）、田村（21）、立野（22）、などの小人数の協同で造墓できる群集墳が出現して，その総数は100基を越える。形象埴輪が多く出土した常光坊谷古墳群（23）は、当時の生活様式を知る上で貴重であろう。[7]

この時代の須恵器などの遺物が散布する地域は、概ね伊勢寺地区とその周辺に多い。遺跡の実態については不明であるが、丘陵部の古墳とのつながりが推定できる。

〔飛鳥～平安時代〕伊勢寺廃寺（24）や丹生寺廃寺（25）は創建時期を白鳳期に比定することが出来る。前者は東西150m、南北180mの東西南北の方位にのった方形の地割が残り、調査によって寺域を区画する溝も検出されている。遺物としては、複弁蓮華文の軒丸瓦や重弧文の軒平瓦など多数の瓦類をはじめ、奈良三彩の須弥山と思われるものも出土している。[8] 丹生寺廃寺も伊勢寺廃寺と同じような布目瓦が散布し、方形台地状の区画や低い土塁遺構が残っている。また、阪内川の対岸には丹生寺廃寺に供給した立野瓦窯跡もある。この時期の寺院建築は、権力の象徴であって在地権力の基盤がこの付近にあったことが伺えよう。奈良時代中頃から平安時代にかけて、中央で活躍し文献にその名を残す、「飯高氏」の本拠地が現在の阿形町付近であるとする説もあるが、現在までのところ裏付ける資料は見つかっていない。[9]

平安時代の書物『和名類聚抄』には、立野郷や英太郷、上牧郷などの記述があるが、当地域では立野郷は現在の立野町に、英太郷は現在の阿形町にそれぞれ比定されている。[10] また阿形町や殿村町、曲町周辺にほぼN30°Eの方位にのっとった古代条里制をしのばせる地割が残っている。現在判明している集落遺跡は、時代をまたぐ複合の遺跡が多い。木製人形が多数出土した杉垣内遺跡（26）[11]、巨木をくり抜いた井筒が検出された曲遺跡（27）[12] などは、おおよそ奈良時代から室町時代までの複合遺跡である。他に奈良時代から平安時代の鳥戸遺跡（28）[13]、出口遺跡などもあげられるが、いずれも古代の竪穴住居や中世の掘立柱建物等の遺構が多数検出されている。このことはこの付近が古代から中世まで継続的に営まれた集落が存在していた、とも言えよう。ただ、その地域を支配するほどの有力者の存在をにおわす建物群の発見は、いまだ見られない。

〔鎌倉・室町時代〕鎌倉時代以降には、伊勢神宮の神領としての井村御厨、岩内御厨、勾御厨などの地名が「神鳳鈔」に見られる。また、室町時代になると伊勢国司北畠氏の支配下におかれ、岩内城（29）、伊勢寺城（30）、立野城（31）、船江城などがつくられた。これらのことは、鎌倉時代・室町時代を通してこの地域にかなりの人口が集中していたであろうことを想像させる。昭和60年伊勢寺町横尾で発掘調査された横尾墳墓群（32）は、一つの広大な尾根全体が墓域となっており、[14] 室町時代を中心とした五輪塔が多数出土した。よって、同地域と横尾墳墓群との関連も注目させるのに十分である。

以上、阪内川周辺地域について概述したが、古代から中世を通してこの地域の歴史的重要性を垣間見ることができよう。

［註］

① 松阪市教育委員会『松阪市史』巻二資料編　1978

② 松阪市教育委員会『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告』　1990

③ 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』　1982～1985

④ ②に同じ

⑤ 1989年から1991年にかけて三重県埋蔵文化財センターの調査による

⑥ 三重県教育委員会『深長古墳』「昭和61度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ」　1989

⑦ ②に同じ

⑧ 1989年三重県埋蔵文化財センターの調査による

⑨ 『近長谷寺資財帳』によると平安時代初期に当寺に飯高氏が寄進した領地を見ると、不明の地名に混じって、「櫛田川」・「丹生」の名称が頻出する。従って、この櫛田川周辺や現在の勢和村丹生のあたりには勢力が及んでいたことは推定できよう。

⑩ 池辺弥『増訂版和名類聚抄考證』吉川弘文館　1970

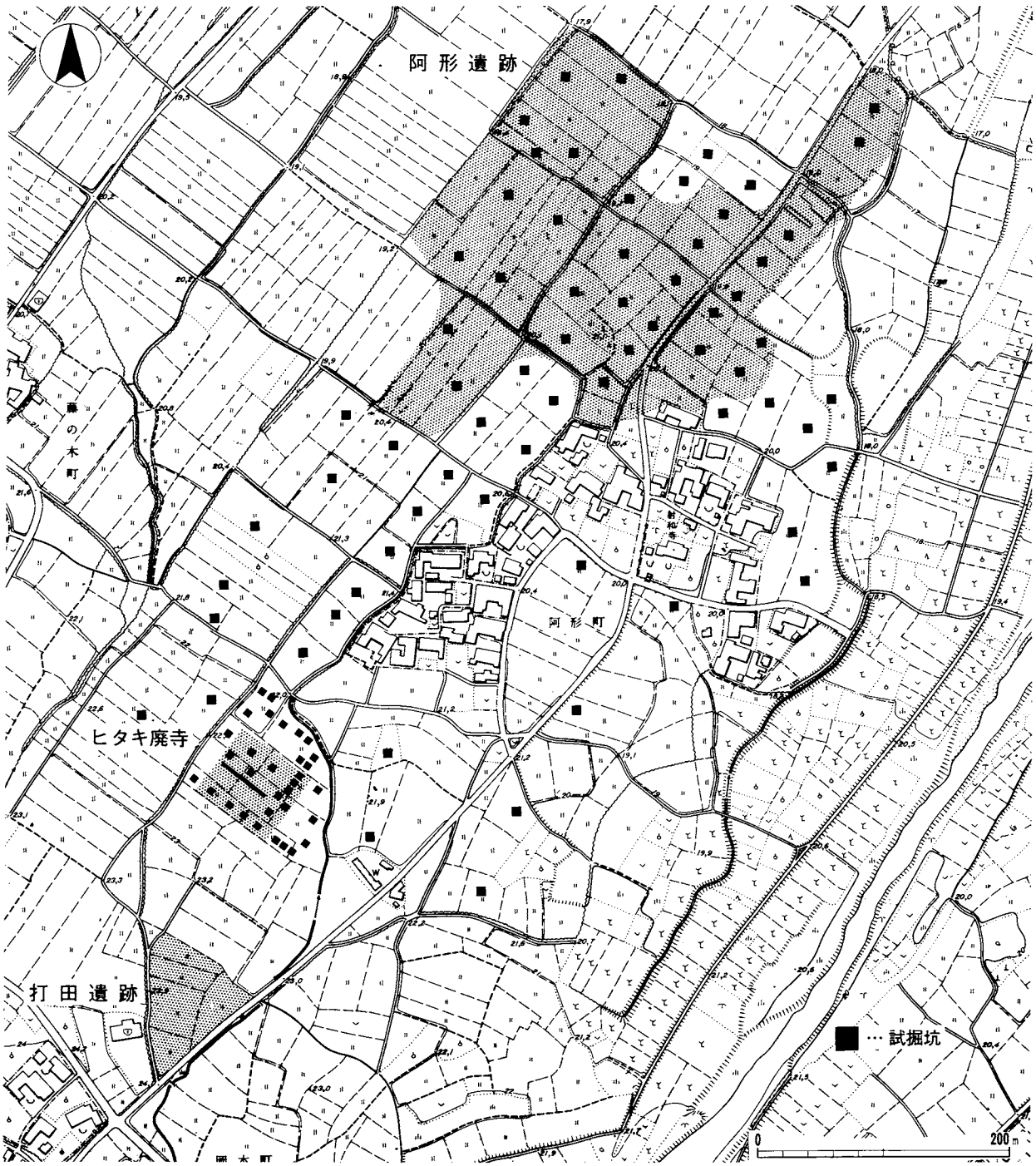
⑪ 三重県教育委員会『杉垣内遺跡』「昭和61度農業基

盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ」 1989

⑫ 松阪市教育委員会『曲遺跡』「県道丹生寺一志線及び県道合ケ野松阪線改良工事敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 1989

⑬ 三重県埋蔵文化財センター『鳥戸遺跡発掘調査報告』1989

⑭ 三重県教育委員会『横尾墳墓群』「近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」 1986



第２図　遺跡地形図（１：5,000）スクリーントーンは調査前の遺跡範囲

Ⅱ. 松阪市阿形町　ヒタキ廃寺

1. 遺　構

ヒタキ廃寺は地元の人々の伝承にもなく、平成３年度県営ほ場整備事業に伴う、分布調査によって確認された新発見の遺跡である。

今回の調査は事業により削平をうける約800㎡を対象にした。調査区は大きくＡ・Ｂの２地区に分けられる。

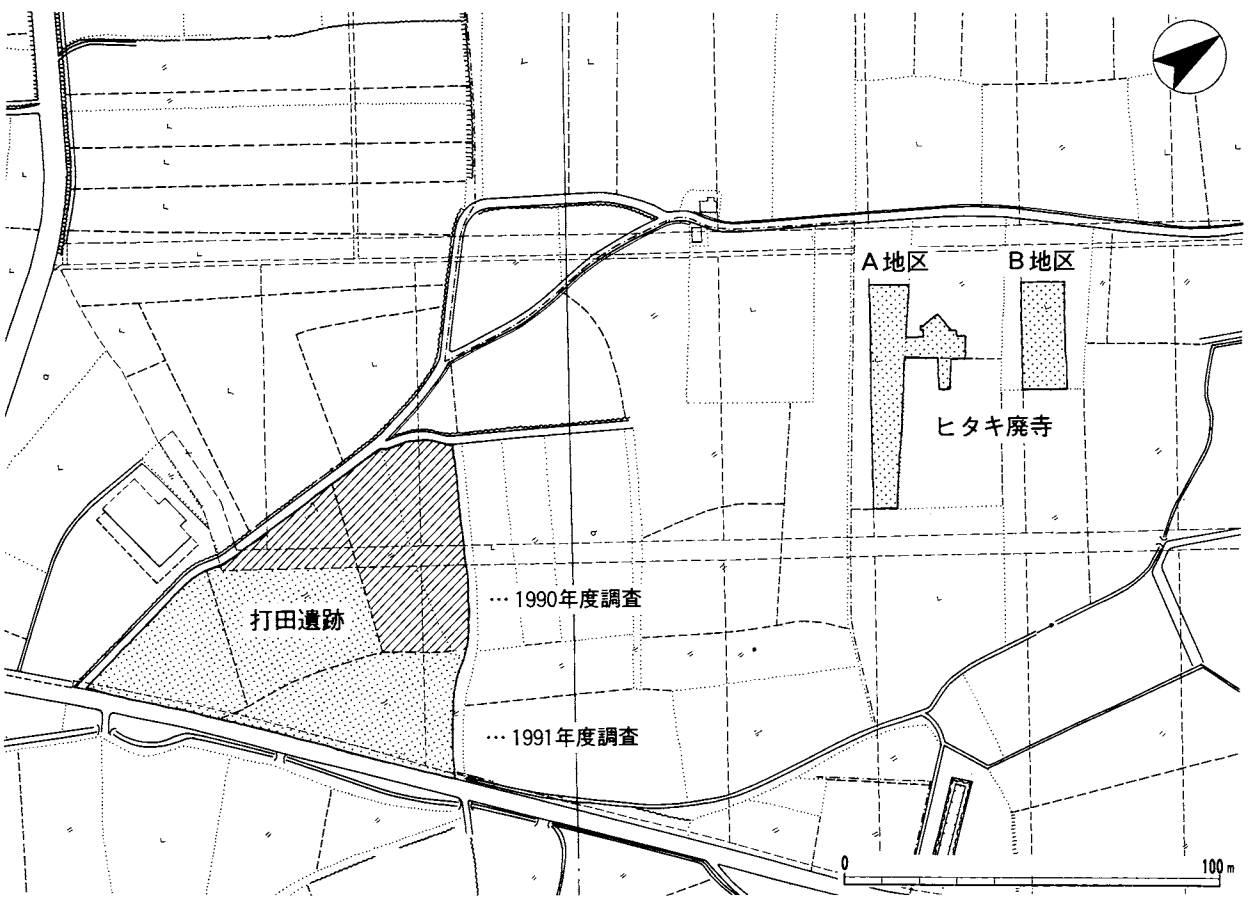
Ａ地区

Ａ地区の基本層序は上から青灰色粘質土（耕土）、黄灰色砂質土（包含層）、灰色砂質土（地山）となる。地山直上から耕土上面までの高さは35～40㎝と浅い。

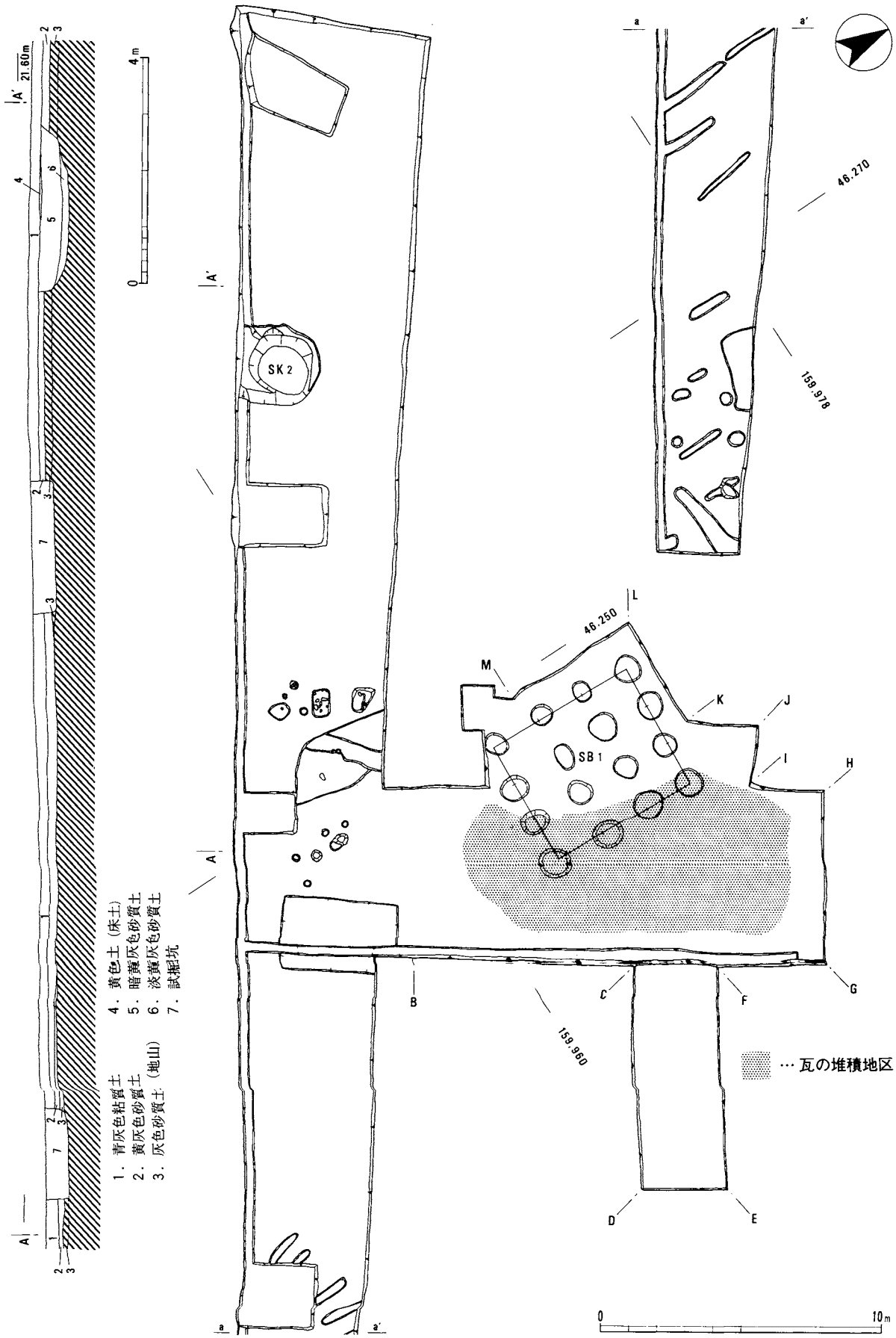
主な遺構として、ＳＢ１とＳＫ２がある。その他ピットもいくつか検出したが、建物にはならない。また、耕土から浅いためか近年の耕作溝らしいものも、数条確認した。

ＳＢ１　桁行5.4m（1.8m等間）梁行4.5m（1.5m等間）で、棟方向は真北であり、南北にやや長い３×３間の建物である。周囲に瓦が多数堆積していることや、付近に他の建物が見られないなどから瓦葺き建物であろう。

建物の東側にある瓦の堆積層の一部に軒先を揃えて裏返っているところが見える。また、軒丸瓦の玉縁部は建物の側にあるが、軒先に続く瓦は細片が多い等の理由で、明確には確認出来なかった。柱穴の大きさは60～70㎝で、すべてほぼ円形を呈する。深さはいずれも約70㎝程で、柱穴にはロ２柱穴の１カ所を除きすべて柱穴に中程まで瓦が詰められていた。上面や断面から見た限りでは、瓦は丁寧に置いたというより,捨てたという印象である。柱穴の埋土はいずれも地山の砂に比べ、やや粘質っぽい砂である。断面の土層は調査員２名が丹念に少しずつ下げながら検出したが、はっきりした層位は確認出来なかっ



第３図　調査区位置図（１：2,000）



第４図　Ａ地区遺構平面図（１：200，土層図は１：100）

1．攪乱　　3．暗黄灰色土　　5．淡灰色砂質土　　7．灰色土　　9．礫混灰色砂質土（地山）
2．暗灰色土（耕土）　　4．黄色土（床土）　　6．黄色砂質土　　8．黄灰色土

第５図　瓦堆積地区周辺土層図（１：40）

瓦堆積層軒先（1：20）

第6図　ＳＢ１及び瓦堆積状況（1：40）

た。柱穴の断面から見るかぎり、版築をして礎石を置いたというようには見えない。掘立柱建物の可能性が大であろう。建物は瓦の特徴や、瓦の堆積層や柱穴からの土器から見て奈良時代後期に属すると思う。

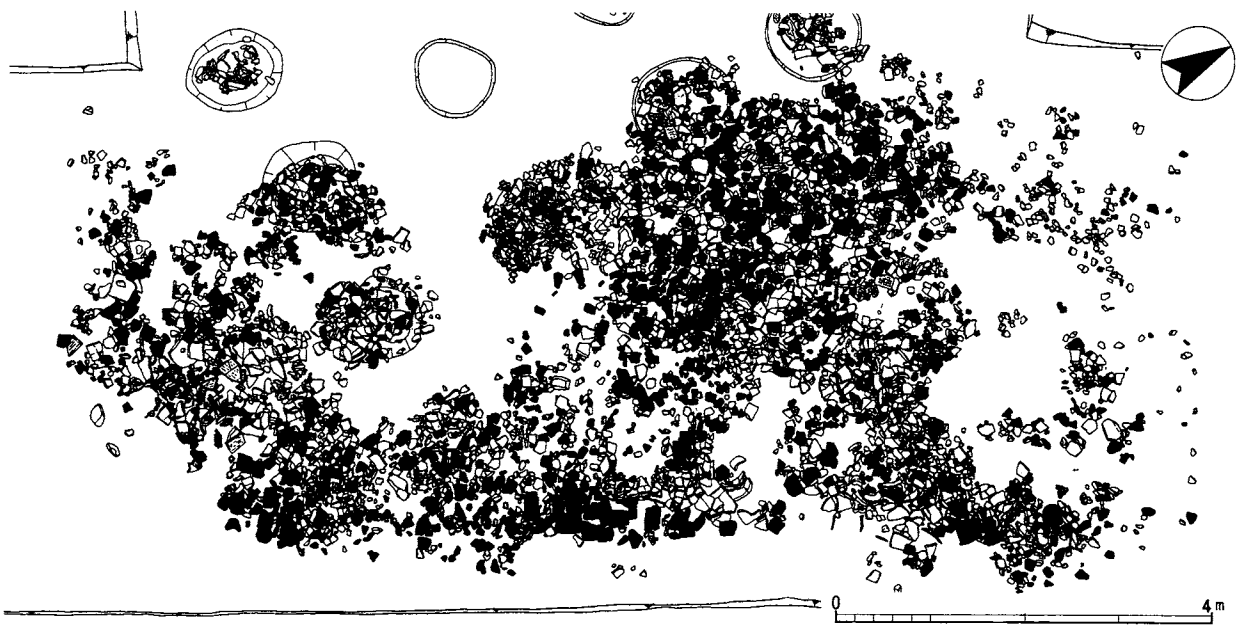
建物の周囲には砂地の地山という点もあり、雨落ち溝は残っておらず、調査区内に柵らしいものも見当たらなかった。

図７は瓦の堆積層の瓦の表と裏を表したものである。表は白抜き、裏返っているものは黒で塗りつぶした。この表で見ると図中央下辺の一線が黒く並んでいるのがわかる。

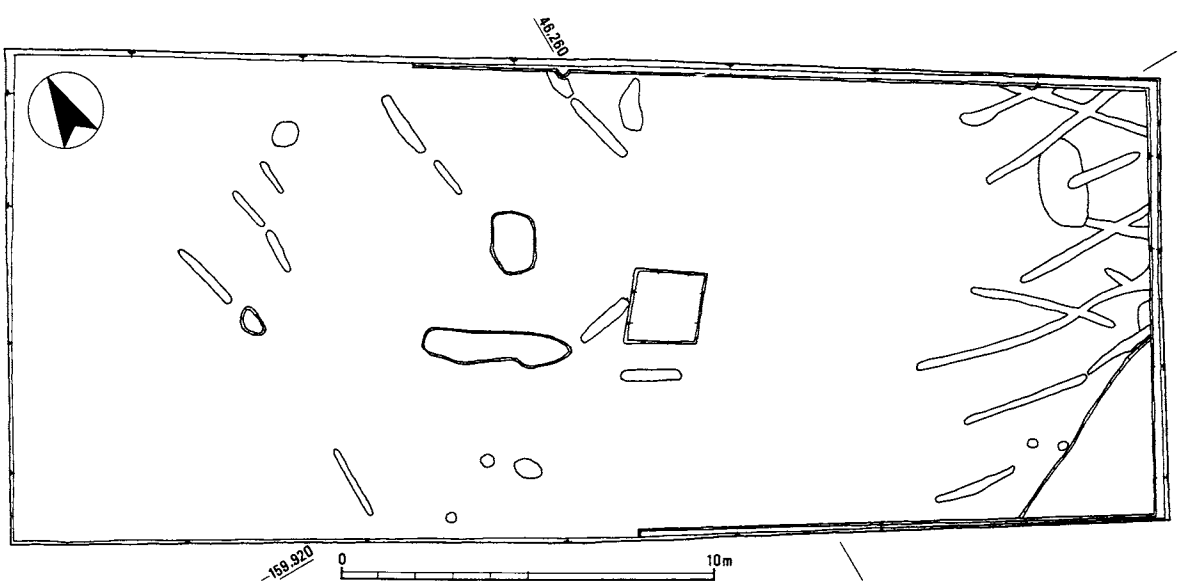
ＳＫ２　径約３ｍ、深さ約1.4mのやや角張った円形の土坑である。出土遺物に瓦片、輪花のある山茶椀などがあり、平安時代末のものであろう。

Ｂ地区

Ｂ地区の基本層序は青灰色土（耕土）、黄灰色砂質土（包含層）、灰色砂質土（地山）で、地山直上から耕土上面までの高さは約40cmである。この地区では主な遺構は見当たらず、耕作溝らしいものが数条あるのみである。ただ、ＳＢ１のものと思われる瓦片が調査区東部付近から多数見られた。



第７図　瓦堆積状況（１：80）　白：表面，黒：裏面



第８図　Ｂ地区遺構平面図（１：200）

2．遺　物

調査により出土した遺物は、コンテナバットにして、約360箱分ある。このうち、瓦類はその99％をしめる。瓦類のうち90％は丸・平瓦で、残りの10％程度が鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦等である。

軒丸瓦　当遺跡では二種類に型式が分かれる。すなわち、A類単弁八葉蓮華文軒丸瓦とB類単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。A類は総数185点、B類は9点と圧倒的にA類が多い。軒丸瓦は蓮弁や珠文の数の残りから残存する個体数を推定できる。すなわち、A類であれば蓮弁が2枚分残っておれば、1／4個体とし、B類であれば蓮弁が2枚分残っておれば、1／8個体とする。そのようにして、軒丸瓦の合計個体数は調査区内から、32.78個体分出土している。

（1）ＳＢ１出土遺物

軒丸瓦

A類（1～3）　蓮子は1＋6と配され、中房は小さい。八葉の蓮弁は短く、肉厚で、中央に稜線を入れる。外区内縁の珠文は、蓮弁と間弁の延長上に配される。瓦当から玉縁尻までの長さは約42.0㎝、瓦笵径は約16.4㎝、玉縁の最大長は約6.4㎝となる。成形方法は粘土塊を横方向の成形台に置き、瓦当部頭に粘土塊をたす。そのため、粘土板の痕跡である糸切り痕が見られない。瓦当部と丸瓦部の接合痕は認められないため、一本造りの手法であろう。

瓦笵をかぶせたまま丸瓦部にヨコ方向のケズリを施すため、瓦笵痕跡の後方からケズリがはじまる。玉縁部はケズリ出しの方法をとり、刀子痕跡が残るものも見られる。また、瓦当部に離れ砂の痕跡と思われるものが一部に残る。瓦当部裏面は概して胎土のいいものはタテケズリ、胎土の悪いものはナデとなっている。（1）はナデているもの、（2）はタテケズリのものである。（3）はA類の瓦笵を2回押し直しているものである。

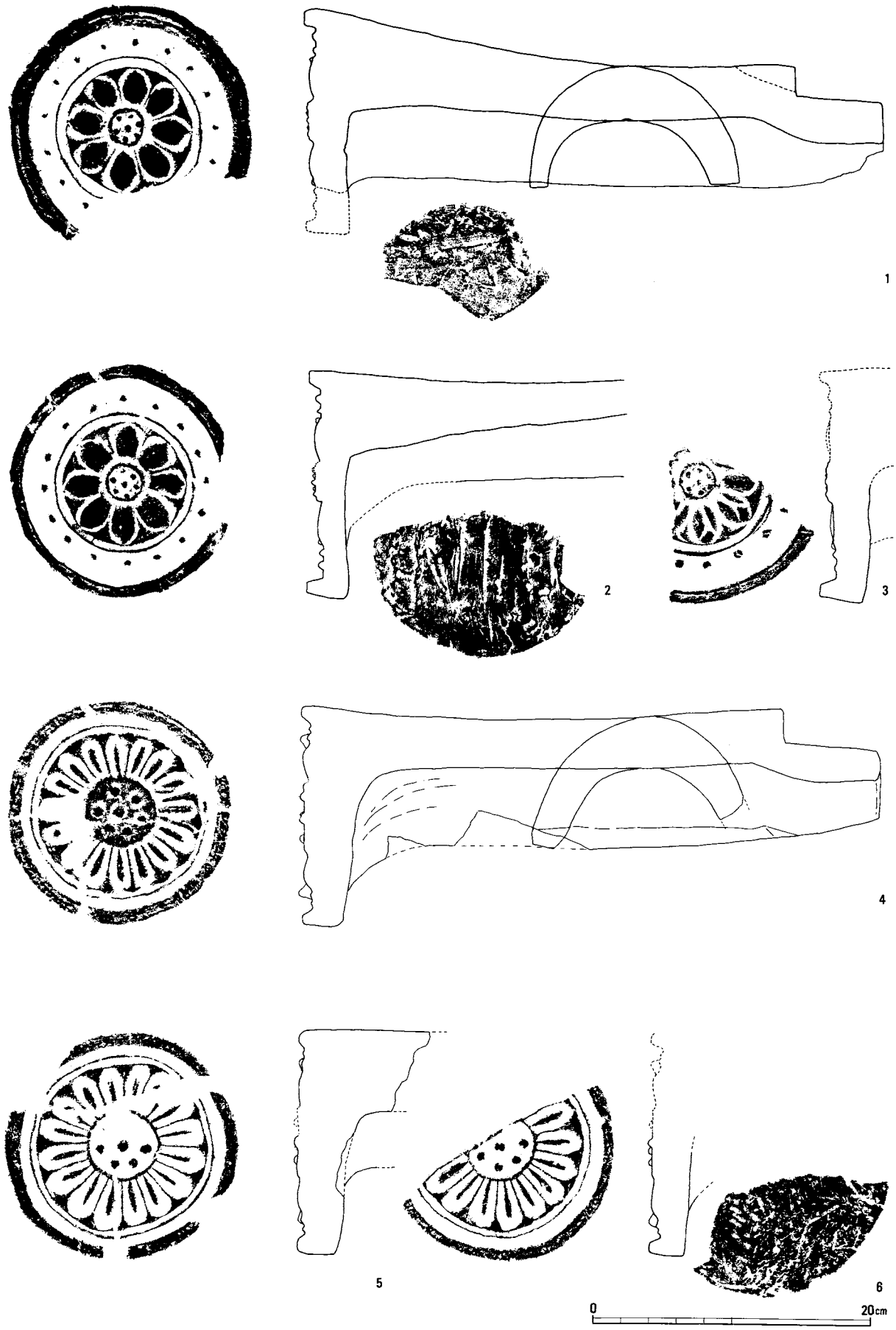
B類（4～6）　蓮子は1＋6でA類と共通するが、中房はA類よりもやや大きい。蓮弁は子葉をもつ16弁の細弁であり、稜線はなくやや丸みをもつ。間弁は直立的に立ち上がる。また、A類の珠文に代わって界線となる。B類は抽出点数が少ないが、瓦当から玉縁尻までの長さは41.5㎝、瓦笵径は約16㎝、玉縁の最大長は6.8㎝となる。成形方法はA類と共通する。A類に比べ圧倒的に少ないので補足的に使用されたものと思われる。

丸瓦（7～9）　出土した丸瓦はすべて玉縁式のものである。6,716点に及び重量は946,380ｇあった。いずれも桶巻き造りの成形法をとる。ビン型の桶に粘土板を巻きつけ、肩土を胴部尻に補強して、玉縁の背と段差をつける。タタキの後ナデ調整してタタキメを消している。その後、桶原体をはずし、内面から刀子のような鋭利なもので胴部頭から玉縁の方向に切り口をつける。そして、ある程度乾燥してから2つに割る。胴部頭から玉縁尻までの最大長は37.5㎝、内径の最大幅は13㎝前後、玉縁の最大長は約7.2㎝となる。1点だけではあるが、（8）は玉縁部が剥離しており、粘土紐巻き上げの可能性をもつものもある。（9）は丸瓦の玉縁部であるが、中央部に裁断面があり、両端が破断面となる。恐らく鋭利なもので切り口を入れ玉縁部まで引いた時、切り口が外面に突き抜けたものと考えられる。

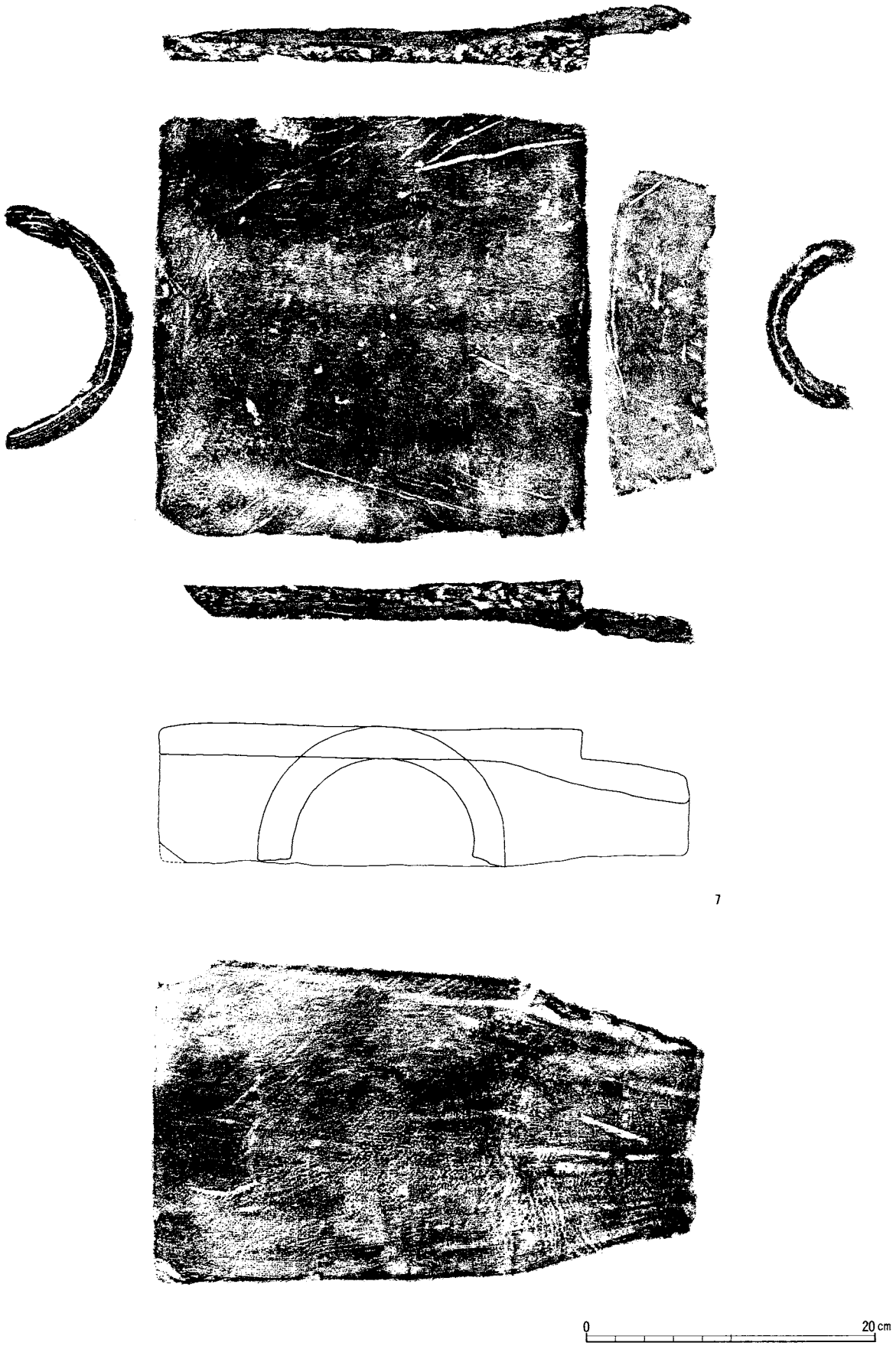
軒平瓦（10）　軒平瓦は当遺跡では、総数131点出土しているが、いずれも飛雲文系と思われるが、花を雲で飾ったような文様をもつ。笵の文様は内区の中心飾りは、花菱の祖形のようなデザインであり、宝相花のような茎をつけ、両側に雲で飾っている。左右両側に非対称の雲形が2対ある。また、外区にそれぞれの雲に上下3つずつ、両端に4つずつ珠文をもつ。雲、花菱の茎は軒丸瓦A類と同じく肉厚的で中央に稜線をもつ。成形方法は、粘土板糸切りで、糸きり段階で瓦当部頭は粘土を厚く切っているので、曲線顎となる。最大長は40.5㎝、瓦当頭部幅は約28.0㎝となる。凸型成形台に粘土をのせ笵を押すが、凸面のケズリは笵をはずしてからおこない、最後にタタキをいれる。タタキの原体幅は15本／㎝である。

軒平瓦も中心飾りと左右の4つの雲の残り具合から残存度を計算することにより、残存個体数がわかる。その結果、27.75個体分の軒平瓦を数えた。

平瓦（11・12）　長辺36㎝、短辺28㎝とほぼ規格性をもっている。いずれも瓦凹面には粘土板糸切り痕が見られると同時に、凹面の中心線上の2ケ所に1㎝×1.5㎝程の方形の突起部がある。突起部間の距離はいずれも約11㎝程度になる。加えて、一部に



第９図　軒丸瓦拓影・実測図（１：４）



第10図　丸瓦拓影・実測図（１：４）

布の端が見られることから一枚造りの手法であると思われる。凸面の端部および側部のケズリがすべて左から右方向に、つまり成形台の上から見ると、すべて左回りの方向にケズリがなされている。そのため、成形台は回転台を使用していると思われる。また、凸面の成形台の後、凹面調整台の使用痕跡がある。凸面タタキのための離れ砂の使用痕跡も一部に見られるものもある。(12) は部分的な細片のため詳細は不明であるが、幅約8.4cmのところで一面は裁断され、もう一面は直線の切り口が入り、破面となっているものである。

熨斗瓦 (13〜16)　側面の生きているもので総点数は36あり、重量にして31,540ｇになる。いずれも平瓦を鋭利な刀子様のもので半裁してつくっている。そのため小破片の場合、平瓦と熨斗瓦の区別がつきにくい。両面の生きているもので、幅は12〜16.5cmと幅があるが13〜14cmのものが、もっとも多い。(13) は粘土の付け足しの見られるもの、(15) は平瓦の時に見られた突起をもつもの、(16) は布目の端部が見られるものである。

隅切軒平瓦 (17)　この隅切軒平瓦は他に２点程見つかっているが、いずれも凹面凸面の両方から打ち欠いた痕跡が残る。

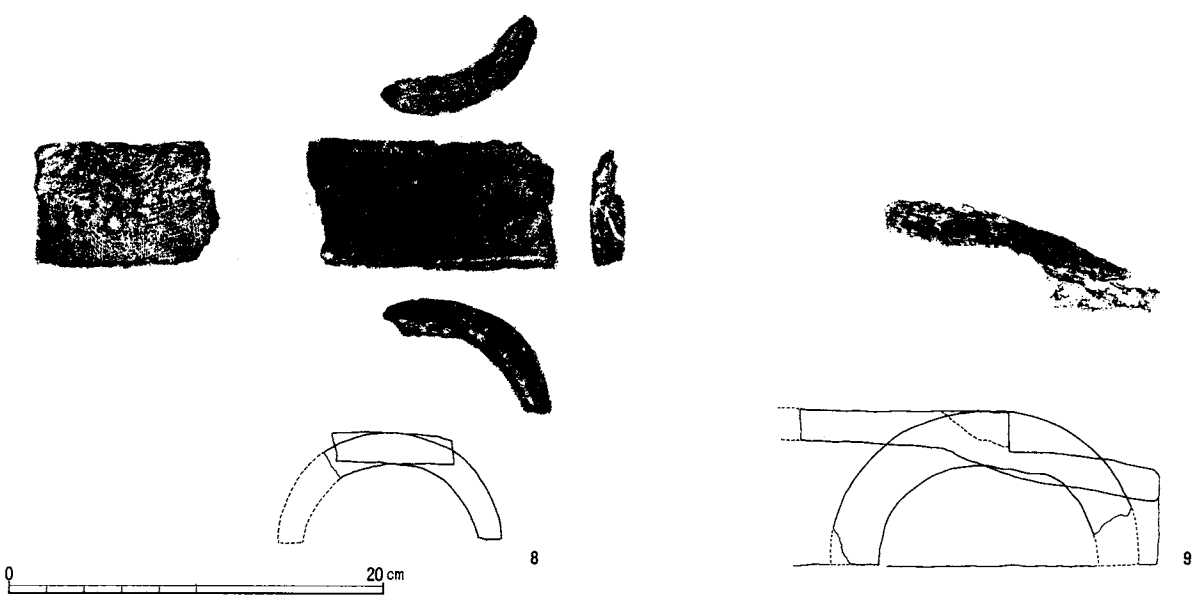
鬼瓦 (18)　破片を含めて12点出土している。それぞれの造りの特徴から全部で２個体以上の鬼瓦が存在したことが想像できる。いずれも、手造りの手法で成形してある。最も残りの良いもの (18) は、縦30cm、横35cm、最大厚みは7.6cmあった。赤褐色を呈し、両目と鼻の間に釘止めの穴があり、穴に鉄銹が残る。刻線で髪の毛や眉毛、口髭なども表現する。鬼面や刻線の割りつけ、釘止めの穴にそれぞれゆがみがある。

	端部あり	端部なし
幅 (cm) 12,0…	0	2
12,5…	0	1
13,0…	4	1
13,5…	4	1
14,0…	3	5
14,5…	1	1
15,0…	2	2
15,5…	1	0
16,0…	1	0
16,5…	1	0

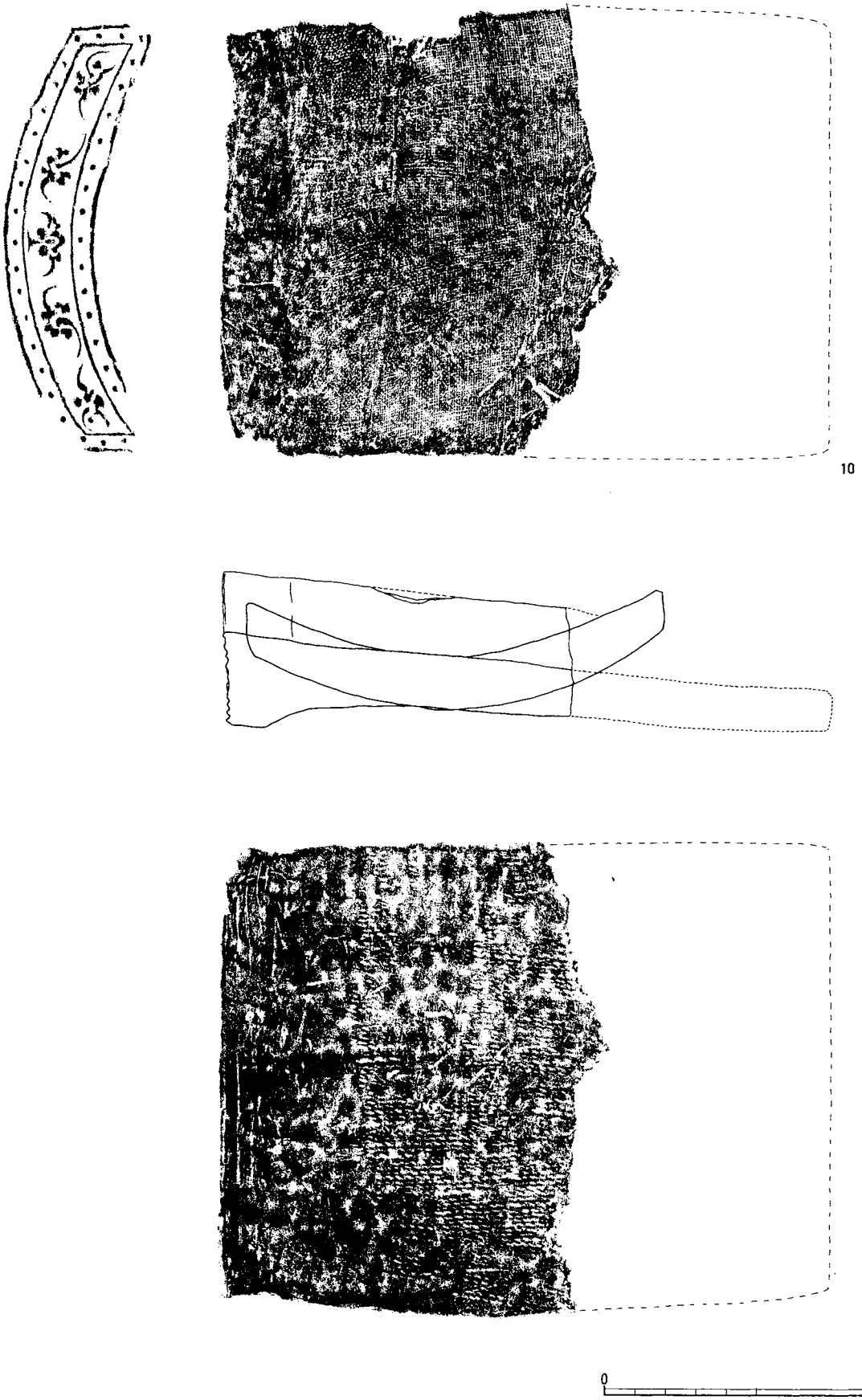
表１　熨斗瓦の幅

土器 (19〜22)　遺跡内からコンテナバットにして約５箱分出土している。うち、瓦堆積層及び柱穴から２箱分出土している。瓦層の土器はいずれも奈良時代中期から後期に属するものである。

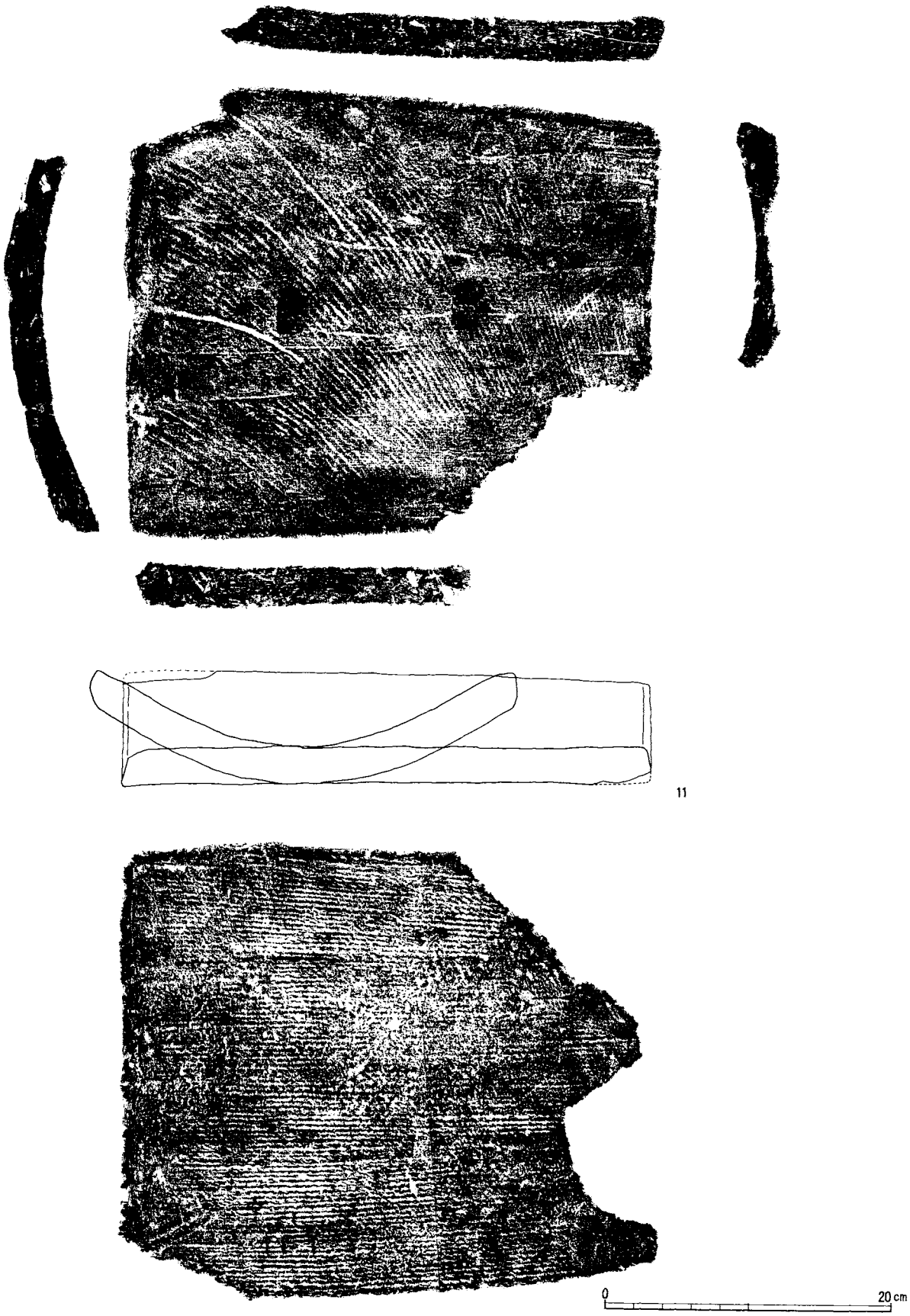
①土師器椀 (19) 口径12cm、器高４cmで、口縁部ヨコナデ、外面底部ナデの調整を施す。粘土接合痕が



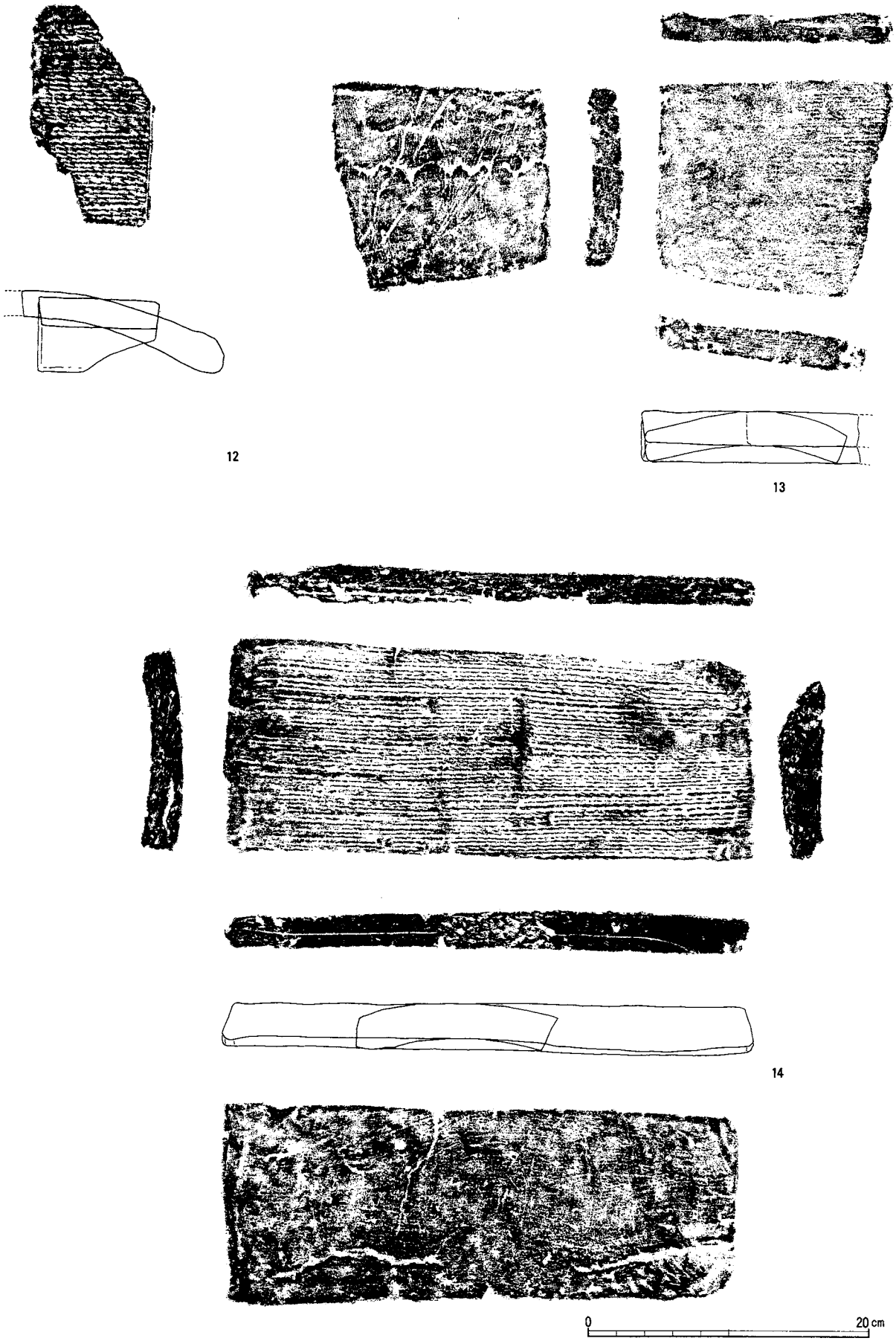
第11図　丸瓦拓影・実測図（１：４）



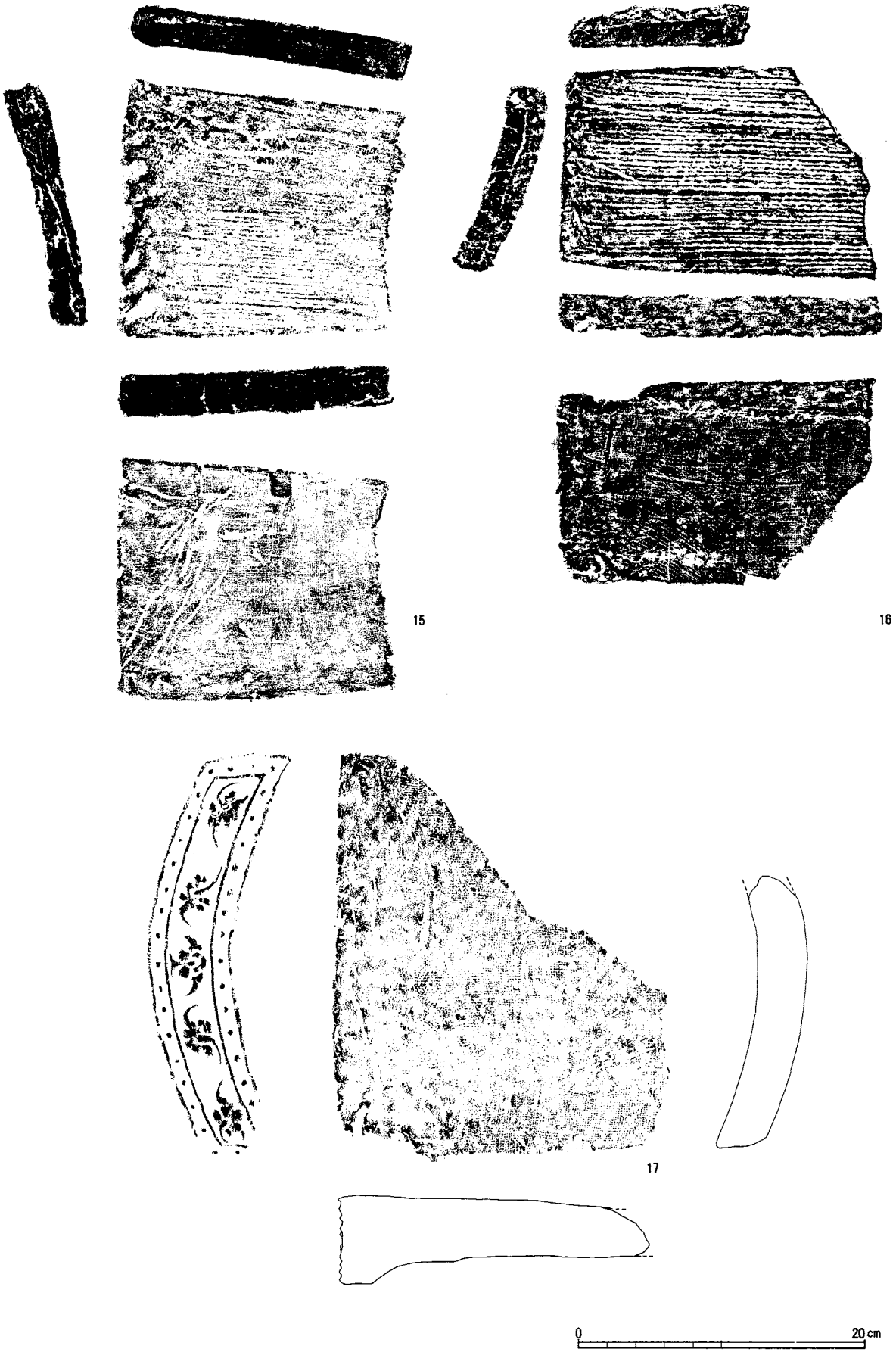
第12図　軒平瓦　拓影・実測図（１：４）



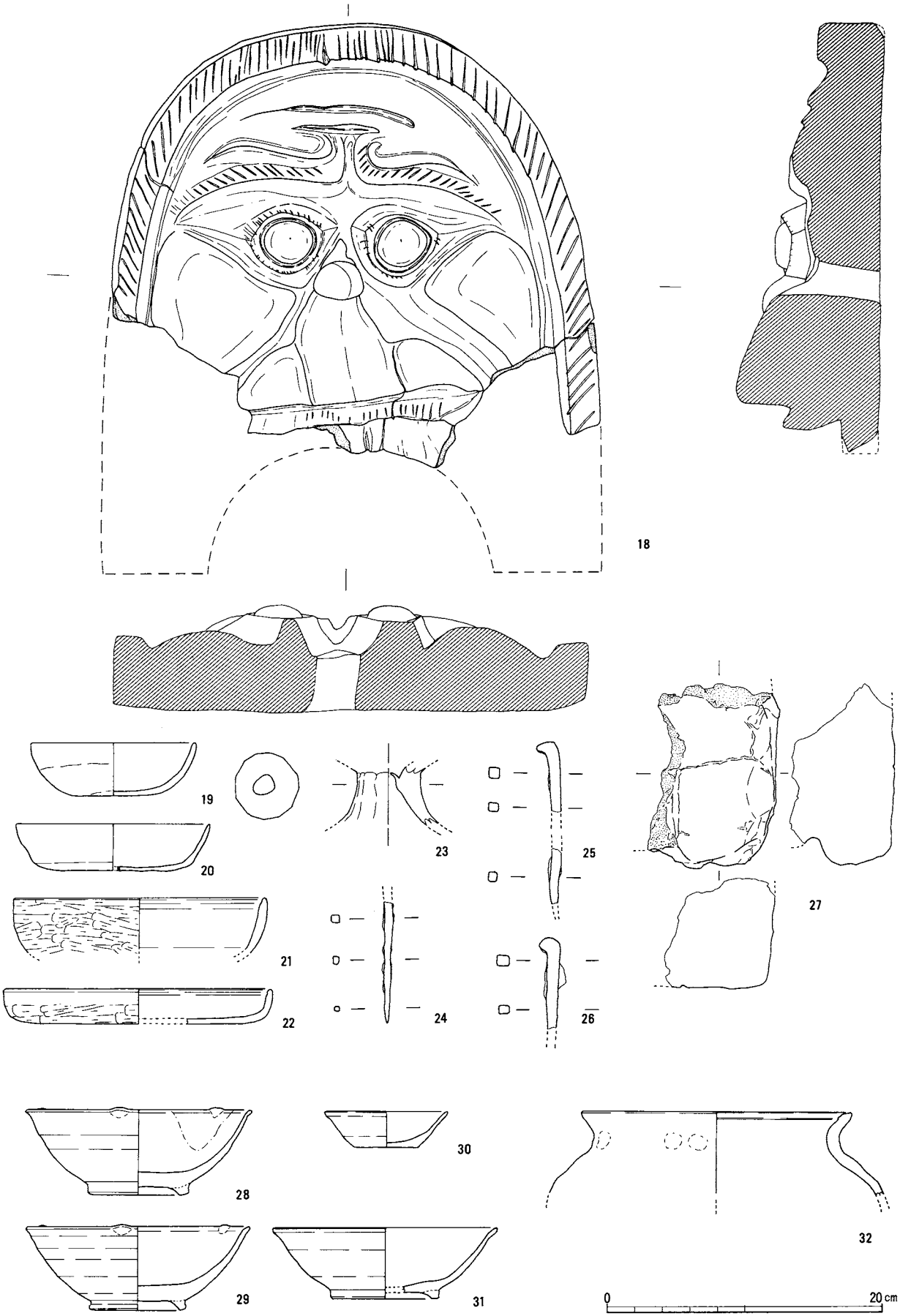
第13図　平瓦　拓影・実測図（1：4）



第14図　平瓦及び熨斗瓦　拓影・実測図（1：4）



第15図　熨斗瓦及び隅切軒平瓦　拓影・実測図（1：4）



第16図　遺物実測図（１：４）

見える。口縁端部は直上を向く。

②土師器杯（20）口径14cm、器高3.2cmで、口縁部ヨコナデ、外面底部ナデとなっている。口縁端部はやや直線的に上方やや外を向く。

③土師器杯（21）口径18.4cm、推定器高4.8cmで、外面口縁部までヘラケズリを施す。

④土師器皿（22）口径19.2cm、器高2.4cmで、口縁部ヨコナデ、外面体部から底部にかけてヘラケズリの皿である。

鉄釘（24～26）　総数20点で、そのうち瓦堆積層からは15点出土している。完形のものはなく、いずれも折れているが、幅約８mmの断面方形をしている。

塼（27）　一応塼と呼ぶが瓦製品と言うより、土製品という感じのもので、全部で14点5,790ｇ分ある。表面は比較的雑なナデとなっている。残りの良いもの（27）は３面、他のものはいずれも２面生きている。使用目的は不明であるが、瓦堆積層には出土しないので、建物の構造上のものではないと思う。

（２）ＳＫ２出土遺物

ＳＫ２からコンテナバット２箱程度出土している。そのうち瓦類が１箱分、土器も１箱分ある。

①山茶椀Ａ（28・29）　いずれも輪花をもつ山茶椀口径は16.4cmで、器高は６cmである。（28）は口縁部から体部にかけて自然釉がかかる。

②山茶椀Ｂ（31）　輪花をもたない山茶碗である。口径は16cmで、器高は５cmである。

③山皿（30）　口径8.8cm、器高2.6cmの山皿である。

④土師器鍋（32）　口径19.6cmの土師器鍋である。口縁部折り返しが見られ端部にやや面をもつ。頸部にはユビオサエの痕跡が残る。

３．結　語

ここではヒタキ廃寺の遺構と瓦の堆積層との関係を推定してみたい。建物の遺構は３間×３間の総柱建物１棟のみであり、周囲に建物が見当たらないことや、瓦層の一部に軒先を揃えたところが見られること等から、その建物が倒壊し瓦が落下して瓦層ができたと考えられるため、瓦葺建物が容易に推定できる。

そこで瓦の葺き方を検討してみる。当遺跡全体の出土瓦は表３を合計すると2,867kｇ余りである。その中で丸瓦の枚数を調べてみよう。

軒丸瓦と丸瓦の区別は磨耗の激しいものは玉縁に近づく程困難になっている。同じように軒平瓦と平瓦の区別も狭端部に近いほど難しい。よって、表３に挙げた軒丸瓦と軒平瓦の重量は誤差を生じているので、修正を加える。

瓦の種類	完形が推定できる点数	瓦一枚の平均重量
軒丸瓦	完形に近いもの５点	5,500ｇ
丸　瓦	完形が１点のみ	2,700ｇ
軒平瓦	完形に近いもの３点	5,500ｇ
平　瓦	完形に近いもの２点	3,700ｇ
熨斗瓦	完形が１点（2,300ｇ）あるが、平瓦の半截を考える	1,850ｇ

表２　それぞれの瓦の平均重量

まず、軒丸瓦と丸瓦の合計重量を計算する。

117,693ｇ＋946,380ｇ＝1,064,073ｇ

軒瓦は建物の場合、通常左右対称に葺かれると考えられるので、32.78点（軒丸瓦の残存個体数）の数値の近似値の偶数値は34となる。この34は建物の瓦が最も散逸していない場合である。

軒丸瓦を34個体（以上）として×5,500ｇ（軒丸瓦の平均重量）＝187,000ｇ（軒丸瓦の重量）

丸瓦の重量は

1,064,073ｇ（合計重量）－187,000ｇ

＝877,073ｇとなる。

丸瓦の枚数は877,073÷2,700（丸瓦の完形重量）

≒325枚となる。

同様に平瓦も

軒平瓦＋平瓦＝1,757,037ｇ

軒平瓦は軒丸瓦と同数と考えると34個体（以上）になるので、

34×5,500＝187,000ｇ

平瓦＝（軒平瓦＋平瓦）－軒平瓦なので

1,757,037ｇ－187,000ｇ＝1,570,037ｇとなり、

平瓦の枚数は1,570,037ｇ÷3,700（平瓦の完形重量）≒424枚となる。

ここで、瓦葺建物を屋根全体に瓦を葺く総瓦葺か、屋根の棟だけに瓦を葺く甍棟建物かという問題が出てこよう。甍棟建物の場合、丸瓦は棟の上に一線に並べるだけである。丸瓦は重ねると、玉縁部が隠れるので丸瓦の総延長は玉縁の長さを差し引かなくてはならない。もし、甍棟とするなら

325（丸瓦の総数）×｛42㎝（丸瓦の長さ）－6.4㎝（玉縁の長さ）｝＝11,570㎝となる。

すなわち、丸瓦の数から棟の長さは約116ｍになり桁行5.4ｍの遺構に矛盾する。それ故甍棟ではなく、総瓦葺建物を推定できよう。

それでは総瓦葺建物なら、切妻か寄棟か入母屋かが次の問題である。

鬼瓦の点数から寄棟の場合は大棟両端と降棟に鬼瓦が４個体必要であり、入母屋なら大棟両端、降棟とさらに隅棟に鬼瓦が６個体必要となる。しかし、切妻の場合は大棟両端２個体で済む。遺跡内出土の鬼瓦は総点数は12点あるが、個体数にすると２～３個体である。個体数に幅をもたせる理由は焼きと造りの関係で確実に２個体にはなる。しかし、そのうち１点は鬼の頭部で刻線をもつもので、またもう１点は鬼面下方の部分で、刻線をもたない。焼きと造りは極めて似ているし、刻線が下になってなくなると考え、同一個体とすれば鬼は２個体となる。しかし、刻線の有無が不自然で同一でないとすると、３個体となり切妻の可能性は消える。つまり、確実に３個体になる要因が無いため２ないし３個体とした。２個体なら切り妻屋根で鬼瓦の散逸率が低くなる。３個体なら入り母屋か寄棟になり、散逸率が高いといえよう。従って、鬼瓦からは屋根の形態は推断できない。

次に瓦の散布状況を考えよう。図19に見られるようにJ4の11・15、J5の3・7・11・15、J6の３・７・11・15の幅約４ｍに軒瓦は多い。この地区の軒瓦は裏返って並んで落下した軒先と考えられる。この軒先は屋根の一面全部ないし、一部が剥がれ落ちたものであろう。柱穴遺構の付近は瓦の分布に規則性が見られないが、建物の倒壊後柱の抜き取りによる柱穴の瓦の埋まり具合やその後の整地などから、かなり人為的に倒壊当時から動いているものと思われる。つまり、J4からJ6の付近以外は軒先は残っておらず、当時の屋根を推定させるものはないと思う。

桁行から約30度振った位置に裏返って軒先を揃えて、しかも玉縁部を柱穴側を向ける屋根の葺き方にはどんなものが考えられようか。

Ａ．切妻の場合

桁方向にだけ軒瓦をもつ切り妻屋根の軒先側が滑り落ちたら、裏返ることはあっても玉縁は反対方向を向く。反対側の桁が大きく大棟方向に回って落ちれば可能であるが、現実的ではない。また、隅切りの軒平瓦の出土も説明が困難である。

Ｂ．切妻屋根でも破風・掛瓦丸納めの場合

この場合は切妻でも妻先に軒瓦が並ぶ。この妻側の軒先（南北どちらの妻先にしても）が30度振れて倒壊して瓦層の軒先になったと考えるのは十分に可能である。また、隅切りの軒平瓦の説明も可能である。

ただし、桁行き×梁間は5.4ｍ×4.5ｍで建物の周囲に軒瓦が並ぶと（5.4＋4.5）×２＝19.8となり、最低約20ｍ以上の軒先が必要となる。軒平瓦が、幅28㎝なので、接する隙間を含めて30㎝とし、出土した個体数は約33点なので、

33×30＝990（㎝）で、軒先部分は約10ｍ分出土している。そのため、切妻屋根破風・掛瓦丸納めの場合は50％以上の散逸率となり、かなりの瓦が倒壊後なくなっていると言えよう。

Ａの切妻屋根の場合なら屋根の桁を仮に６ｍとしたら12ｍ分の軒瓦が必要となる。この場合

10÷12＝0.83となり、かなり残存率が高くなる。

Ｃ．寄棟の場合

寄棟の場合はＢと違う点は梁方向の軒先が低い位置にあるということである。それは入母屋についても言えることであるが、低い位置にあるものを反転させるより、高い位置のものを反転させる方がより簡単である。その点でＣよりもＢの方が可能性がありそうである。また、寄棟であるなら隅切瓦が軒平瓦に限定されていること、また、総数も３点程しかないなど、疑問点もある。

以上、瓦の葺き方は資料からいろいろ考えられるが、鬼瓦の数・瓦の分布、種類などから見て、切妻屋根の破風・掛瓦丸納めが、最も推定できよう。

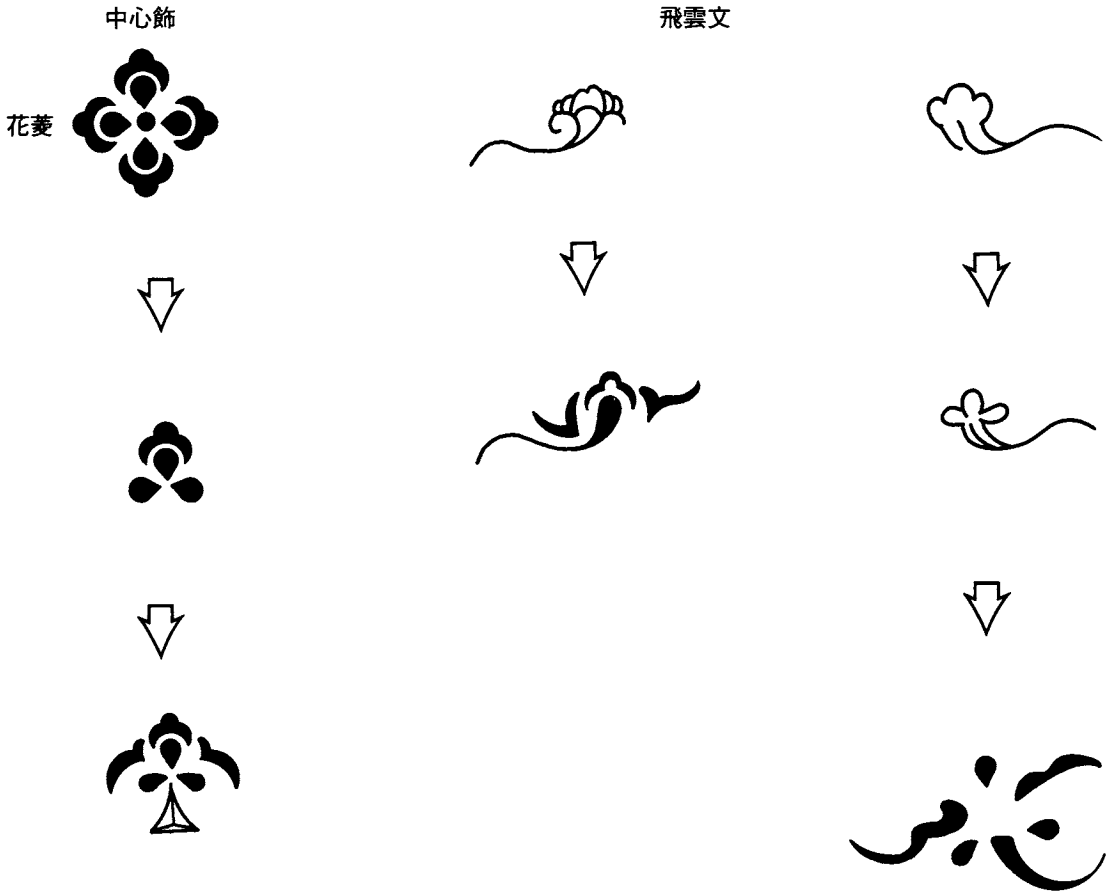
次に瓦の系譜を考えて見よう。単弁八葉の軒丸瓦は鈴鹿市の伊勢国分寺でも出土しているが、[1] ヒタキ廃寺のそれは花弁がより肉厚的で、珠文も引き締まったかたちをしている。そのため、ヒタキ廃寺の方がやや先行するかたちとも言えよう。軒平瓦の模様は「飛雲文系」と述べたが詳細は不明である。ただ、当時の飛雲文系と宝相華文系の合わさったようなヒタキ廃寺軒平瓦を、図17のような流れの中に考えられないだろうか。

最後にヒタキ廃寺の性格であるが、多数の瓦を出土することから「廃寺」としたが、詳細は不明である。周囲に他の建物が見当たらないことから仏堂的な性格をもつものと考えられよう。そうなると南北棟の仏堂となって、一般的な寺院の東西棟の建物とは異質にはなるが、福岡県の観世音寺[2]や奈良の川原寺のように類例はある。

官衙の中心建物なら周囲に整然と並ぶ建物群が調査区内に出て来てしかるべしであろう。遺跡の100m程南方に打田遺跡がある。奈良時代が中心の打田遺跡は、一部に官衙的配置をもち、方位を同じくする掘立柱建物が20余棟検出している。打田遺跡の正倉的な建物ということも考えられるが、瓦葺建物を倉庫に持つ程の大豪族は、現時点では確証がなく現実的ではない。しかしながら、この遺跡とヒタキ廃寺との結びつきは大いに推定できよう。

また、軒平瓦が1種類・軒丸瓦が2種類しか見られないところから、この建物は創建後極めて短期間に倒壊し、その後再建されなかったものと思える。

（福田哲也）



第17図　飛雲文変遷想定図

［註］

① 鈴鹿市教育委員会『伊勢国分寺跡…第３次発掘調査概要報告』1991

② 小田富士雄『大宰府の寺院』「大宰府の歴史」３ 西日本新聞社

〈参考文献〉

・上原真人『平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった』「高井悌三郎先生喜寿記念論集」1988

・今泉潔『瓦と建物の相剋試論』「千葉県文化財センター研究紀要」12 1990

・名古屋市博物館『尾張の古代寺院と瓦』 1985

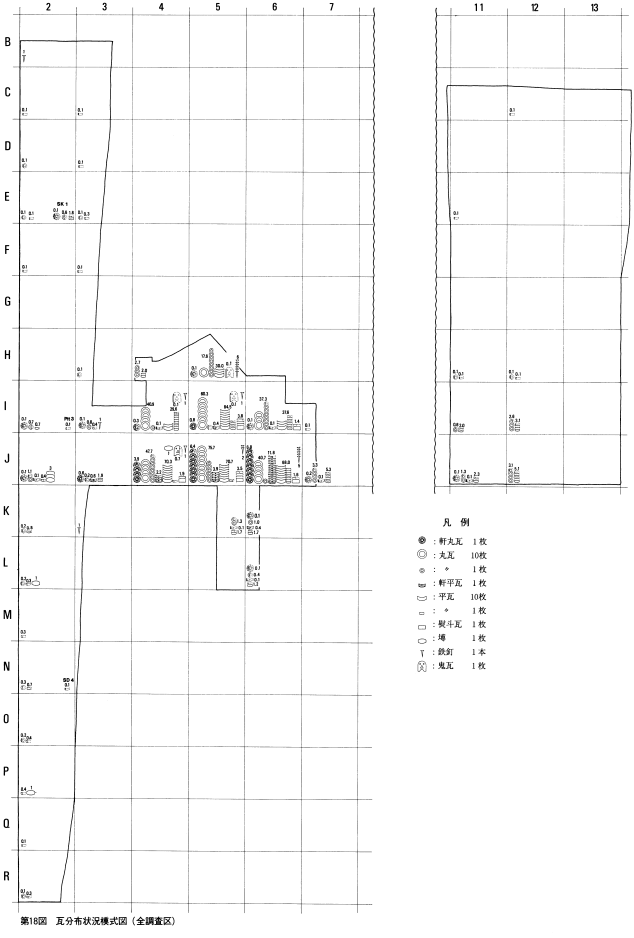
・井内古文化研究室『古代棟端飾瓦の固定方法』「井内古文化研究室報二」 1969

・植山茂『古代瓦私見（一）飛雲文軒 平瓦について』「古代文化」６…1981

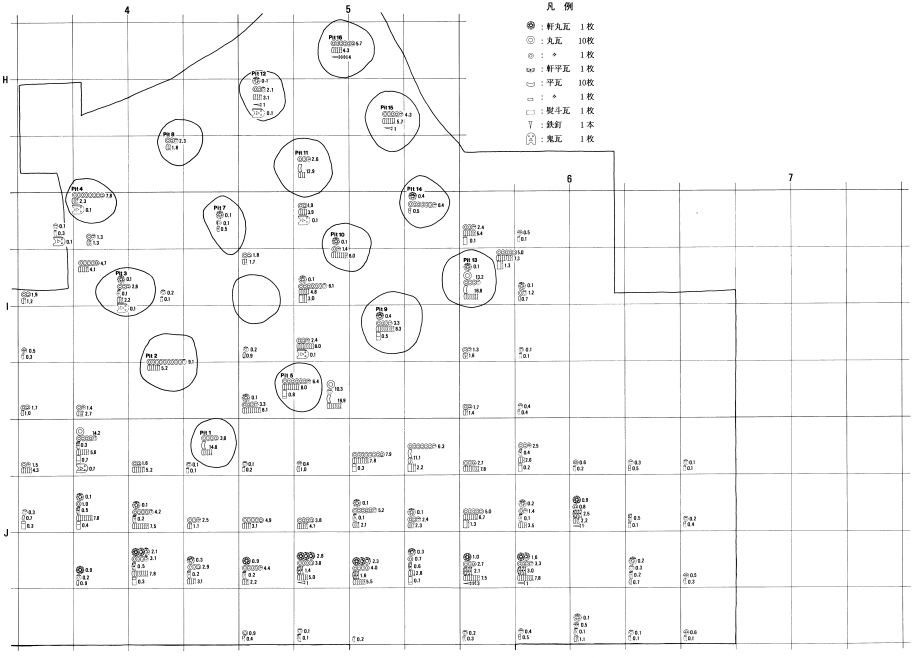
・植山茂『古代瓦私見（二）飛雲文軒 平瓦について』「古代文化」７…1981

・坪井利弘『日本の瓦屋根』 理工学社 1987

・稲垣晋也『古代の瓦』「日本の美術」第66号 至文堂 1971



第18図 瓦分布状況模式図（全調査区）



第19図 瓦分布状況模式図（瓦推積層周辺）

ヒタキ廃寺瓦分布データ

第3表　遺跡内全体（A地区＋B地区＋排土）の瓦類

	重量（g）	破片数	個体数	備　考
鬼　瓦	11,690	12		
軒丸瓦	117,693	194	32.78	B類　9点
丸　瓦	946,380	6,716		
軒平瓦	115,740	142	27.75	

	重量（g）	破片数	個体数	備　考
平　瓦	1,641,297	10,024		
熨斗瓦	28,740	33		
塼	5,090	13		
鉄　釘		19		

第4表　A地区　地区別瓦分布

凡例；重量〔g〕（破片数）軒瓦の瓦当部の個体数、但し、鉄釘は破片数のみ

地区名	軒　丸　瓦	丸　瓦	軒　平　瓦	平　瓦	熨斗瓦	そ　の　他
B2						(鉄) 1
C2				100 (　1)		
C3				200 (　1)		
D2		320 (　1)				
D3				450 (　3)		
E2		150 (　1)		360 (　4)		
E2SK1	300 (3)　0	1,550 (　7)		6,000 (　17)		
E3		150 (　2)		1,180 (　9)		
F2				750 (　4)		
F3				150 (　3)		
H3		150 (　1)				
I2	500 (1)　0.2	1,820 (　12)		2,650 (　16)		
I2Pit3				100 (　1)		
I3	180 (1)　0.05	2,240 (　25)		1,380 (　22)		(鉄) 1
I4	1,720 (6)　0.9	110,440 (　769)	640 (6)　0.5	109,490 (　704)		(鉄) 1、(鬼) 1,640 (6) 0.12
I5	4,370 (7)　1.11	162,710 (1,140)	2,230 (2)　0.5	312,550 (1,777)	8,650 (9)	(鉄) 1、(鬼) 1,380 (2) 0.08
I6	470 (2)　0.38	100,640 (　614)	40 (1)　0	139,160 (　908)	3,240 (5)	
I7		220 (　2)		100 (　1)		
J2	630 (1)　0.5	3,050 (　22)	310 (1)　0.1	2,300 (　15)		(塼) 350 (3)
J3	3,500 (45)　0.1	480 (　6)	3,430 (3)　0.91	7,000 (　80)		
J4	19,270 (22)　4.08	128,820 (　811)	11,960 (16)　2.66	259,980 (1,562)	4,300 (5)	(鉄) 1、(鬼) 6,500 (1) 0.7 (塼) 200 (1)
J5	35,180 (22)　8.34	204,270 (1,455)	21,420 (24)　5.56	261,770 (1,749)	7,940 (9)	(鉄) 2
J6	37,173 (59) 12.79	109,870 (　931)	63,670 (63) 14.15	251,530 (1,577)	3,570 (4)	(鉄) 5、(塼) 200 (1)
J7	1,270 (8)　0.83	8,850 (　107)	230 (1)　0	19,677 (　161)		
K2		450 (　5)		2,850 (　25)		
K3						(鉄) 1
K5		3,590 (　37)	710 (4)　0.4	6,290 (　43)		
K6	610 (2)　0.58	2,600 (　30)	1,950 (7)　0.8	6,190 (　44)		
L2		540 (　4)		1,100 (　10)		(塼) 560 (1)
L6	120 (1)　0.2	1,150 (　11)	20 (1)　0.05	4,300 (　30)		
M2				1,000 (　10)		
N2		730 (　5)		2,600 (　20)		
N2SD4				210 (　2)		
O2		600 (　5)		1,440 (　12)		
P2				1,490 (　3)		(塼) 200 (1)
Q2				110 (　1)		
R2		300 (　2)		940 (　2)		

（鬼）は鬼瓦、（塼）は塼、（鉄）は鉄釘

第5表　B地区　地区別瓦分布

凡例；重量〔g〕（破片数）　軒瓦の瓦当部の個体数、但し、鉄釘は破片数のみ

地区名	軒丸瓦	丸瓦	軒平瓦	平瓦	熨斗瓦	その他
C12				200 (1)		
E11				50 (1)		
F13				900 (6)		
H11		300 (5)		100 (2)		
H12		300 (4)		550 (4)		
H13		700 (10)		960 (12)		
I11		1,650 (20)		7,300 (50)		
I12		6,900 (65)		11,400 (90)		
I13		840 (8)		2,600 (10)		
J11	220 (1) 0.25	3,500 (35)	360 (2) 0.23	8,600 (45)		
J12		8,300 (85)		18,900 (143)		
J13		5,600 (60)	130 (3) 0.09	10,800 (700)		

第6表　瓦層、柱穴別瓦分布

凡例；重量〔g〕（破片数）　軒瓦の瓦当部の個体数、但し、鉄釘は破片数のみ

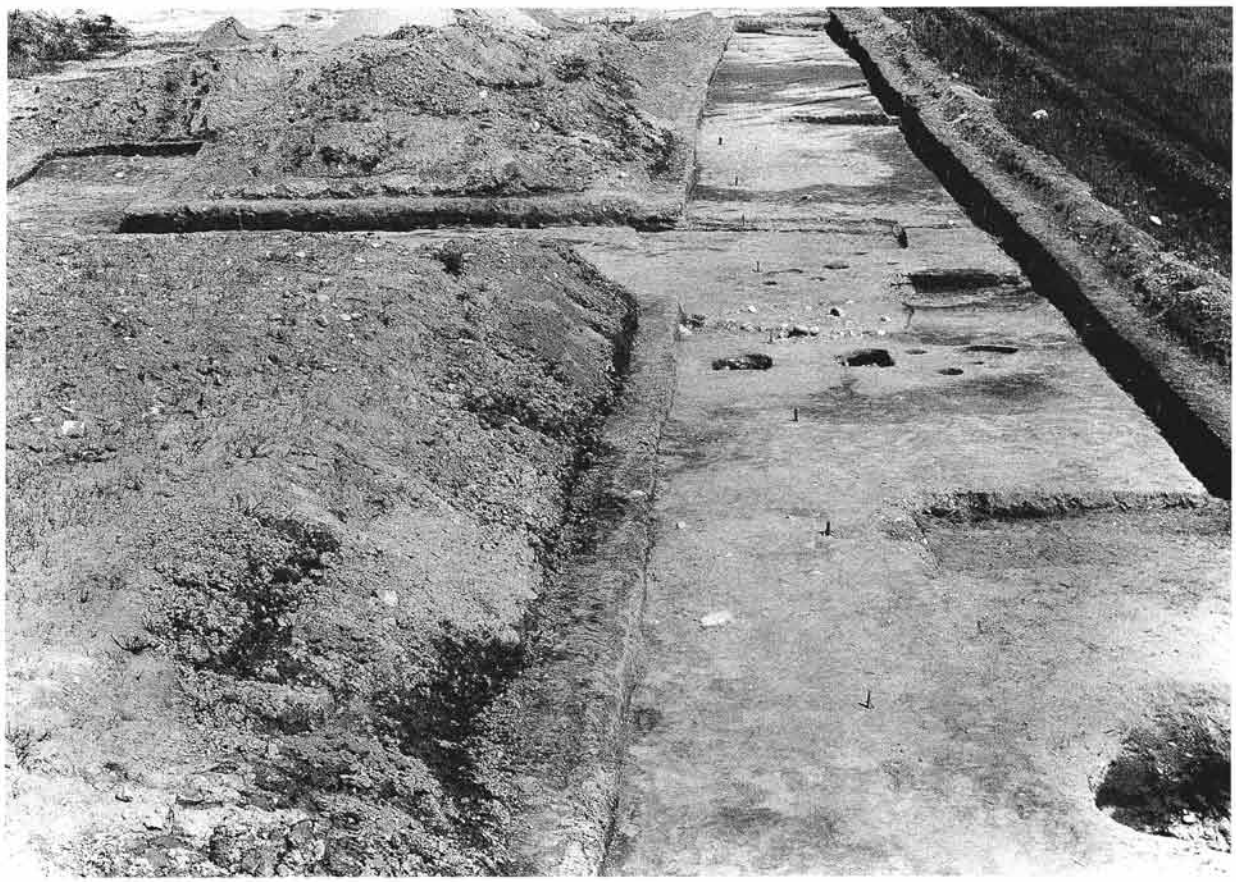
地区名	軒丸瓦	丸瓦	軒平瓦	平瓦	熨斗瓦	その他
H4Pit8		6,240 (13)		6,830 (12)		
H5Pit11		7,080 (38)		47,750 (151)		
H5Pit12	700 (2) 0.55	5,690 (21)		11,600 (45)		(鉄) 1、(鬼) 50 (1)
H5Pit15		11,670 (54)		21,200 (80)		(鉄) 1
H5Pit16		15,520 (67)		15,750 (71)		(鉄) 4
I4-1		850 (9)		170 (4)		(鬼) 70 (1)
I4-2		5,000 (30)		4,400 (35)		
I4-3		1,420 (17)		1,070 (7)		
I4-4		4,720 (31)		3,630 (18)		
I4-5		3,400 (15)		4,800 (20)		
I4-6		12,800 (65)		15,150 (76)		
I4-8		3,670 (32)		10,110 (65)		
I4-10		430 (2)		200 (3)		
I4Pit2		24,660 (111)		19,380 (89)		
I4Pit3	650 (1) 0.5	7,540 (47)	250 (1) 0	8,260 (5)		(鬼) 1,320 (2) 0.1
I4Pit4		21,100 (109)		8,380 (59)		(鬼) 150 (2) 0.01
I4Pit7	750 (1) 0	300 (5)		2,000 (10)		
I5-2		4,860 (51)		6,190 (45)		
I5-3		630 (7)		3,500 (21)		
I5-4	80 (1) 0.1	8,950 (71)		29,870 (193)		
I5-5		5,090 (50)		14,430 (85)		(鬼) 630 (1) 0.03
I5-6	100 (1) 0.1	16,580 (107)		17,790 (153)	6,800 (7)	
I5-7		6,590 (45)		29,660 (149)		(鬼) 750 (1) 0.05
I5-8		27,730 (168)		62,630 (267)		
I5Pit5		17,210 (81)		29,420 (152)	1,850 (2)	
I5Pit9	1,970 (1) 0.66	8,990 (60)		30,780 (147)	1,040 (1)	
I5Pit10	160 (1) 0.05	3,720 (21)		22,060 (45)		
I5Pit14	2,060 (3) 0.2	17,260 (69)	1,760 (1) 0.5			
I6-1		6,510 (56)		20,080 (97)	210 (1)	
I6-2		13,410 (67)		27,020 (134)	3,030 (4)	
I6-3		3,440 (33)		6,100 (47)		
I6-4		4,700 (35)		5,000 (41)		
I6-5		1,450 (15)		530 (8)		
I6-6	25 (1) 0.03	3,250 (25)		2,500 (30)		

第7表（第6表のつづき）

地区名	軒丸瓦	丸瓦	軒平瓦	平瓦	熨斗瓦	その他
I6-7		360 (4)		350 (3)		
I6-8		1,100 (19)		1,650 (17)		
I6Pit13	400 (1) 0.33	35,770 (163)		62,140 (306)		
J4-1		4,020 (35)		16,080 (81)		
J4-2		780 (8)		2,690 (18)	1,050 (1)	
J4-5		38,460 (45)	1,680 (2) 1.1	20,730 (133)	1,520 (2)	(鬼) 6,500 (1) 0.7
J4-6	300 (1) 0.33	2,660 (14)	2,700 (1) 0.1	28,410 (135)	1,030 (1)	
J4-7	4,700 (2) 0.66	450 (4)		3,250 (19)		
J4-9		4,440 (45)		19,100 (100)		
J4-10	500 (1) 0.2	11,460 (79)	1,200 (1) 0.33	27,850 (143)		
J4-11	11,630 (6) 2.33	8,440 (64)	2,750 (3) 0.45	14,050 (111)	700 (1)	
J4-13		50 (1)		180 (2)		
J4-14		6,680 (46)		4,170 (29)		
J4-15	1,440 (5) 0.23	7,870 (64)	1,000 (1) 0.05	11,500 (71)		
J4Pit1		10,180 (66)		54,900 (216)		
J5-1		150 (3)		750 (8)		
J5-2		13,330 (89)		11,400 (66)		
J5-3	5,210 (3) 0.2	11,960 (67)	870 (6) 0.2	7,990 (56)		
J5-4		2,360 (6)		1,380 (10)		
J5-5		1,170 (15)		3,870 (34)		
J5-6		10,150 (64)		15,040 (57)		
J5-7	15,160 (6) 3.23	10,200 (51)	7,790 (9) 1.86	18,390 (107)		(鉄) 1
J5-8		70 (2)	600 (1) 0			
J5-9		21,430 (125)		28,780 (193)	600 (1)	
J5-10	100 (1) 0.07	13,910 (90)	70 (1) 0.1	7,770 (60)		
J5-11	12,550 (4) 3.3	10,880 (88)	8,700 (2) 2	20,460 (138)		
J5-12				600 (6)		
J5-13		17,010 (107)		41,040 (239)	4,960 (6)	
J5-14	230 (1) 0.33	6,350 (61)		8,500 (57)		
J5-15	1,640 (3) 0.93	2,020 (16)	3,200 (1) 1	10,400 (28)	1,500 (1)	
J6-1		7,170 (66)		28,690 (157)		
J6-2		13,490 (89)		24,930 (173)	3,070 (3)	
J6-3	5,470 (6) 2.45	7,340 (57)	11,400 (3) 3.0	27,730 (116)		(鉄) 3
J6-4		620 (3)		1,100 (10)		
J6-5		6,650 (65)	2,200 (1) 0.5	9,800 (72)	500 (1)	
J6-6	1,120 (2) 0.6	3,730 (32)	430 (1) 0	12,860 (78)		
J6-7	9,050 (6) 3.04	8,890 (53)	16,760 (12) 3.77	28,990 (145)		(鉄) 1
J6-8		1,030 (6)		1,800 (10)		
J6-9		1,700 (14)		730 (10)		
J6-11	4,970 (17) 2.27	2,150 (15)	13,650 (26) 3.20	8,040 (35)		(鉄) 1
J6-12	20 (1) 0.03	1,400 (16)	300 (2) 0.23	4,090 (18)		
J6-13		680 (5)		1,720 (12)		
J6-14			2,830 (7) 0.01	300 (6)		
J6-15	1,070 (5) 0.43	900 (14)	950 (4) 0.4	2,680 (23)		
J6-16		200 (8)		400 (5)		
J7-1		380 (6)		380 (3)		
J7-2		580 (8)		1,440 (18)		
J7-3		1,270 (6)		980 (22)		
J7-4		1,520 (16)		220 (2)		

（鬼）は鬼瓦、（塼）は塼、（鉄）は鉄釘

図版１



Ａ地区（北西から）

Ａ地区瓦推積層（南東から）

瓦堆積層軒先部（南東から）

瓦堆積層軒先部（南から）

図版 3

瓦堆積層軒先部（南東から）

瓦堆積層軒先部（北から）

ＳＢ１　イ１柱穴瓦堆積状況

瓦堆積層　鬼瓦出土状況

図版５

ＳＢ１　柱穴及び瓦堆積層軒先部（東から）

ＳＢ１　イ２柱穴断面

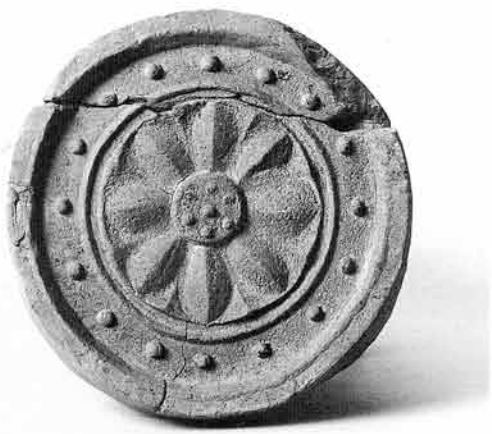
ＳＢ１　イ１柱穴断面

ＳＢ１　ニ１柱穴断面

図版 7

1

1



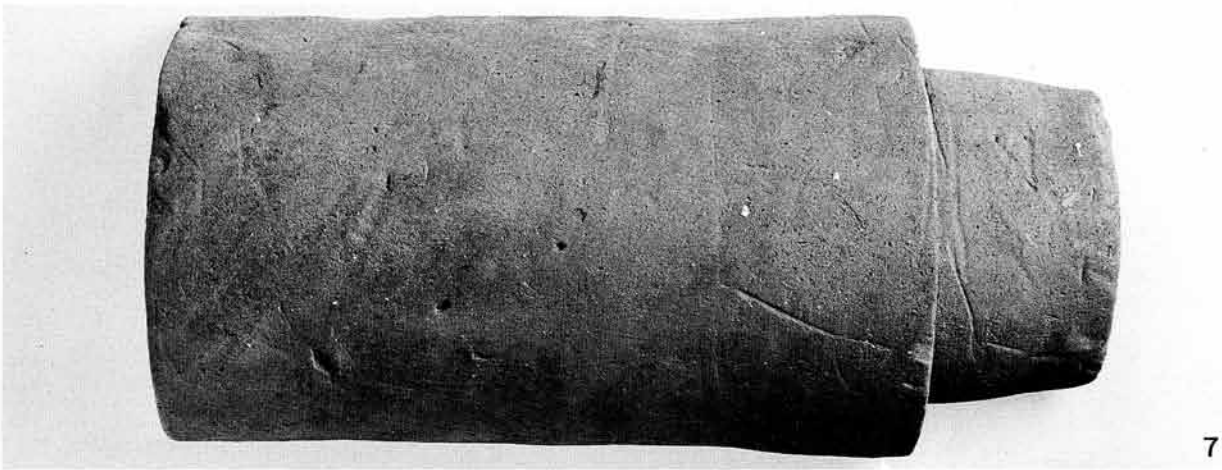
2

4

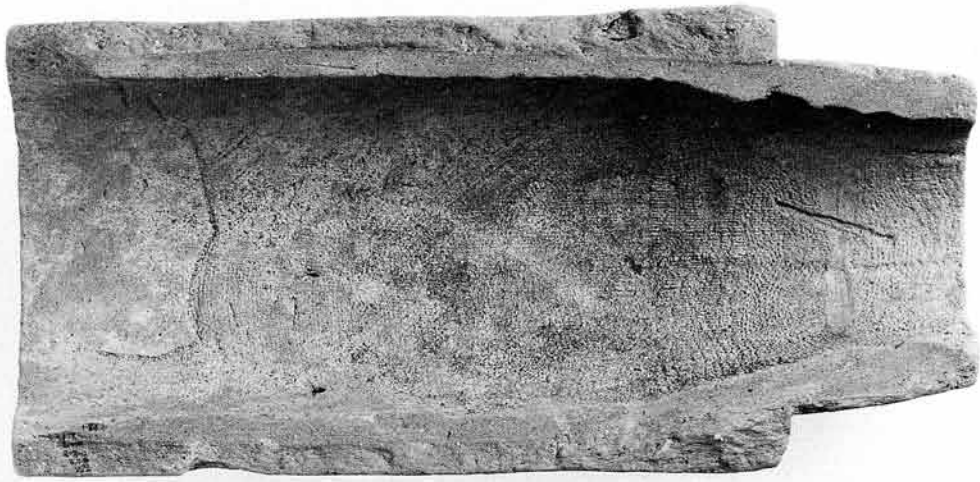
出土遺物（1：3）

4

5



7

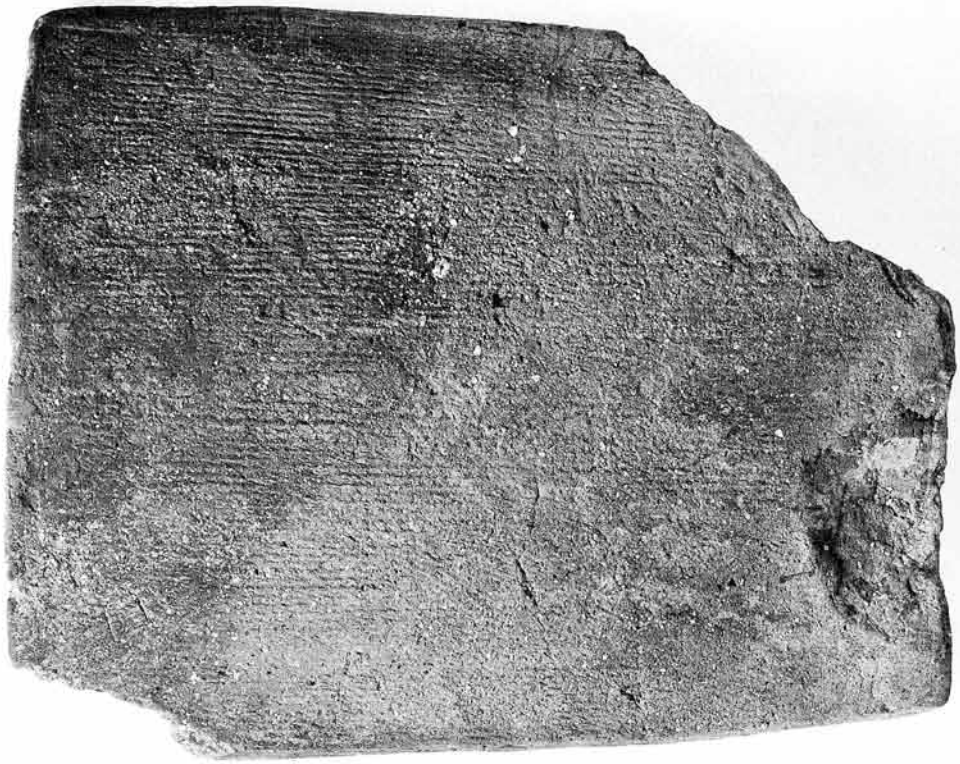


出土遺物（1：3）

図版 9

出土遺物（1：3）

11



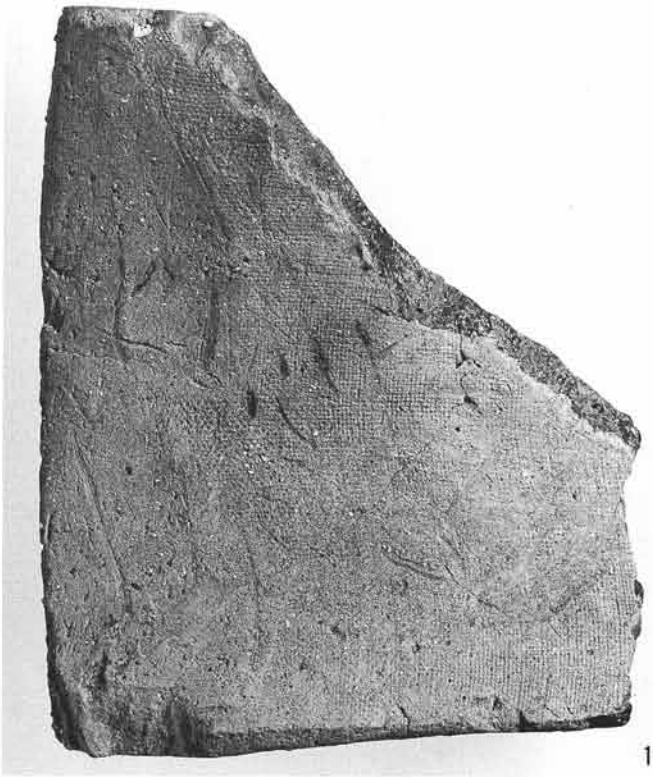
出土遺物（1：3）

図版11

14

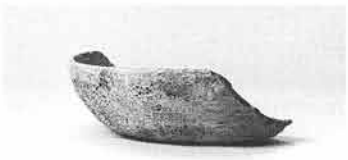
18

出土遺物（1：3）



17

27



19

22

23

出土遺物（1：3）

Ⅲ. 松阪市岡本町　打田遺跡

1．層　序

打田遺跡は、前述のように扇状地の扇央部に位置し、南側に丘陵をひかえるため、南側がやや標高は高く北にいくにしたがって緩く下がっている。比高差は調査区の南北の端で約１m程である。平地は北側に大きく広がり、遺跡の東約300m程に阪内川が東流する。基本層序は平成２年度の調査区と同じく、第１層は耕作土、第２層は旧耕作土、第３層に包含層の暗褐色土で第４層が地山の小石混の灰白色砂質土となる。南端では第３層と第４層の間にマンガン混じりの黒紫土が入る。地表から約40cm程で地山に至るが、包含層はどの地点でも約20cm程の厚さである。

1．層　序

本年度の調査で竪穴住居を24棟、掘立柱建物16棟、柵１条、土坑墓２基、溝１条等を検出した。時代は飛鳥時代から平安時代末まであり、昨年度にひき続き遺構を検出することができた。

A．飛鳥時代の遺構

この時代の遺構はすべて竪穴住居である。全部で３棟検出できた。竪穴住居は、いずれも主柱穴は検出できなかったが、東辺中央近くにカマドの痕跡を残すなど共通性が見られる。

a．竪穴住居

ＳＨ４５（第21図）　調査区南端近くで検出した。やや台形状の隅丸方形を呈し、規模は10.8㎡程である。カマド跡と思われる焼土が東辺中央に見られる。床面の標高は22.3m前後である。遺物としては小ぶりの宝珠つまみのつく須恵器の杯蓋片がある。

ＳＨ９４（第21図）　ＳＨ４５の北西約６mの位置にあり、隅丸の長方形を呈し、規模は16㎡である。焼土が東辺やや南に見られる。床面の標高が21.7m前後である。遺物としては土師器杯や甕、須恵器片がある。

ＳＨ９５（第21図）　ＳＨ９４の東約13mに位置し隅丸方形を呈し、14.5㎡の規模を測る。焼土が東辺やや南にあり床面の標高は22.2mである。遺物には土師器甕（１，２）などがある。

B．奈良時代前期の遺構

この時代の遺構には、竪穴住居13棟がある。竪穴住居は竈痕跡である焼土をもつものと、もたないものなどいろいろであるが、いくつかのグループで分散しているようにも見える。また、主柱穴はいずれも確認できなかった。掘立柱建物やその他の遺構はまだ見られない。

a．竪穴住居

ＳＨ３６（第21図）　調査区南端に位置し、規模は7.3㎡である。竈の痕跡は見られず、床面の標高は22.3m程である。出土遺物に細片の土師器がある。

ＳＨ３７（第21図）　ＳＨ３６から１m程北に位置し、規模は約5.5㎡である。焼土も見られないが、北東隅に土器片が多く見られた。ただ、床面から浮いた地点に見られるため竪穴住居廃絶後の遺物であろう。床面の標高は22.3mである。

ＳＨ３８（第21図）　ＳＨ３７の北に接した位置にあり、規模は約5.5㎡である。竈の痕跡と思われる焼土が東辺中央にある。土層の違いからＳＨ３９を切ってつくったと思われる。床面の標高約22.3mである。遺物に土師器長胴甕（３）などがある。

ＳＨ３９（第21図）　ＳＨ３８に切られているため規模は不明であるが、一辺約2.6mで隅丸方形を呈すると思われる。焼土が北辺中央に見られる。床面の標高は22.3mである。出土遺物に土師器甕（５）などがある。

ＳＨ４０（第22図）　ＳＨ３９の東約１mに位置して、規模が９㎡である。東辺やや南に焼土をもつ。床面の標高は22.3mである。出土遺物に土師器杯（６，７）などがある。

ＳＨ４１（第22図）　ＳＨ４１の南東約３mに位置するが、長辺と短辺の差が約１mになる隅丸長方形を呈する。規模は約7.4㎡で、焼土は見られない。床面の標高は22.4mである。出土遺物に土師器甕（８）などがある。

ＳＨ４２～４４（第22図）　ＳＨ４１の北約３mに

第20図　遺構平面図（１：200）

位置し、３つの竪穴住居は切りあい関係にある。埋土の状況からＳＨ４４が最も新しいと思われる。焼土はいずれも見られない。規模はＳＨ４４が約5.7㎡であるが、他は不明である。ただ、残っているそれぞれの辺から推定し、ＳＨ４４よりＳＨ４３がやや大きく、ＳＨ４３よりＳＨ４２がやや大きいと思われる。床面の標高はＳＨ４２・４３が22.3m、ＳＨ４４が22.4mと新しくなるに従い高くなっている。出土遺物には土師器甕や杯があるが、実測に足る遺物は土師器杯（９）のみである。

ＳＨ４６（第22図）　ＳＨ４４の北約７mに位置する。規模は約8.3㎡の隅丸方形を呈する。北辺中央に焼土をもつ。床面の標高は22.3mである。出土遺物に土師器甕（10・13）、杯（11）、皿（12）などがある。

ＳＨ４７（第22図）　ＳＨ４６の南東約３mに位置し、隅丸の長方形を呈する。規模は13.2㎡とやや大きい。焼土は見られず、床面の標高は22.4mである。遺物には土師器甕（15）、杯（14）がある。

ＳＨ４８　焼土が検出されたため、竪穴住居の残存と思われる。規模は不明であるが、実測できない出土遺物や周囲の竪穴住居の状況から奈良時代前期にあてはまると思う。

ＳＨ５８（第22図）　調査区の最も東側で検出された。一辺をＳＨ５７により切られているため規模は不明であるが20㎡程になると思われ、奈良後期の竪穴住居としては大きい。焼土も見られず、形も釣鐘状を呈し、床面も一定ではないため、廃棄所的な性格をもつ土坑とも考えられる。

出土遺物に土師器杯（33）、須恵器杯（34）、土師器甕（35～37）などがある。

ＳＨ６９　昨年度の調査区に接する北端で検出された。ＳＨ２６に切りあう形であるが、新旧関係は不明である。床面の標高は約21.5mである。焼土は見られず、規模は一方がＳＨ２６と重複するためわからない。ただ、検出された形状からＳＨ２６より小さくなると思う。出土遺物に土師器片がある。

ＳＨ７０（第23図）　ＳＨ６９の東約１mに位置して、規模は7.3㎡程である。焼土は確認されなかった。床面の標高は21.5mである。須恵器杯（44）と土師器杯（42・43）が竪穴住居の床面直上の北東隅で重なって出土した。他に出土遺物として須恵器杯（41）がある。

ＳＨ７１（第23図）　ＳＨ７０の南東約２mに位置し、ほぼ隅丸方形を呈する。規模は7.3㎡程である。焼土を北辺やや東に確認した。焼土からは正立した状態の土師器高杯（46）が出土した。竈の支柱石代わりに使用したものであろうか。床面の標高は21.5mである。出土遺物に土師器杯（45）、土師器甕（47～49）がある。

Ｃ．奈良時代後期から平安時代初めの遺構

この時期になると竪穴住居の数が減る。竪穴住居の特徴は奈良前期と同じく、主柱穴は見られない。また、グループをつくるほどの数もなくなる。その一方で方位にのった、建物間に規格性の感じられる掘立柱建物群が出現する。また、掘立柱建物の配置から数棟ずつ建て替えられたと考えられる。

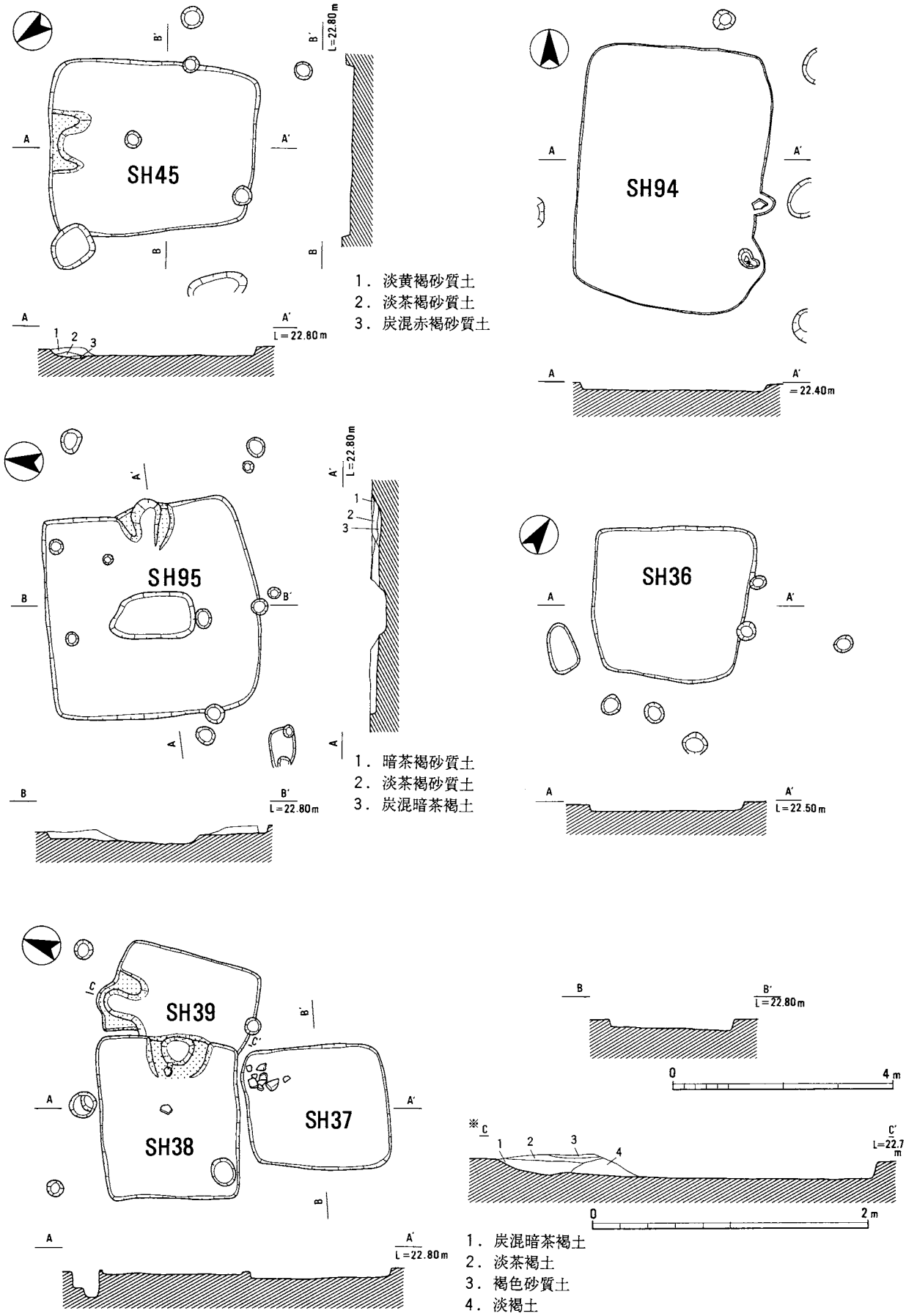
ａ．竪穴住居

ＳＨ６１（第24図）　調査区のほぼ中央に位置し、ほぼ隅丸方形を呈し、規模は約8.1㎡である。焼土は確認されず、床面の標高は22.2mである。出土遺物に土師器杯（38・39）、土師器甕（40）などがある。

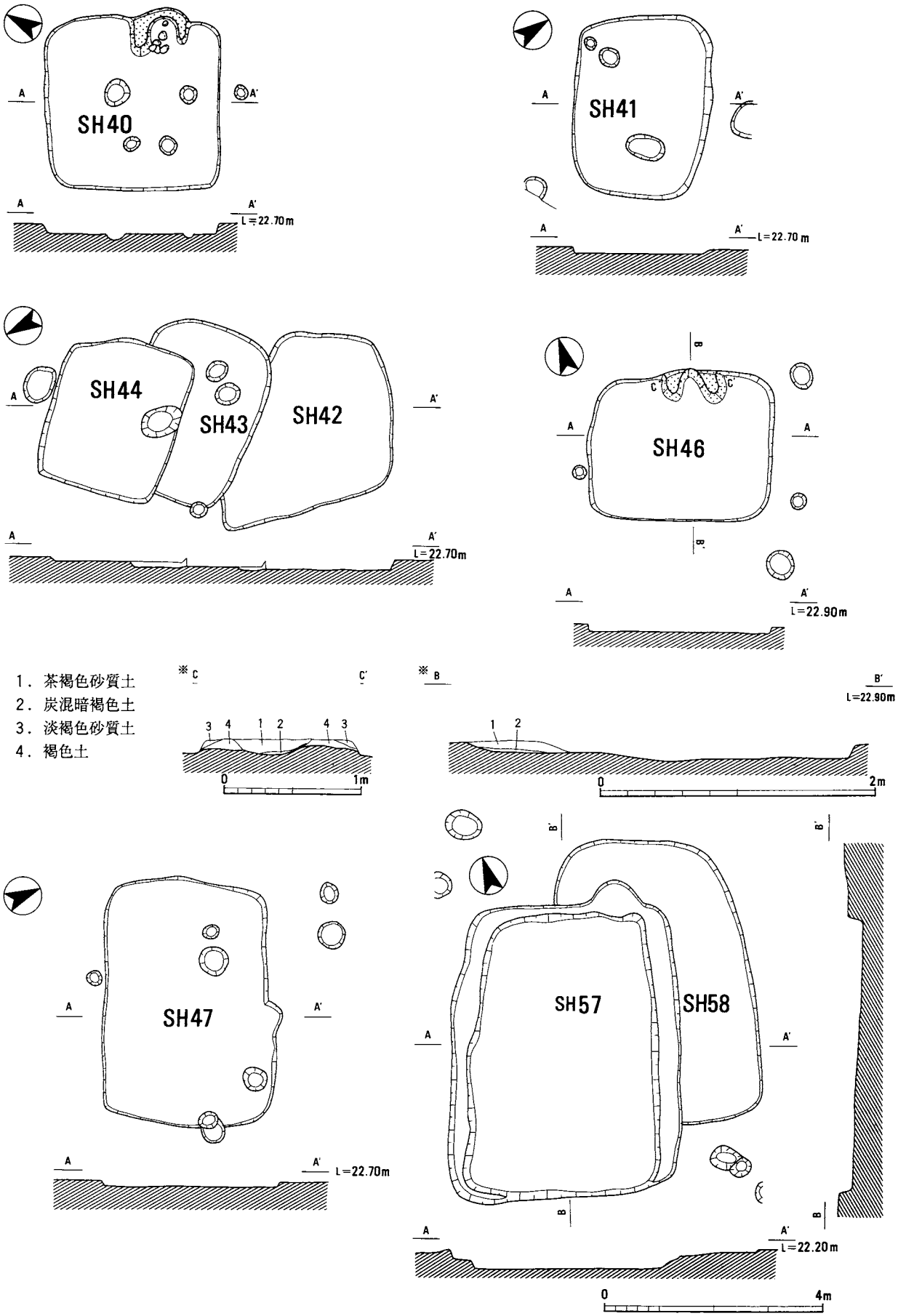
ＳＨ７４（第23図）　ＳＨ７１の東約５mに位置する。規模は７㎡程であるが、焼土は確認できなかった。床面の標高は約21.6mである。出土遺物に土師器杯（50）、土師器甕（51）などがある。

ＳＨ８３（第23図）　ＳＨ７１の南約10mに位置する。規模は約14㎡程の東西方向にやや長い方形を呈する。焼土は北辺やや東に確認でき、床面の標高は約21.5mである。出土遺物には土師器杯（52・53）、土師器高杯（54）、土師器甕（55、56）などがある。

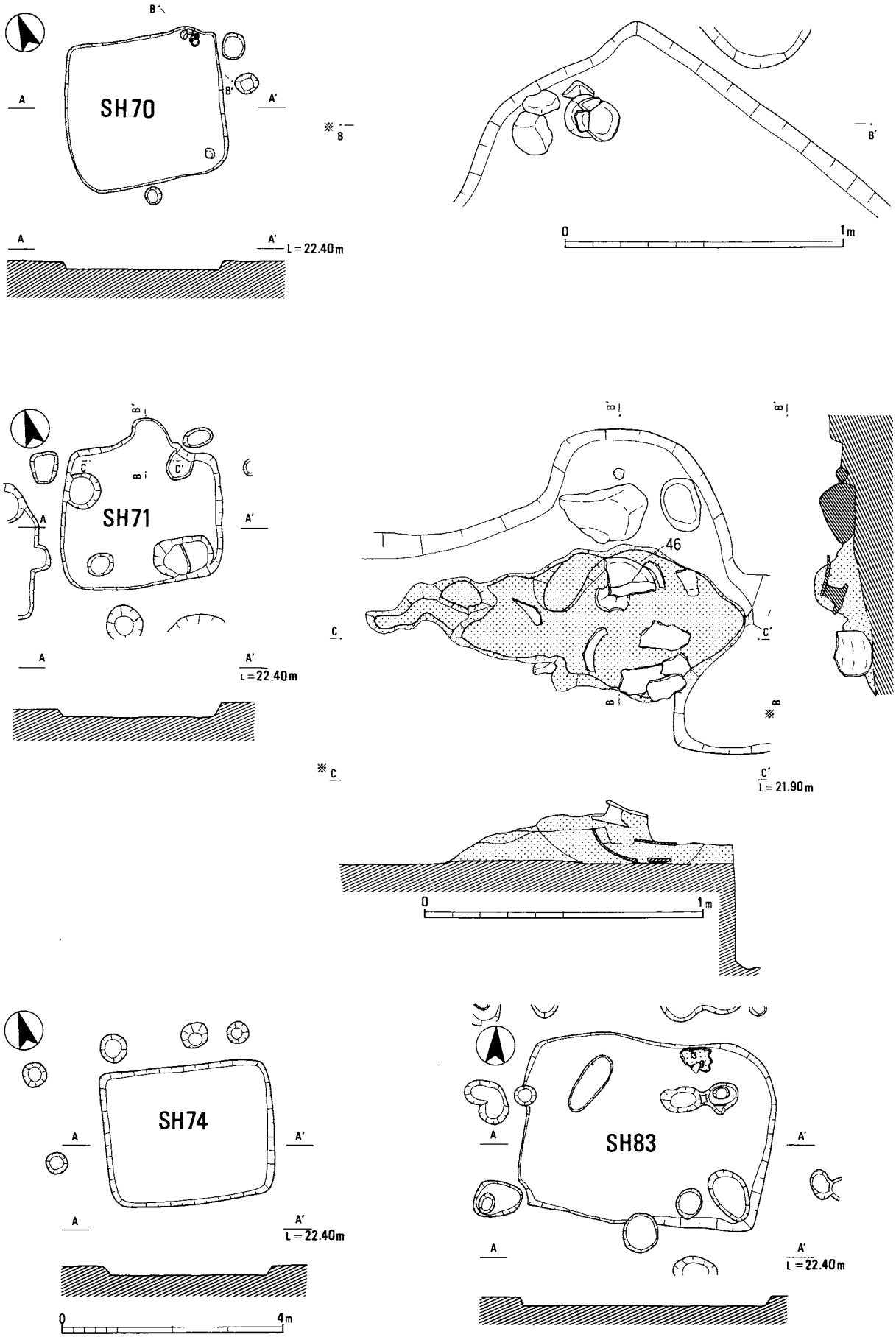
ＳＨ５７（第22図）　ＳＨ５８を切る形でつくられている。焼土も確認出来ず、形も釣鐘形をし、床面の標高は21.9mから21.6mと北に行くほど30cm近く低くなっている。南側を除く３方で段差が見られるなど竪穴住居にしては不自然な点が多く、廃棄土坑の可能性が考えられよう。出土遺物には土師器杯（16～23）、土師器皿（24）、土師器甕（25～28）、須恵器杯（30）、須恵器長頸壺（31）などの日常品などに加え、二彩小壺（32）のような都の貴族層にとっても稀少品となるものもある。



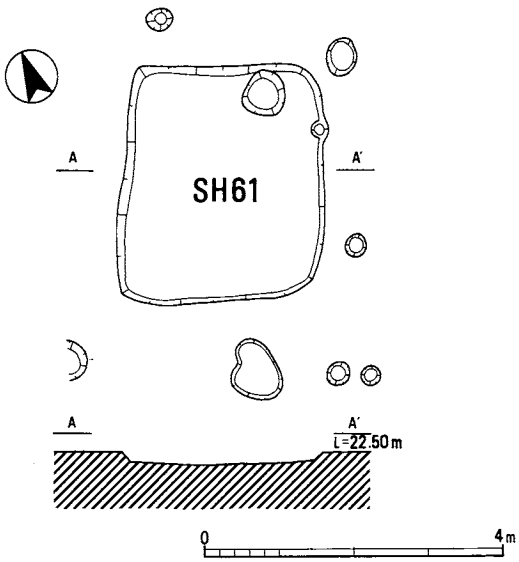
第21図　ＳＨ45，94，95，36，37，38，39実測図（１：100，但し※印は１：40）



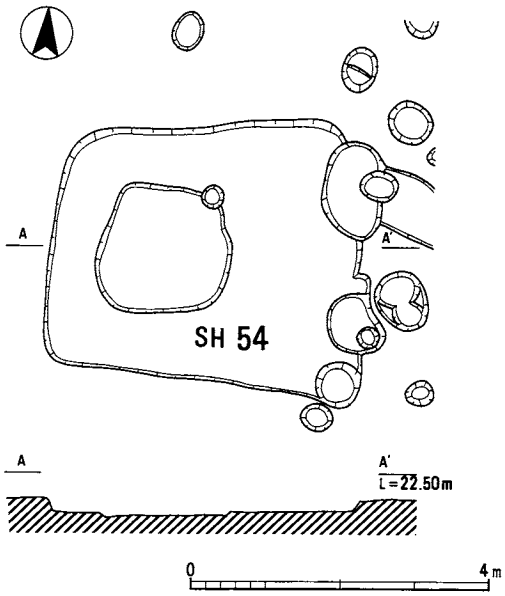
第22図　ＳＨ40，41，42，43，44，46，47，57，58実測図（１：100，但し※印は１：40）



第23図　ＳＨ70，71，74，83実測図（１：100，※印のみ１：20）



第24図　ＳＨ61実測図（１：100）



第25図　ＳＨ54実測図（１：100）

ｂ．掘立柱建物と柵（※印は平成２年度調査分）

ＳＢ３１※調査区北端付近で検出した。４間×３間のN15°Wの南北棟である。桁行6.5m、梁行4.5mであるが、柱間は揃っていない。一部に「溝もち」の手法を用いているが柱掘形は径約１mくらいから60cmくらいまで様々である。深さも40～60cmと不揃いである。

ＳＢ３２※ＳＢ３１を囲む形で検出した。５間×４間のN15°Wの南北棟である。桁行8.3m、梁行7.2mで、桁行は1.7mから1.5mまで不揃いであるが、梁行は1.8m等間となる。柱掘形の深さは、深いところは35cm、浅いところは60cmと不揃いながらも、おおよそは40cm程のところでまとまっていて、ＳＢ３１よりやや浅い。ＳＢ３１と柱筋は通らないが、方位が一致し、四周を取り囲むためＳＢ３１の庇の可能性も考えられる。

ＳＢ１４※（第26図）　調査区の北端、ＳＨ１５を切った位置にある、５間×３間のN15°Wの南北棟である。桁行は8.8m、梁行は4.5mで柱間は不揃いである。柱掘形の径は40～80cm、深さは20～30cmである。

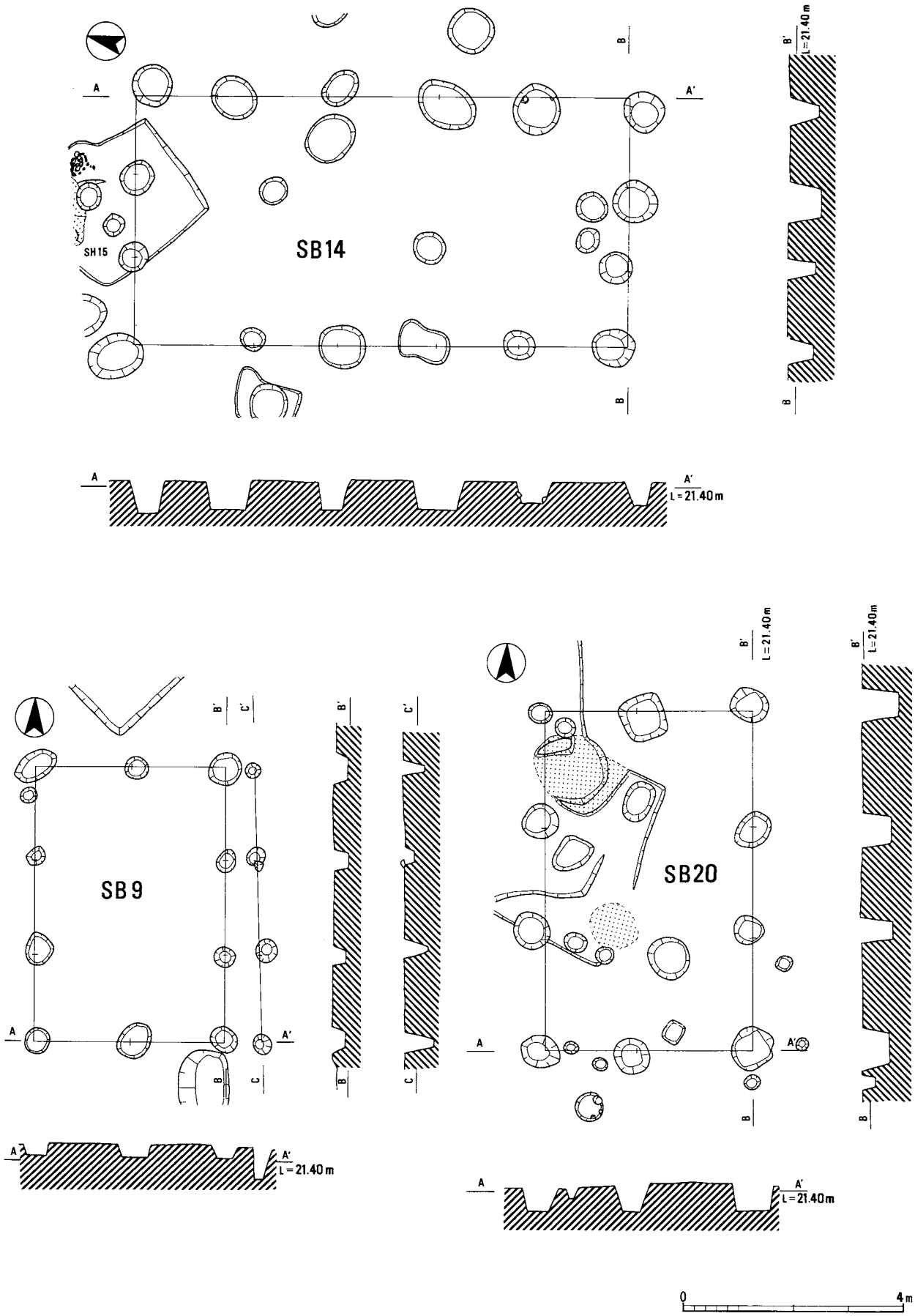
ＳＢ９※（第26図）　ＳＢ１４の西約10m、調査区の西端に位置する３間×２間のＮ０°の真北方向に立つ南北棟である。桁行は5.1m、梁行は3.4mで、柱間は桁行・梁行ともに1.7mで揃う。ただ、柱掘形は40～60cmと比較的小さく、深さは30cm程である。建物の東60cmに柱列が見られる。柱間隔がＳＢ９に揃うため、この柱列はＳＢ９の庇とも考えられる。柱列の径はＳＢ９より小さく、深さはハ１柱穴が20cm程であるが、あとは40cm程で揃う。

ＳＢ２０※（第26図）　調査区の北端、ＳＨ１８・１９を切った位置にある、３間×２間のＮ０°の南北棟である。桁行6.2m、梁行3.9mで、柱間は1.8m～2.1mまで様々である。柱掘形は50～70cm、深さは40～60cmである。

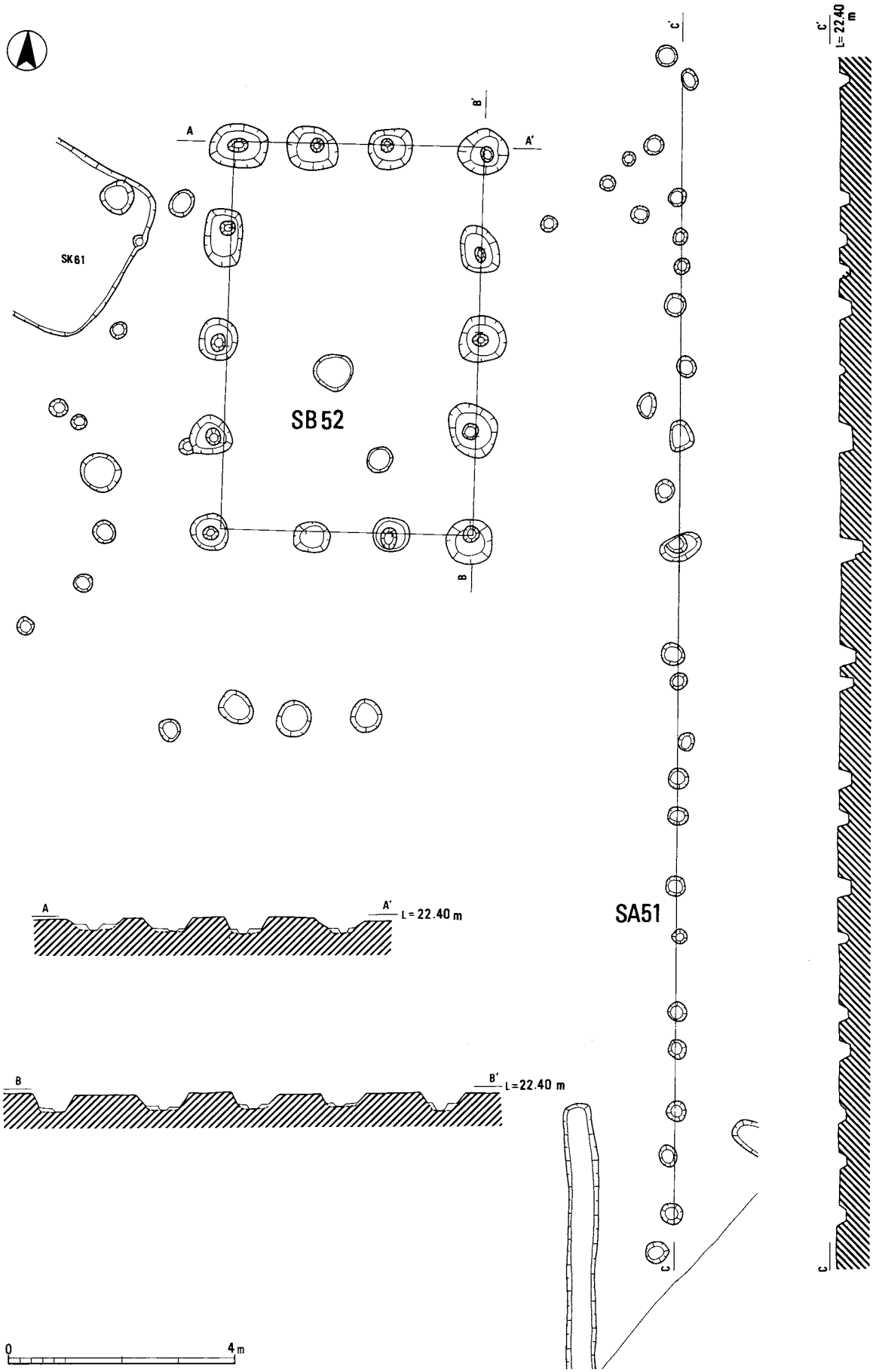
ＳＢ２８※　調査区中央付近でＳＨ２９・３０を切った位置にある、５間×３間のＥ０°の東西棟である。桁行9.4m、梁行4.7mで柱間は桁行が1.7～2.1m、梁行が1.5～1.7mまで様々である。柱の掘形は60～80cmで、深さは50～70cmである。

ＳＢ５２（第27図）　調査区中央やや南に位置するＮ０°の４間×３間の南北棟である。桁行き6.9m、梁行4.5mで、柱掘形は60～80cm、深さは20～30cmである。出土遺物に土師器杯（57～59）、須恵器長頸壺（59）などがある。

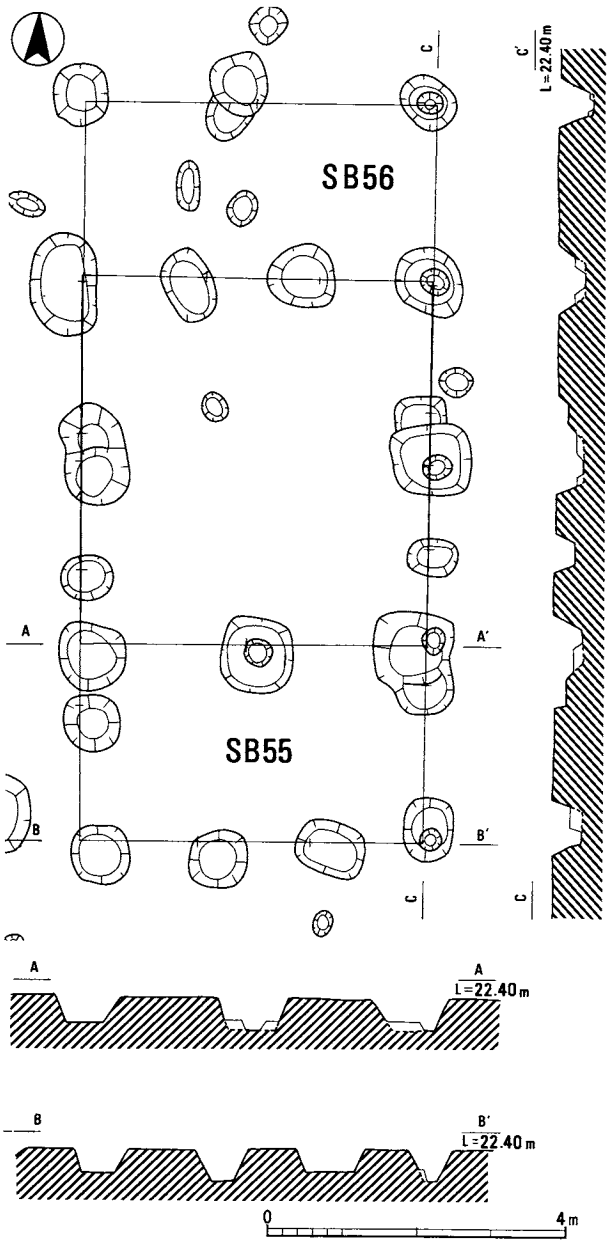
ＳＡ５１（第27図）　ＳＢ５２の東約3.5mに位置し、Ｎ０°の南北方向の、調査区外へのびる柵である。柱間は1.2～2.4mと様々であるが、柵の長さは確認されている分で約19mである。柱跡の状況から新旧２度の建て替えがあったものと考えられる。柱



第26図　ＳＢ14，９，20実測図（１：100）



第27図　ＳＢ52，ＳＡ51実測図（１：100）



第28図　ＳＢ55，56実測図（１：100）

掘形の深さは20～40cmである。出土遺物に土師器杯や甕があるが、細片のため実測に足る遺物はない。遺物の内容やＳＢ５２の横で切れているところから、ＳＢ５２と同時期と考えられる。

ＳＢ９０（第29図）　ＳＢ５２の西方約12mに位置するＮ０°の４間×３間の南北棟である。桁行6.6m、梁行4.2mで柱間は1.2～1.8mである。柱掘形は60～80cmで、深さは30～50cmである。出土遺物に細片であるが土師器杯・甕や須恵器甕などがある。

ＳＢ９１（第29図）　ＳＢ９０に切りあったかたちでつくられている、Ｎ０°の３間×２間の南北棟である。桁行は5.1m、梁行は3.9m、柱間は1.5～2.1mである。柱の深さは20～40cmである。ＳＢ９０との新旧関係は不明であるが、ＳＢ９１の南側柱とＳＢ５２のロ１・ロ４の柱筋が通る。

ＳＢ５５（第28図）　ＳＡ５１の延長線上に西側柱が通る位置にある、Ｎ０°の４間×３間の南北棟である。桁行は7.5m、梁行は4.5mで、柱間は桁行が1.8mか2.1m、梁行が1.5mとなる。柱の深さは30～40cmである。出土遺物に土師器杯（61）・皿（62）・甕（63）などがある。

ＳＢ５６（第28図）　ＳＢ５５に重なる形でつくられた３間×２間のＮ０°の南北棟である。桁行は7.2m、梁行は4.8mである。柱間は桁行・梁行ともに2.4mである。柱掘形は70～80cm、深さは40～50cmである。柱の切りあい関係から、ＳＢ５５の建て替えと考えられる。出土遺物には土師器皿（64）・杯（65、66）・蓋（67）などがある。

ＳＢ９２（第30図）　調査区中央に位置するＥ０°の５間×３間の南北棟である。桁行8.4m、梁行4.8mで、柱間は1.5mか1.8mである。柱掘形は60～80cmで、深さは40～70cmとばらつきがある。出土遺物に土師器皿（73）などがある。

ＳＢ８４（第30図）　ＳＢ９２を切る形でＮ０°の５間×３間の南北棟である。桁行は5.4m、梁行は4.8mで柱間は1.5mか1.8mである。柱掘形は70～80cmで、深さは40～50cmである。出土遺物に土師器杯・甕、須恵器杯蓋等がある。

ＳＢ８５（第30図）　ＳＢ８４を切るかたちでＮ５°Ｅに少し方位をふって４間×３間で建つのがＳＢ８５である。桁行は6.0m、梁行は4.2mである。柱間は桁行・梁行ともに1.2～1.8mまで様々である。柱掘形は40～70cmで、深さは20～60cmである。出土遺物に土師器杯・甕がある。

ｃ．その他の遺構

ＳＫ４９　東西２mで南北３m程の不定形の土坑である。深さは３～５cm、西端に南北にやや長い方形の石積みの部分がある。石積みの部分のみ深さは17～18cmと深くなる。一番深いところの標高は22.2mである。この遺構の性格は不明である。

Ｄ．平安時代前期の遺構

ａ．竪穴住居

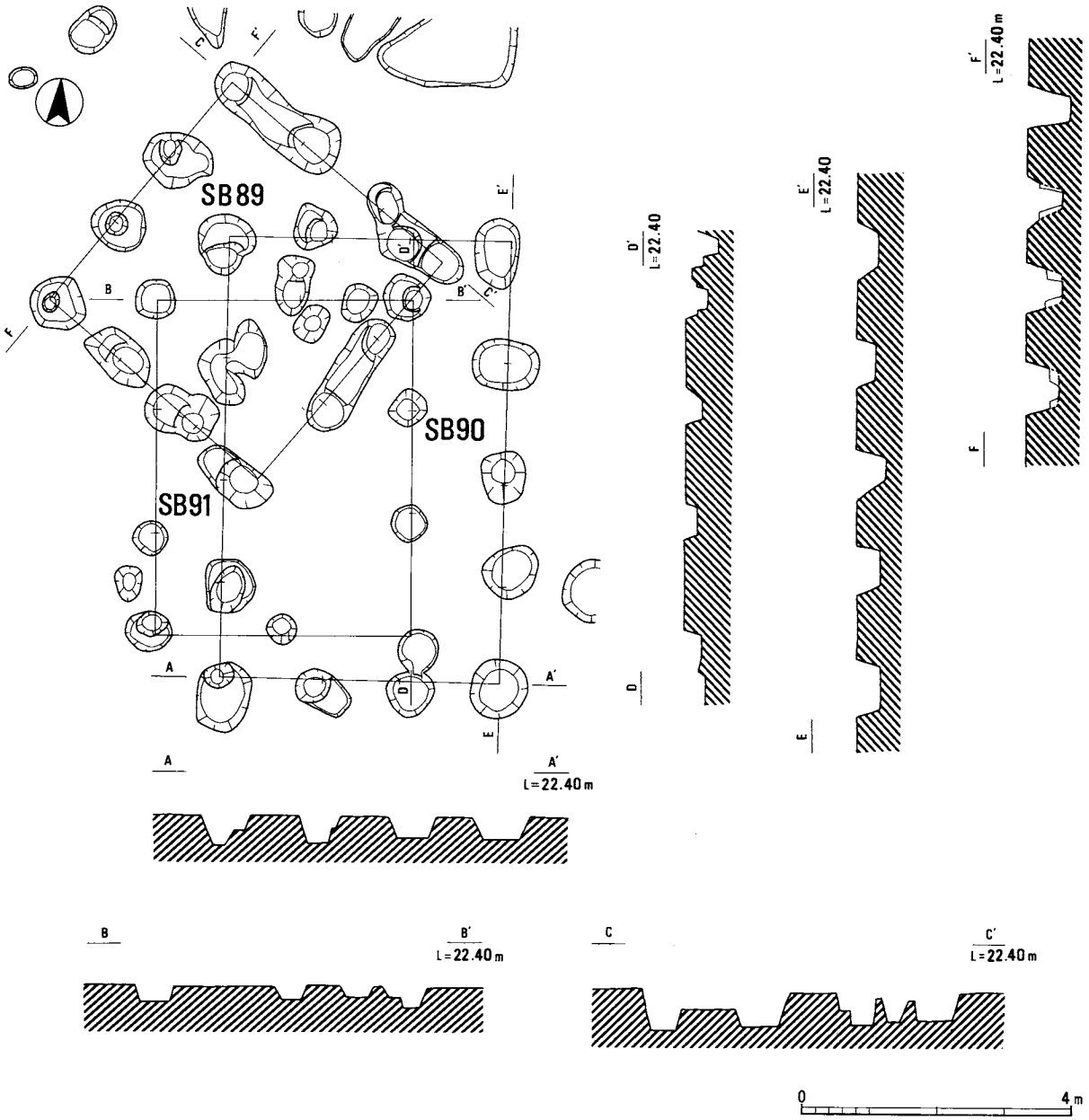
ＳＨ５４（第25図）　調査区の東端で検出されたもので、規模は13.6㎡と大きい。隅丸方形を呈するが、やや東側に広がっている。標高は22.0ｍであるが中央部はほぼ円形に10㎝程度窪んでいる。この窪みは、埋土の状況からＳＨ５４が使用時に掘られていたと考えられ、この時期の竪穴住居にしては大きく、竪穴住居というよりは土坑の性格をもつものとも考えられる。

ｂ．掘立柱建物

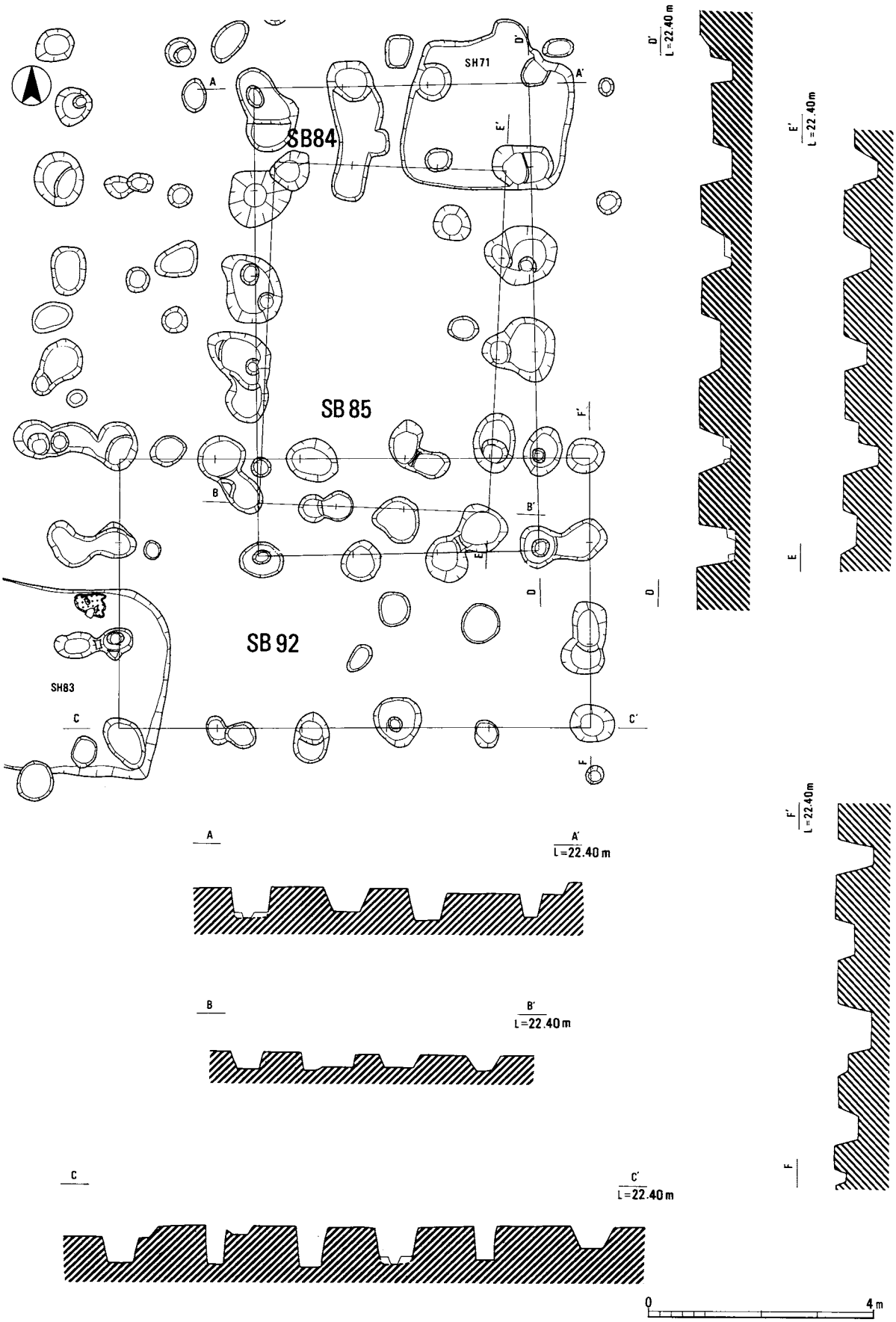
ＳＢ４※（第31図）　調査区西端に位置し、ＳＨ３を切ってつくられる。柱筋はＮ５°Ｅの方位に向き、桁行きは3.6ｍ、梁行は3.3ｍで、柱間は桁行が1.8ｍ、梁行が1.6ｍと1.7ｍになり、不揃いである。柱掘形は大きく、１ｍ近いのもある反面、60㎝程のもあり、柱通りも悪い。ただ、柱の深さは60～70㎝と最も深い。

ＳＢ８６（第32図）　調査区中央に位置し、Ｎ０°の南北棟の４間×２間の総柱建物である。桁行8.7ｍ、梁行3.9ｍで柱間は1.2～2.1ｍまで様々である。柱の深さは30～50㎝である。ＳＢ５５の南側柱筋とＳＢ８６の南側柱筋は通るが、総柱ということもあり、別の時期に入れた。遺物に土師器甕（71）や須恵器大甕（72）がある。

ＳＢ９６（第32図）　ＳＢ８６とＳＢ８７を切って



第29図　ＳＢ89，90，91実測図（１：100）



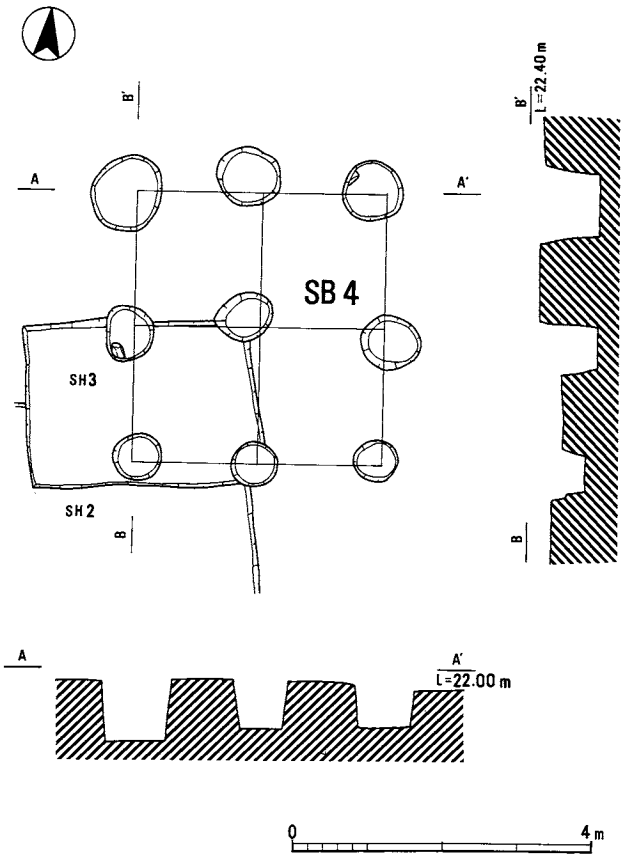
第30図　ＳＢ84，85，92実測図（１：100）

つくられているＮ０°の３間×３間の総柱建物である。桁行き６ｍ、梁行5.9ｍとやや南北に長い。柱間は1.8ｍと2.1ｍのどちらかとなる。柱の深さは40㎝内外である。遺物に土師器杯（68～70）などがある。

ＳＢ８７（第32図）　ＳＢ８６の南に位置し、４間×２間のＮ５°Ｗの南北棟の総柱建物である。桁行は7.2ｍ、梁行は3.6ｍで、柱間はすべて1.8ｍとなる。方位はやや異なるが、ＳＢ８６の建て替えであろうか。遺物に土師器杯・高杯・甕、須恵器長頸壺片等がある。

ＳＢ９３（第33図）　調査区のやや南に位置する６間×２間のＮ５°Ｅの南北棟である。ロ１の柱穴が欠けているが、２年４回にわたる分割調査の切れ目に位置するため、見落としの可能性が否めない。桁行が６間・13ｍは調査区内では最も長大な建物で、梁行は4.5ｍである。柱間は桁行・梁行とも2.1ｍか2.4ｍとなる。遺物に土師器杯・甕片がある。

ＳＢ８９（第29図）　ＳＢ８７の南に位置し、Ｎ40°Ｗの３間×３間の一部に「溝もち」手法をもつ建物である。ＳＢ90・91を切って建てられており、柱掘形は60～80㎝、深さも50～60㎝と比較的おおきなものであるが、柱穴からの遺物で平安時代前期とした。方位や「溝もち」の点から時期の検討が必要であろう。



第31図　ＳＢ４実測図（１：100）

ｃ．その他の遺構

ＳＫ８８　今年度調査区の東端で検出された土坑である。東西2.6ｍ、南北1.8ｍあり、深さは２段になり、浅い東側で10㎝、深い西側で20㎝である。最も深いところの標高が21.5ｍ程である。性格不明の土坑である。

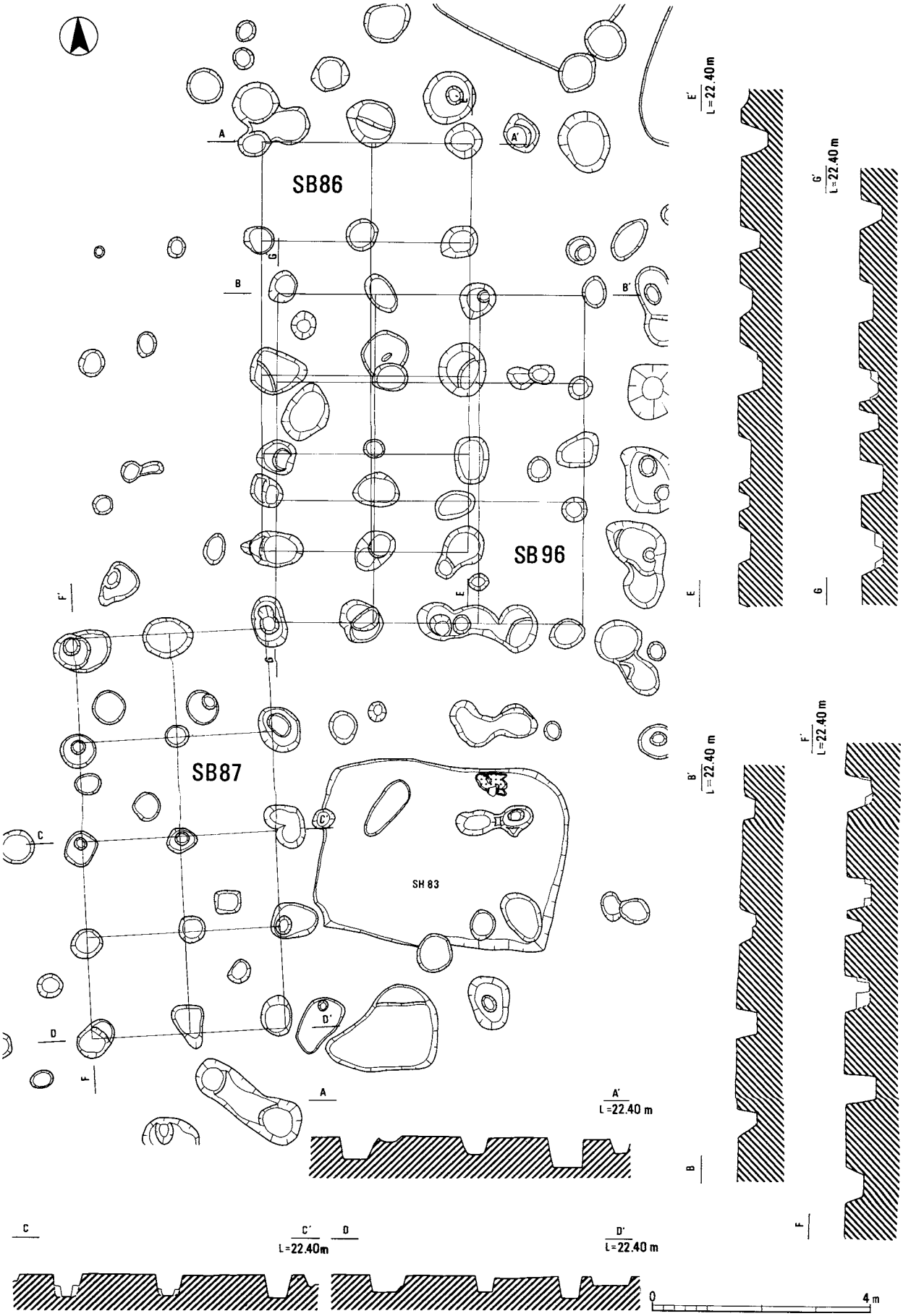
ＳＥ５３（第34図）　調査区のやや東に位置し、検出面での径は南北４ｍ、東西3.6ｍのほぼ円形の掘形の井戸である。検出面から底までの深さは約2.5ｍで、素堀りとなる。ただし、断面の形状から土留めの木材が使用された可能性も残る。出土遺物は豊富で、土師器杯（84～106、108）・皿（109）・高杯（110）・蓋（107）・甕（111～122）・須恵器高杯（125）などの日常品がある。最下層にあたる砂混じりの層から口縁部を除き、ほぼ完形の灰釉陶器の長頸瓶（123）が出土した。また、猟に使ったのか土錐（127～129）や鉄鏃（130）もある。注目すべきは墨書土器の多さで、墨痕跡の残るものを含め23点あった。判読できるものは「門」または「□門」と読める。

ＳＤ５０　幅70～80㎝、深さ８～13㎝である。調査区の南東端から始まり北に向かって流れ、ＳＫ４９の土坑を切ったところで大きく東に曲がり、調査区外へ流れる。出土遺物として土師器鉢（83）などがある。

Ｅ．平安時代末期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物３棟がある。いずれも柱掘形はそれまでのと比較して小さく、柱通りも悪い。また、いずれも総柱建物となる。

ＳＢ８０（第35図）　調査区の南端に位置し、３間×３間のＳＨ４７やＳＫ４９などを切ってつくられた総柱建物である。ロ３の束柱は検出できなかった。方位は梁行方向がＮ５°Ｅのやや東西に長い東西棟である。桁行7.2ｍ、梁行７ｍで、柱間は桁行・梁行ともに2.9～2.1ｍまで様々である。柱掘形は20～40㎝と比較的小さく、深さは15～20㎝程である。ロ



第32図　ＳＢ86，ＳＢ87，ＳＢ96実測図（１：100）

４の柱穴からは、ロクロ土師器（75）が出土した。

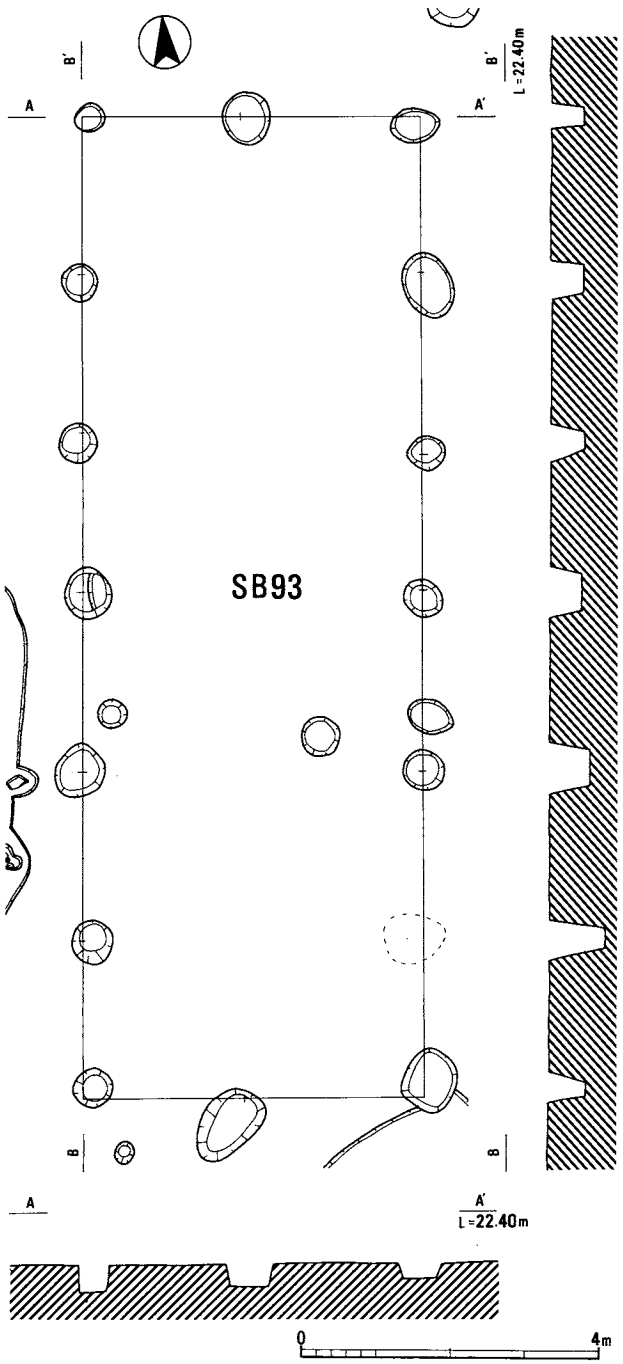
ＳＢ８１（第36図）　調査区の東端に位置し、ＳＢ８０の北東約15mにあり、４間×３間の総柱建物である。ロ３に束柱の跡は見られない。方位はＮ５°Ｗの南北棟で、桁行は9.2m、梁行は7.5mである。柱間は桁行・梁行ともに2.1～2.7mと様々である。柱掘形の深さは25～45cmである。ハ４の柱穴からは完形のロクロ土師器（77）が、ハ３の柱穴からも完形のロクロ土師器（78）と、つぶれた形で土師器甕が４点（79～82）出土した。

ＳＢ９７（第37図）　調査区の南端に位置し、ＳＨ９５を切ってつくられた、２間×２間の総柱建物である。桁行5.4m、梁行は4.2mである。柱間は2.7mの桁行、2.1mの梁行に区分できる。柱掘形の深さも、20～40cmと様々である。遺物には土師器杯片・土師器甕片、黒色土器椀（74）などがある。

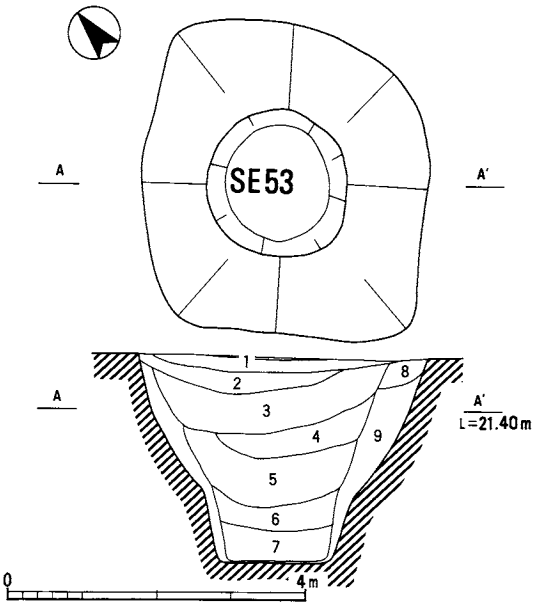
Ｆ．時期不明の遺構

ＳＸ５９　調査区のやや北東に位置し、一辺が80cmの隅丸方形の土坑墓である。深さは約45cmで周囲に焼土をもつため火葬墓と思われる。出土遺物が細片のため、遺構時期は不明である。

ＳＸ６０（第38図）　ＳＸ59の東約10mに位置し、一辺が80cm前後で隅丸方形の土坑墓である。深さは23cmで周囲に焼土を含むため、火葬墓と思われる。出土遺物は細片で時期は不明であるが、ＳＸ５９と同じような規模・形状のため、この両者は時期が近いものと思う。

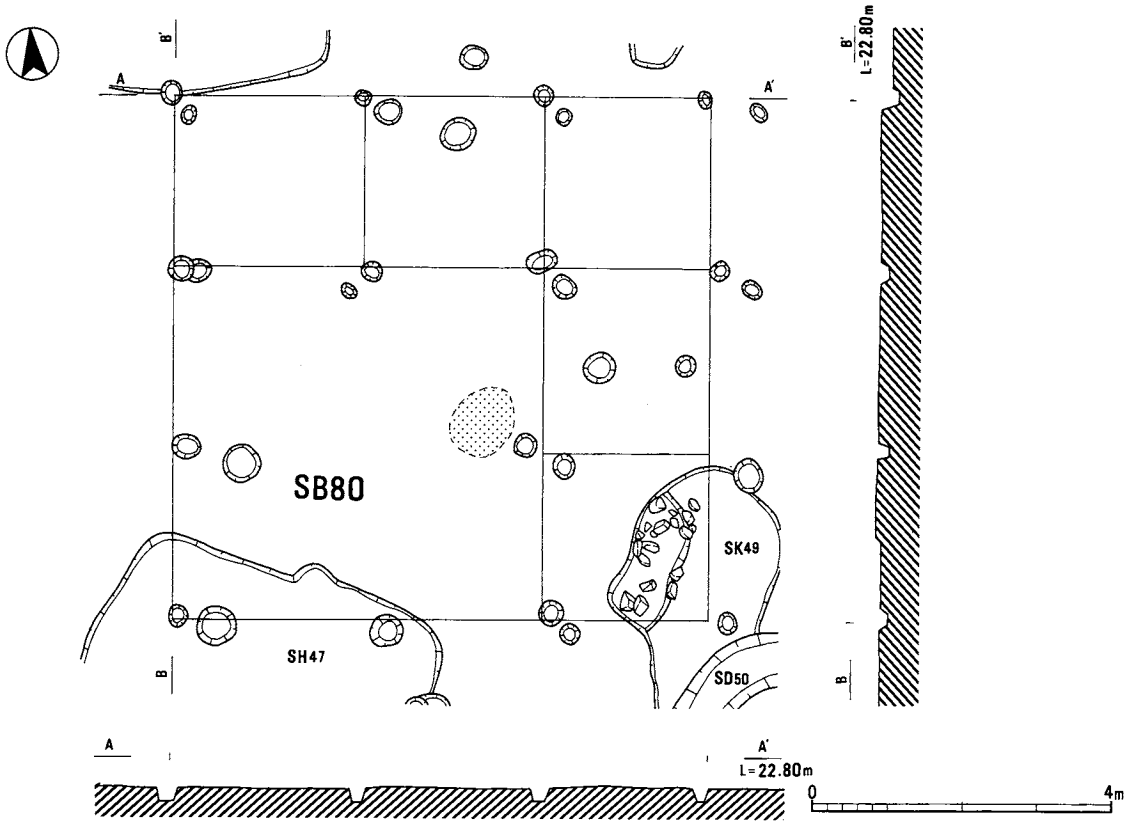


第33図　ＳＢ93実測図（１：100）

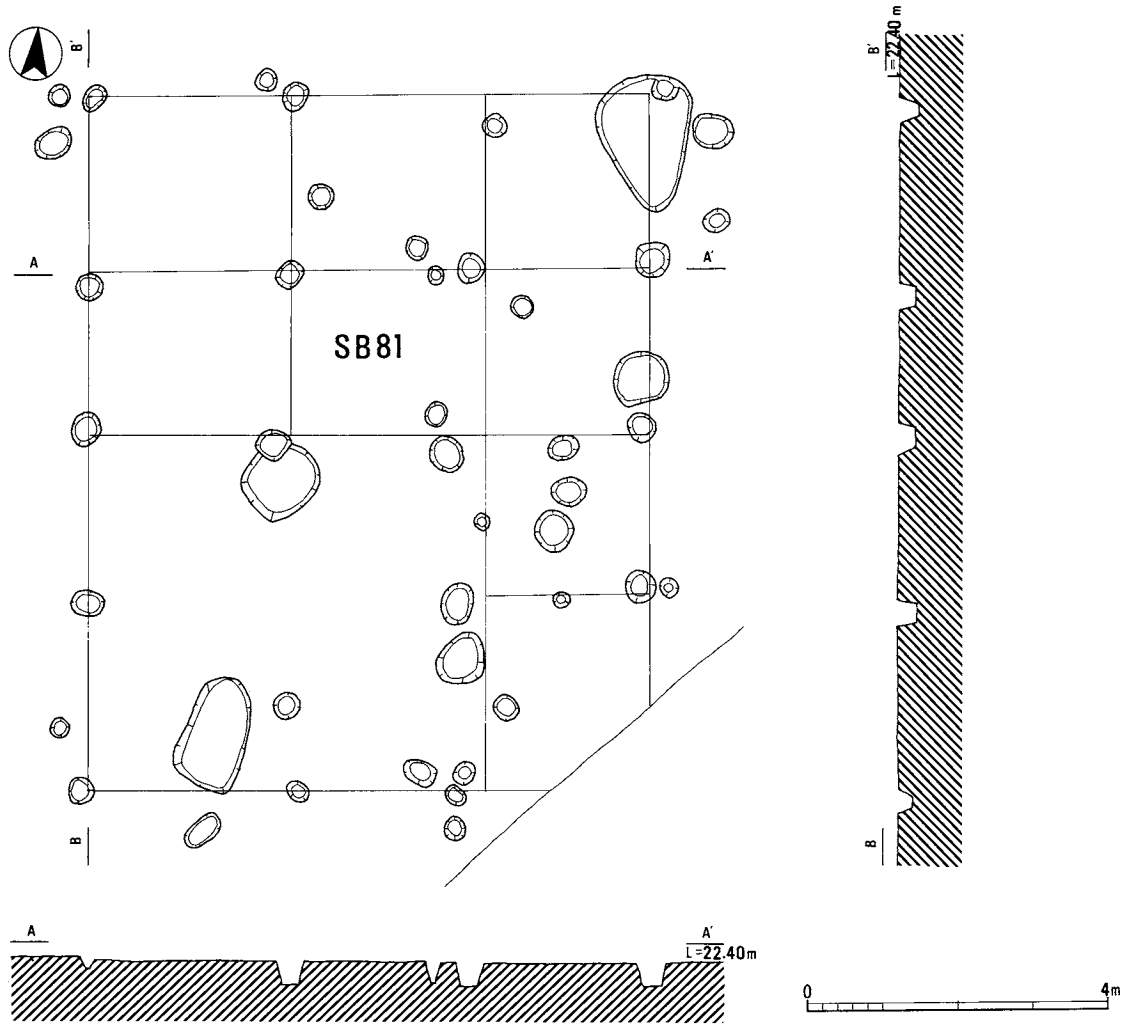


1．黒褐色粘質土　2．暗褐色粘質土
3．礫混暗灰色土　4．淡灰褐色土
5．暗灰褐色土　6．礫混暗褐粘土
7．灰褐砂質土　8．黄褐砂質土
9．灰褐粘土

第34図　ＳＥ53実測図（１：100）



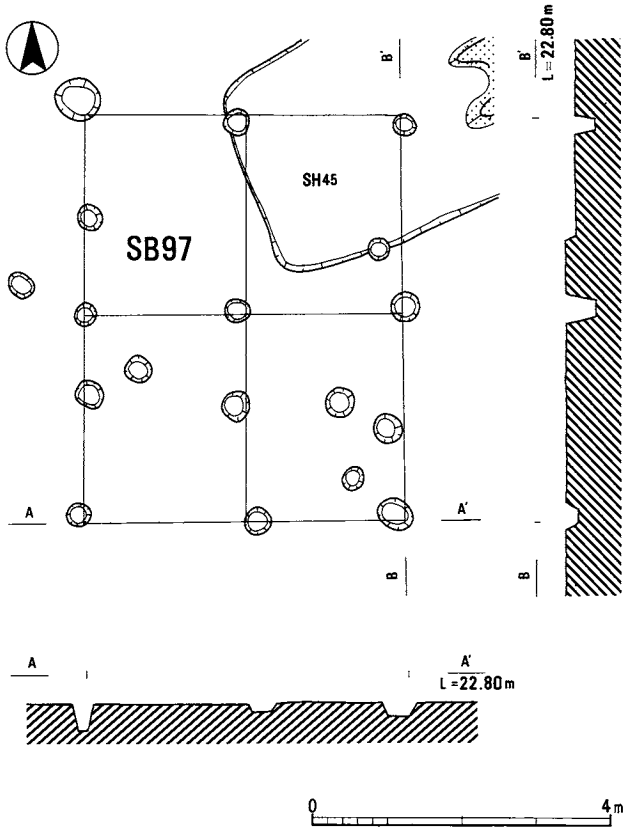
第35図　ＳＢ80実測図（１：100）



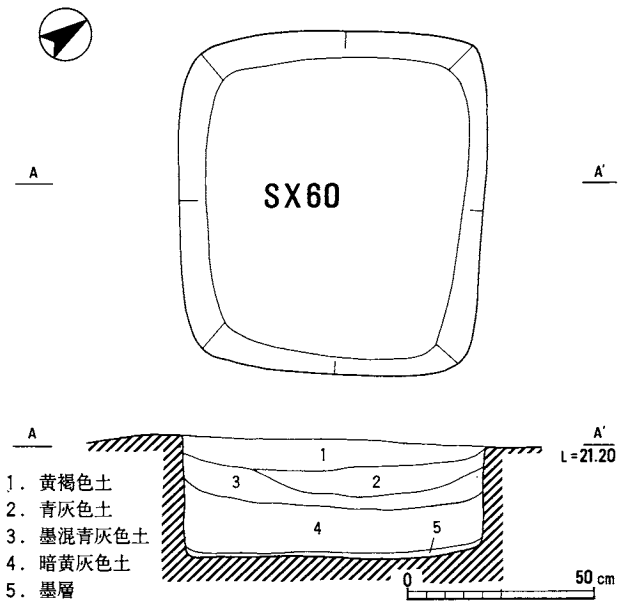
第36図　ＳＢ81実測図（１：100）

3．遺　物

出土遺物は整理箱にして、約120箱程度出土した。前年度調査分を含めると総計5,000㎡の調査区に対して、200箱程度の出土量である。遺物は約半数が包含層、残りの半数が遺構内の出土という割合である。



第37図　ＳＢ97実測図（１：100）



第38図　ＳＸ60実測図（１：20）

遺物は弥生土器片も一部に含まれるが、90％以上は飛鳥から平安時代の遺物である。遺物の過半数は土師器や須恵器類である。他に灰釉陶器、製塩土器、わずかではあるが緑釉陶器片や平瓦片、土錘や鉄製品がある。製塩土器は整理箱に約２箱程度が出土している。

Ａ．飛鳥時代の遺物

この時代に属するものはＳＨ４５から出土のＴＫ217①型式相当の須恵器の杯蓋などがあるが、多くは、時期不明の土師器や須恵器の細片である。

ａ．ＳＨ９５出土遺物

土師器甕（１）は体部がやや角張って、頸部から口縁部が肥厚し、大きく外反して直上やや外方向につまみあげる。ハケメは内面が外面に比べやや細かい。土師器甕（２）はやや口径が大きいが、頸部から口縁部の厚さがやや緩くなる。口縁端部のつまみ上げは強くなる。ハケメは内面より外面のほうがやや細かい。

Ｂ．奈良時代前期の遺物

ａ．ＳＨ３７出土遺物

土師器長胴甕（３）は、砲弾状に立ち上がった体部から、頸部はやや肥厚しながら口縁部は大きく外反して、端部は水平方向を向く。端部付近で緩くつまみ上げている。外面体部中央付近に、円形をなぞったヘラ記号様のものがある。

ｂ．ＳＨ３８出土遺物

土師器杯（４）は、器壁がやや厚手で底部から口縁部へ大きく立ち上がる。

ｃ．ＳＨ３９出土遺物

土師器甕（５）は、体部が直上方向に立ち上がり頸部に至るが、ほぼ体部と同じ位の厚さを保ちながら外反し、端部は斜め外方向を向き、直上方向につまみ上げる。

ｄ．ＳＨ４０出土遺物

土師器杯（６）は、底部から口縁部にかけ急に立ち上がり、器壁の厚さは底部から口縁部までほとんど変わらない。土師器杯（７）は、やや口径が大きくなり、底部から口縁部への立ち上がりはやや緩くなる。また、底部から口縁部までのたちあがりの部

第８表　打田遺跡竪穴住居遺構一覧

竪穴住居 No.	規模SN×EW (m)	平均深さ (cm)	方　向 (長軸を中心に)	カマドの位置	備　　考	時　期
ＳＨ４５	３．６×３．０	１４	Ｎ６０°Ｅ	東辺中央		飛鳥
ＳＨ９４	４．７×３．４	１０	Ｎ　５°Ｅ	東辺やや南		飛鳥
ＳＨ９５	３．８×３．８	１０	Ｎ９０°Ｅ	東辺やや南		飛鳥
ＳＨ３６	２．７×２．７	１４	Ｎ７０°Ｅ	——		奈良前期
ＳＨ３７	２．２×２．５	１５	Ｎ１５°Ｗ	——		奈良前期
ＳＨ３８	２．７×２．５	５	Ｎ１５°Ｗ	東辺中央		奈良前期
ＳＨ３９	—— ×２．６	１３	Ｎ　０°Ｗ	北辺中央？	ＳＨ３８に切られる	奈良前期
ＳＨ４０	３．０×３．０	１２	Ｎ８０°Ｅ	東辺やや南		奈良前期
ＳＨ４１	３．２×２．３	８	Ｎ７０°Ｗ	——		奈良前期
ＳＨ４２	３．０× ——	５	Ｎ２０°Ｅ	——	ＳＨ４３に切られる	奈良前期
ＳＨ４３	３．０× ——	６	Ｎ４０°Ｗ	——	ＳＨ４４に切られる	奈良前期
ＳＨ４４	２．６×２．２	５	Ｎ４０°Ｗ	——		奈良前期
ＳＨ４６	３．２×２．６	１２	Ｎ８０°Ｗ	北辺やや東		奈良前期
ＳＨ４７	４．４×３．０	５	Ｎ６０°Ｗ	北辺やや東		奈良前期
ＳＨ４８	４．３×２．７	１	Ｎ５０°Ｗ	北辺やや東		奈良前期
ＳＨ６９	３．０× ——	６	Ｎ６０°Ｗ	——		奈良前期
ＳＨ５８	—— ×５．０	６	Ｎ１０°Ｅ	——	ＳＨ５７に切られる	奈良前期
ＳＨ６１	３．０×２．７	１０	Ｎ３０°Ｅ	——		奈良後期
ＳＨ７０	２．８×２．６	１０	Ｎ６０°Ｗ	——		奈良前期
ＳＨ７１	２．８×２．６	１７	Ｎ８０°Ｗ	北辺やや東	ＳＨ８４，８５に切られる	奈良前期
ＳＨ７４	２．８×２．５	１０	Ｎ８０°Ｗ	——		奈良後期
ＳＨ８３	４．２×３．３	１７	Ｎ８０°Ｗ	北辺やや東	ＳＨ９２に切られる	奈良後期
ＳＨ５７	４．１×５．３	２４	Ｎ１０°Ｅ	——		平安初期
ＳＨ６１	３．０×２．７	１０	Ｎ３０°Ｅ	——		平安初期
ＳＨ５４	４．０×３．４	１７	Ｎ９０°Ｅ	——		平安前期

第９表　掘立柱建物一覧

掘立柱建物No.	規模(桁行×梁間)	柱間 桁行（m）	柱間 梁間（m）	桁行(m)	梁間(m)	棟方向	備考	時期
ＳＢ５２	４×３	W1.5+2.1+1.8+1.5 E1.8+1.5+1.8+1.8	N1.5+1.2+1.8 ×S1.5+1.5+1.5	6.9	4.5	N0°		奈良後期
ＳＡ５２	（旧）1.8+1.8+1.8+2.1+1.2+1.5+1.8+1.8+2.4+1.8 （新）1.8+1.8+2.1+1.8+1.8+2.4+1.8+2.4+1.8					N0°		奈良後期
ＳＢ９０	４×３	W1.8+1.8+1.5+1.5 E1.8+1.8+1.5+1.5	N1.5+1.2+1.5 ×S1.5+1.2+1.5	6.6	4.2	N0°		奈良後期
ＳＢ９１	３×２	W1.8+1.8+1.5 E1.8+1.5+1.8	N2.1+1.8 ×S1.8+2.1	5.1	3.9	N0°	ＳＢ90と切り合	奈良後期
ＳＢ５５	４×３	W1.8+1.8+1.8+2.1 E2.1+1.8+1.8+1.8	N1.5+1.5+1.5 ×S1.5+1.5+1.5	7.5	4.5	N0°		奈良後期
ＳＢ５６	３×２	W2.4+2.4+2.4 E2.4+2.4+2.4	N2.4+2.4 ×S2.4+2.4	7.2	4.8	N0°	ＳＢ55を切る	平安初期
ＳＢ９２	５×３	W1.5+1.8+1.5 E1.5+1.8+1.5	N1.8+1.5+1.5+1.5+1.8 ×S1.8+1.8+1.5+1.5+1.8	8.4	4.8	E0°		平安初期
ＳＢ８４	５×３	W1.8+1.8+1.5+1.5+1.8 E1.8+1.8+1.5+1.8+1.5	N1.5+1.5+1.8 ×S1.5+1.5+1.8	5.4	4.8	N0°		平安初期
ＳＢ８５	４×３	W 2.4 +1.8+1.8 E1.5+1.8+1.5+1.2	N1.5+1.2+1.5 ×S1.5+1.2+1.5	6.0	4.2	N5°E	ＳＢ71と84を切る	平安初期
ＳＢ８６	３×３	W2.4+2.1+2.4 E2.4+2.1+2.4	N1.8+1.8+2.1 ×S1.8+1.8+2.1	4.6	5.7	N0°	総柱建物	平安前期
ＳＢ９６	３×３	W1.8+2.1+2.1 E1.8+2.1+2.1	N1.8+2.1+1.8 ×S1.8+2.1+1.8	6.0	5.9	N0°	ＳＢ86、87を切る	平安前期
ＳＢ８７	４×２	W1.8+1.8+1.8+1.8 E1.8+1.8+1.8+1.8	N1.8+1.8 ×S1.8+1.8	7.2	3.6	N4°W	束柱の可能性あり	平安前期
ＳＢ８９	３×３	W1.2+1.5+1.5 E1.2+1.5+1.5	N1.5+1.2+1.2 ×S1.5+1.2+1.2	4.2	4.0	N38°W	総柱建物「溝もち」	平安前期
ＳＢ９３	６×２	W2.1+2.1+2.1+2.4+2.1+2.1 E2.1+2.4+1.8+2.4+2.1+2.1	N2.1+2.4 ×S2.1+2.4	13.0	4.5	N5°E		平安前期
ＳＢ８０	３×３	W2.3+2.4+2.3 E2.3+2.4+2.3	N2.9+2.1+2.2 ×S2.9+2.1+2.2	7.0	7.2	N5°E		平安末期
ＳＢ８１	４×３	W2.3+2.2+2.1+2.6 E2.3+2.2+2.1+2.6	N2.7+2.6+2.2 ×S2.7+2.6+2.2	9.2	4.2	N5°W		平安末期
ＳＢ９７	３×３	W2.7+2.7 E2.7+2.7	N2.1+2.1 ×S2.1+2.1	5.4	4.2	N0°		平安末期

第10表　その他の遺構一覧

遺構名	特徴	時期
ＳＫ４９	（径）ＳＮ×ＥＷ２．０×３．０ｍ　（深さ）３～６cm（石のところは１７～１８cm）西端に石積みあり ＳＤ５０に切られる	奈良後期
ＳＫ８８	（径）２．６×１．８ｍ　（深さ）１０～２０cm　深い所と浅い所あり	平安前期
ＳＥ５３	（径）３．６×４．０ｍ　（深さ）２．４８ｍ	平安前期
ＳＤ５０	（幅）０．７～０．８ｍ　（深さ）８～１３cm　南から北へ流れる	平安前期
ＳＸ５９	（径）０．８×０．８ｍ　火葬墓か　（深さ）４５cm　周囲に焼土	時期不明
ＳＸ６０	（径）０．９×０．８ｍ　火葬墓か　（深さ）２３cm　周囲に焼土	時期不明

分がやや肥厚する。

e．ＳＨ４１出土遺物

土師器甕（８）は、体部から頸部にすぼまり、頸部で肥厚して口縁部へ、くの字に曲がる。端部まで直線的にのび、端部断面は厚く肥厚する。

f．ＳＨ４２出土遺物

土師器杯（９）は、底部から口縁部にかけて大きく立ち上がるが、やや深めの杯である。

g．ＳＨ４６出土遺物

土師器甕（10）は、器壁は薄く、口縁部が大きく外反し、頸部から口縁部は強くヨコナデを施し、端部は水平方向まで弯曲する。ハケメも細かい。土師器杯（11）は、口径が16cm前後と大きく、底部から口縁部まで緩やかに立ち上がる椀的な要素をもつ。また、口縁部付近の器壁は底部に比較して、やや肥厚する。土師器皿（12）は、厚めの底部から大きく立ち上がり口縁部はやや薄くなる。底部外面にヘラ記号様のものが残る。土師器甕（13）は口径が34cm前後と大きく、体部からややすぼまり頸部に至り、口縁部で大きく外反するが、端部は直上方向につまみ上げる。頸部から口縁部は肥厚する。

h．ＳＨ４７出土遺物

土師器杯（14）は、底部から口縁部へ大きく立ち上がり、端部は直上やや外を向く。土師器甕（15）は、体部から頸部へ緩くすぼまり、緩く外弯し、端部で直上方向につまみ上げる。

i．ＳＨ５８出土遺物

土師器杯（33）は底部から口縁部に大きく内弯して、端部が直上方向を向く。須恵器杯（34）は口縁部のみであるが、ＭＴ21[②]型式あたりの時期のものであろうか。（35）は土師器甕の把手と思われるもので、把手の中央が穿孔を受けているものである。土師器甕（36・37）は体部から頸部に緩やかにすぼまり、直線的に口縁部は外反する。つまみ上げはない。いずれもやや外面より内面のハケメが細かい。

j．ＳＨ７０出土遺物

土師器杯（42）に対し、土師器杯（43）は口径はあまり変わらないが、底径がやや小さく、口縁端部は直上やや内を向く。須恵器杯（41・44）はＭＴ21型式あたりであろうか。

k．ＳＨ７１出土遺物

土師器杯（45）は、底部から大きく口縁部は立ち上がり、端部は直上やや内を向く。土師器高杯（46）は、斎宮編年ＳＤ170[③]あたりであろうか。土師器甕（47）は体部に対して頸部・口縁部はやや肥厚する。口縁部は頸部から大きく外反するが、端部は直上方向を向く。内面にハケメが見られない。土師器甕（48・49）は口縁部が大きく肥厚し、端部断面は四角となる。

Ｃ．奈良時代後期から平安時代初めの遺物

a．ＳＨ５７出土遺物

遺物は豊富である。土師器杯は口径12cm前後で口縁端部がやや内弯気味で深めの（18・20）と、口径13cm口縁端部が直線的に外にのびる（19）、口径13.5～15cmと大きく底部から口縁部に立ち上がるところで稜をもち、口縁部は外反する（17・21～23）の３タイプに分けられる。（23）は底部外面に「門」の墨書をもつ。土師器皿（24）は底部から立ち上がりに稜をもち、口縁が外反する。土師器甕は口径18cm前後で小型の（25、28）と口径26cm前後の大型の（26、27）に分けられる。須恵器杯蓋（29）や須恵器杯（30）はＴＫ７型式の時期であろう。須恵器壺（31）の高台はやや踏ん張りのきいたものである。二彩小壺（32）は底部片であるが、県下では３例目の出土であり、今まで鳥羽市神島と明和町斉宮跡での出土例がある。

b．ＳＨ６１出土遺物

土師器杯（38）に対して土師器杯（39）は立ち上がりが緩く、口縁端部もやや外方向を向く。土師器甕（40）は頸部から口縁部にかけての折り返しが緩く、端部は直上方向につまみあげる。また、頸部から口縁部にかけて肥厚する。

c．ＳＨ７４出土遺物

土師器杯（50）は底部から口縁部へ大きく立ち上がり、端部は直上やや内を向く。土師器甕（51）は頸部から口縁部が強くヨコナデされ、端部断面は円となる。

d．ＳＨ８３出土遺物

土師器杯（52）が底部から口縁部がゆるやかに立ち上がるのに対して、土師器杯（53）は底部から直線的に急に立ち上がり、深い。土師器（54）は底部付近が大きく肥厚しはじめており、脚が付く高杯と

思われる。土師器甕（55・56）はいずれも体部が直上方向にのび、頸部に至る口径30cm以上と推定される大きなものである。ただ、（56）に対して（55）は口縁部がやや厚く、端部も直上方向につまみ上げている。

e．ＳＢ５２出土遺物

（57）は墨痕をもつものである。判読不能で、器種も細片のためわかりにくいが、土師器杯片であろうか。柱穴からの出土である。土師器杯（58）は、底部から急に立ち上がり端部が直上方向を向く。柱穴からの出土である。須恵器（59）は、底部のみであるが、内面底部のつくりから壺系統のものであろう。（57）はハ１、（58）はホ４、（59）はイ２の柱穴からの出土である。

f．ＳＢ５５出土遺物

土師器（61）も墨書を外面底部にもつが、他の墨書をもつ遺物の状況から杯であろうか。土師器皿（62）は内面底部にらせん暗文をもつ。土師器甕（63）は、頸部から大きく外反し、ほぼ水平方向までのびるが、端部でななめ上方につまみ上げている。（61）はイ３から、（62）はロ４から、（63）はイ４の柱穴からの出土である。

g．ＳＢ５６出土遺物

土師器皿（64）はやや口径が大きく、口縁部の立ち上がりも小さいが、土師器皿（66）は口径はやや小さいが、口縁部の立ち上がりは大きい。土師器杯（65）は立ち上がりはさらに大きい。土師器蓋（67）は外面にヘラミガキを施す。（64）～（67）はすべてロ１柱穴からの出土である。

h．ＳＢ９２出土遺物

土師器皿（73）は底部から口縁部に立ち上がるところで稜をもち、口縁はななめ外方向に直線的にのびる。端部は直上につまみ上げる。ロ６柱穴からの出土である。

i．ＳＡ５１出土遺物

土師器杯（60）は、墨痕を外面底部にもつもので、底部から急に立ち上がり、端部は直上やや内を向く。ＳＢ５２の南側柱筋に延長する柱穴からの出土である。

Ｄ．平安時代前期の遺物

a．ＳＢ９６出土遺物

土師器皿（68）は底部から一段稜をもち、口縁部は外方向に弯曲し、端部は水平方向やや上を向く。土師器（69）は底部から口縁部に緩やかに立ち上がり、稜はもたない。土師器杯（70）はやや薄手のもので、口縁部が内弯しながら立ち上がるが、端部でやや外方向につまみ出す。３点は、すべてイ３柱穴からの出土である。

b．ＳＢ８６出土遺物

土師器甕（71）は口縁端部が頸部・口縁部に対して肥厚する。端部断面は円となる。（72）は須恵器甕の口縁部である。口縁部は直線的にのび、端部が外側に肥厚する。（71）はハ３柱穴から、（72）はニ１柱穴からの出土である。

c．ＳＥ５３出土遺物

土師器杯片（84～100）はいずれも墨痕あるいは墨書の残るものである。判読できるものは「門」と書かれたものが多い。黒色土器杯（101）はＡ類に属すもので、外面に「□門」と読める。門の上の字は食片であろうか。土師器杯（102～106・108）もいずれも墨痕をもつものであるが、判読できない。土師器杯（102）は口縁端部が直上やや内を向くが、（106）は底部から緩やかに立ち上がり、弯曲しながら口縁部に至る。端部はななめ上方を向く。土師器蓋（107）は、宝珠つまみの部分だけであるが、斎宮編年ＳＫ1045あたりであろうか。土師器皿（109）は底部からわずかに稜をもってななめ外方向に直線的に口縁がのびる。土師器（110）は口縁部の状況から高杯であろう。土師器甕（111～122）も頸部からくの字に外反してするが、つまみ出さないもの（119・120）、端部が直上方向につまみ出すもの（111～118、121・122）とに分けられる。灰釉陶器長頸瓶（123）は頸部から体部上半に施釉される。口縁端部を欠くが、猿投編年Ｋ90④型式相当であろう。灰釉陶器小椀（124）は口縁端部から内面底部近くまで、ていねいにハケ施釉される。須恵器(125）はどの面も磨耗が激しく、古墳時代の遺物の混入であろうか。口縁端部に面をもつ。須恵器（126）は内面底部の状況から長頸瓶か壺の類である。外面底部に木葉痕をもつ。土錘（127～130）はそれぞれ22ｇ、20ｇ、14ｇの手ずくねのものである。いずれも円筒形をしている。

d．ＳＤ５０出土遺物

土師器鉢（83）は底と体部の境がはっきりした鉢で、頸部から口縁部にかけてやや外反し、端部で直上方向につまみ上げる。斎宮編年ＳＫ1445あたりであろう。

E．平安時代後期から末期の遺物

a．ＳＢ９７出土遺物

黒色土器椀（74）は黒色Ａ類に属すもので、外面ヘラケズリ、内面横方向の細かいミガキが施される。ハ３柱穴からの出土である。

b．ＳＢ８０出土遺物

土師器皿（75）は、ロクロ成形のもので底部に糸切り痕をもつが、口縁部を欠く。

c．ＳＢ８１出土遺物

土師器杯（76）は、底部から急に立ち上がり、口縁部は直線的にななめ上方を向く。土師器皿（77・78）はいずれもロクロ成形のもので、底部に糸切り痕をもつ。土師器甕（79～82）はいずれも体部に比べ口縁部が肉厚的で、口縁端部に折り返しがつき、端部断面は厚く肥厚する。

d．ＳＫ６５出土遺物

ＳＨ５７の東に位置する土坑からの出土である。土師器皿（133～135）は口縁部が底部から急に立ち上がるもの（133）、緩やかに立ち上がるもの（134）、器壁がやや厚く、急に口縁が立ち上がるが、端部がすぼまるもの（135）に区分できる。土師器甕（136）は体部が直上方向にのび、頸部に至り口縁部は水平方向にくの字に弯曲する。端部断面は四角である。土坑の時期は奈良後期と思われる。

e．その他の土坑出土遺物

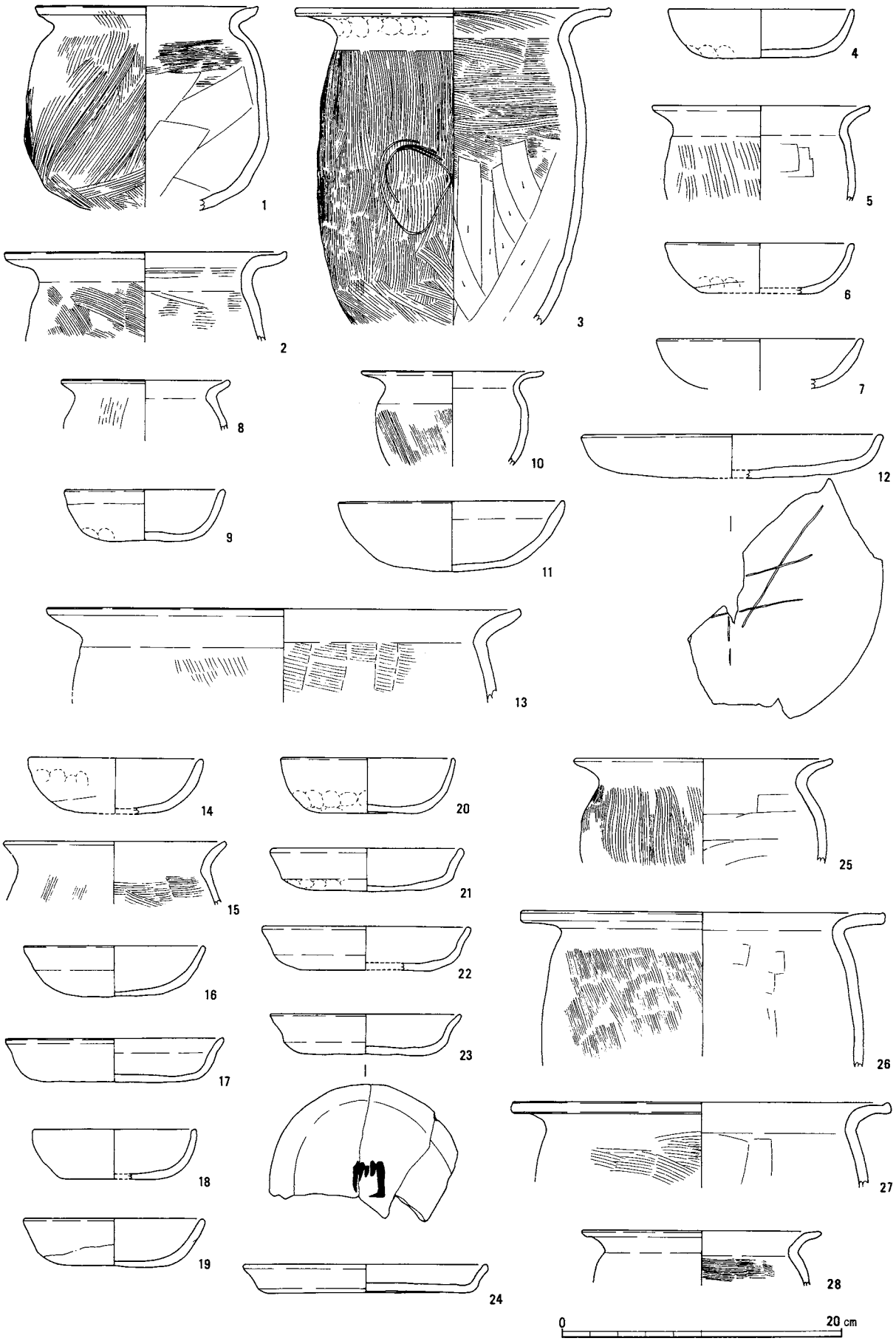
土錘（137～141）はそれぞれ12ｇ、15ｇ、15ｇ、15ｇ、５ｇでいずれも手ずくねである。（141）がそろばん形をしているのに対して、他の土錘は円筒形をしている。

f．ｐｉｔ出土遺物

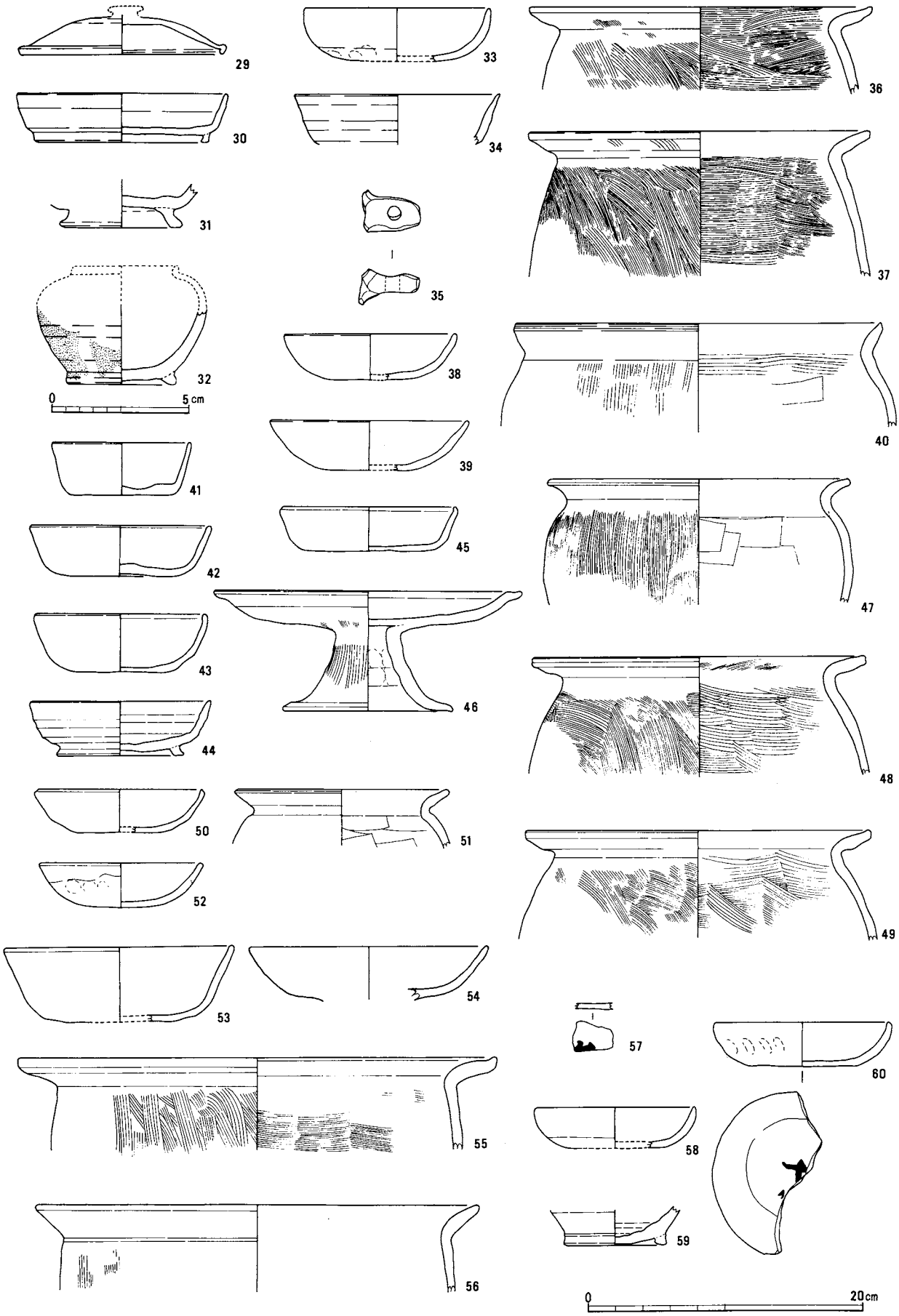
土師器皿（153）は高台付きの土師器皿の皿部が欠け、高台部のみが残ったものである。皿部の欠けたところは何か鋭利なもので削った跡があり、２次的に再利用したものと思われる。灰釉陶器皿（154）は猿投編年Ｋ90型式あたりであろう。

F．包含層出土遺物

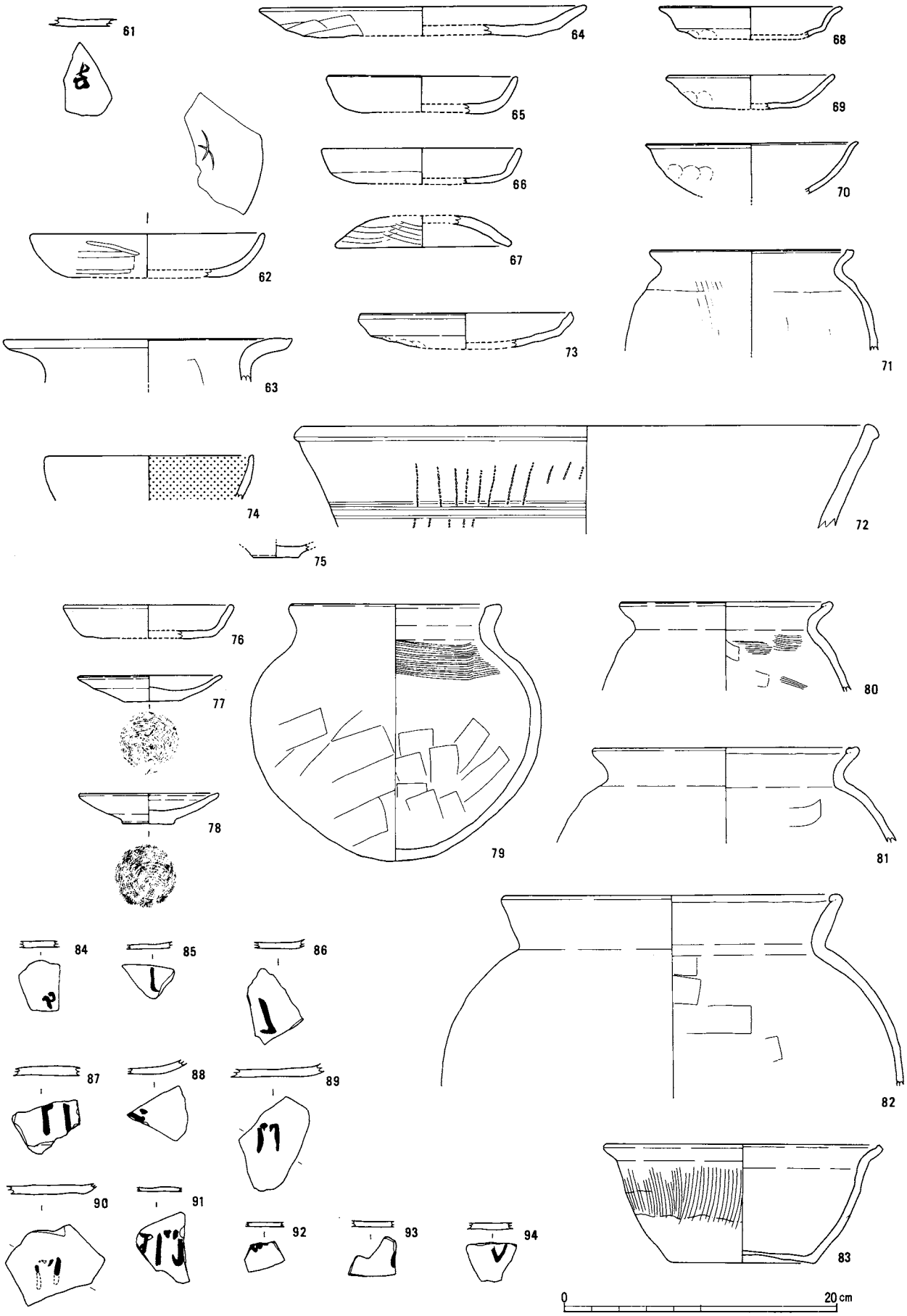
土師器皿（142・143）はいずれも底部の外面に「門」の墨書をもつものである。灰釉陶器椀（144）は底部片であるが、「徒」と読めるものである。土師器杯片（145～149）はいずれも墨書をもつものであるが、判読できるものは「門」「得」と読める。円面硯（150・151）はいずれもわずかに陸と海の区別がなされており、圏足部に透しをもつ。（150）は18～20の長方形透し孔をあける。圏足部の欠けた（151）は６～７の透し孔はあるが形は不明である。灰釉陶器（152）は、外面上に施釉されており、蓋であろう。



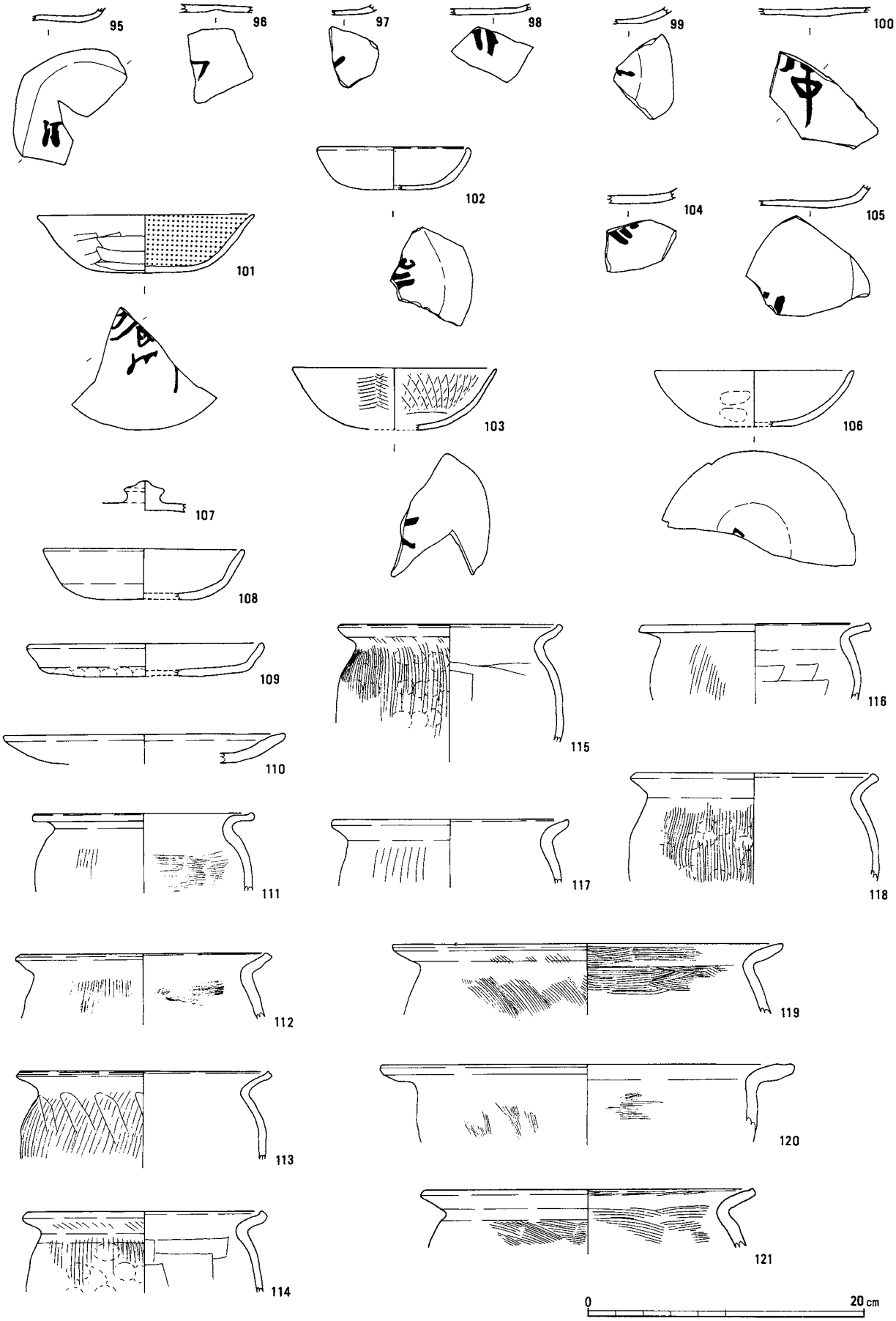
第39図　遺物実測図（1：4）　（1・2はSH95、3はSH37、4はSH38、5はSH39、6・7はSH40、8はSH41、9はSH42、10～13はSH46、14・15はSH47、16～28はSH57出土）



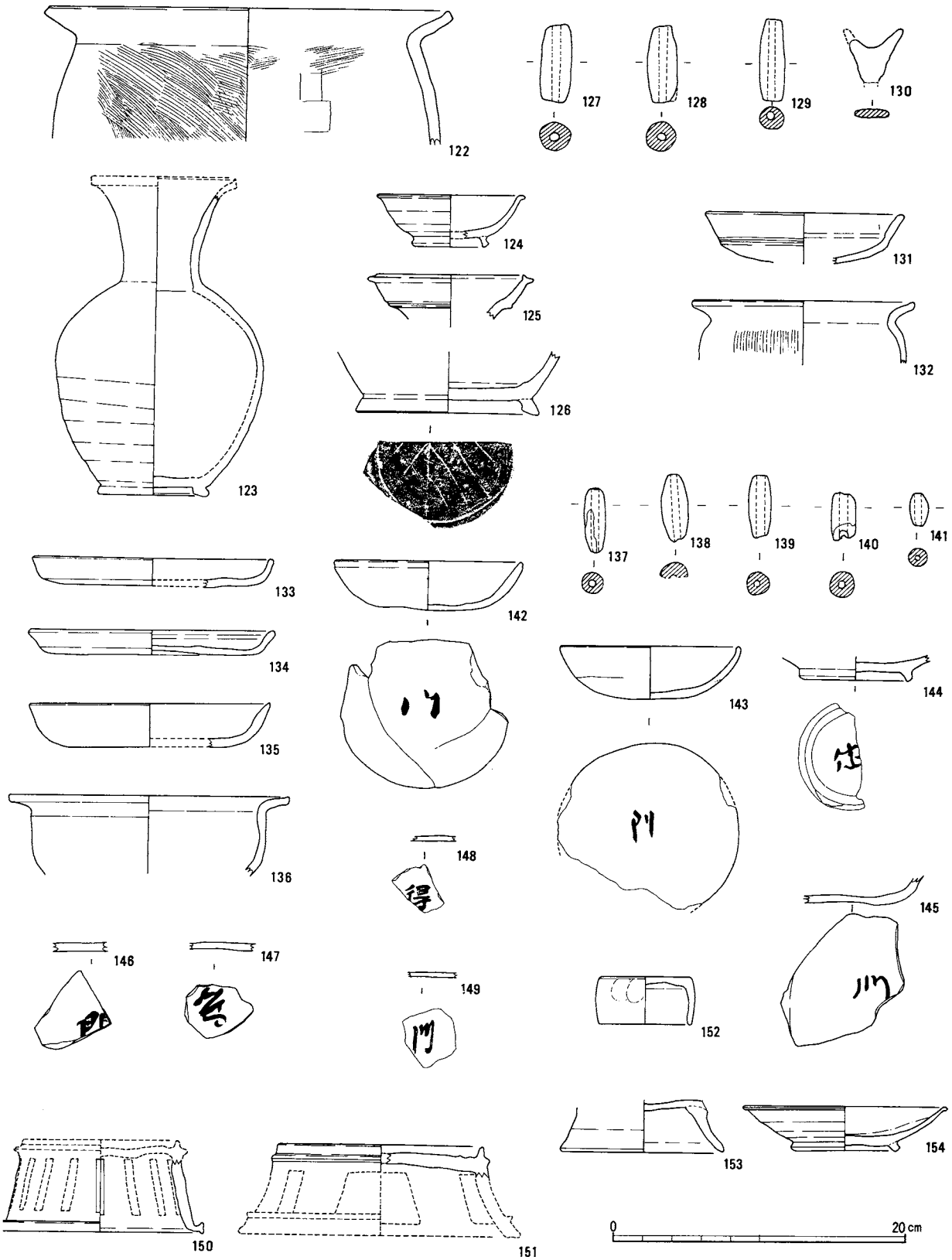
第40図　遺物実測図（１：４）　(29～32はＳＨ57、33～37はＳＨ58、38～40はＳＨ61、41～44はＳＨ70、45～49はＳＨ71、50・51はＳＨ74、52～56はＳＨ83、57～59はＳＢ52、60はＳＡ51出土)



第41図　遺物実測図（１：４）　(61～63はＳＢ55、64～67はＳＢ56、68～72はＳＢ86、73はＳＢ92、74はＳＢ93、75はＳＢ80、76～82はＳＢ81、83はＳＤ50出土)



第42図　遺物実測図（１：４）（95～121はＳＥ53出土）



第43図　遺物実測図（１：４）　（122～130はＳＥ53、131・132はＳＫ54、133～136はＳＫ65、137～141および153・154はpit、142～152は包含層出土）

第11表　打田遺跡遺物観察表（遺構順）

図版番号	登録番号	器種	出土位置 地区	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) その他	調製・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	その他
1	31－2	土師器　甕	P－18	SH95	15.0?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：体部上半ハケメ、下半板ナデ	やや密：0.5～1㎜の長石、雲母を含む	軟	明褐灰、浅黄橙	1／5	
2	16－1	土師器　甕	D－18	SH95	20.2?			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：ハケメ、内：頸部ナデ	密：0.5㎜の長石、金雲母を含む	良	浅黄橙	1／8	
3	28－1	土師器　甕	O－23	SH37	22.4?			外：ハケメ、口縁部オサエ、ヨコナデ、内：口縁部ハケメ後ヨコナデ、体部上半ハケメ、下半ケズリ	やや粗：0.5～2.5㎜の長石と0.5㎜の雲母を含む	良	浅黄橙	口縁部 1/4	ヘラ記号？あり
4	15－1	土師器　杯	N－22	SH38	13.4	3.5		外：指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：金雲母と0.5～1㎜の長石、石英を含む	軟	鈍い黄橙～褐灰	3／4	粘土接合痕あり
5	16－2	土師器　甕	O－22	SH39	15.4?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：頸部ナデ、体部板ナデ	密：1㎜の金雲母と若干の石英を含む	軟	橙	1／8	
6	15－4	土師器　杯	N－22	SH40	13.4?			外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや粗：0.5～3㎜の長石、雲母を含む	軟	鈍い橙～灰褐	1／5	粘土接合痕あり
7	14－6	土師器　杯	P－22	SH40	14.6?	3.6?			密：金雲母を含む	良	橙	1／6	粘土接合痕あり
8	17－2	土師器　甕	Q－23	SH41	12.0?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：1㎜の石英、雲母を含む	軟	鈍い黄橙	口縁部 1/4	
9	15－3	土師器　杯	Q－22	SH42	11.4?	3.6		外：指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや粗：1㎜の長石、石英、雲母を含む	軟	鈍い淡黄	2／5	
10	14－5	土師器　甕	O－19	SH46	13.0?			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：頸部ナデ、体部工具ナデ	密：0.5㎜の長石、金雲母を含む	良	鈍い橙	1／6	
11	14－4	土師器　杯	O－19	SH46	16.2?	5.0?		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：金雲母、赤色斑粒を含む	軟	橙	2／5	
12	29－1	土師器　皿	O－19	SH46	21.2	3.1		外：オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：3.5㎜以下のレキと、1.5㎜以下の雲母、赤色斑粒を含む	良	橙	口縁部 1/4	ヘラ記号あり
13	18－2	土師器　甕	O－19	SH46	33.8?			外：ハケメ、口：ヨコナデ	やや密：0.5㎜の長石を若干含む	良	淡橙	1／8	
14	15－2	土師器　杯	Q－20	SH47	12.4?			外：底部ナデ、体部指オサエ後ナデ、口：ナデ、内：ナデ	密：0.5～1㎜の長石、石英、雲母を含む	軟	鈍い橙	1／3	粘土接合痕あり
15	15－6	土師器　甕	Q－20	SH47	16.0?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：ハケメ	やや密：0.5㎜の石英、雲母を含む	軟	外：淡赤橙 内：鈍い黄橙	1／4	
16	19－3	土師器　杯	P－5	SH57	12.8	3.6		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：0.5～1㎜の長石、石英、金雲母を含む	良	淡橙	完形	
17	19－5	土師器　杯	P－5	SH57	15.6	3.1		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：0.5㎜の長石を含む	軟	橙	1／2	
18	29－4	土師器　杯	P－5	SH57	11.6	3.6		外：オサエ、口：ヨコナデ、内：ナデ	粗：2㎜以下の長石、雲母を含む	良	淡黄	1／2	
19	01－1	土師器　杯	P－5	SH57	12.8	3.5		外：底部オサエ、口：ヨコナデ、内：底部ナデ	やや密：1～2㎜の長石と1㎜の石英、雲母を含む	良	浅黄橙	完形	粘土接合痕あり
20	29－3	土師器　杯	P－5	SH57	12.3	3.9		外：底部オサエ後ナデ、体部オサエ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや粗：2.5㎜以下の長石、石英、0.5㎜の雲母を含む	良	浅黄橙	4／5	口縁にスス付着
21	29－2	土師器　杯	P－5	SH57	13.5	3.1		外：底部オサエ後ナデ、体部オサエ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：1㎜以下の長石、雲母、1～2㎜の赤色斑粒を含む	良	橙	1／2	
22	29－5	土師器　杯	P－5	SH57	14.6	3.1		外：オサエ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：0.5～2㎜の長石、石英、赤色斑粒を含む	良	橙	口縁部 1/3	
23	03－4	土師器　杯	P－5	SH57	13.6?	2.9		外：底部指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：底部ナデ	やや密：0.5～1㎜の長石、石英、雲母を含む	良	橙 内：一部黒褐	3／5	「門」の墨書あり
24	26－2	土師器　皿	P－5	SH571	3.4?			外：底部指オサエ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：極細かい長石、雲母を含む	軟	鈍い橙	1／2	
25	30－1	土師器　甕	P－5	SH57	18.2			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：工具ナデ	やや粗：1㎜以下の長石、雲母、赤色斑粒を含む	軟	鈍い橙	口縁部 1/3	
26	27－2	土師器　甕	P－5	SH57	26.0?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：板ナデ	密：0.5～1㎜の長石、石英を含む	良	鈍い橙	1／8	
27	27－1	土師器　甕	P－5	SH57	26.6?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：板ナデ	密：0.5～1㎜の石英を含む	良7	鈍い橙	1／8	
28	19－6	土師器　甕	P－5	SH57	17.0?			外：ハケメ？、口：ヨコナデ、内：頸部ナデ、内：体部ハケメ	密：0.5～1㎜の長石、石英、金雲母を含む	軟	淡橙	1／8	
29	28－2	須恵器　杯蓋	P－5	SH57	14.6			ロクロナデ、外：ヘラケズリ	粗：2㎜以下の長石と3.5㎜のレキを含む	軟	灰白	3／5	ロクロ時計回り
30	26－1	須恵器　杯	P－5	SH57	17.4?	2.0		ロクロナデ、外：底部ケズリ	やや密：0.1㎜の長石、雲母を含む	良	灰白	1／3	
31	19－4	須恵器長頸壺	P－5	SH57			底径　8.5	体部ロクロナデ、内：底部ナデ	密：0.5～2㎜の長石、石英を含む	良	灰	台部のみ	
32	04－2	二彩　小壺	P－5	SH57			底径　4.0	白釉と緑釉の二彩	やや密：0.5～1㎜の石英、雲母を含む	軟	淡黄	1／5	
33	26－3	土師器　杯	P－5	SH58	15.0?			外：指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや粗：1～2㎜の長石、石英、雲母を含む	軟	淡灰黄褐	1／5	
34	26－4	須恵器　杯	P－5	SH58				ロクロナデ	やや密：0.5㎜の長石、石英を含む	良	褐灰	口縁部 1/8	
35	31－3	土師器　甕？	P－5	SH58					やや密：雲母を含む	軟	褐灰	把手のみ	穿孔あり
36	31－1	土師器　甕	P－5	SH58	25.0?			体部ハケメ、口：ヨコナデ	やや密：雲母を含む	軟	褐灰	口縁部 1/6	
37	30－2	土師器　甕	P－5	SH58	24.4			外：ハケメ、口：ハケメ後ヨコナデ、内：ハケメ	やや粗：1㎜以下の長石、石英、雲母を含む	良	鈍い黄橙	口縁部 1/3	
38	16－3	土師器　杯	O－14	SH61	13.5	3.3		外：オサエ、ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密	良	淡橙	1／3	
39	14－3	土師器　杯	O－14	SH61	14.4?	3.6?		外：オサエ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：0.5㎜の長石、金雲母を含む	良	橙	1／3	
40	18－1	土師器　甕	O－14	SH61	26.6?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：頸部ハケメ、内：体部板ナデ	密：0.5㎜の長石、金雲母を含む	良	鈍い橙	1／8	

第12表　打田遺跡遺物観察表（遺構順）

図版番号	登録番号	器種	出土位置 地区	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) その他	調製・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	その他
41	36－3	須恵器　杯	K－9	SH70	10.0	3.8		ロクロナデ、外：底部ナデ	密：0.5～1㎜の長石、石英を含む	良	鈍い赤褐	2／5	
42	38－2	土師器　杯	K－9	SH70	13.0	3.7		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：0.5～1.5㎜の長石、石英、金雲母を含む	良	浅黄橙	ほぼ完形	粘土接合痕あり
43	38－1	土師器　杯	K－9	SH70	12.4	4.2		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：0.5～1㎜の長石、石英、金雲母を含む	良	鈍い橙	ほぼ完形	粘土接合痕あり
44	38－3	須恵器　杯	K－9	SH70	13.0	3.9	底径　9.2	ロクロナデ、底部ケズリ	密：0.1～1㎜の長石を含む	良	灰黄	3／5	
45	35－2	土師器　杯	L－10	SH71竈	12.7	3.2		外：底部オサエ、ナデ、体部～口：ヨコナデ、内面底部ナデ	やや密：2㎜以下の長石、石英、1㎜以下の雲母を含む	良	淡橙	口縁部 1/4	
46	36－1	土師器　高杯	L－10	SH71竈	22.2?	8.7?	底径 12.2	脚部内：指オサエ後ナデ、脚部端部ナデ、脚～杯部ハケメ、口：ヨコナデ、杯部内：ナデ	密：0.3～1㎜の長石、金雲母、赤色斑粒を含む	軟	橙	3／5	
47	35－4	土師器　甕	L－10	SH71竈	21.8			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：体部板ナデ	やや粗：1～2㎜の多量の長石、石英と1㎜以下のレキを含む	良	鈍い褐	口縁部 1/4	
48	35－5	土師器　甕	L－10	SH71竈	24.0			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：体部ハケメ	やや粗：1.5㎜以下の長石、石英、雲母と7㎜のレキを含む	良	淡黄橙	口縁部 1/5	
49	36－2	土師器　甕	L－10	SH71竈	24.8?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：頸部ナデ、内：体部ハケメ	やや密：1㎜の石英、雲母を含む	良	浅黄	1／5	
50	35－1	土師器　杯	N－9	SH74	11.9	3.1		体部ナデ、口：ヨコナデ	やや密：1㎜の長石、石英、雲母と2～3㎜のレキを少量含む	良	橙、灰褐	口縁部 2/5	
51	35－3	土師器　甕	N－9	SH74	15.2			外：体部ハケメ？、口：ヨコナデ、内：体部板ナデ	やや密：1㎜以下の長石、雲母を含む	良	淡橙	口縁部 1/4	
52	42－5	土師器　杯	L－13	SH83	11.8			外：ナデ、口：指オサエ後ヨコナデ、内：ナデ	やや粗	良	浅黄橙	口縁部 3/5	粘土接合痕あり
53	42－1	土師器　杯	L－13	SH83竈	16.6			摩耗により不明瞭	やや粗	良	外：浅黄橙 内：黒	口縁部 1/4	
54	41－1	土師器 高杯?	L－13	SH83	17.4			摩耗により不明瞭	やや密	良	浅黄橙	口縁部 1/2	
55	41－3	土師器　甕	L－13	SH83	34.8			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：ハケメ	やや密	良	黄橙	口縁部 1/6	外面にすす付着
56	42－3	土師器　甕	L－13	SH83	32.3?			外：ハケメ、口：ヨコナデ	やや密	良	橙	口縁部 1/8	外面にすす付着
57	03－3	土師器　杯？	P－14	SB52					やや密：1㎜の長石、石英を含む	良	浅黄橙	底部片	墨痕あり
58	50－6	土師器　杯	P－13	SB52	11.6?	3.0?		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密	良	淡橙	1／5	
59	50－3	須恵器　壺？	P－15	SB52				ロクロナデ、底部ヘラ切り、高台部ナデ	密	良	灰白	1／2	
60	04－1	土師器　杯	R－14	SA51	13.0?	3.2		底部ナデ、外：体部指オサエ、口：ヨコナデ	やや密：0.5～2㎜の長石、雲母を含む	軟	鈍い橙 一部淡黒褐	1／2	墨痕あり
61	03－6	土師器　杯？	P－9	SB55					やや密：雲母を含む	良	鈍い橙	底部片	墨痕あり
62	50－5	土師器　皿	O－9	SB55	16.9?	3.2?		外：工具による調整？、口：ヨコナデ、内：ナデ	密	良	橙	1／8	内面にらせん暗文あり
63	41－4	土師器　甕	O－10	SB55	21.2			外：ハケメ？、口：ヨコナデ	やや粗	良	橙	口縁部 1/8	
64	46－2	土師器　皿	P－8	SB56	29.0?			外：ヘラケズリ、口：ヨコナデ、内面ナデ	やや密：0.5㎜の長石、雲母を含む	良	橙	1／8	
65	46－3	土師器　杯	P－8	SB56	14.0?			外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：雲母を含む	良	橙	1／8	
66	50－4	土師器　杯	P－8	SB56	14.4?	2.6?		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：雲母を含む	良	橙	1／4	
67	46－1	土師器　蓋	P－8	SB56	13.0?			外：ミガキ、口：ヨコナデ	密：雲母を含む	良	橙	1／8	
68	34－3	土師器　杯	K－12	SB96	13.6?			外：指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ	密：雲母を含む	良	鈍い橙	1／6	
69	34－4	土師器　杯	K－12	SB96	12.4?			外：指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：雲母を含む	良	鈍い黄、褐灰	1／6	
70	34－6	土師器　杯	K－12	SB96	15.4?			外：指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：雲母と1～2㎜の長石を若干含む	軟	鈍い橙、褐灰	1／8	内外面口縁部にススト付着
71	39－1	土師器　甕	K－11	SB86	15.0?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：工具ナデ？	やや粗：0.5～1㎜の長石、1～2㎜の石英、雲母を含む	軟	外：淡橙、灰褐 内：鈍い黄褐	口縁部 1/8	外面体部にすす
72	39－5	須恵器　大甕	K－10	SB86	43.8?			ロクロナデ、口縁部に櫛歯刺突列	やや密：0.5～1㎜の長石を含む	良	オリーブ灰	口縁部 1/6	自然釉あり
73	34－1	土師器　皿	L－13	SB92	15.4?			外：指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：0.5㎜の長石、雲母を含む	良	橙	1／6	
74	39－4	黒色土器椀	M－21	SB97	14.0?			ミガキ	やや密：0.5㎜の長石、雲母を含む	良	外：鈍い橙 内：黒褐		
75	50－2	土師器　皿	P－19	SB80				ロクロナデ、底部糸切り	密	良	灰白	底部のみ	ロクロ土師器
76	46－4	土師器　杯	R－12	SB81	12.2			外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：0.5㎜の長石、雲母を含む	良	橙		
77	50－1	土師器　皿	R－13	SB81	10.5	1.9		ロクロナデ、底部糸切り	密	良	浅黄橙	完形	ロクロ土師器
78	11－1	土師器　皿	S－12	SB81	10.2	2.3	底径　3.8	ロクロナデ、底部糸切り	密：0.5～1㎜の長石、石英を含む	良	浅黄橙	完形	ロクロ土師器
79	12－1	土師器　甕	S－12	SB81	15.0?	18.7?		外：体部下半ケズリ、上半オサエ、ナデ、口：ヨコナデ、内：上半板ナデ、下半ケズリ	やや密：0.5～1㎜の長石、石英を含む	軟	鈍い褐	1／2	外面にすす付着
80	11－3	土師器　甕	S－12	SB81	15.4?			外：体部オサエ、ナデ、口：ヨコナデ、内：体部ハケメ	やや粗：0.5～1㎜の長石、石英をやや多く含む、金雲母を含む	軟	浅黄橙	1／8	

第13表　打田遺跡遺物観察表（遺構順）

図版番号	登録番号	器種	出土位置 地区	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) その他	調製・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	その他
81	11－2	土師器　甕	S－12	SB81	19.2?			外：体部オサエ、ナデ、口：ヨコナデ、内：頸部ナデ、内：体部板ナデ	密：0.5～1㎜の長石、石英を含む	軟	鈍い橙	口縁部 1/4	
82	13－1	土師器　甕	S－12	SB81	24.2			外：体部オサエ、ナデ、口：ヨコナデ、ナデ、内：体部板ナ	やや密：0.5～2㎜の長石、石英、金雲母を含む	良	鈍い褐	1／4	
83	01－2	土師器　鉢	R－19	SD50	20.0?	8.5?	底径 10.6?	外：底部ナデ、外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや粗：1.5㎜以下の長石、石英,雲母、赤色斑粒を含む	軟	黄橙	3／5	
84	06－3	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密	良	橙		墨痕あり
85	02－6	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密	良	橙	底部片	墨痕あり
86	06－9	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや粗	良	橙		墨痕あり
87	25－1	土師器　杯？	Q－11	SE53	15.4	3.5			やや密	良	浅黄橙	破片	墨痕あり
88	06－1	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密	良	橙	破片	墨痕あり
89	06－5	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密	良	浅黄橙		「門」の墨書あり
90	06－4	土師器　杯？	Q－11	SE53									墨痕あり
91	02－3	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや粗	良	浅黄橙	底部片	「□門」の墨書あり
92	06－10	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや粗	良	橙		墨痕あり
93	02－7	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密	良	橙	底部片	墨痕あり
94	06－2	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密	良	橙		墨痕あり
95	06－7	土師器　杯？	Q－11	SE53					密	良	外：橙 内：浅黄橙		墨痕あり
96	03－5	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密：0.5㎜の若干の石英と、雲母を含む	良	鈍い橙	底部片	墨痕あり
97	02－5	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密：1～2㎜の長石を若干含む	良テ	鈍い橙	底部片	墨痕あり
98	06－8	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密	良	浅黄橙		墨痕あり
99	02－8	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密：雲母を多量に含む	良	橙	底部片	墨痕あり
100	10－3	土師器　杯？	Q－11	SE53						良	橙	破片	墨痕あり
101	06－6	土師器　杯	Q－11	SE53	15.6			外：ヘラケズリ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密	良	外：橙 内：黒	1／3	「□門」の墨書あり
102	02－1	土師器　杯	Q－11	SE53	10.7?			底部ナデ、口：ヨコナデ	やや密：1～2㎜の石英を含む	良	淡橙	口縁部 1/6	墨痕あり
103	10－2	土師器　杯	Q－11	SE53	14.6			外：底部ナデ、外：体部ミガキ、口：ヨコナデ、	やや密	良	橙	1／5	墨痕あり 格子目暗文あり
104	10－1	土師器　杯？	Q－11	SE53					やや密	良	橙	破片	墨痕あり
105	02－4	土師器　杯？	Q－11	SE53				外：底部指オサエ、体部ナデ、内：ナデ	密：雲母を多量に含む	良	橙	底部片	墨痕あり
106	02－2	土師器　杯	Q－11	SE53	14.4?			外：指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密	良	橙	1／2	墨痕あり
107	08－2	土師器　蓋	Q－11	SE53				外：ナデ、内：ナデ	密	良	橙	宝珠のみ	
108	07－3	土師器　杯	Q－11	SE53	14.4	3.7		外：オサエ、ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：1㎜の長石、赤色斑粒を含む	良	橙	杯部 1/4	
109	07－5	土師器　皿	Q－11	SE53	17.0	2.4		外：オサエ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：1㎜の雲母、赤色斑粒を含む	良	橙	1／4	
110	08－3	土師器　高杯	Q－11	SE53	20.1			外：ヘラケズリ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：1㎜以下の長石、雲母、赤色斑粒を含む	良	橙	1／3	
111	17－1	土師器　甕	Q－11	SE53	16.0?			体部ハケメ、口：ヨコナデ	やや粗：0.5～1㎜の石英と0.5㎜の長石、雲母を含む	軟	浅黄橙	口縁部 1/4	
112	05－2	土師器　甕	Q－11	SE53	18.0?			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：体部ハケメ？	やや粗：1～2㎜の石英を含む	軟	外：灰黄褐 内：鈍い褐	口縁部 1/6	口縁部にすす付着
113	05－1	土師器　甕	Q－11	SE53	18.0			外：体部ハケメ後部分的にナデ、口：ヨコナデ、内：体部ナデ	やや密：0.5～1㎜の石英を含む	軟	浅黄橙	口縁部 1/4	
114	07－4	土師器　甕	Q－11	SE53	17.0			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：体部ナデ	やや密：1㎜の雲母を含む	良	鈍い橙	1／4	すす付着
115	08－1	土師器　甕	Q－11	SE53	13.8			外：体部ハケメ後ユビオサエ、口：ヨコナデ、内：体部オサエ、板ナデ	やや粗：1.5㎜以下の長石、雲母を含む	良	浅黄橙	1／4	
116	17－3	土師器　甕	Q－11	SE53	16.4?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：板ナデ	やや密：1㎜の長石、石英を若干含む	軟	浅黄橙	口縁部 1/8	
117	17－4	土師器　甕	Q－11	SE53	17.0?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：ナデ	やや密：0.5㎜の長石、雲母を含む	軟	外：鈍い橙、褐 内：鈍い黄橙	口縁部 1/5	
118	07－2	土師器　甕	Q－11	SE53	17.2			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：体部ナデ	やや密：1㎜以下の長石、0.5㎜の雲母を含む	良	浅黄橙、褐灰	1／6	
119	08－4	土師器　甕	Q－11	SE53	28.0			外：体部ハケメ、口：ハケメ後ヨコナデ、内：体部ハケメ	密：0.5㎜の長石、雲母を含む	良	浅黄橙	口縁部 1/3	
120	17－5	土師器　甕	Q－11	SE53	30.0?			外：ハケメ、口：ヨコナデ、内：ハケメ				口縁部 1/8	

第14表　打田遺跡遺物観察表（遺構順）

図版番号	登録番号	器種	出土位置 地区	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	法量(cm) その他	調製・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	その他
121	09－1	土師器　甕	Q－11	SE53	23.8			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：ハケメ	やや密：1㎜以下の長石、石英を含む	軟	浅黄橙	口縁部 1/6	
122	07－1	土師器　甕	Q－11	SE53	27.2			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：体部板ナデ一部ハケメ	やや粗：2㎜以下の長石、石英、5㎜の雲母を含む	良	鈍い黄橙	1／8	
123	01－4	灰釉陶器長頸瓶	Q－11	SE53			底径　7.3	外：底部ケズリ、外：体部～頸部ロクロナデ、内：ロクロナデ	やや密：2㎜以下長石を含む	良	灰白	ほぼ完形	外面と内面頸部に施釉
124	08－5	灰釉陶器小椀	Q－11	SE53	10.0	3.55	底径　5.2	外：底部ナデ、体部ロクロナデ	密：1㎜以下の長石を少量含む	良	灰	1／3	口縁から内面にかけて施釉
125	08－6	須恵器　高杯	Q－11	SE53			底径 10.0	ロクロナデ	密：1㎜以下の長石を少量含む	良	青灰	脚部 1/3	
126	09－2	須恵器長頸瓶	Q－11	SE53			底径 12.4	底部糸切り、体部ロクロナデ、内：底部オサエ	やや粗：1㎜以下の長石を含む	良	明褐灰一部鈍い赤褐	底部 1/4	外面底部に木葉痕あり
127	22－6	土錘	Q－11	SE53					密：雲母を微量含む	良	暗灰～灰黄	完形	
128	22－7	土錘	Q－11	SE53					密：雲母を少量含む	良	浅黄橙	ほぼ完形	
129	22－5	土錘	Q－11	SE53					密：雲母を少量含む	良	浅黄	完形	
130	43－2	鉄鏃	Q－11	SE53									
131	14－1	土師器　杯	R－10	SH54	13.4?			外：オサエ、ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：0.5㎜の金雲母、若干の石英を含む	良	明赤褐	1／5	
132	14－2	土師器　甕	R－10	SH54	15.0?			外：体部ハケメ、口：ヨコナデ、内：頸部ナデ、体部板ナデ	密：0.5㎜の長石、金雲母を含む	軟	鈍い橙	1／8	
133	38－4	土師器　皿	Q－6	SK65	16.0?	1.4		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：0.3～1㎜の長石、金雲母を含む	軟	橙	1／8	
134	22－4	土師器　皿	Q－6	SK65	17.0?	1.7?		外：オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：雲母を微量含む	軟	橙	1／4	
135	38－5	土師器　皿	Q－6	SK65	16.4?	3.0?		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：金雲母、赤色斑粒を含む	軟	橙	1／8	
136	43－1	土師器　甕	Q－6	SK65	19.2?				密：0.5㎜の長石、石英、金雲母を含む	良	鈍い橙	1／8	
137	43－7	土錘	T－11	SK				ナデ	密：金雲母を含む	良	鈍い黄橙	完形	
138	43－5	土錘	T－9	SK				ナデ	密	良	鈍い黄橙	ほぼ完形	
139	43－6	土錘	U－9	SK				ナデ	密：金雲母を含む	良	鈍い黄橙	完形	
140	43－8	土錘	T－11	SK				ナデ	やや粗	良	黒褐		
141	43－9	土錘	S－8	SK				ナデ	密	良	灰褐	完形	
142	03－1	土師器　杯	O－6	包含層	12.8?	3.4		外：底部指オサエ後ナデ、口：ヨコナデ、内：底部ナデ	やや密：0.5～1㎜の長石、石英を含む	良	鈍い橙	4／5	「門」の墨書あり
143	49－1	土師器　杯	T－9	包含層	12.2	3.6		外：ナデ、口：ヨコナデ、内：ナデ	密：0.5㎜の長石、石英、雲母を含む	良	鈍い橙	ほぼ完形	「門」の墨書あり。粘土接合痕あり
144	45－3	灰釉陶器椀	K－16	包含層			底径　7.7	ロクロナデ、内：体部に施釉	密：0.5㎜の長石を含む	良	灰白	高台部 1/2	けずり出し高台墨痕あり
145	03－2	土師器　杯？	R－10	包含層					やや密：1㎜以下の長石、雲母を含む	軟	橙	底部片	「門」の墨書あり
146	32－4	土師器　杯？	J－13	包含層				外：工具ナデ？、内：ナデ	やや密：0.5㎜以下の長石、雲母を少量含む	良	橙	破片	墨痕あり
147	32－5	土師器　杯？	J－10	包含層				外：工具ナデ、ケズリ？、内：オサエ	やや粗：1㎜以下の長石、雲母を含む	良	橙	破片	墨痕あり
148	45－1	土師器　杯？	K－12	包含層				外：オサエ、内：ナデ	やや密：1㎜以下の雲母を含む	良	鈍い橙	底部片	墨痕あり
149	47－4	土師器　杯？	R－10	包含層					密：雲母を含む	良	浅黄橙	体部片	「門」の墨書あり
150	04－4	円面硯	O－6	包含層			底径 14.2		密：1㎜の長石を含む	良	外：黄灰内：灰	破片	透穴は幅5～6㎜で18～20個
151	04－3	円面硯	I－14	包含層	14.0			ロクロナデ	密：1㎜の長石を含む	良	灰	海　1／4	透穴は6～7個
152	48－4	灰釉陶器蓋	M－22	包含層	6.3	3.2		内：ヨコナデ、口縁端部ケズリ、外：ナデ、外：上部に釉	密：雲母を含む	良	浅黄	1／3	外面上部に模様あり
153	20－5	土師器　皿	U－10	Pit	10.8?	2.8?	底径 11.0	外：底部オサエ後ナデ、体部ナデ、内：底部オサエ後ナデ	密：1～4㎜のレキ、雲母を多量に含む	良	浅黄	脚部のみ	脚部のみ2次使用分
154	23－1	灰釉陶器皿	S－8	Pit	14.0	3.0	底径　7.4	ロクロナデ、底部ロクロケズリ	密：1～2㎜のレキを少量含む	良	灰白	1／2	ハケヌリ

4．結　語

（1）遺構について

A．建物の変遷

平成２年から２年間にわたる調査で、5,000㎡の調査区内からは飛鳥時代から平安時代までの竪穴住居44棟、掘立柱建物23棟、井戸３基等が検出されたが、それらの時代変遷をまとめてみる。

１期．（飛鳥時代）

この時代のものとして、竪穴住居６棟がある。いずれも東に竈をもつもので、奈良時代のものよりやや広い。６棟の竪穴住居は調査区の北辺に位置する３棟と、南辺に位置する３棟の、２つのグループに分けられる。

２期．（奈良時代前期～中期）

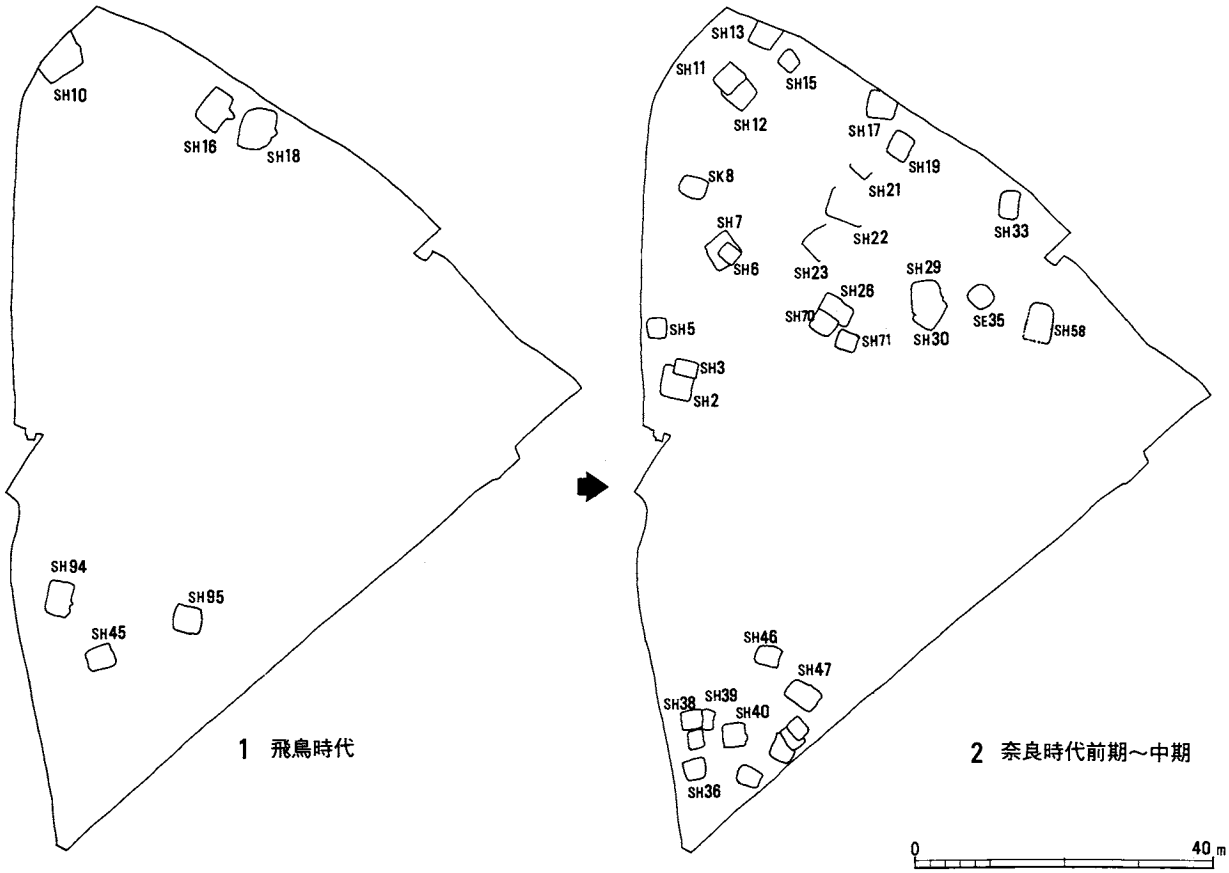
この時代に属するものに竪穴住居33棟、土坑１基、井戸１基がある。これも南北のグループに分けられ、北辺に19棟の竪穴住居と土坑１基・井戸１基が位置し、南辺に11棟の竪穴住居が位置する。この時期になると、竈の位置や建物の規模は様々なものが出現する。この時期には、掘立柱建物はまだ現れない。

３期．（奈良時代後期～平安初期）

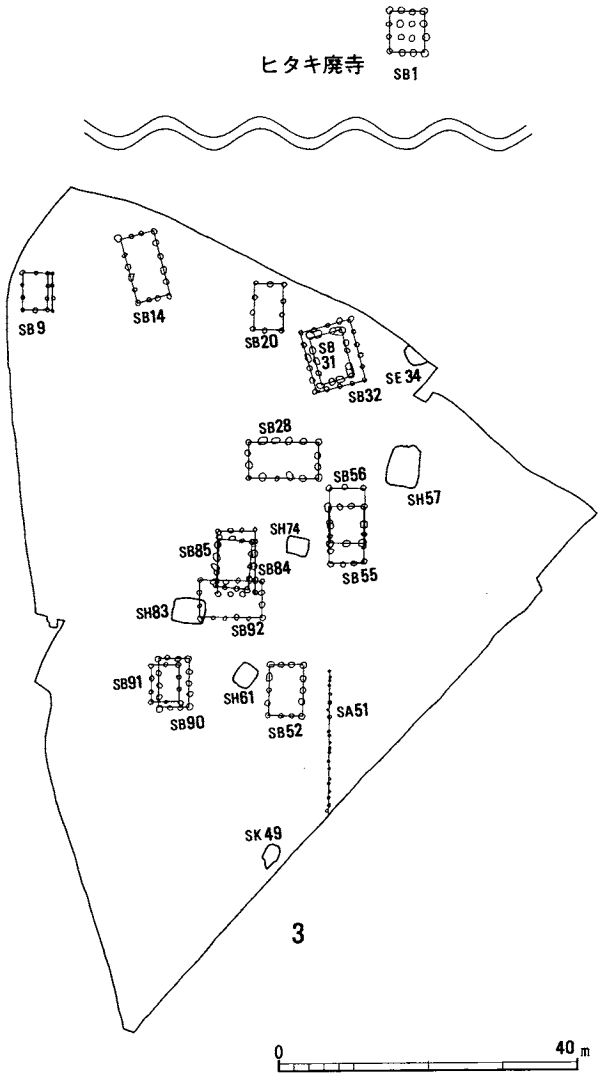
打田遺跡の最も栄えたと思われる時期である。竪穴住居は３棟と激減するが、代わりに方位にのった規格性のある掘立柱建物群が出現する。また、100ｍ程北方に瓦葺き建物（ヒタキ廃寺）が現れるのも、この時期である。

この時期竪穴住居が激減しているが、その理由は不明である。ＳＨ61、ＳＨ74、ＳＨ83など竪穴住居と見なしたものは焼土を伴わず、また床面と思われるところが平坦でない、などから土坑の可能性も残るが、遺物の時期から見ると竪穴住居が掘立柱建物群と併存していた可能性も残る。

竪穴住居については微妙な点が多く細分は困難であるが、方位と出土遺物の関係から、掘立柱建物15



第44図　飛鳥時代～奈良時代前期・中期　遺構配置図（１：500）



第45図　奈良時代後期～平安時代初頭　遺構配置図
（1：500）

棟、柵1条についてはA～Cの3つの時期に細分することが可能である。

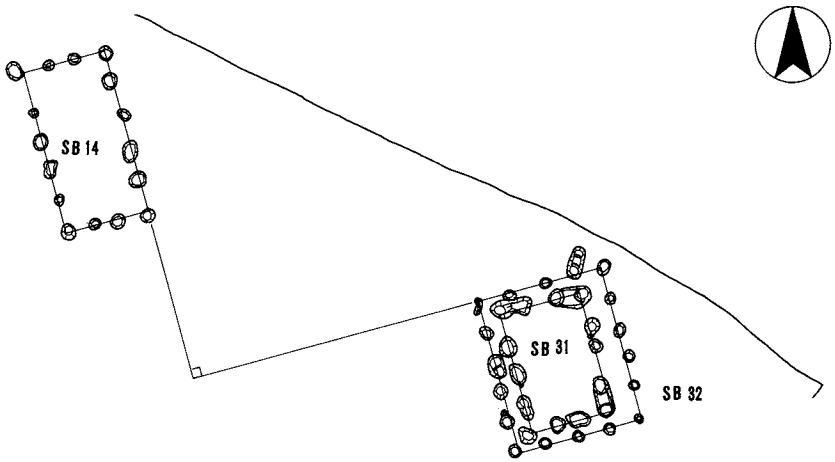
3－A期.（奈良後Ⅰ期）　調査区北辺に位置するN15°Wの掘立柱建物が3棟ある。SB14とSB31、SB32である。SB32はSB31の四面庇の可能性もある大型の掘立柱建物である。

3－B期.（奈良後Ⅱ期）　3－A期の建物遺物よりわずかではあるが新しい時期の遺物の出土により、3－B期とした。SB84・SB85・SB92は重なっているが、建物配置からしてSB85はSB84の建て替えと考えられる。そうすると遺物から平安初期に入れていたSB92はSA51・SB52・SB90と同じクループという可能性もでてくる。そのようなことから遺物だけでなく、建物の方向や間隔などから以下のように建物の時期を一部変更する。

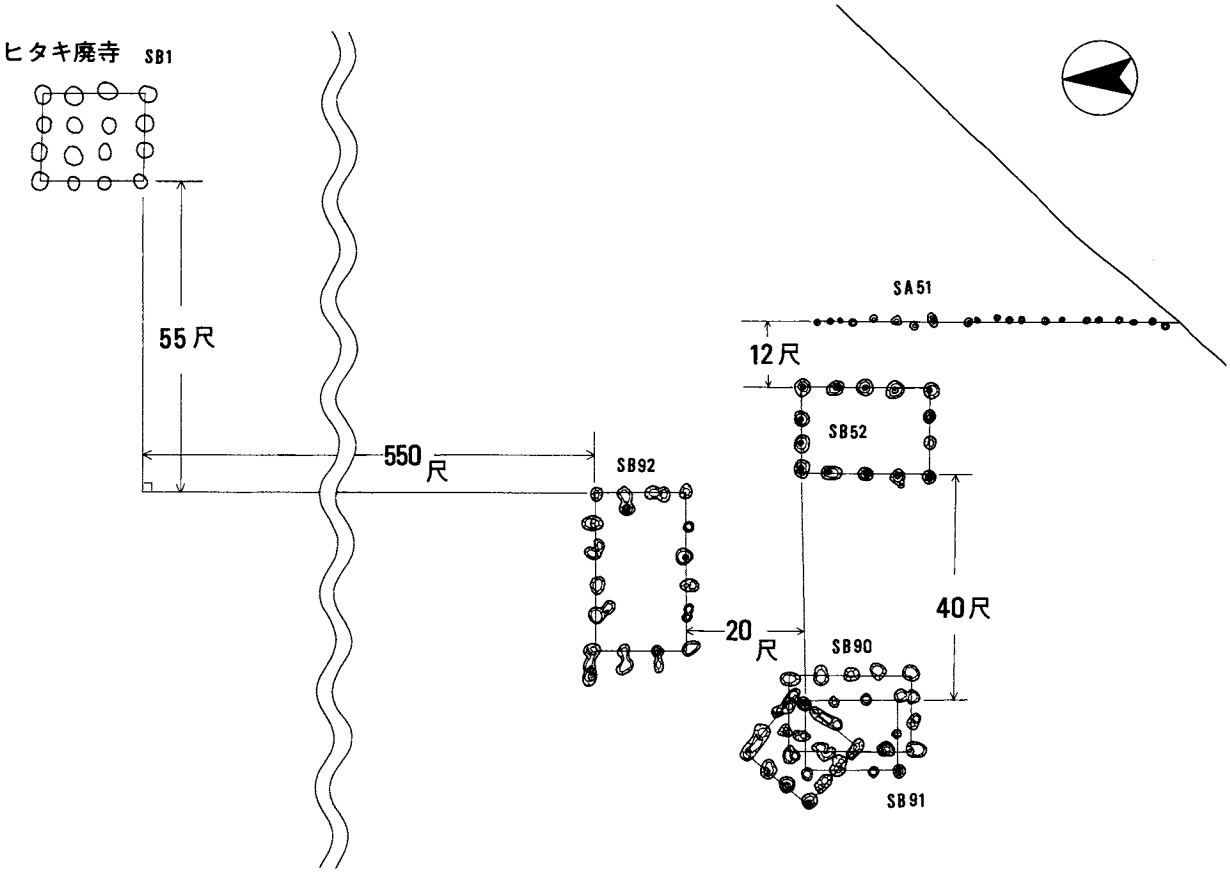
真北方向に並ぶSA51、SB52、SB90、SB91、SB92がある。この時期にヒタキ廃寺が建立されたと思われる。それぞれの建物間を測ると30cmで完数になる場合が出てきた。[5] 仮に30cmを1尺とすると、SA51とSB52の間隔は12尺となる。SB91とSB52は40尺、SB91・SB52の北側柱筋とSB92の南側柱筋との間隔は20尺となる。

SB92が唯一の東西棟となり建物配置はこのSB92を中心にSB52とSB90・SB91がコの字形に並ぶ。SB52の東には延長20m以上の柵SA51が配される。

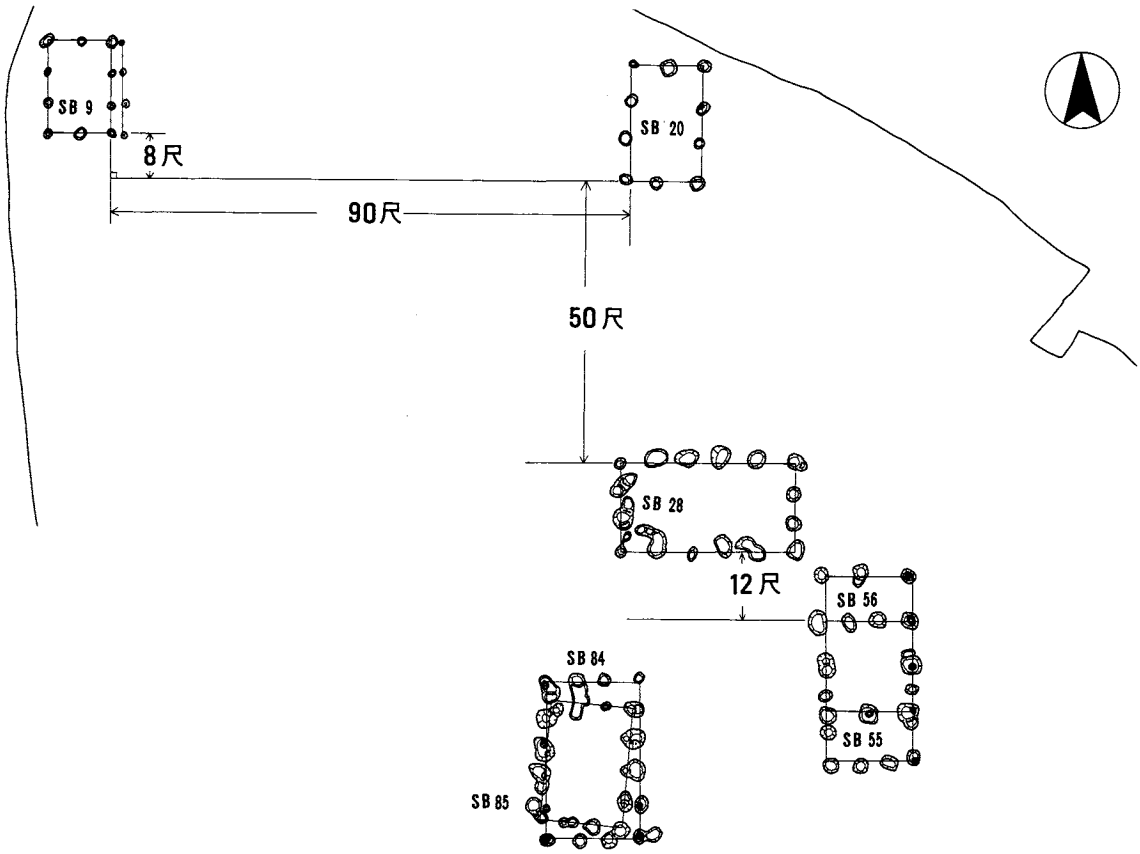
東西棟SB92の北側柱筋から真北に550尺いったところにヒタキ廃寺の南側柱筋がある。また、SB



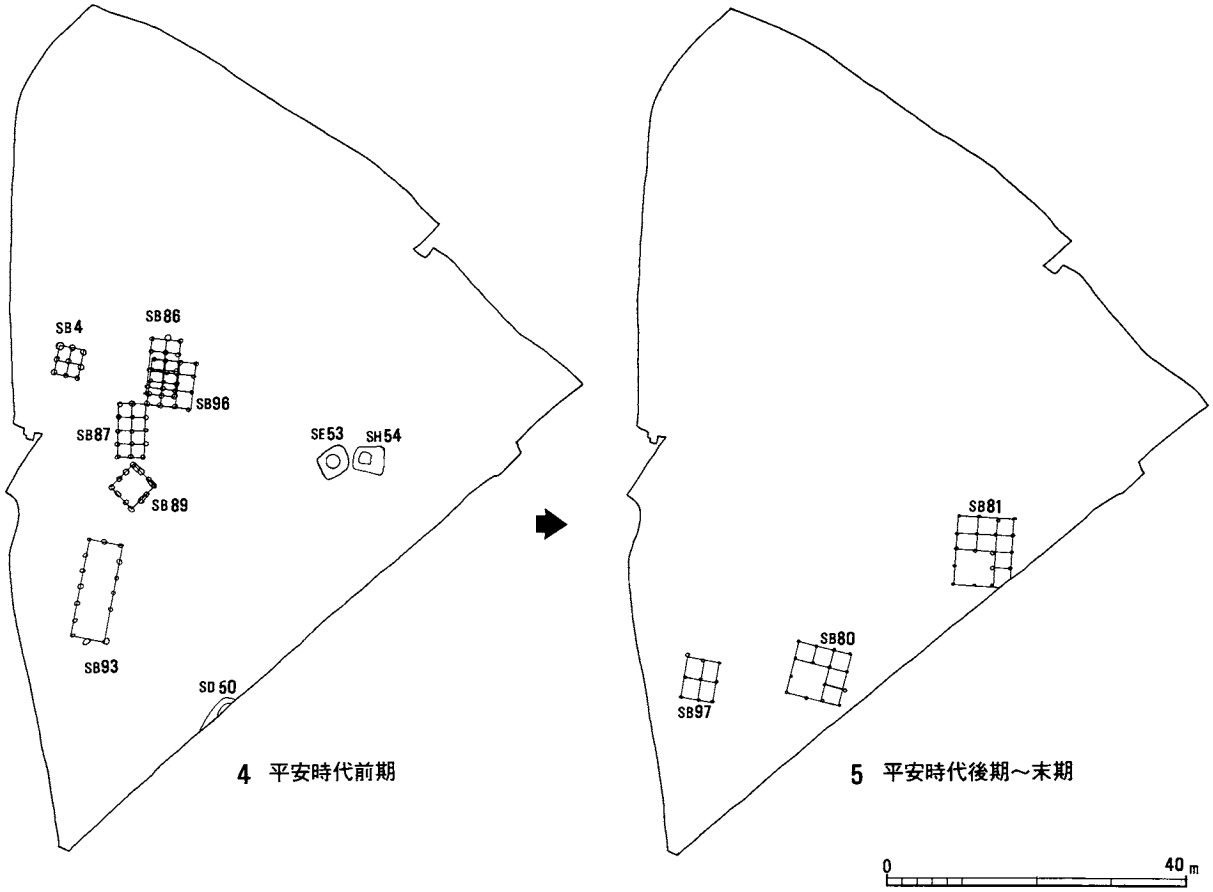
第46図　3－A期　掘立柱建物配置図（1：500）



第47図　3－B期　掘立柱建物配置図



第48図　3－C期　掘立柱建物配置図



第49図　平安時代前期～末期遺構配置図（1：500）

92の東側柱筋から55尺東にいったところにヒタキ廃寺の西側柱筋がある。

3－C期.（平安初期）　この時期も真北を意識した建物配置をとる。SB9、SB20、SB28、SB56、SB84、SB85、SH57がある。このうちSB56は奈良後II期に属するSB55の建て替えと考えられることから、時期は極めて近接していよう。

この時期の掘立柱建物も一部に30cmを1尺とした数値で測れる。即ち、SB9とSB20の間隔が90尺、SB20とSB28の間隔が50尺、SB55の北側柱筋とSB28の南側柱筋の間隔が12尺となる。

この時期もSB28を中心にSB55・SB85でコの字形の配置をもつ。

4期.（平安前期）　この時期も真北を意識した建物がつづくが、SB4、SB86、SB87、SB96、などの総柱建物などが増える。6×2の長大なSB93はあるが、コの字型の配置は消える。また、建物は調査区の西に偏り、総柱建物が多く見られる。

SB89は平安時代前期の遺物が出土しているが、建物の方位40°Eに共通する他の建物がないこと、一部にSB31と同じ「溝もち」の手法を用いていることなどから、時期の確定にはさらに検討が必要であろう。

5期.（平安末期）　なおこの時期にも北を意識した建物3棟が残るが、柱穴は小さく、SB80、SB81、SB97など総柱建物のみとなる。SB80・SB81は、いずれもロ3柱穴がみられない。この時期以降、打田遺跡からは建物の跡はなくなる。

B．北を意識した建物について

奈良後期以後、平安末期の小さな柱穴の掘立柱建物まで、真北に近い建物方位をもつのはなぜであろうか。旧飯高郡の条里はN30°Eの方向にとられているとされているが、[6] よく見ると、調査区の西端にほぼ真北の方角に溝が北流するのがうかがえる。[7] この方角にこの地域には同じような方位に溝、あるいは畦が散見できる。このことは先の建物は奈良後期から平安初期ごろに古い条里あるいは地割りが真北方向にできあがり、以後それに沿って建物が出来た

とも言えよう。

では、現在のN30°Eの条里制遺構はいつごろできたものであろうか。ひとつの示唆として、同年調査された阿形遺跡の例がある。ここでは中世の掘立柱建物群と多くの区画溝と思われるものが、現存の条里に沿って検出されている。[8]

C.「溝もち」のある掘立柱建物について

いわゆる「溝もち」のある掘立柱建物は、当遺跡内ではSB31とSB89に見られる。いずれも3か所のとなり合う柱間に浅く溝が掘られている。このような「溝もち」のある建物をもつ遺跡は、県内では明和町の斎宮跡に例がある。[9] 大上周三氏によると、『このような「溝もち」の掘立柱建物は官衙・特定集落・集落内主要建物をはじめ一般集落でもみられる。時期は多くは8世紀代で、それ以降にも見られる』ということである。[10]

「溝もち」の機能については、板塀が一部地面に埋められているからという説など諸説あるが、地山が砂地で礫が散在している当地域では柱を安定させるため、一部隣あう柱間に横木を添えるために、溝を掘ったと考えるのが最も妥当ではないだろうか。

(2) 遺物について(墨書「門」について)

調査区から土師器皿・杯・椀、黒色土器椀の裏面に筆跡も様々な「門」或いは「□門」と書かれた墨書が十数点出土しているが、どのような意味をもつものであろうか。

門という言葉をそのままとらえるならば、施設・建物としての門が、まず考えられよう。しかし、門と明らかに断定できる遺構は見つかっていない。

次に同時期の「門」を用いた例として、「門田」あるいは「門畠」などがある。これは屋敷地の中につくられた田や畠のことで、極めて私有の意味合いの濃い呼び方である。この理解の場合、単なる物理的な施設ではなく、敷地という概念的なものとして「門」が使用されたと考えられる。このことは「門」の墨書土器が調査区の至る所で散在して発見され、それぞれの掘立柱建物が別個に独立していたものではないことの推定をさらに補強するものとなろう。いずれにしても「門」の意味は、打田遺跡の性格を知る上で大変重要な意味をもつと考えられる。

(3) 遺跡の性格

飛鳥時代から奈良前・中期までは調査区の北部と南部に、それぞれ竪穴住居の集落が存在した。しかし奈良後期になり、その竪穴住居群もそれまでの南北にわかれて存在した集落関係も無視され、激減する。そして、規格性のある掘立柱建物群が出現する。このことは竪穴から掘立柱建物に単純に移行していったとも考えられるが、地域を支配する程の有力層が居住の拠点とするために、集落の人々を意図的に退去させた、とも考えられよう。

その有力層は、奈良後II期あたりに打田遺跡の北方にヒタキ廃寺も建立し、全盛期を迎える。そして、その勢いは平安初期まで続くが、平安前期以降になると建物群の配置は北は意識するものの、規格性をもたなくなってくる。このことは律令国家の変貌とともに有力層の勢いが弱まったのか、主たる勢力が他の位置に移動したのかいずれかであろうと推定できよう。

有力層については、識字層の存在を想定させる円面硯や約五十点に及ぶ墨書土器、二彩小壺や緑釉陶器片の出土からも、班田農民の一般的な集落形態とは考えがたく、かなりの有力豪族が推定できよう。

打田遺跡やヒタキ廃寺周辺は旧飯高郡の阿形郷に所在するが、阿形郷は古くから旧飯高郡の郡衙推定地とされている。郡衙推定地については不確定な部分が多く確証もないが、今回の調査でこの地域に稀少な遺物とともに、ヒタキ廃寺という草堂をもつ規格性のある掘立柱建物群が検出されたことは、少なくともこの付近にかなりの有力な勢力が存在したことを裏付けるものである。また、この掘立柱建物群に倉庫群が見られないところは、ヒタキ廃寺の位置関係を見ても、より広い遺跡の範囲を考慮すべきなのであろうか。

古代の県内の規格性のある掘立柱建物群には、名張市の観音寺遺跡[11]・鴻之巣遺跡[12]、上野市の森脇遺跡[13]、四日市市の西ケ広遺跡[14]、菰野町の下江平遺跡[15]、鈴鹿市の末野B遺跡[16]・明和町の古里遺跡C地区[17]などで見られる。

いずれも柱筋が通る多数の掘立柱建物群をもつが、その中でも「建物の配置、規模、多量の陶硯などから地方政庁的なもの」が考えられる西ケ広遺跡、「五十戸□」・「倭家」の墨書土器と「集落にはみられない建物配置や建築構造を有する点で、何らかの公的な性格を考えることもできる。」下江平遺跡などは役所的な意味合いを込めて報告されている。末野B遺跡も「郡衙の出先機関的な役割をも、果していたのかも知れない」と注目されている。

また、1973年に調査された古里遺跡は、規格性のある側柱建物群や倉庫と見られる総柱建物群が検出され、当初より何らかの公的な性格をもつもの、あるいは在地豪族層の居宅の一形態と見られていたが、その後の範囲確認の調査により史跡斎宮跡となり現在に至っている。

打田遺跡は、規格性のある掘立柱建物群に加えて、その北に仏堂的な瓦葺き建物をセットにした建物配置を想定し、当時の豪族層を調べる上で今後の好資料となった。　　（福田哲也）

［註］

① 大阪府教育委員会『陶邑』 1979

② ①に同じ

③ 三重県斎宮跡調査事務所『斎宮跡の土師器』「史跡斎宮発掘調査概要」 1984

④ 愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』 1983

⑤ 古代の法制上の尺度は『大宝令』雑令、あるいは和銅6年2月の度量衡の改訂など、中央あるいはそれに連なる建物には小尺（29.61cm）を定めている。県内の斎宮跡は、29.6cmで完数になるという。一方、平安京の小尺が（29.9cm）使用している。

⑥ 弥永貞三・谷岡武雄編 『伊勢湾岸の古代条里制』東京堂出版 1979

⑦ 本書P3第2図参照

⑧ 本報告書 阿形遺跡参照

⑨ 三重県斎宮跡調査事務所『64－3次』「史跡斎宮跡発掘調査概要」 1986

⑩ 大上周三 『掘立柱建物の堀り方―布掘系譜を中心に―』「青山考古 第9号」 1991

⑪ 三重県教育委員会 『昭和59年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告 観音寺遺跡』 1985

⑫ 名張市遺跡調査会 『鴻之巣遺跡、小谷遺跡、小谷古墳群』 1991

⑬ 三重県埋蔵文化財センター 『森脇遺跡（三次）発掘調査報告』 1991

⑭ 三重県教育委員会 『東名阪道路埋蔵文化財調査報告 西ケ広遺跡』 1970

⑮ 菰野町教育委員会 『下江平遺跡発掘調査報告Ⅰ、Ⅱ』 1987、1988

⑯ 鈴鹿市教育委員会 『末野B遺跡』「鈴鹿市史」 1980

⑰ 三重県教育委員会 『古里遺跡発掘調査報告』 1973

〈参考文献〉

・静岡県浅羽町教育委員会 『古新田Ⅰ』 1992

・広瀬和雄 『古代の集落』「国立歴史民俗博物館研究報告 第22集」 1989

・山中敏史 『古代郡衙の再検討』「日本史研究 161」 1976

・山田 猛 『七世紀初頭における集落構成の変質』 考古学研究

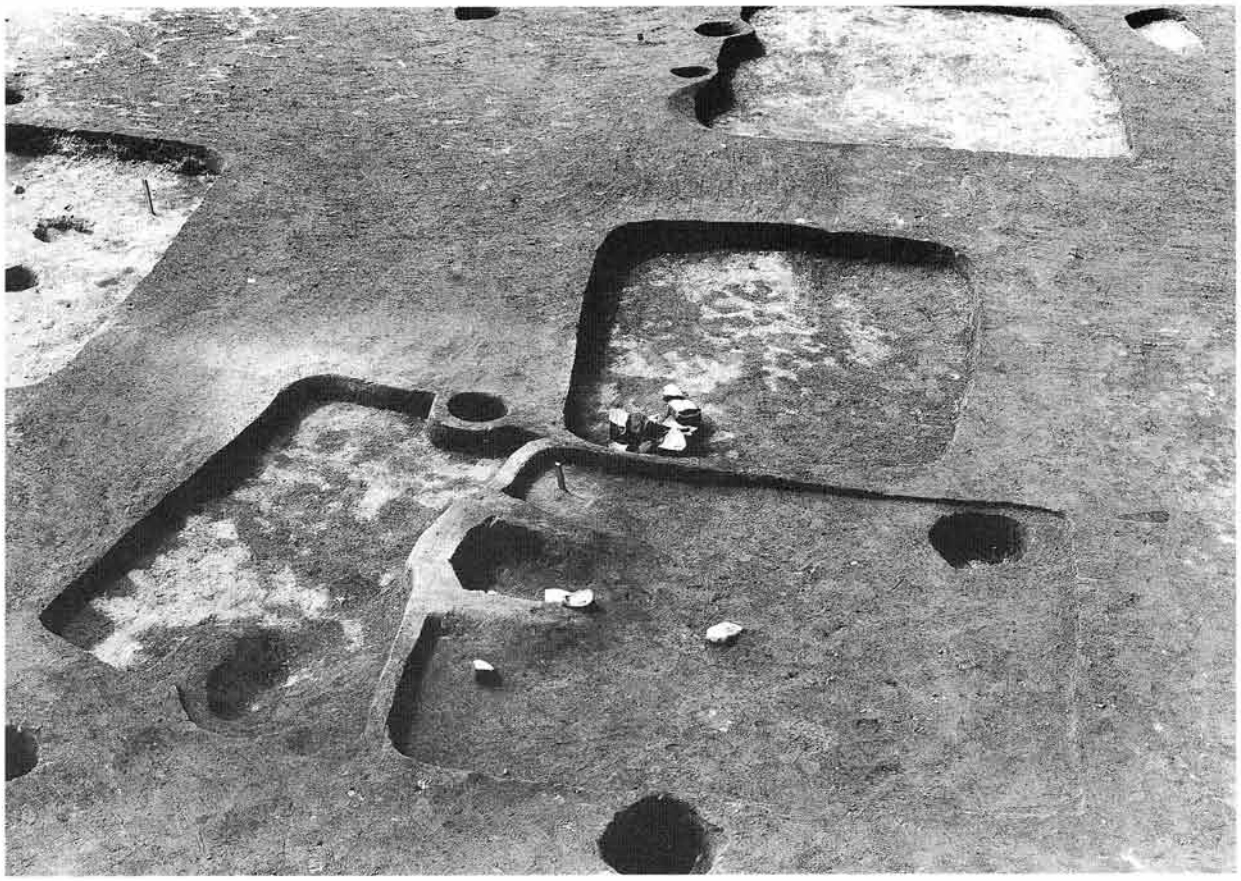
・三重県郷土資料刊行会 『貝野遺跡』 1969

・三重県教育委員会 『北堀池発掘調査報告』 第2分冊 1992

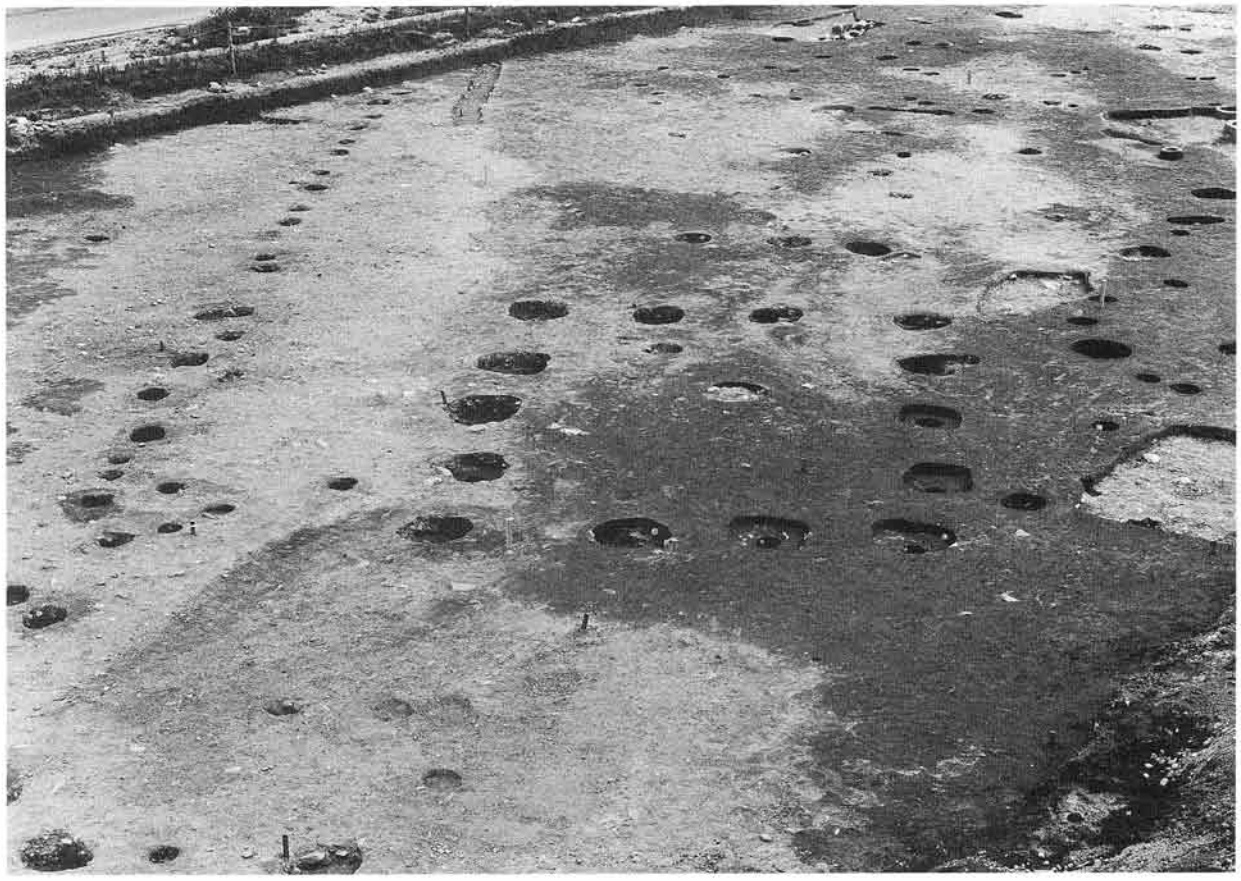
図版13

調査区東部

調査区中央部（北から）



ＳＨ37・38・39（北西から）

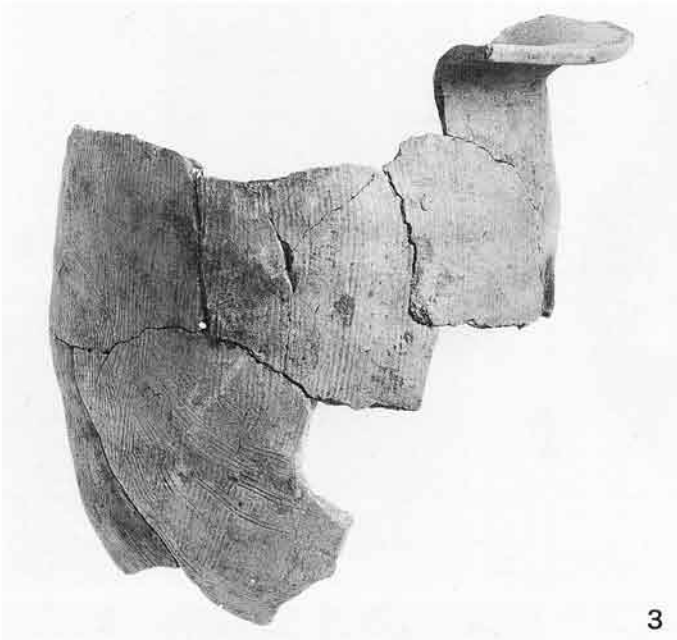


ＳＡ51，ＳＢ52（北から）

図版15

ＳＢ86・96・87, ＳＨ83（北から）

ＳＢ89・90・91（北から）


3

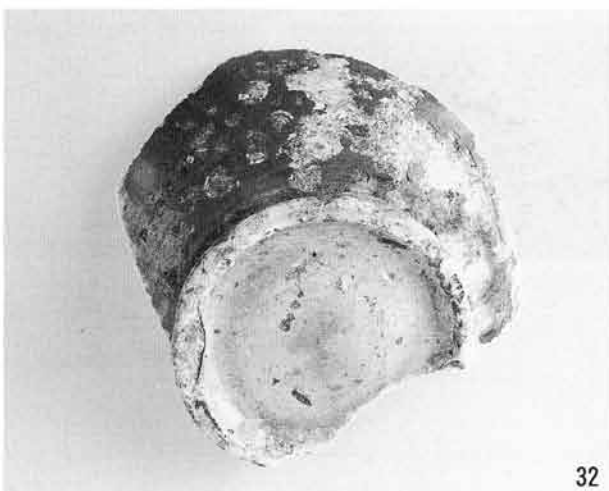
16

17

23

30

19


32

42

43

46

（1：4，32のみ1：1）

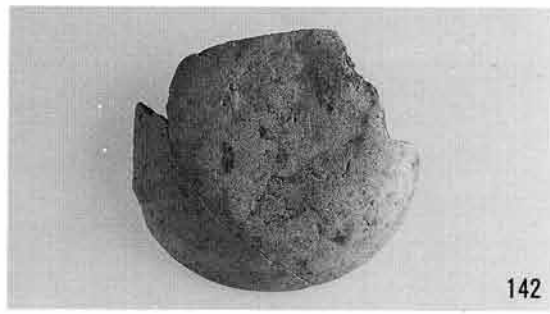
図版17

79

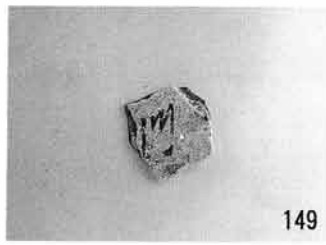
57

101

148


142

89


149

143

150

151

123

153

154

（1：4，148は1：1，150は1：2）

Ⅳ. 松阪市阿形町　阿形遺跡

1．はじめに

阿形遺跡は松阪市市街地よりやや北西方向に位置する標高20m程の阿形町の集落をとりかこみながらもやや北側にあり、約60,000㎡にも及ぶ広大な遺跡である。先述のヒタキ廃寺や打田遺跡は阿形町集落を挟んで、約500m程の距離にある。南東側には松阪市街地を流れる阪内川が東流・接している。

今回、遺跡の中で事業により削平を受ける3,500㎡について調査した。調査の結果、弥生時代後期に属する遺構と中世を中心とした遺構を検出することができた。そのため、本文では弥生時代を前編として、古墳時代以降の中世を中心とした遺構を後編として記す。

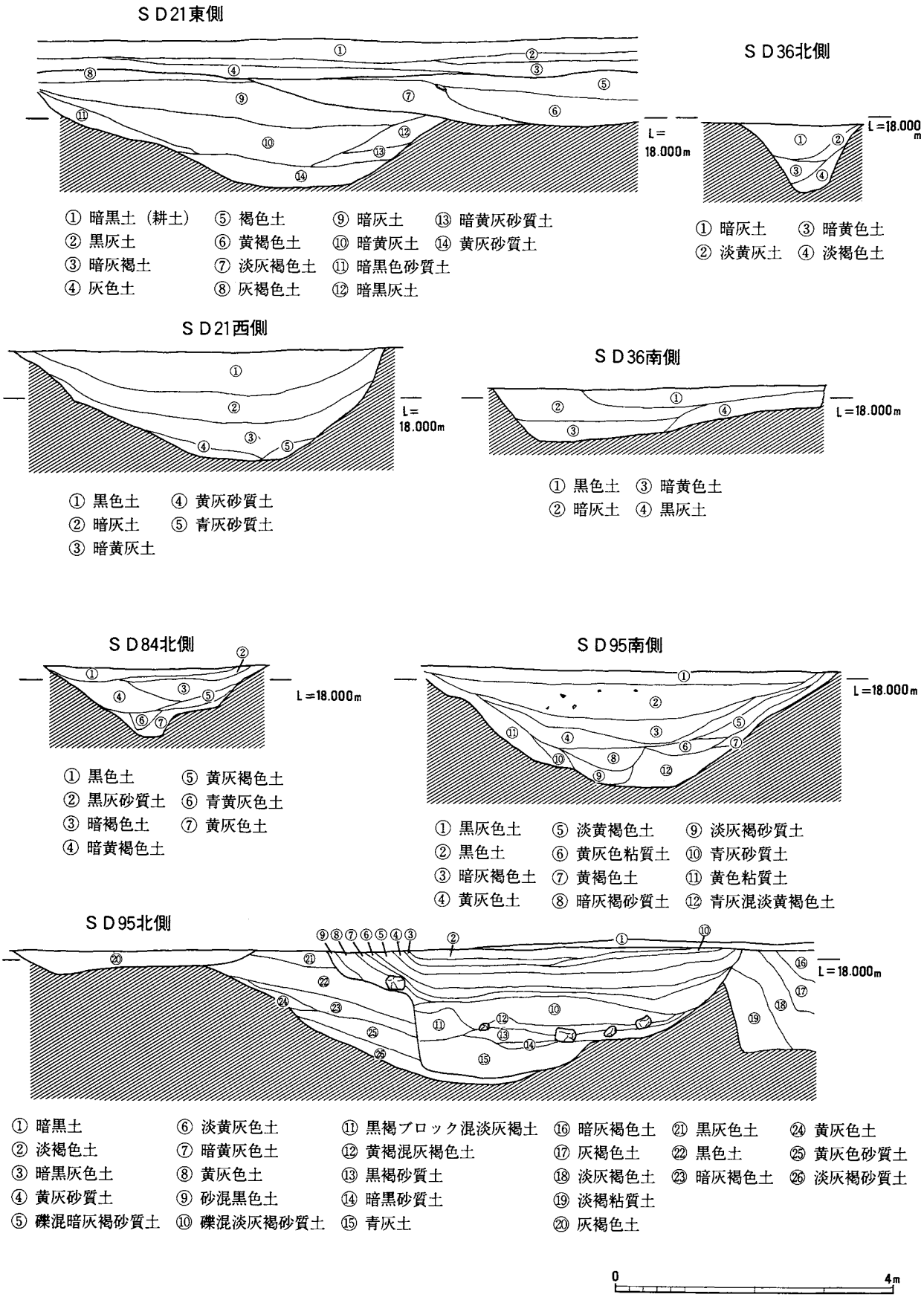
2．弥生時代の遺構

弥生時代に属する遺構としては溝が5条ある。いずれも多数の中世の遺構に切られて検出された。ＳＤ21、ＳＤ36、ＳＤ84、ＳＤ95、ＳＤ103がそれであるが、そのうちＳＤ21は東西に流れ、その他はおおむね南北に並行して流れている。

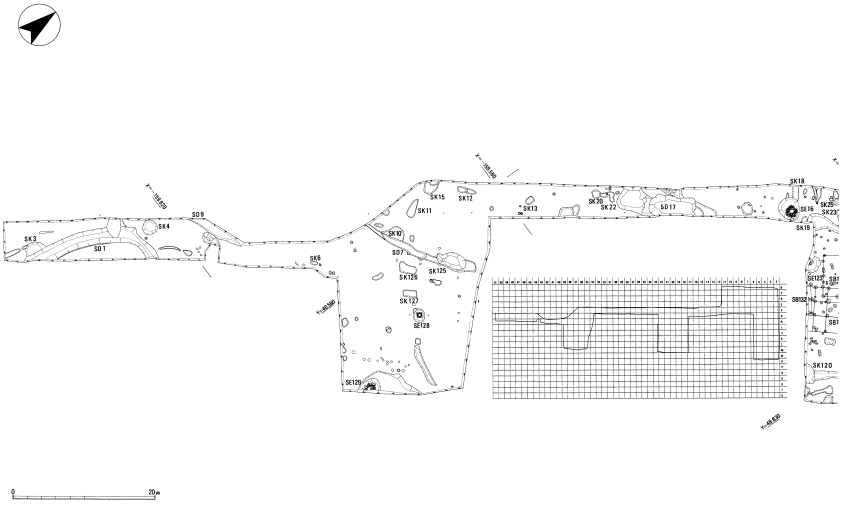
ＳＤ２１　唯一東西方向に流れる溝である。溝はやや南側に内弯し、幅は４～６ｍある。長さは両端を調査区で切られるため不明である。深さは約1.5ｍであるが、東に行くほどやや深くなる傾向が見られる。溝の東端は中世の溝ＳＤ117によって切られている。

基本層序は耕土下に黄色や黒色の粘質土があり、

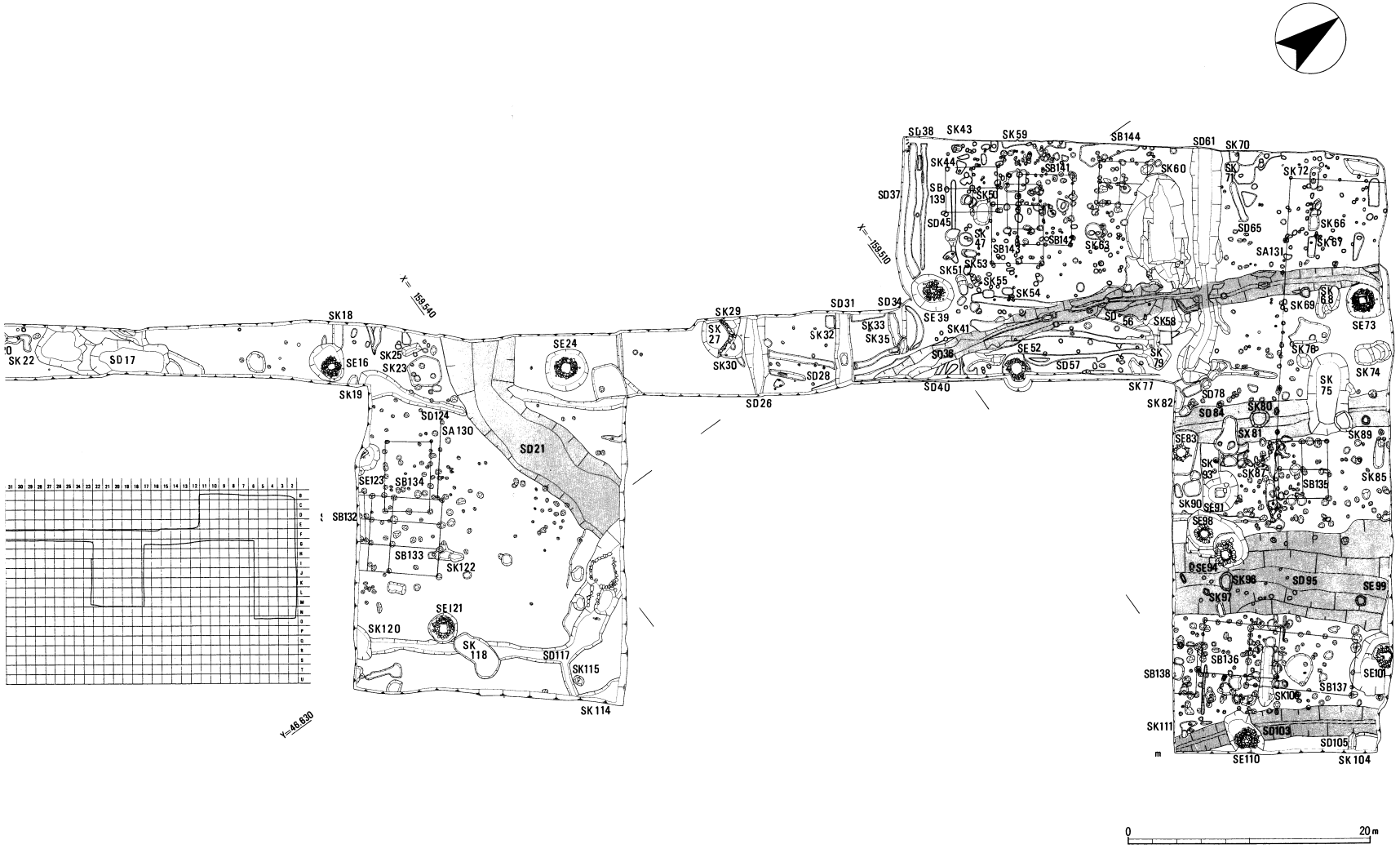
第50図　調査区位置図（１：2,000）



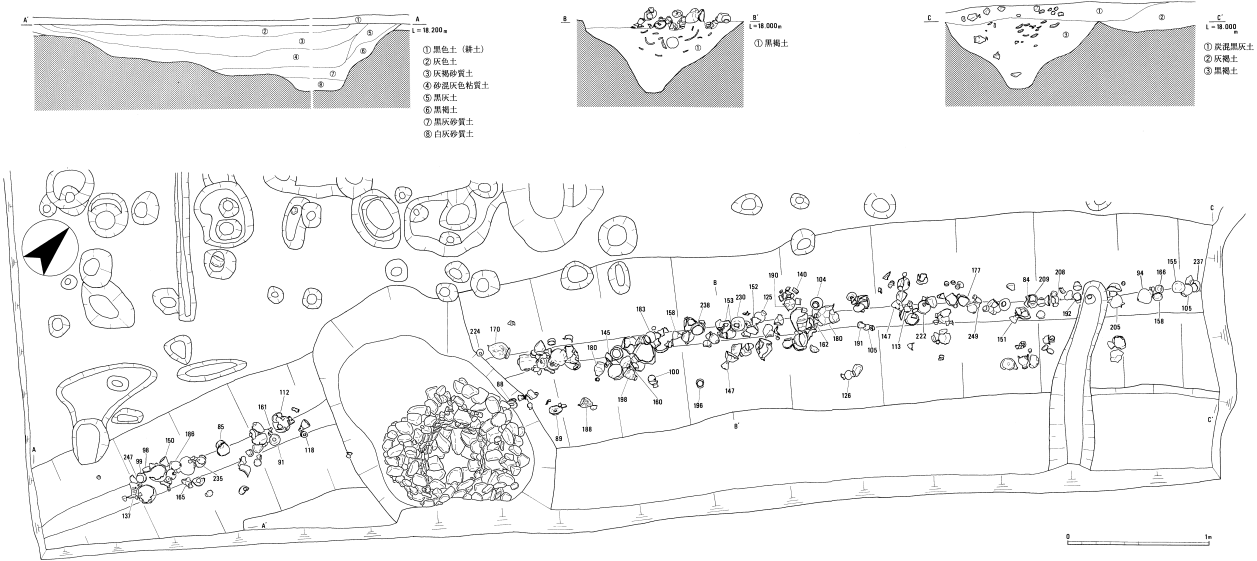
第51図　ＳＤ21，36，84，95土層図（１：80）



第52－１図　遺構平面図（１：400）



第52－２図　遺構平面図（１：400）



第53図　ＳＤ103遺物出土状況（１：40）

若干の後期に属する遺物が含まれていた。その下に砂地の層（下層）があり、若干の中期に属する広口壺、細頸壺などの遺物を含んでいた。

ＳＤ３６　南北に流れる溝で最も西側に位置するものである。溝はやや西側に緩く内弯し、幅は約２ｍある。長さは調査区により両端を切られるため不明であるが、わかっているだけで約40mある。深さは約１ｍ程であるが、溝の南北で極端な標高差はない。この傾向は南北を流れる後述の３条の溝についても言える。

この溝も多数の中世の遺構に切られており、無頸壺（16）などが出土しているが、遺物の量は少なくく、出土量と層位の傾向は特定出来なかった。

ＳＤ８４　南北に通じる溝で西から２番目の溝である。南端をＳＥ83が、中央部はＳＸ81の火葬墓が、北側を土取りと思われる土坑によって切られる。調査区が狭くなっているところの溝のため、約18m分しか検出できなかったが、最も長いＳＤ36より多くの遺物が出土した。黄灰色系の比較的深いところからの出土が多かった。幅約３ｍ、深さ約１ｍである。

ＳＤ９５　南北に通じる溝で西から３番目のものであるが、幅は約６ｍと広く、深さも約２ｍと深い。この溝も中世の井戸ＳＥ94、98が南側で、ＳＥ99の掘形が北端を切る。遺物は黒色土（上層）からのものが多い。

ＳＤ１０３　南北に通じる溝で、最も東に位置するものである。西から数えて４番目のこの溝は、西側に緩く内弯して幅は約２ｍ、深さは約１ｍである。溝の断面はＶ字形をなす。遺物は溝の上面より密集し、深さ約50cmくらいのところまで多く、溝の下半には少なかった。層序は南端以外はとりにくく、短期間で埋まったものと思われる。

３．弥生時代の遺物

弥生時代の遺物はコンテナバットにして約500箱あった。チャート製石製品一点を除くと、あとはすべて土器である。ほとんどが５条の溝からの出土で、包含層からの出土は遺構面の上がすぐに耕作土となることもあり、極めて少ない。

溝からの遺物もＳＤ103が過半数で200箱程を占め、その４分の１程がＳＤ95、ＳＤ95の半数程がＳＤ84、ＳＤ84の半数程がＳＤ36、ＳＤ36よりやや少ない量がＳＤ21という割合である。

弥生時代中期の土器（１～５、41）

この時期のものは広口壺・細頸壺があるがいずれも完形のものはなく少量の出土であり、全容を把握できるものはない。

弥生時代後期の土器（６～８、11～40、42～255）

器種には壺、高杯、甕、器台、鉢、蓋、手焙り形土器、ミニチュア土器がある。ここではまず各器種の分類を行い、その後で各遺構出土の土器について述べることにする。（第15・16表参照）

Ａ．ＳＤ21出土遺物

この溝からは弥生中期に相当する広口壺（１、２）や細頸壺（４）などの土器が下層の砂質土から出土している。広口壺の口頸部は円筒状に肥厚して強く外反する。いずれも口縁部に指圧痕をもつものである。

細頸壺は口頸部が著しく細くなり、わずかに外傾する口縁部となる。また、外面の口頸部から口縁部にかけて、櫛描波状文を幾重にも施す。

（３）と（５）は同時期の壺類の部分と思われるものである。（３）は体部と思われるもので、縦に貼り付け突帯をもつ。（５）も底部と思われるものである。

上層からは後期の壺Ｂ２（６）や高杯Ａ１（７、８）が出土している。また、約500gの深緑色の随所に敲打痕のあるチャート製の石（９）もある。

同じ溝上の包含層（灰褐色土）からは甕Ｃの流れをくむ５世紀代の甕（10）が入ってくる。

Ｂ．ＳＤ36出土遺物

最も西側に位置するこの溝からは、出土遺物は少なく、実測に足るものも僅かである。集中して出土することもなく、たまに見つける程度である。

出土遺物としては、壺Ａ、壺Ｃ、高杯Ａ、高杯Ｄ、甕Ａ１、鉢Ａ１、鉢Ｂ２、ミニチュアＢ等がある。比較的新しい部類の高杯Ｃ等は出土していない。

くの字口縁をもつ壺Ａに属する（11、12）と、無頸壺とした壺Ｃ（16）が完形で出土している。

（11、12）はいずれも外面にハケメを施すが、無頸壺とした（16）は内外面ともにヘラミガキを施す。

（11、12）は口縁が外反して口縁端部も上方外を向

第15表

壺A 広口壺に相当する。	A1	口頸部が直線的あるいは外弯して開き、口縁端部の外側に凹線や櫛歯刺突列などの文様のある広い面をもつ。口縁部内面にも文様を持つもの、貼付突帯をもつものなどがあり、口頸部の文様はほとんどのものが櫛歯による刺突列か羽状文である。	85
	A2	A1に類似し、口縁端部外面に広い面をもつが、装飾性はない。	94
	A3	口頸部ですぼまり、口縁部に向かって直線的もしくはカーブを描いて外反する。胴部は球形・縦長な期ゅ桂・無花果形となる。広口壺の形態としては当遺跡では最も多いタイプである。	104
	A4	A3に類似するが、口頸部から口縁端部に向かってカーブを描いてやや内弯する。	112
	A5	A3に類似するが、口縁部が受口状になっているもの。	40
壺B 長頸壺に相当する。	B1	頸部で細くなり、口縁部は直線もしくはわずかに外反する。	120
	B2	頸部で細くなり、口縁部はわずかに内弯する。	118
	B3	B1に類似するが、台が付くタイプである。	126
壺C		台付きの無頸壺とするものである。当遺跡から唯一の出土であり、用途的にも不明であるが、一応壺に入れるものとする。	16

高杯A	杯部は浅く、中位で稜を持ち、口縁部が外弯して開く。脚部は比較的長い柱状部に外弯する裾部がつくものである。ヘラミガキを多用するものである。脚部にヘラミガキの後、櫛歯横線・櫛歯刺突列・3方ないし4方の透孔をもつものA1と、それのないA2に分けられる。	135
高杯B	杯部はやや深くなり、中位下方に稜をもつ。口縁部は直線的に開き、ヘラミガキを多用し、3方ないし4方の透孔をもつ。脚は直線的に開くものである。	145
高杯C	杯部は深く、下位に稜をもつ。口縁部は内弯して開き、端部内面に面をもつ。ヘラミガキを多用し、3方ないし4方の透孔をもつ。脚は内弯気味に開くものである。高杯Cも櫛歯横線・櫛歯刺突列・3方ないし4方の透孔をもつものC1と、それのないC2に分けられる。	151
高杯D	球形状のやや深めの杯部をもち、やや外反気味の脚がつくものである。	17
高杯E	球形状の杯部に直線的または内弯気味に開く脚部が付くものである。高杯Eも櫛歯横線・櫛歯刺突列・透孔をもつものE1と、それのないE2に分けられる。	166
高杯F	杯部が2度内弯するタイプである。	167
高杯G	脚部が円筒状に伸び、裾部で急に広がるものである。	45
甕A 台の付かない甕である。	A1 口縁部が短く、「く」の字に開くものである。	174
	A2 口縁部が中位または上位で屈曲して受口状になるものである。	200

第16表

甕B 台付き甕である。	B1 口縁部が短く、「く」の字に開くものである。	179	
	B2 口縁部が中位または上位で屈曲して受口状になるものである。	205	
甕C	いわゆるS字状の口縁をもつ甕である。	216	
器台	数点出土しているが、いずれも杯部径と底部径はほぼ等しいと思われるが、杯部と脚部は明瞭な境を持たず、杯部と脚部は同じくらいの径で、ともに大きく開く。	223	
鉢A	A1 体部は球形状に立ち上がるが、口縁部は外反する。	226	
	A2 体部はA1に類似するが、口縁部は直立するか内傾する。底部には穿孔がある甑形の鉢である。	236	
	A3 体部はA1に類似するが、口縁部は受口となる。	69	
	A4 体部はA1に類似するが、底面から口縁部まで無頸壺状に立ち上がる。	230	
鉢B	B1 体部の中位でやや張り出し、口縁部は直上または緩く外反する。	225	
	B2 B1に類似するが、底部に穿孔がある甑形の鉢である。	233	
	B3 B1に類似するが、口縁部両端に把手の付くタイプである。	230	
蓋	蓋はいずれも編笠形を呈し、上方に開くつまみ部を持ち、中央がやや窪む。	239	
手焙り形土器	いずれも鉢部の口縁部と蔽部とが明瞭な境をもつものである。	241	
ミニチュア土器 器高が10cm程度以下のものを指す。	壺形をAとする。	243	
	高杯形をBとする。	161	
	甕形をCとする。	250	
	器台形をDとする。	75	
	鉢形をEとする。	254	

くが、(16) は口縁は内弯するが、端部は直上方向を向く。

(13) は壺Aの底部と思われるものである。体部は外面がヘラミガキとなっている。

(14) は残っている杯部の内面がミガキ調整となっているので、壺ではなく、ミニチュアBというミニチュア高杯になると思われる。

(15) は高杯Aに属するものである。透孔は脚部のかなり下方にある。

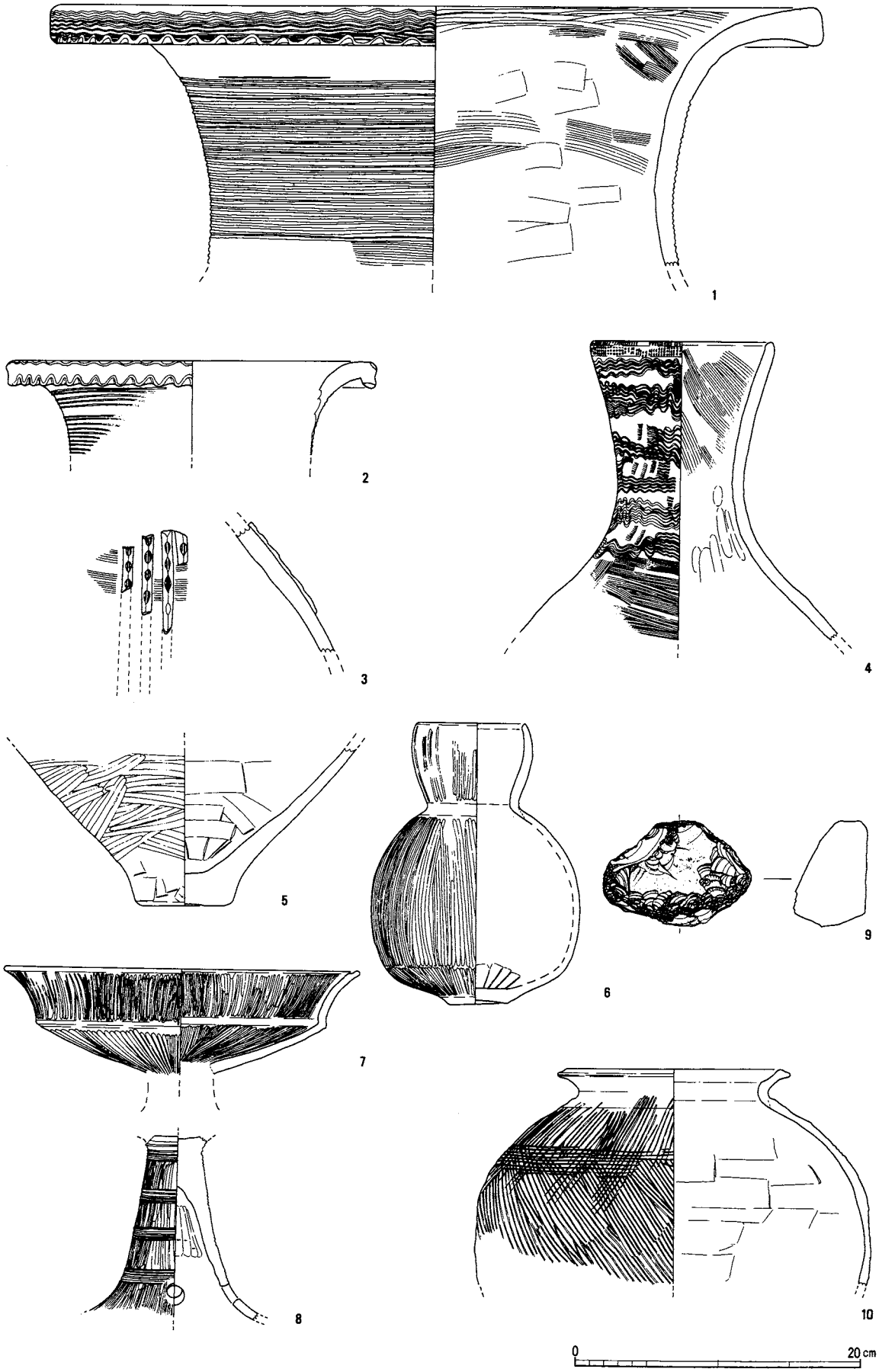
(17) は高杯Dに属するものである。この種類のものは、当遺跡からこの1点のみである。

(18) は甕A1に属するが、やや底部に粘土が補強されている。体部最大径は口縁部と同じ位で、やや細長い形である。

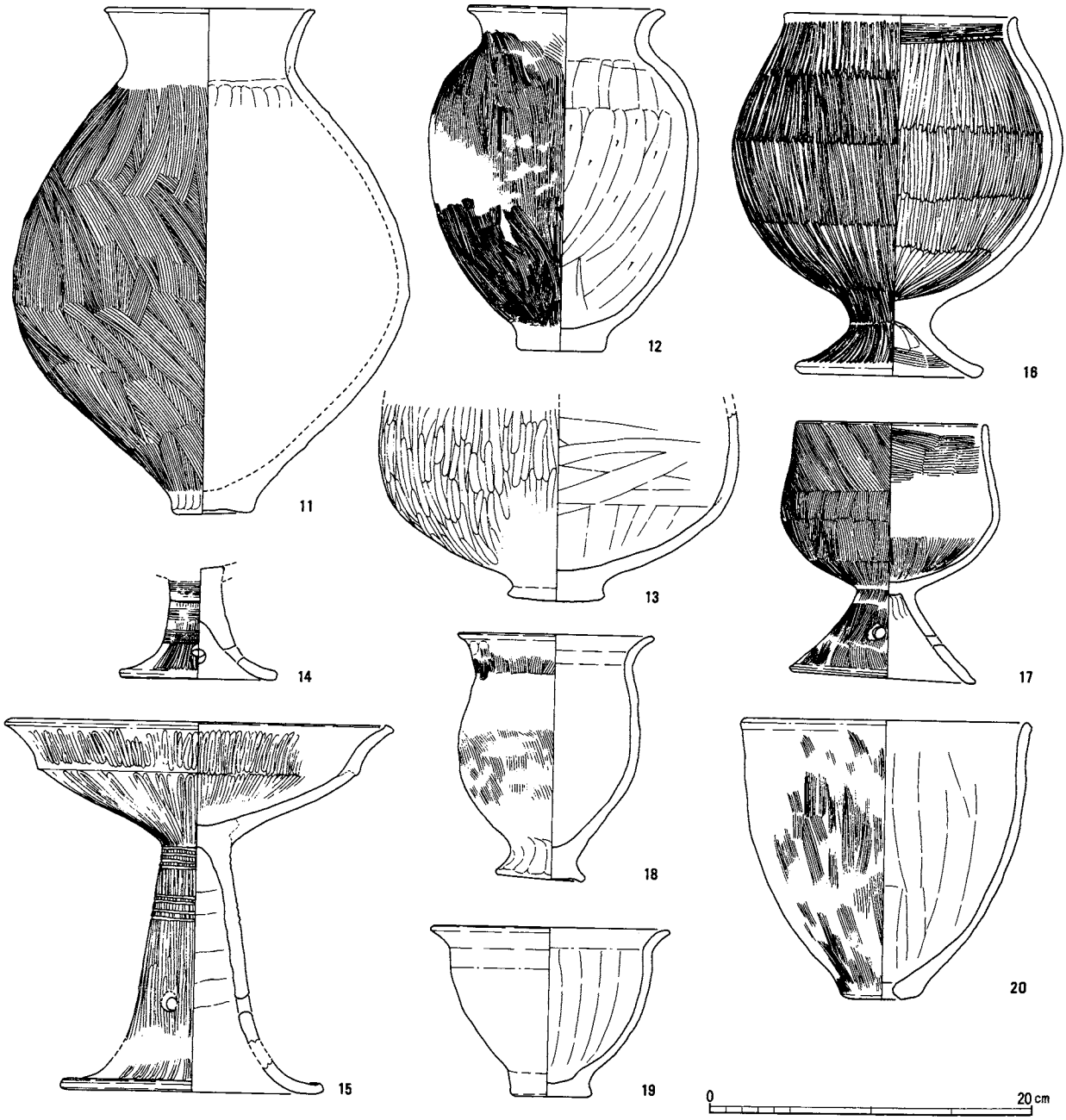
(19) は鉢A1に属するものである。底部がやや厚く、粘土で補強されている。

(20) は鉢B2に属するものである。

(19) は外面がナデに対して、(20) はハケメ調整



第54図　ＳＤ21及び溝上面出土遺物実測図（１：４）



第55図　ＳＤ36出土遺物実測図（１：４）

となっている。

C．ＳＤ84出土遺物

遺物は少ないが、下層の黄灰色系の土層からの出土が比較的多かった。出土遺物には壺Ａ２、高杯Ｃ２、高杯Ｅ、甕Ａ１、甕Ｂ１、甕Ｂ２、鉢Ａ１、鉢Ａ３に属するものがある。

壺Ａ２（21）は外面ミガキののち、肩部に竹管刺突列をもつ。

（22）は杯部、脚部ともに端部が欠損しているが、調整方法、脚部の開き具合から高杯Ｃ２に属するものであろう。

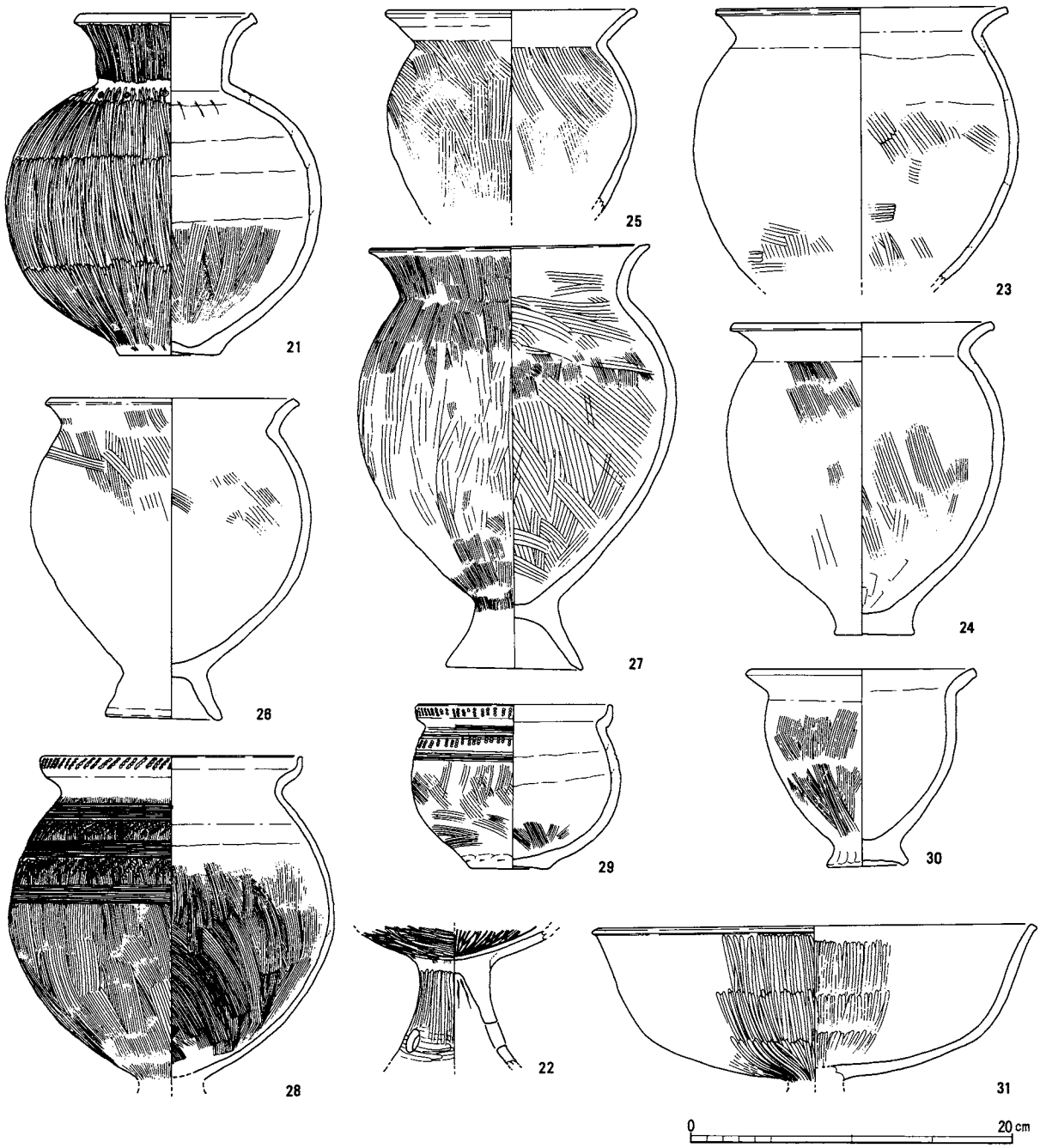
（24）は甕Ａ１に属するものであるのに対して（26、27）は甕Ｂ１に属するものである。いずれも内外面ハケメ調整を施し、口縁部もやや外弯しながら端部が水平方向やや上を向く。

（28）は甕Ｂ２に属するものである。体部は球形に近く、薄手である。また、体部上半から口縁部にかけて、櫛歯刺突列や櫛描横線を交互に丁寧に施す。

（23、25）はくの字系１の甕であるが、ＡかＢかの違いは不明である。

（29）は受口の口縁部をもつ鉢Ａ３である。

（30）は鉢Ａ１に属するものであるが、やや底部が



第56図　ＳＤ84出土遺物実測図（１：４）

肥厚している。

(29) の底部が薄いのに対して、(30) はややふんばりを意識したつくりである。

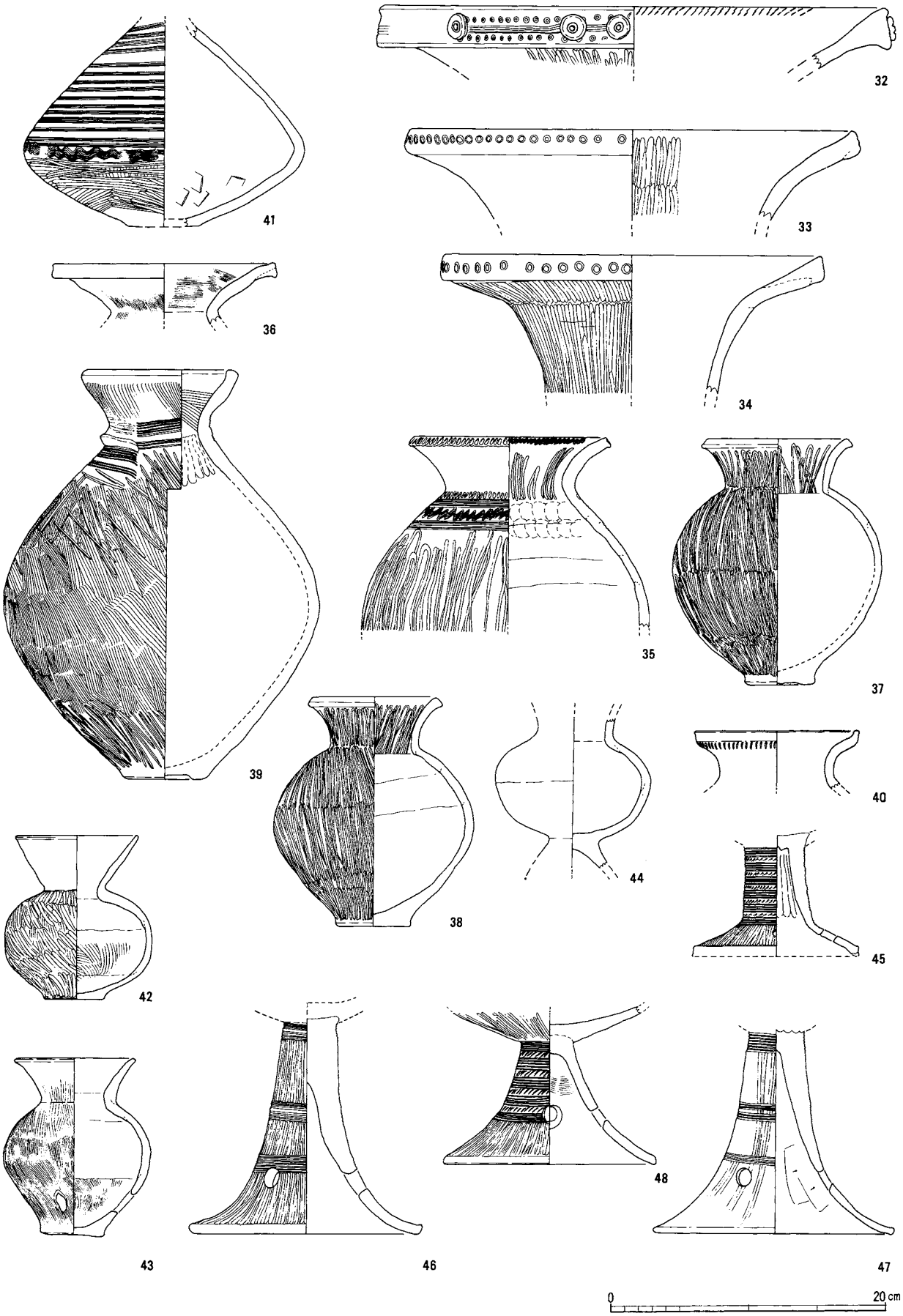
(31) は一見鉢のようにも見えるが、杯部底部が急に肥厚しだしており、内面もミガキ調整になっているので、高杯Ｅに属するものであろうか。そうなると口径は約27.8cmと、高杯Ｅの中では最大である。

Ｄ．ＳＤ95出土遺物

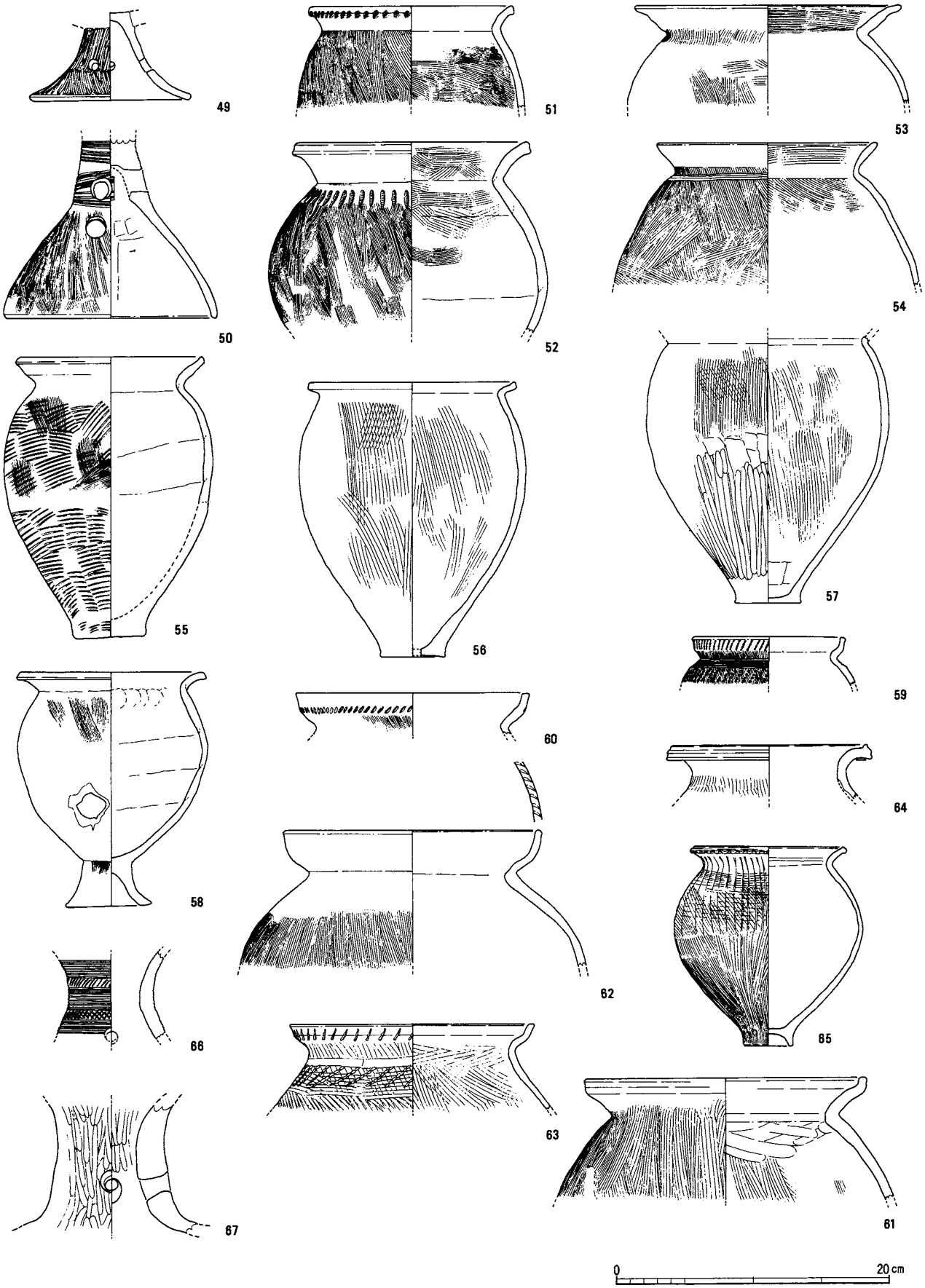
この溝からは多数の遺物が出土しているが、比較的浅い上層（黒色土）からの出土が大半を占める。遺物には壺Ａ１・壺Ａ２・壺Ａ３・壺Ａ５・壺Ｂ２・壺Ｂ３、高杯Ａ１・高杯Ｃ１・高杯Ｇ、甕Ａ１・甕Ｂ１、器台、鉢Ａ１・鉢Ａ２・鉢Ａ３・ミニチュアＣ・Ｄ・Ｅがある。また、高杯Ｃ類も１点のみの出土で、高杯Ａ類の比率は高杯の中では多い。遺物から見て、ＳＤ36と同様比較的時期差がないようにも見える。

(41) は中期的色彩をもつ細頸壺である。他の遺物から見て、紛れ込みであろうか。

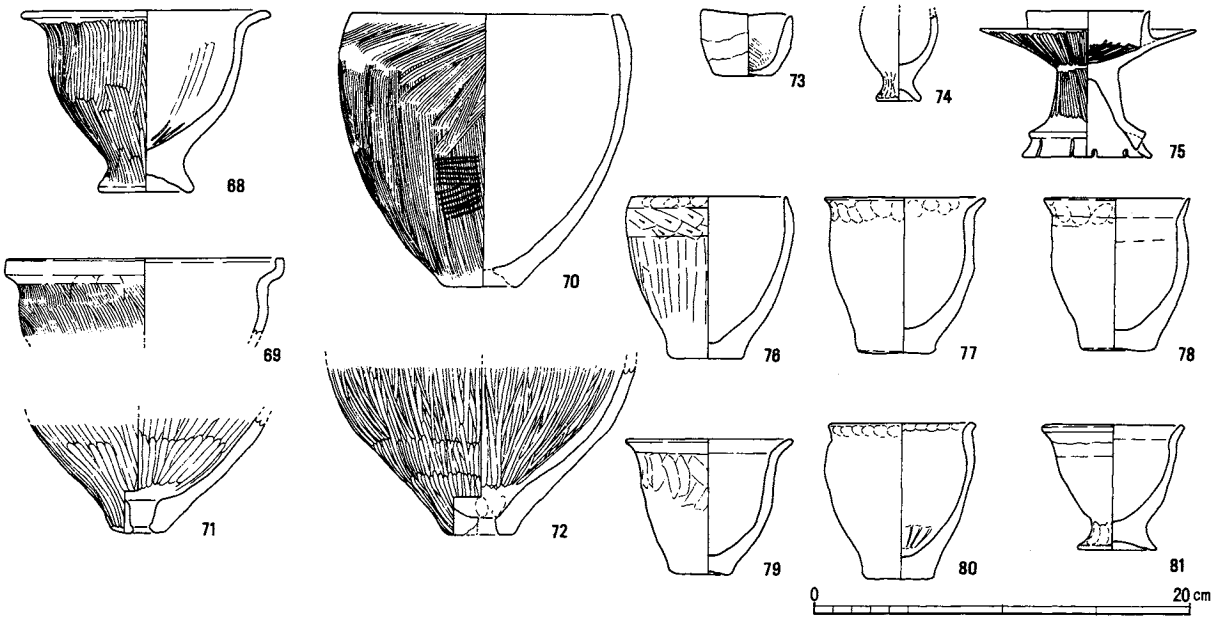
壺（32～34）は、くの字にまがる口縁部に竹管刺突



第57図　ＳＤ95出土遺物実測図（１：４）



第58図　ＳＤ95出土遺物実測図（１：４）



第59図　ＳＤ95出土遺物実測図（１：４）

や円形浮文を施す壺Ａ１に属すものである。

壺（36）は、くの字に曲がる口縁部に装飾をもたない壺Ａ２に属するものである。

壺（32～36）の、外反する口縁部はいずれも肥厚する。

壺Ａ１に属する壺（35）は、口縁部は肥厚せず、外面口縁部に櫛歯刺突列を施すものである。

壺Ａ２に属する（37、38）は、全く同じ成形であるが、ＳＤ95から同じ地区であと１個体、計３個体出土している。

壺Ａ３に属する（39）は口頸部に貼り付け突帯のようなものをもつ。完形のため粘土の接合部は不明であるが、櫛描横線と粘土接合のひずみの可能性もある。口縁部はやや内弯気味に開く。

壺Ａ５に属する（40）は、口縁部のみの残存であるが、口縁下方に櫛歯刺突列を施す。口縁端部はやや直上方向を向く。

壺Ｂ２に属する（42、43）はいずれも、（42）が外面をミガキ調整を施し、口縁部が直線的にのびるのに対して、（43）はハケメ調整で、口縁部も外反気味にのびる。また、（43）は体部下方に焼成後の穿孔をもつ。

壺Ｂ３に属する（44）は口縁端部と台部端部を欠く台付き壺である。磨耗が激しく、調整は内外面とも不明である。

高杯Ｇに属する（45）は、脚部のみの残存であるが透孔は裾部にあり、丁寧な調整を施す。ただこの種のものは、１点のみの出土である。

（46、47）はいずれも高杯の脚部であるが、透孔も裾部付近にあり、高杯Ａ１に属するものである。

（48、49）は一見高杯の脚部に見えるが、内面がナデ調整であり台付き壺の壺Ｂ３であろう。（48）は櫛歯刺突列や櫛描横線を持つが、（49）はそれを持たない。

高杯Ｃ１（50）は、透孔が杯底部近くの上方に位置し、上に３か所・下に１か所もつ。

（51、52）はいずれも口縁部に面をもち、（51）は口縁部に櫛歯刺突列をもつ甕である。（52）は面に装飾を施さないものである。いずれも底部に台が付くか否かは不明である。

（53、54）は甕の口縁部でいずれもくの字にひろがる。口縁端部断面は円となる。底部の形態は不明である。

（55～57）はいずれも甕Ａ１に属すものである。いずれも体部最大径が、口径と変わらない程細長い体部をもつ。（55）は体部に畿内系の影響をもつタタキ調整を施す。遺跡内出土のタタキ甕はこの１点のみである。

甕Ｂ１（58）は、体部下半に焼成後の穿孔をもつ。

（59～63）はいずれも口縁部と体部上半のみの残存

である。台の有無は不明であるが、いずれも受口系の甕である。

(64) は同じく口縁部のみの残存ではあるが、口縁部に凹線を２本もつ。

(65) は (64) とよく似た口縁部をもつ。口縁部下半に円形の原体による押圧を連続して施す。

器台 (66、67) はいずれも受部と裾部を欠くが、(67) が単にミガキ調整のみであるのに対して、(66) は格子型櫛歯刺突列、櫛描横線も丁寧に施すものである。

鉢Ａ１に属す (68) はわずかに台が付く。口縁部は大きく外弯し、端部が水平方向やや上を向く。

鉢Ａ３に属す (69) はその外観から見て、手焙り形土器に似ているが、蔽部との接合部分が見られないし、(241) や (242) などと比べ鉢部の窪みが少ない。

鉢Ａ２に属す (70) は、外面ハケメの以前にわずかにタタキが残る。また、底部穿孔跡が残る。

(71、72) は底部しか残らないが、体部は直線的にのびる鉢Ｂ２に属するものであろう。ミニチュア土器 (73～81) は甕形 (74、76～81)、器台形 (75)、鉢形 (73) に分けられよう。

ミニチュア土器Ｃ (74) は、口縁部は欠くが、内面に朱が付着しているものである。

ミニチュア土器Ｄ (75) は、器台形をしたものであるが、受部と裾部にそれぞれ帯状の粘土を貼り付けてある。さらに裾部には７方向にキザミを入れ、内外面とも丁寧にミガキを入れている。この類のものは１点のみであるが、内外面ハケメで杯部に帯状の粘土を貼り付けたのが高杯Ｄ (156) である。

Ｅ．ＳＤ103出土遺物

この溝からは最も多くの遺物が出土しているが、遺構検出面である耕作土直下から多量の遺物が露呈していた。遺物の出土層位は見極め難い地区が多かったが、比較的溝の上半からのものが目立った。

豊富な遺物は、壺Ｂ２、鉢Ａ３、ミニチュアＤを除くすべての器種が揃う。遺物から見てもＳＤ８４と同様に、時期的にやや幅があるようにも見える。

壺Ａ１に属するものは (82) から (91)、(110) まである。そのうち、口縁部に円形浮文をもつもの (82、83) や、頸部に貼り付け突帯をもつもの (83、84)、口縁端部が肥厚するもの (87、90)、櫛歯羽状刺突列をもつもの (84、86、88) など様々である。

壺Ａ１に属すると思われる (110) は、遺跡内で唯一のパレススタイル土器である。鋸歯文から見ても、比較的雑につくった印象を受ける。

壺Ａ２に属するものは (92) から (94) まである。このうち、(94) は外面体部中央と上端・下端とミガキの方向が異なるものである。

壺Ａ３に属するものは、(96) から (105) まである。

(96) は器高44.9cmと遺物中最大のものである。

(101、102) は、いずれも肩部にヘラ記号「キ」をもつ。ヘラ記号をもつものは、この２点のみである。

(103) は体部の最大径が体部の上位にあるもの (103、100、104)、体部の最大径が体部の中位にあるもの (96、97、102、106、107)、体部の最大径が体部の下位にあるもの (95、108、109、105、107) などがある。

壺Ａ４に属する (112) から (114) は、球形状の体部にやや内弯する口縁部をもち、端部は直上方向を向く。(113) は口頸部に焼成前の穿孔が両端に２つずつある。紐ようのものを通してさげて使ったものであろうか。体部下方に焼成後の穿孔もある。

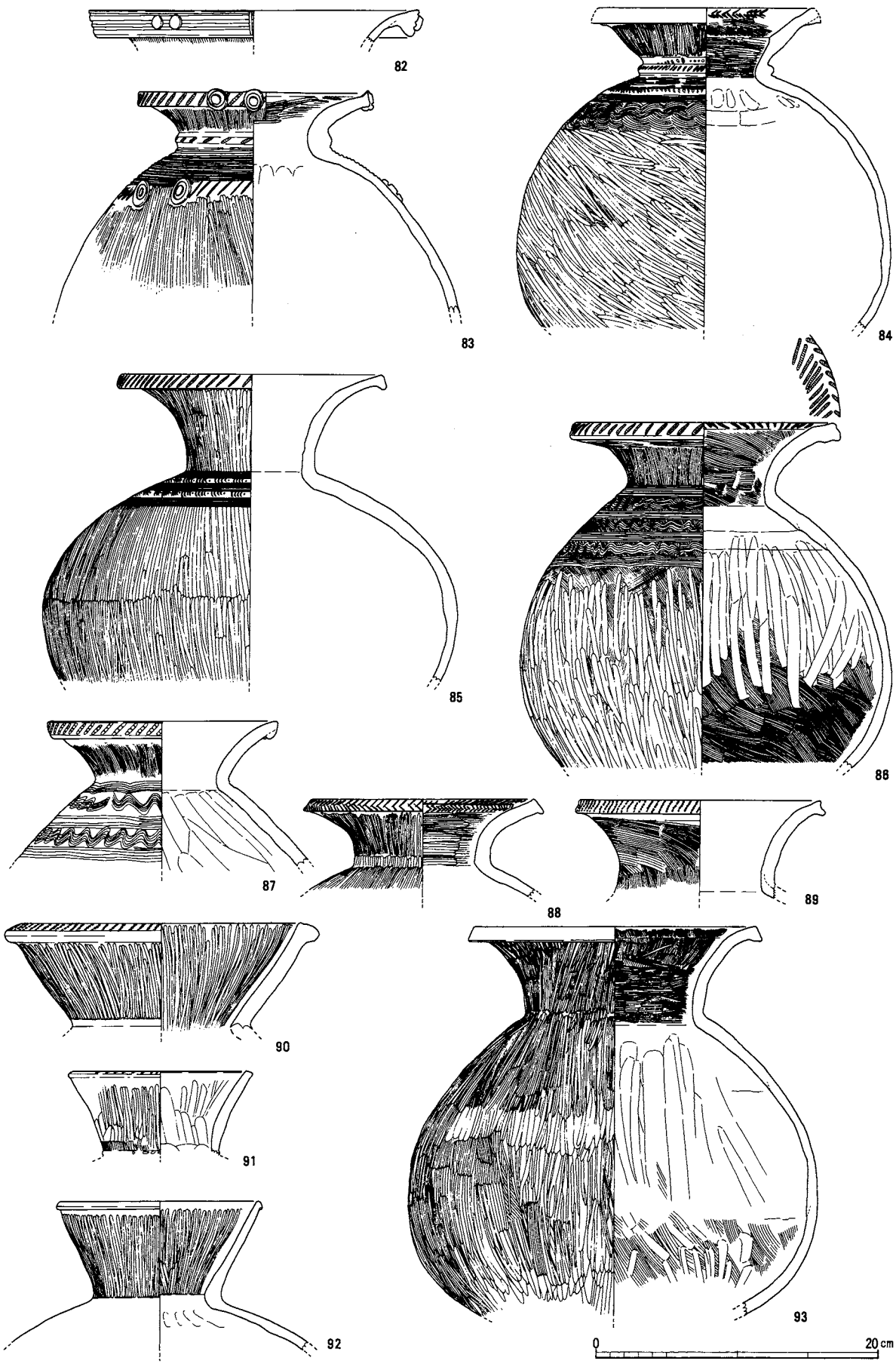
壺Ｂ１に属するものには、(116、120) などのやや縦長の体部にタテミガキのものと、(115、119、121、122) などの体部横長にヨコミガキに大別出来よう。

壺Ｂ３に属する台付き壺も櫛歯横線や透孔の入る (123～125、128) と、それのない (126、127、129) に大別出来る。

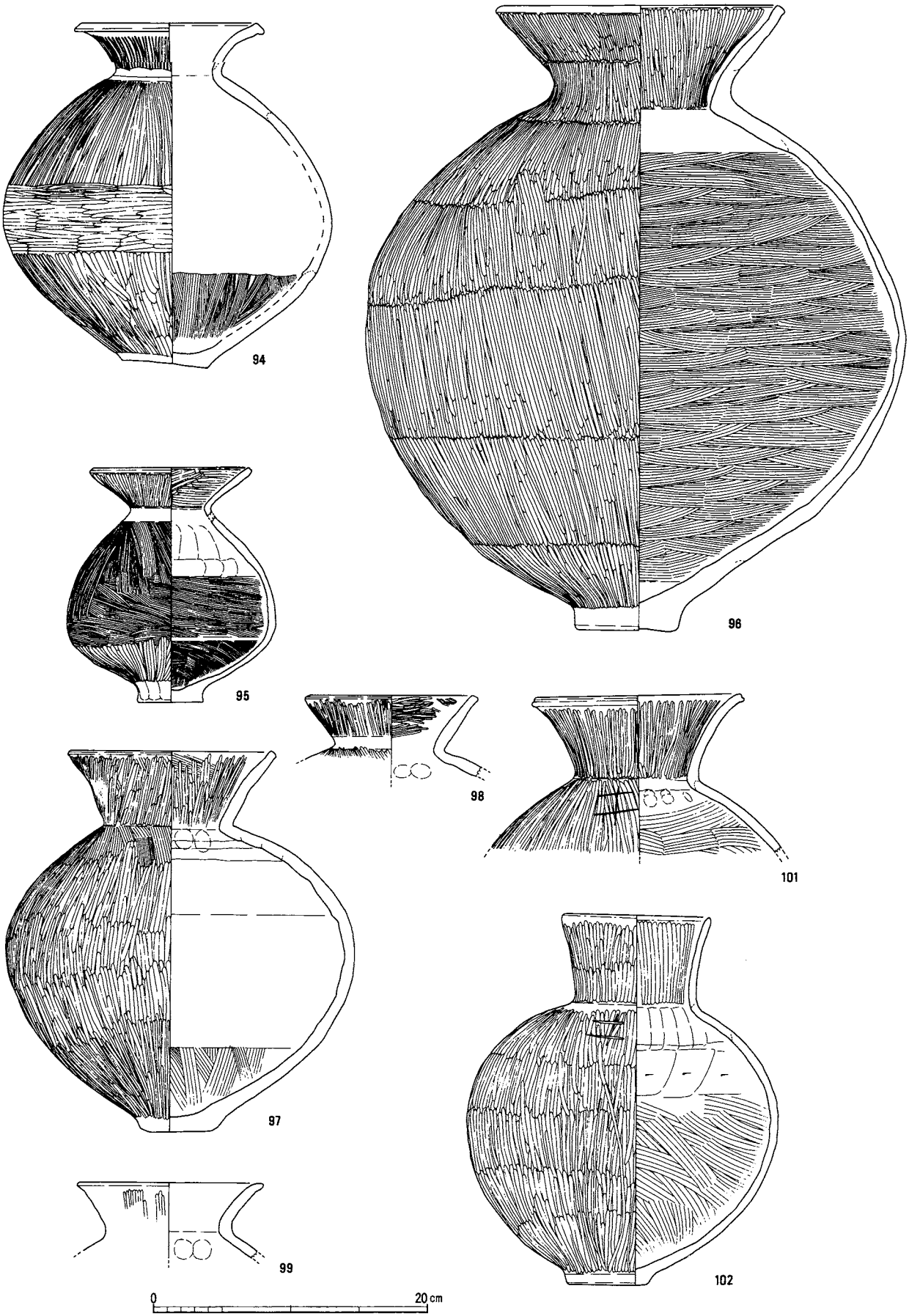
(128、129) は台部のみの残存であるが、高杯が内面ナデ調整であるので、台付壺の部類に入れた。高杯はＡ類に属するものに (130) ～ (142) まである。いずれも内外面ミガキ調整を丁寧に施してあるが、櫛描横線と３方透孔のあるＡ１は、それのないＡ２より圧倒的に多い。

高杯Ｂ類は (144)、(145) の２点を図示したが、点数的にもＡ類やＣ類より少ない。(145) はミガキ調整がやや雑に施されている。

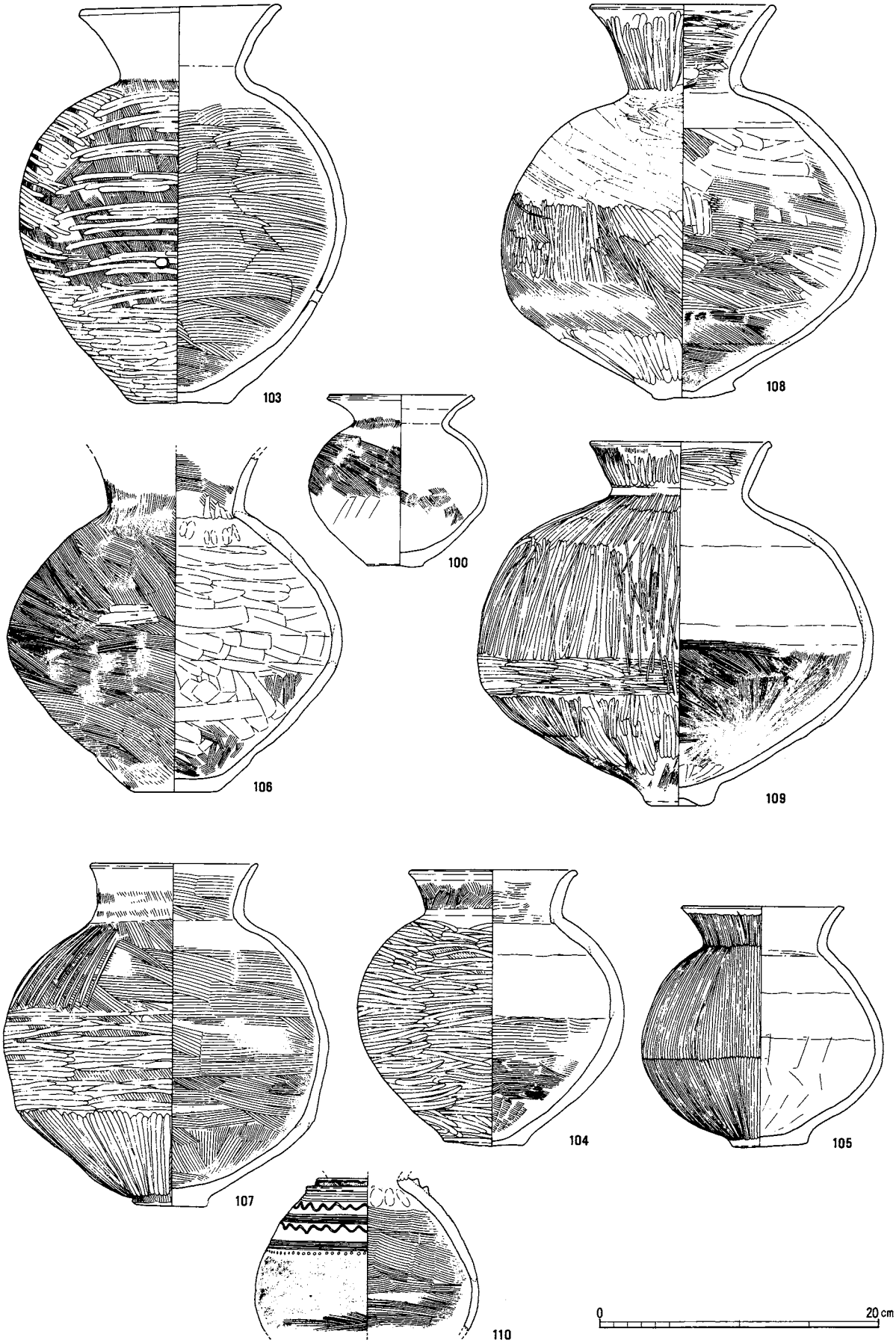
高杯Ｃ類は (146) ～ (154) まであるが、出土数から見ても、櫛描横線と３方透孔のあるＣ１は、それのないＣ２とほぼ同数である。(151) は３方透孔



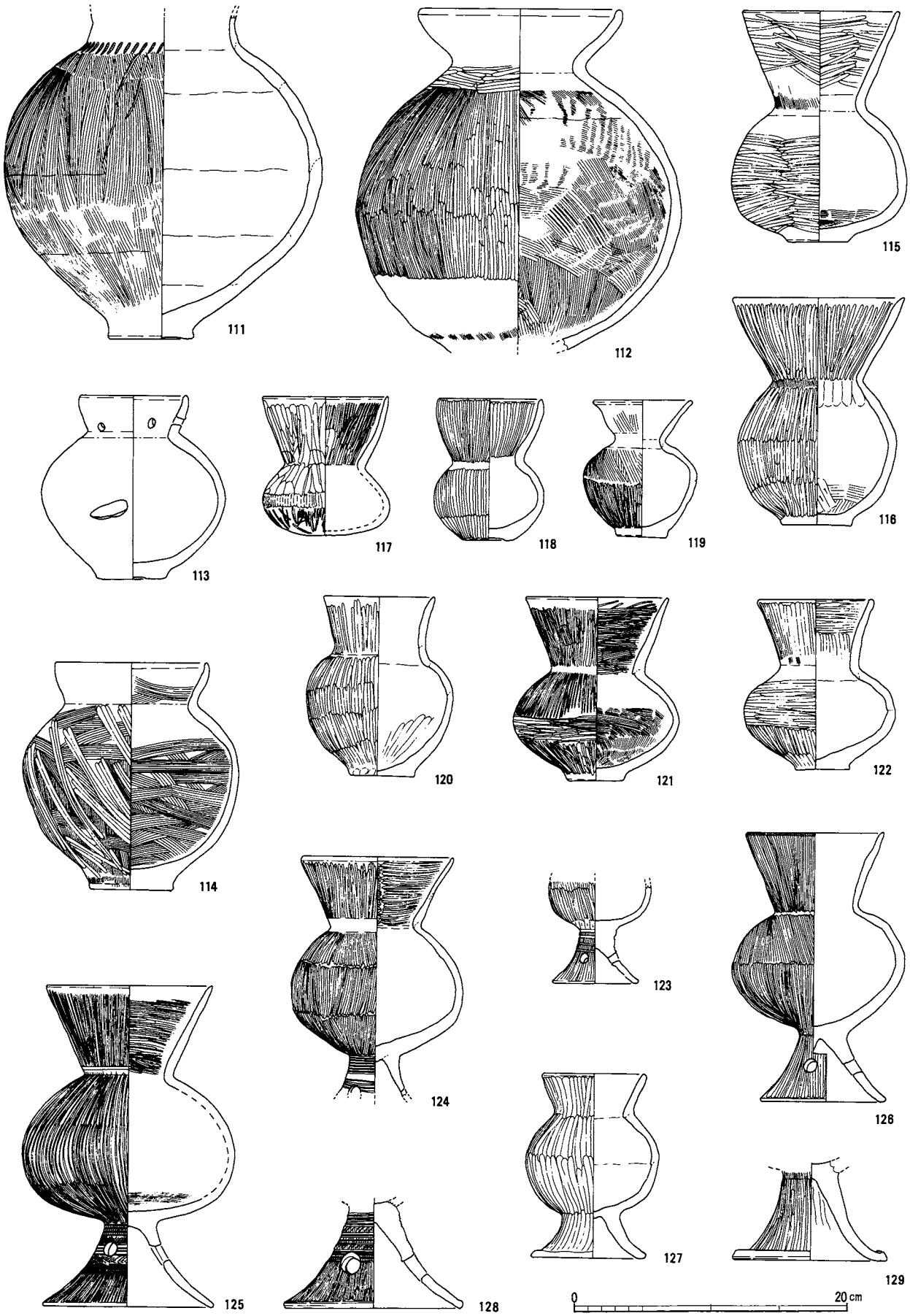
第60図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



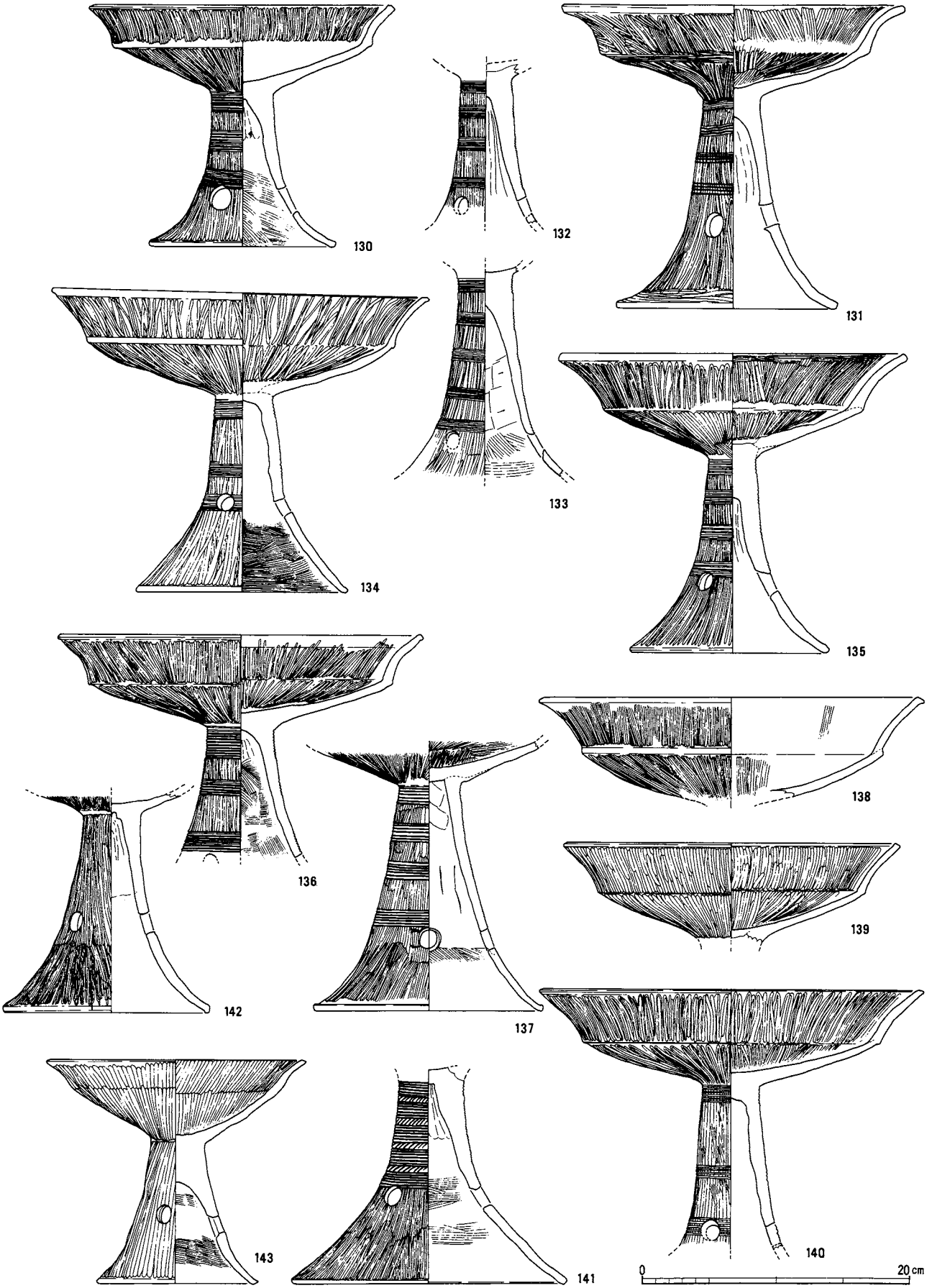
第61図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



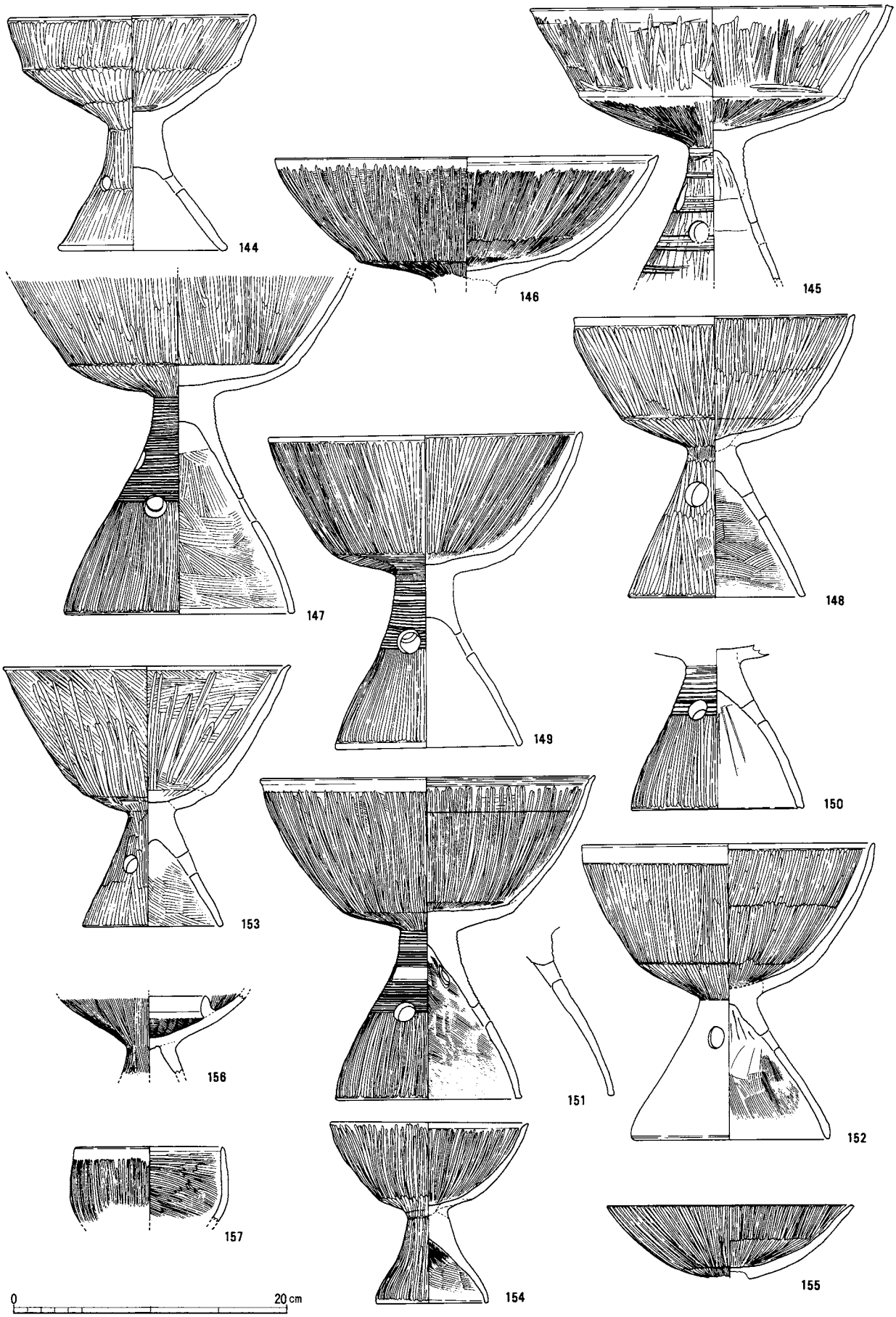
第62図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



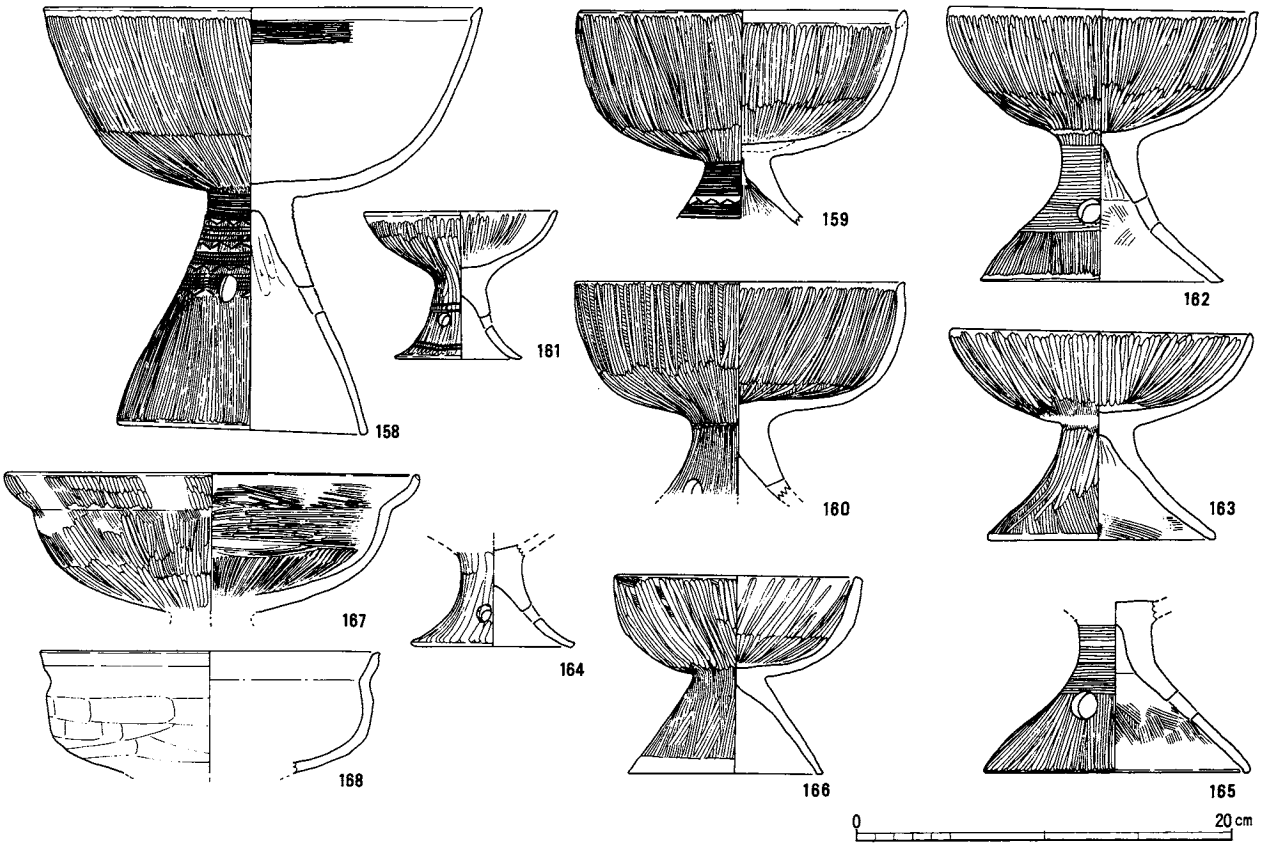
第63図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



第64図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



第65図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



第66図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）

が二段に施されているものである。

（152）は脚部磨耗が激しく、横線の有無は不明である。

（156）はハケメを全面に施し、杯部に突帯を貼り付けたものである。器形から見るかぎり、ミニチュア土器Ｄにも似ているが、調整方法や大きさの違い、つくりの粗雑さなどもあり、検討が必要であろう。

高杯Ｅ類に属するものは（157～160、162、163、165、166）がある。そのうち（158）、（159）は柱状部の杯底部に接するところに櫛歯刺突列を鋸歯形に施すものである。

高杯Ｆ（167、168）は杯部が２度内弯するもので、遺跡内では珍しいタイプである。いずれも残存度が悪いため、全容を把握できない。

甕はＡ類に属するものと、Ｂ類に属するものとの差は体部や口縁部からは判断しにくいものである。全体の比率から言えば、甕Ｂ類の方が多い。

甕Ａ１類に属するものに（174、175、189）がある。（174、175）は体部がいずれもハケメ調整であるが、（189）はハケメ後ミガキ、後ヘラケズリとなっている。

（180、187、188）は甕Ａと甕Ｂの間に属すると思われるほどのもので、台ではないが台を意識したつくりをもつ。体部下半～底部はいずれもヘラケズリ、ユビオサエとなる。

（169）は口縁部のみの残存であるが、口径が34.1cmと甕としては遺跡内最大のものである。口縁部に櫛歯刺突列をもつ。

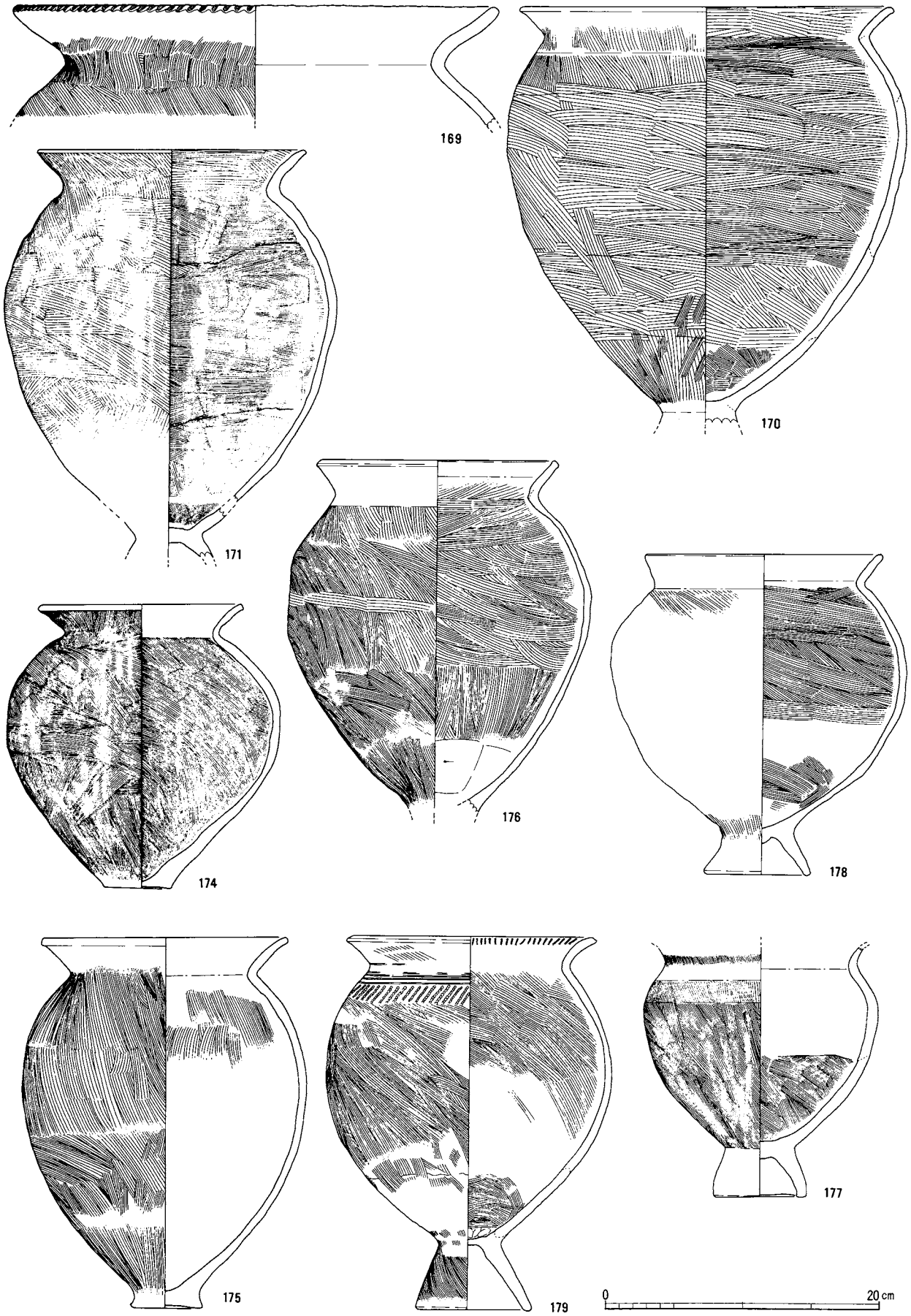
甕Ａ２類に属するものに（199、200、208、218）がある。この類は（218）を除き体部から口縁部にかけて櫛歯刺突列、櫛描波状文などの装飾が付く。

（199）は近江系の受口状の甕である。

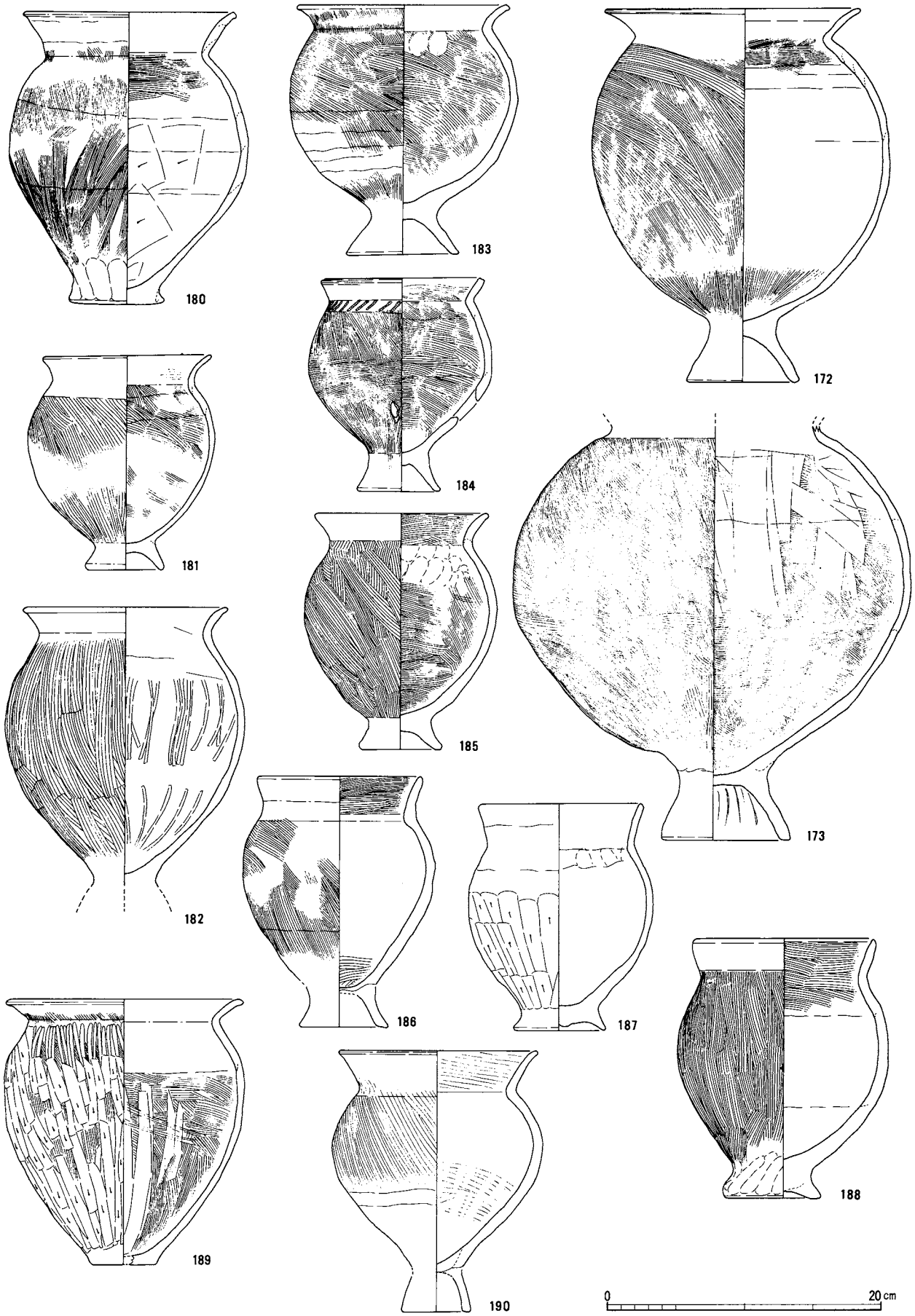
（217）は台ではないが、底部を意識したつくりをもつ。

甕Ｂ１に属するものは（170～173、176～179、181～186、190、192～198）がある。いずれも内外面体部ハケメを基本としているが、装飾のある櫛歯刺突列をもつものは（179）と（184）のみである。

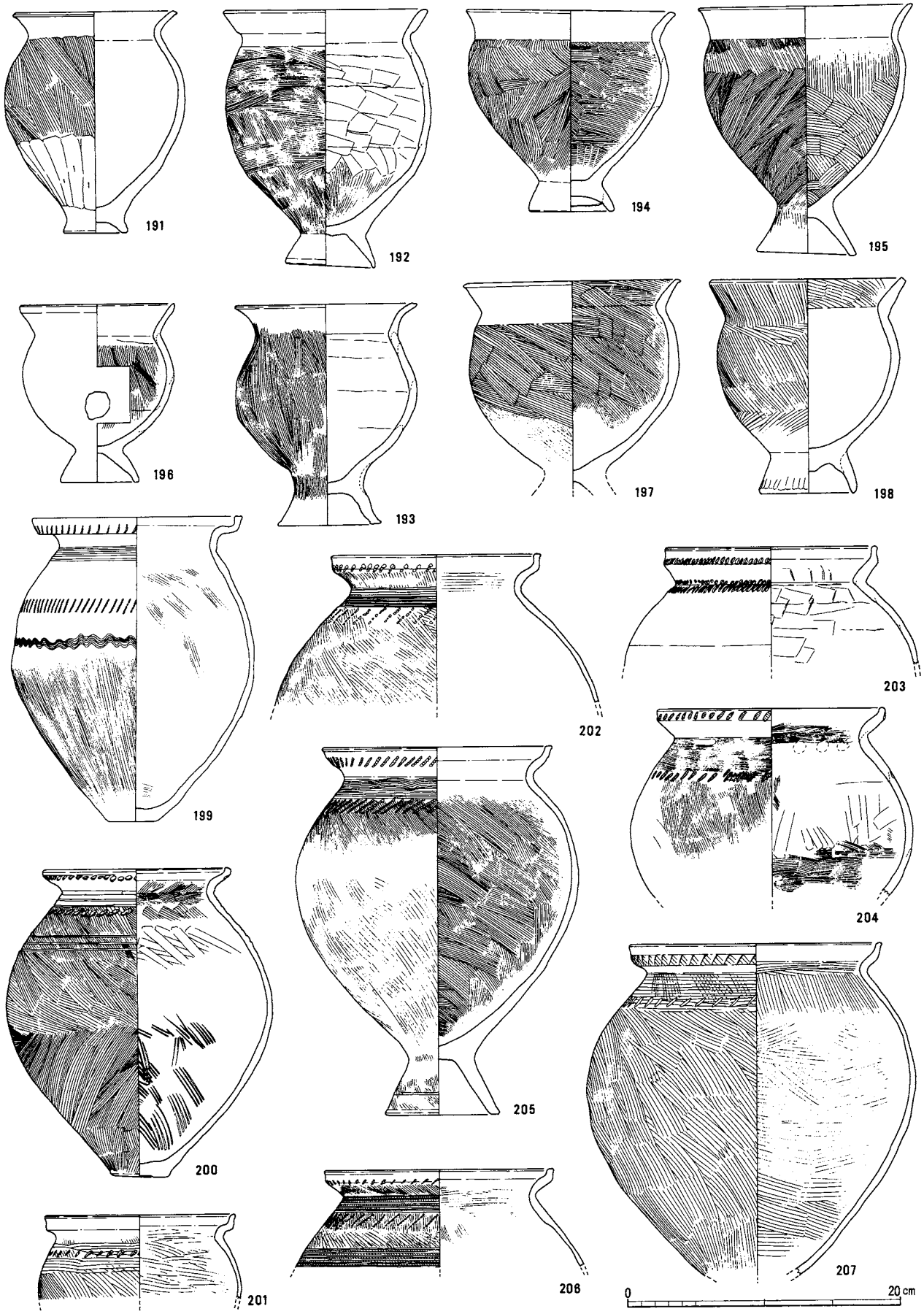
甕Ｂ２に属するものに（205、222）がある。（205）は口縁部などに櫛歯刺突列をもつのに対して、



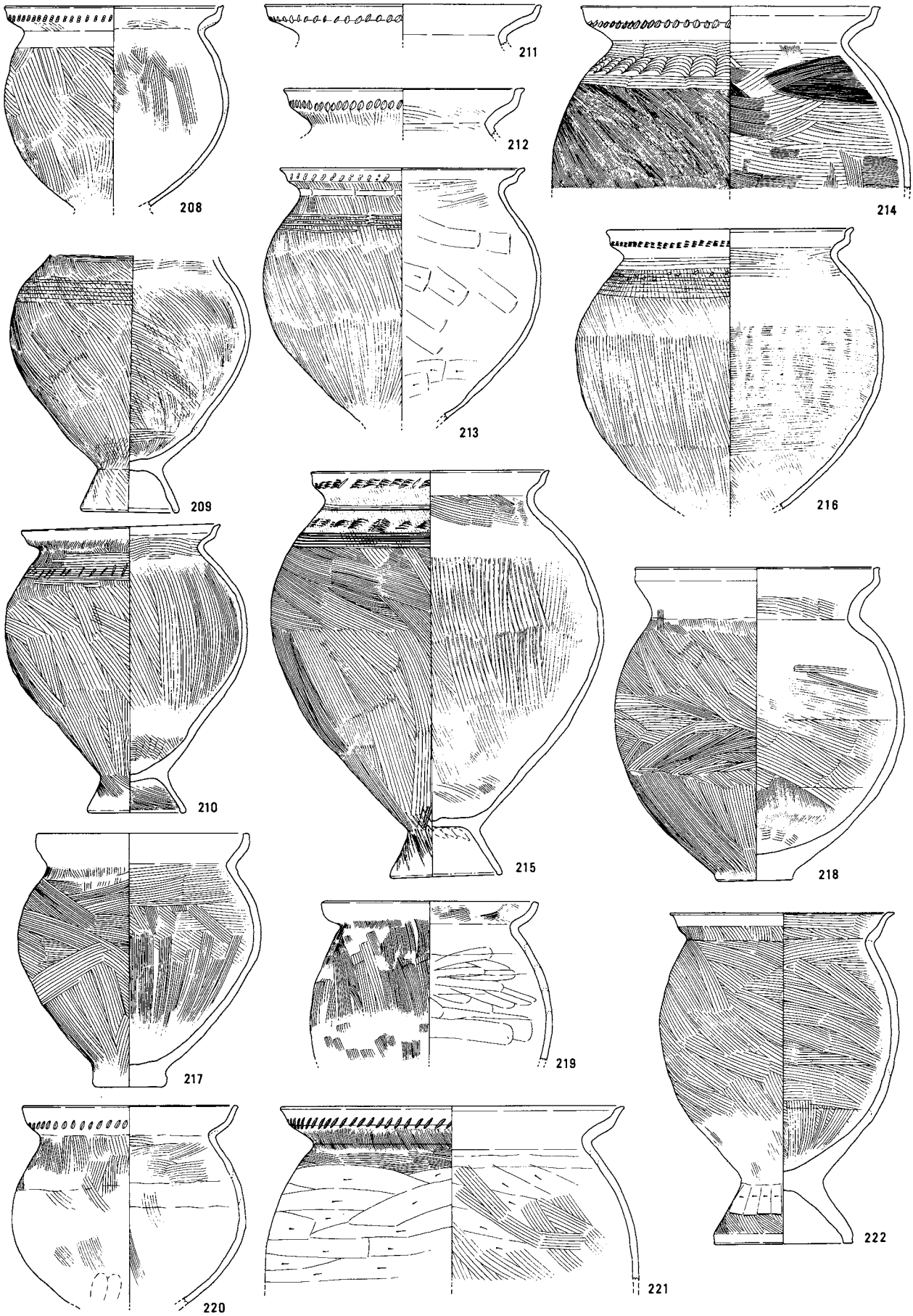
第67図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



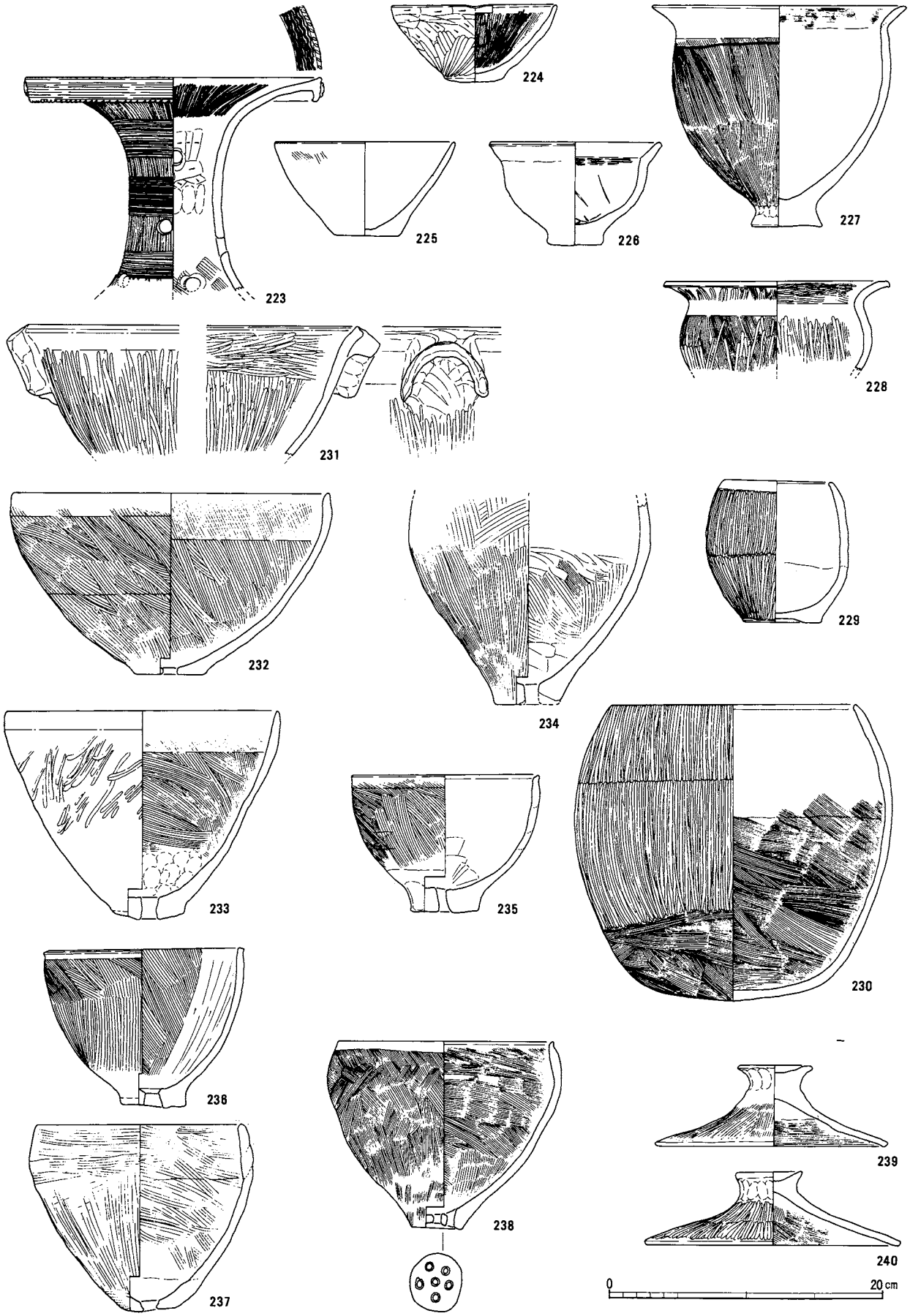
第68図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



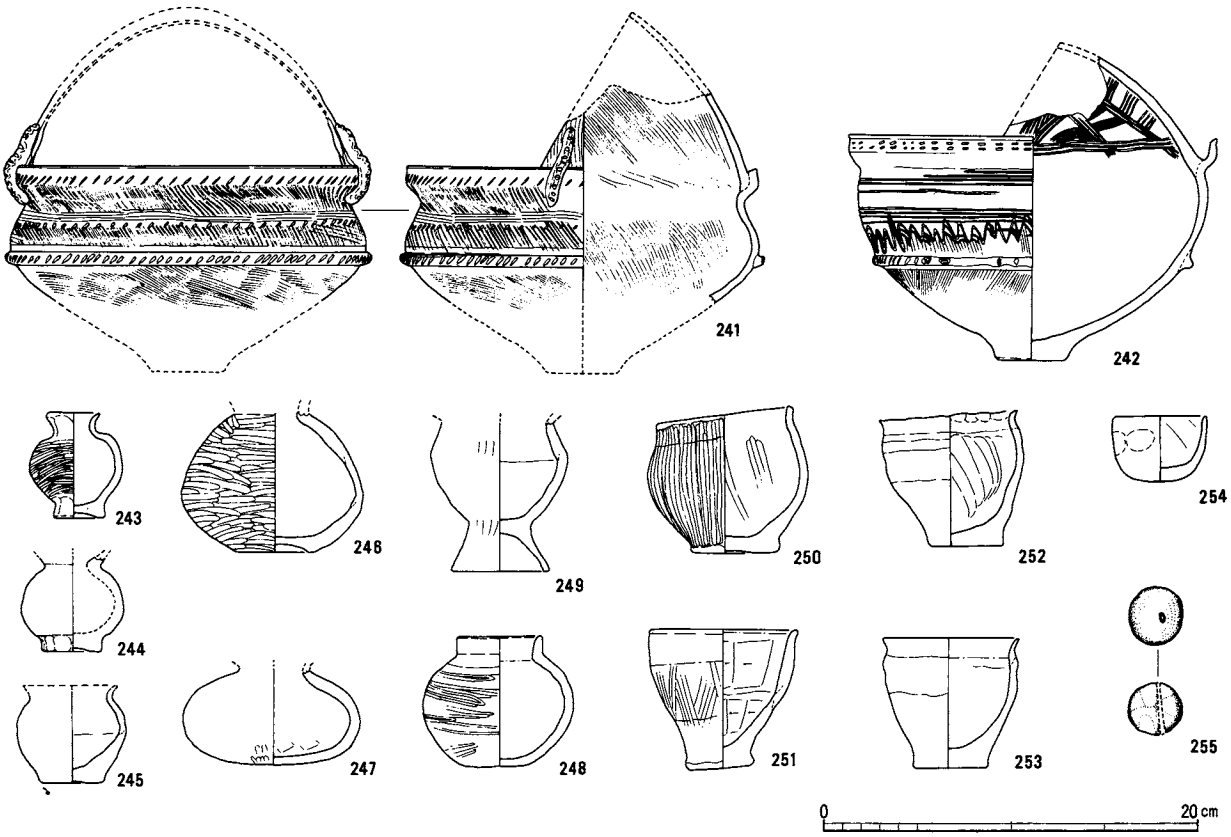
第69図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



第70図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



第71図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）



第72図　ＳＤ103出土遺物実測図（１：４）

（222）はハケメのみである。

甕Ｃ類に属するものに（209、210、215、216）がある。いずれも肩部や口縁部に櫛描横線・櫛歯押引列など装飾をもつ。

器台（223）は裾部を欠くが、透孔が３段につくられ、ヘラミガキ、円形浮文、ヘラ刻目、櫛描波状文、ハケメなどを組合わせて、大変丁寧につくられたものである。

鉢Ａ１に属するものは（226、227）がある。（227）は（226）に比べ、器高が高く、底部を意識したつくりである。

鉢Ａ２に属するものは（235、236）がある。いずれも底部は補強を意識したつくりである。

鉢Ａ４に属するものに（229、230）がある。いずれも内弯する体部をもつものであるが、（229）は底部がやや窪んだ平底になるのに対して、（230）は丸底に近い形をもつ。一応鉢の分類に入れたが、検討を要する。

鉢Ｂ１に属するものに（224、225）がある。（224）がケズリやミガキを多用するのに対して、（225）は磨耗が激しく、全容は不明であるがハケメを用いている。

鉢Ｂ３（231）は、体部の両端に把手を貼り付けたものである。

鉢Ｂ２（238）は、底部に焼成前の穿孔をもつ、甑型の鉢であるが、底部に６か所の穿孔をもつものである。

蓋（239、240）はいずれも編笠形を呈し、上方に開くつまみ部をもち、中央がやや窪むタイプである。（239）が外面ハケメであるのに対して、（240）はミガキを施すものである。

手焙り形土器（241、242）はいずれも全容を把握できるものではないが、（241）は鉢部から蔽部口縁部にかけて１対の半円形の刻み目付突帯をつけるのに対して、（242）はそれをもたず、蔽部にハケメではなく、櫛描横線を縦横にもつ。

ミニチュア土器は壺形のＡ類（243～248）、高杯形のＢ類（161、164）、甕形のＣ類（249～253）、鉢形のＥ類（254）がある。

（255）は焼成前の穿孔のある土玉である。

（福田哲也）

4．出土土器の観察

阿形遺跡出土の弥生土器のうち、実測図を掲載した255個体の観察結果を「阿形遺跡出土弥生土器観察表」に以下の要領でまとめた。

（1）土器番号

遺物の土器番号は、観察表・実測図・出土状況図・写真とも同一番号を付した。

（2）整理番号

実測における整理番号である。

（3）出土位置・遺構および取り上げ番号

出土位置とは4ｍごとに南北に数字を、東西にアルファベットで記した位置のことである。

（4）器種

大きく壺、高杯、甕、鉢、蓋、手焙形土器、ミニチュア土器、石に分け、さらに細分を行った。

（5）法量

口径、器高、底径の単位は㎝で、いずれも少数第1位まで表した。法量の測定については実測図をもとに行った。

（6）遺存度

95％以上の残りをもつものについては完形とした。また、口縁部から底部まで残っているものについては分数表記のみにした。「口縁など」と「口縁」との違いについては、「など」が無い場合はその部分しかないということである。

（7）調整技法の特徴等

調整についてはヘラミガキ、ヘラケズリをミガキ、ケズリとし、ハケメ、ナデなどはそのまま表記した。場合によって「タテ、ヨコ」などの表記を加えた。

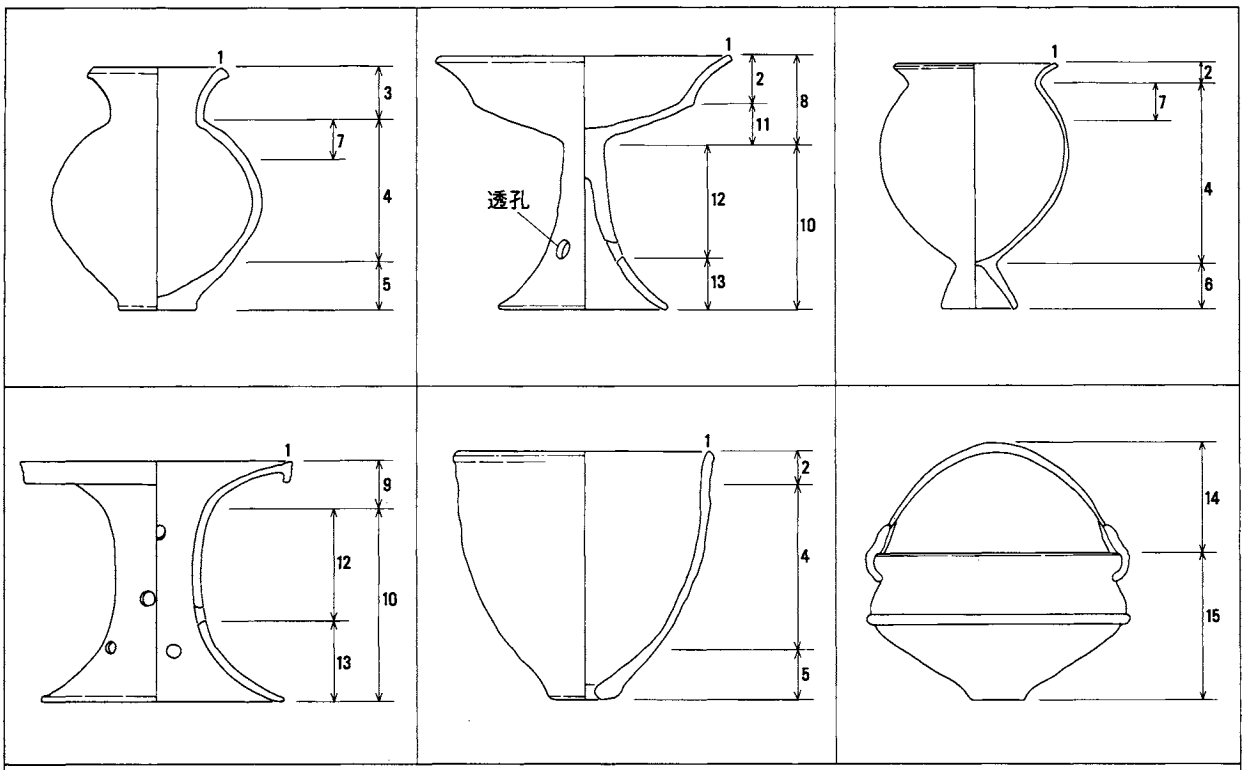
（8）色調、胎土、焼成

色調は標準土色帳を基本とした。胎土は砂粒の量や大きさにより、密、やや密、やや粗、粗の4種類に分けた。焼成は不良、やや不良、やや良、良に分けた。

（9）備考

上記以外の、黒斑・粘土ひも接合痕・炭化物の付着・煤付着など必要と思われる出来るかぎりの情報を入れた。

第17表　土器細部の名称



1．口縁端部　2．口縁部　3．口頸部　4．体部　5．底部　6．台部　7．肩部　8．杯部
9．受部　10．脚部　11．杯底部　12．柱状部　13．裾部　14．蔽部　15．鉢部

第18表　阿形遺跡弥生土器観察表（1）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
1	101－1	H20 SD21 下層	壺	口 38.8 — —	口縁 1／2	外面口頸部櫛描横線文、口縁端部櫛描波状文のち工具押圧による波状成形。内面口縁から口頸部ハケメのちミガキ	・明茶褐色 ・密 ・良	
2	104－1	H20 SD21 下層	壺	口 26.0 — —	口縁 1／3	外面口頸部櫛描横線文、口縁端部工具押圧による波状成形。	・灰褐色 ・密 ・良	
3	105－2	I20 SD21 下層	壺？	— — —	体部 1／10	外面体部に縦方向に4列以上貼付凸帯をもち、凸帯に櫛状工具で間隔をあけ押印する。	・赤褐色 ・密 ・良好	
4	115－1	H18 SD21 下層	壺	口 12.8 — —	口縁 2／3	外面体部から口頸部ハケメ、口頸部から口縁部櫛描波状文、口縁端部櫛歯刺突列。内面口頸部ハケメ、体部上半ハケメのちナデ。	・茶褐色 ・密 ・良	
5	46－2	G20 SD21	壺	— — 底 6.9	底部のみ	外面ミガキ、ケズリ。内面ナデ、イタナデ。	・灰褐色 ・粗 ・良	
6	105－1	I18 SD21 上層	壺 B2	口 7.5 高 19.5 底 4.0	完形	外面タテミガキ、口縁部から内面ナデ。	・黄褐色 ・密 ・良	口頸部に穿孔あり
7	104－2	H20 SD21	高杯 A1	口 25.0 — —	杯部 1／3	内外面ミガキ	・茶褐色 ・密 ・良	
8	103－1	H20 SD21	高杯 A1	— — —	脚部 1／2	外面タテミガキのち櫛描横線4段、四方透孔。内面ナデ、シボリ痕あり	・茶褐色 ・密 ・良	横線時計回り
9	47－2	F21 SD21	石	高 7.0 横 10.0	—	—	・深緑色	チャート
10	47－1	F21 包含層	甕	口 15.0 — —	口縁など 1／3	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部イタナデ。	・赤褐色 ・やや密 ・良	
11	13－1	E8 SD36	壺 A3	口 12.6 高 31.1 底 4.1	完形	外面体部タテハケ、口縁部ヨコナデ、底部ユビオサエ。内面体部ナデ。	・黄褐色 ・やや密 ・良	内面に粘土ひも接合痕
12	51－1	E9 SD36	壺 A3	口 12.2 高 21.2 底 5.5	1／2	外面体部タテハケ、底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部工具によるナデ。	・灰白色 ・やや密 ・良	
13	51－2	E9 SD36 下層	壺 A3？	— — 底 6.0	底部のみ	外面体部タテミガキ、底部ユビオサエ、ナデ。内面体部工具によるナデ、底部イタナデ。	・灰褐色 ・やや粗 ・良	
14	47－3	F10 SD36	ミニチュアB	— — 底 9.7	脚部 1／2	外面タテミガキのち櫛描横線3段のち四方透孔。内面工具によるナデ。	・橙 ・やや粗 ・良	
15	59－1	E5 SD36	高杯 A1	口 24.0 高 22.8 底 16.0	2／3	杯部内外面ミガキ、口縁部ヨコナデ、脚部外面タテミガキのち櫛描横線2段。三方透孔。脚部内面オサエ、ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	歪みあり
16	12－1	E7 SD36	壺 C	口 14.5 高 22.3 底 10.5	1／3	杯部内外面ミガキ、口縁部ヨコナデ、一部ヨコミガキ。脚部内面ユビオサエ、ヨコハケ。	・黄褐色 ・密 ・良	
17	4－1	E8 SD36	高杯 D	口 11.9 黄 15.7 底 10.9	3／4	外面杯部から脚部ハケメ。内面杯部ハケメ一部ナデ。脚部ナデ。3方透孔。	・淡褐色 ・密 ・良	外面に炭化物？付着

第19表　阿形遺跡弥生土器観察表（２）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
18	52－2	E 8 SD36	甕 A 1	口 12.2 高 15.1 底 5.3	4／5	外面底部ユビオサエ、ナデ、体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面口頸部オサエ、ナデ、体部から底部工具によるナデ。	・灰褐色 ・やや密 ・良	
19	52－1	F10 SD36	鉢 A 1	口 14.9 高 10.5 底 5.1	1／3	外面底部から体部オサエ、ナデ。口縁部ヨコナデ。内面体部工具によるナデ、底部オサエ。	・黒褐色 ・やや密 ・良	
20	58－3	E 7 SD36	鉢 B 2	口 18.0 高 17.7 底 5.0	1／2	外面底部オサエ、体部タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面体部工具によるナデ、底部ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	底部穿孔
21	4－2	H 6 SD84 下層	壷 A 2	口 11.4 高 21.0 底 6.1	4／5	外面底部ナデ、体部から口頸部にかけてタテミガキ、口頸部に竹管刺突列、口縁部ヨコナデ。内面口頸部から体部ナデ。体部下半から底部ハケメ。	・白褐色 ・やや密 ・良	体部に黒斑 粘土接合痕あり
22	9－2	H 5 SD84 下層	高杯 C 2	— — —	脚など 1／2	外面脚部ヨコミガキのちタテミガキ、透孔３ヶ所。杯部ハケメのちミガキ。内面脚部ナデ、ヨコナデ、杯部ミガキ。	・橙色 ・密 ・やや良	
23	39－2	H 5 SD84 下層	甕	口 18.0 — —	口縁など 2／3	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部ハケメ。	・淡褐色 ・やや粗 ・良	外面に煤付着 粘土接合痕あり
24	38－1	M 4 SD84	甕 A 1	口 16.4 高 19.3 底 4.5	4／5	外面底部ナデ、体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部ハケメのちナデ、底部イタナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
25	40－4	H 5 SD84 上層	甕	口 15.6 — —	口縁など 1／2	内外面体部タテハケ、口縁部ヨコナデ。	・淡橙色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
26	38－2	H 4 SD84	甕 B 1	口 15.6 高 19.7 底 7.2	完形	外面脚部ヨコナデ、ナデ、体部から口頸部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部ハケメのちナデ、底部ナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	歪みあり
27	34－1	H 4 SD84	甕 B 1	口 17.2 高 26.0 底 8.4	完形	内外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ、脚部ナデ、ヨコナデ。	・淡褐色 ・やや密 ・良	歪みあり
28	6－1	H 4 SD84 下層	甕 B 2	口 16.3 — —	口縁など 1／2	外面体部タテハケのち二枚貝による横線３段。二枚貝による刺突列２段、口縁部ヨコナデのち二枚貝による刺突列。内面タテハケ。	・赤褐色 ・密 ・良	外面に煤付着
29	1－1	H 4 SD84	鉢 A 3	口 12.4 高 10.0 底 5.0	完形	外面底部ナデ、体部下半ケズリ、体部ハケメ、口頸部と口縁部櫛描横線２段のち櫛歯刺突列、口縁端部ヨコナデ、内面体部ナデ、下半ハケメ。	・明褐色 ・密 ・やや不良	内面底部に黒斑 粘土接合痕あり
30	2－1	H 4 SD84	鉢 A 1	口 14.3 高 12.1 底 5.1	完形	外面底部ユビオサエ、ナデ、体部タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面体部タテナデ、底部板状工具によるナデ。	・赤褐色 ・やや粗 ・良	外面に煤付着
31	58－2	H 5 SD84 下層	高杯 E？	口 27.8 — —	口縁など 1／10	内外面体部タテミガキ、口縁部ヨコナデ。	・橙色 ・粗 ・良	
32	85－2	K 5 SD95 上層	壷 A 1	口 36.6 — —	口縁 1／7	外面口頸部上半ミガキ、口縁部ヨコナデのち横線２段のち竹管刺突列２段のち円形浮文２コ１組貼付。内面口縁部に刺突列２段。	・赤褐色 ・密 ・良	円形浮文にも竹管刺突あり
33	126－1	K 3 SD95 上層	壷 A 1	口 32.0 — —	口縁 1／12	外面口頸部ナデ、口縁部竹管状のものによる刺突列。内面タテミガキ。	・灰黄褐 ・やや密 ・良	
34	39－1	K 5 SD95 上層	壷 A 1	口 26.2 — —	口縁 1／3	外面頸部タテミガキ、口縁部ヨコナデのち竹管刺突列。内面口頸部タテ方向のナデ	・黄橙色 ・やや粗 ・良	

第20表　阿形遺跡弥生土器観察表（3）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
35	5－1	K4 SD95 上層	壷 A1	口 14.6 — —	口縁など 1／2	外面体部タテミガキ口頸部櫛描横線2段、刺突列、櫛描波状文、口縁端部刺突列、内面波状文、口頸部タテミガキ、ユビオサエ	・灰褐色 ・密 ・良	体部に黒斑
36	121－4	K2 SD95 上層	壷 A2	口 16.2 — —	口縁 1／4	外面口頸部タテハケ、口縁部ヨコナデ、内面口頸部ヨコハケ。	・黄褐色 ・やや密 ・良	
37	2－2	K5 SD95 上層	壷 A2	口 10.9 高 17.7 底 4.4	完形	外面底部ケズリ、ユビオサエ、体部ハケメのちタテミガキ、口頸部タテミガキ、口縁部ヨコナデ。内面口頸部タテミガキ、体部ナデ。	・明褐色 ・密 ・良	体部に黒斑
38	8－2	K5 SD95 上層	壷 A2	口 9.8 高 16.6 底 5.0	完形	外面底部ユビオサエ、ナデ、体部から口頸部タテミガキ、口縁部ヨコナデ。内面口頸部ヨコナデ、体部ナデ。	・黄褐色 ・密 ・良	体部に黒斑
39	11－1	K5 SD95	壷 A3	口 11.3 高 29.5 底 5.2	完形	外面底部ケズリ、ナデ、体部タテハケのちミガキ。口頸部櫛描横線、口頸部下半タテハケ。口縁部ヨコナデ。内面口頸部ヨコハケ。	・黄褐色 ・密 ・良	口頸部に粘土付着
40	111－3	K4 SD95 上層	壷 A5	口 12.0 — —	口縁 1／5	外面口頸部から口縁部ヨコナデのち口縁部下方に櫛歯刺突列。内面口頸部ナデ。	・褐色 ・やや密 ・良	
41	39－3	K5 SD95 上層	壷	— — 底 5.0	体部など 1／5	外面底部ナデ、体部下半ヨコミガキ、上半櫛描横線のち櫛描波状文。内面体部上半ナデ、下半イタナデ。	・淡橙色 ・やや密 ・良	底部に黒斑
42	58－1	K3 SD95 上層	壷 B1	口 9.0 高 11.8 底 4.4	2／3	外面底部ナデ、体部ハケメのちミガキ、口縁部ヨコナデ、内面体部上半ナデ、下半ハケメ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
43	62－6	K5 SD95 上層	壷 B1	口 8.8 高 12.8 底 4.8	4／5	外面底部ユビオサエ、ナデ、体部から口頸部タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面体部上半ナデ、下半ハケメ。	・橙色 ・粗 ・良	体部に焼成後外面から穿孔
44	85－3	K4 SD95 上層	壷 B3	— — —	体部のみ	不明	・黄灰色 ・密 ・良	磨耗激しい 粘土接合痕あり
45	161－4	K2 SD95	高杯 G	— — 底 12.0	脚 7／8	外面タテミガキのち櫛描横線6段と櫛歯刺突列を交互。内面ナデ一部ヘラケズリ、透孔4ヶ所。	・黄橙色 ・密 ・良	
46	160－2	K4 SD95	高杯 A1	— — 底 16.8	脚 2／3	外面タテミガキのち櫛描横線3段のち透孔3ヶ所。内面ナデ。	・黄橙色 ・やや密 ・良	
47	53－1	K4 SD95	高杯 A1	— — 底 17.5	脚 4／5	外面脚部タテミガキのち櫛描横線4段、透孔3ヶ所。内面ハケメのちイタナデ、一部ナデ。	・黄橙色 ・やや密 ・やや良	
48	41－2	K6 SD95	壷 B3	— — 底 15.2	脚 1／2	外面タテミガキのち櫛描横線5段、櫛歯刺突列4段を交互、のち透孔4ヶ所。内面ナデ、一部ハケメ。	・淡橙色 ・やや密 ・良	
49	161－1	K2 SD95	壷 B3	— — 底 11.4	脚 完	外面タテミガキ、内面ナデ、透孔4ヶ所。	・黄橙色 ・やや密 ・良	
50	40－3	K6 SD95	高杯 C1	— — 底 14.1	脚 1／2	外面下半タテハケ、上半櫛描横線のち透孔上部3ヶ所、下部1ヶ所、計4ヶ所。内面イタナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	
51	161－3	K4 SD95 上層	甕	口 15.0 — —	口縁 2／3	外面体部タテハケ、口縁部ヨコナデのち口縁下半櫛歯刺突列。	・にぶい褐色 ・やや密 ・良	

第21表　阿形遺跡弥生土器観察表（4）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
52	40－1	K5 SD95 上層	甕	口 17.0 — —	口縁など 2／3	外面体部タテハケ、口頸部櫛歯刺突列、口縁部ヨコナデ。内面口縁部から体部ヨコハケ。	・橙色 ・やや密 ・良	粘土接合痕あり
53	126－2	K2 SD95 上層	甕	口 19.4 — —	口縁 1／7	外面ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面口縁部から口頸部ヨコハケ、体部ナデ。	・灰褐色 ・やや粗 ・良	
54	111－5	K2 SD95	甕	口 16.2 — —	口縁など 1／4	外面体部ハケメ、口縁部ハケメのちヨコナデ。内面口頸部ハケメ、体部ナデ。	・にぶい橙 ・やや密 ・良	外面に煤付着
55	3－2	K3 SD95 上層	甕 A1	口 13.6 高 20.3 底 5.0	完形	外面底部ナデ、体部タタキのち一部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部タテ方向のナデ。	・赤褐色 ・密 ・良	体部に黒斑 外面に煤付着 煮こぼれ痕あり
56	41－3	K2 SD95 下層	甕 A1	口 15.0 高 20.0 底 4.6	1／2	外面底部ナデ、体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部ハケメのちユビオサエ、ナデ。	・灰褐色 ・密 ・良	外面に煤付着
57	46－3	K2 SD95	甕 A1	— — 底 4.8	体部など 1／5	外面底部ナデ、体部下半タテミガキ、中半工具によるナデ、上半ハケメ、口頸部ヨコナデ。内面体部タテハケ、底部ナデ。	・黒色 ・やや粗 ・良	
58	1－2	E6 SD95 下層	甕 B1	口 13.9 高 17.0 底 6.0	口縁のみ 1／2欠	外面脚部タテハケ、ナデ、体部下半ナデ、上半タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面体部タテナデ、一部ユビオサエ、脚部ユビオサエ、ナデ。	・淡褐色 ・密 ・良	外面に煤付着 体部に焼成後内面より穿孔
59	124－4	K3 SD95	甕	口 11.2 — —	口縁 1／6	外面体部ハケメのち櫛歯刺突列、口頸部櫛描横線、口縁部ヨコナデ、口縁部下半櫛歯刺突列。内面体部ナデ。	・赤褐色 ・やや密 ・良	
60	42－1	K2 SD95	甕	口 17.0 — —	口縁 1／4	外面口頸部ハケメ、口縁部ヨコナデ、下半にヘラ刺突列。	・橙色 ・やや密 ・良	
61	85－1	K3 SD95 上層	甕	口 20.6 — —	口縁 1／2	外面体部タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面口頸部ナデ、体部ハケメ。	・茶褐色 ・密 ・良	
62	127－1	K2 SD95 上層	甕	口 18.8 — —	口縁 1／3	外面体部タテハケ、口頸部から口縁部ヨコナデ、口縁端部ヘラ刺突列。	・淡黄色 ・やや密 ・やや軟	外面に煤付着
63	124－2	K2 SD95 上層	甕	口 18.8 — —	口縁 1／2	外面体部ハケメのち櫛歯刺突列、口縁部ヨコナデのち口縁下半櫛歯刺突列。内面口頸部から体部ハケメ。	・黄橙色 ・やや密 ・良	
64	121－3	K2 SD95 上層	甕	口 14.4 — —	口縁 1／4	外面口頸部タテハケ、口縁部ヨコナデのち2本の凹線。	・黄橙色 ・やや粗 ・良	
65	116－1	K3 SD95 上層	甕 B1	口 11.4 高 14.6 底 3.5	1／2	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデのち2本の横線、そののち口縁下半に円形の原体による押圧。内面ナデ。	・黄灰色 ・密 ・良	体部に黒斑
66	160－4	K5 SD95	器台	— — —	体部 完	外面タテミガキのち櫛描横線と櫛歯刺突列を交互。内面ナデ、オサエ。透孔は4ヶ所。	・橙色 ・密 ・良	
67	46－1	K2 SD95	器台	— — —	体部 完	外面タテミガキのち透孔4ヶ所。内面上半タテミガキ、下半ナデ。	・橙色 ・粗 ・良	
68	41－1	K2 SD95 下層	鉢 A1	口 13.1 高 9.5 底 4.8	2／3	外面脚から体部タテミガキ、口縁部ユビオサエのちヨコナデ。内面体部タテミガキ、脚部ナデ。	・淡橙色 ・やや粗 ・良	

第22表　阿形遺跡弥生土器観察表（5）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
69	111－2	K6 SD95	鉢 A3	口 14.8 — —	口縁など 1／6	外面体部タテハケ、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ。	・灰黄褐色 ・やや密 ・良	内面に朱
70	8－1	K3 SD95 上層	鉢 A2	口 14.2 高 14.4 底 3.7	1／5	外面底部ナデ体部ハケメ、一部タタキのちハケメ口縁部ヨコナデ。内面体部イタナデ、底部ナデ。	・淡灰色 ・やや密 ・やや良	底部に穿孔
71	96－4	K2 SD95 上層	鉢 B2	— — 底 2.5	底部のみ完	内外面体部タテミガキ、内外面底部ナデ。	・黄橙色 ・やや粗 ・良	底部に穿孔
72	9－1	K3 SD95	鉢 B2	— — 底 3.0	底部 2／3	内外面体部タテミガキ、内外面底部ユビオサエ、ナデ。	・黄灰色 ・密 ・やや不良	底部に穿孔 黒斑あり
73	1－4	K2 SD95	ミニチュア E	口 4.8 高 3.3 底 2.7	完形	外面底部ナデ、体部から口縁部ナデ。内面体部から底部ハケメ。	・赤褐色 ・密 ・良	粘土接合痕あり 歪みあり
74	2－3	K6 SD95	ミニチュア C	— — 底 2.4	下半のみ	外面脚部工具によるナデ、体部ナデ。内面脚部ナデ、体部ナデ。	・白褐色 ・やや粗 ・良	内面に朱
75	10－1	K6 SD95 上層	ミニチュア D	口 11.4 高 7.7 底 6.8	4／5	内外面杯部ミガキ、脚部外面ミガキ。内面ナデ、脚部にキザミあり全体で7方向。	・黄褐色 ・密 ・良	杯部と脚部にそれぞれ帯状の粘土を貼りつける
76	59－2	K5 SD95 上層	ミニチュア C	口 8.2 高 8.5 底 4.0	完形	外面底部ナデ、体部下半工具によるかきあげ、上半ケズリ、口縁部オサエ。内面ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	底部に木葉痕あり
77	62－3	K5 SD95 上層	ミニチュア C	口 8.5 高 8.3 底 4.1	完形	外面底部ナデ、体部オサエ、ナデ、口縁部オサエ。内面体部ナデ。	・橙色 ・粗 ・良	歪みあり
78	62－2	K5 SD95 上層	ミニチュア C	口 7.8 高 8.0 底 3.8	完形	外面底部ナデ、体部オサエ、ナデ、口縁部オサエ。内面頸部ヨコナデ、体部から底部ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
79	59－3	K5 SD95 上層	ミニチュア C	口 8.8 高 7.1 底 3.5	完形	外面底部から体部下半オサエ、ナデ、体部上半工具によるナデ、口縁部オサエ、ナデ、内面体部から底部ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	底部に木葉痕あり
80	1－3	K5 SD95 上層	ミニチュア C	口 7.8 高 8.2 底 3.4	完形	外面底部ナデ、体部ユビオサエのちナデ、口縁部ユビオサエ、口縁端部ヨコナデ。内面体部ナデ、底部イタナデ。	・暗褐色 ・やや粗 ・良	
81	62－5	K5 SD95 上層	ミニチュア C	口 7.6 高 6.5 底 4.3	完形	外面底部から体部ナデ、オサエ、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ。	・橙色 ・密 ・良	歪みあり 粘土接合痕あり
82	99－2	N2 SD103	壺 A1	口 23.2 — —	口縁のみ 1／5	外面頸部ハケメ、口縁部ヨコナデのち凹線3本、のち円形浮文。	・橙色 ・密 ・良	
83	49－1	N4 SD103	壺 A1	口 16.0 — —	口縁など 1／3	外面体部と口縁部円形浮文貼付のち櫛歯刺突列、体部下半はタテミガキ、頸部凸帯貼付のち櫛歯刺突列、内面口縁ヨコミガキ、頸部ユビオサエ。	・黄橙色 ・やや粗 ・良	円形浮文は2コ1単位3コずつ2段浮文にはそれぞれ竹管刺突
84	30－1	N2 SD103 No.114	壺 A1	口 14.9 — —	口縁など 2／5	外面体部ミガキ、体部上半櫛描波状文、櫛描横線、刺突列、頸部貼付凸帯のちヘラ刺突列、口縁部ミガキ、内面口縁櫛描羽状刺突列。	・明褐色 ・やや粗 ・良	
85	187－1	N5 SD103 No.99	壺 A1	口 18.2 — —	口縁など 1／3	外面体部タテミガキ、頸部櫛描横線3段、櫛描扇状文2段、口縁部下半タテミガキ、端部櫛歯刺突列、内面口縁部ヨコナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	内面磨耗激しい

第23表　阿形遺跡弥生土器観察表（6）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
86	167－2	N 4 S D103 下層	壷 A 1	口 18.2 — —	口縁など 2／3	外面体部下半ハケメのちミガキ、上半、櫛描横線4段のち櫛描波状文3段、頸部タテハケ、口縁部櫛歯羽状文、内面頸部ハケメ、体部ハケメのちナデ	・灰褐色 ・やや粗 ・良	内面体部ナデは工具による
87	91－3	N 3 S D103	壷 A 1	口 16.3 — —	口縁など 1／5	外面体部櫛描横線3段、櫛描波状文2段以上、頸部タテハケ、口縁部ヨコナデのち櫛歯刺突列、体部ケズリ	・橙色 ・やや密 ・良	文様は反時計回り
88	102－3	N 5 S D103 No.26	壷 A 1	口 16.9 — —	口縁 完	外面頸部タテミガキ、口縁部ヨコナデのち櫛歯羽状文、内面頸部ヨコミガキ	・黄褐色 ・密 ・良	
89	78－3	N 4 S D103 No.30	壷 A 1	口 17.7 — —	口縁 4／5	外面頸部ハケメ、口縁部ヨコナデのち端部に櫛歯刺突列。内面不明ハケ？	・淡橙色 ・密 ・やや不良	内面磨耗激しい
90	75－2	N 3 S D103	壷 A 1	口 22.1 — —	口縁 1／6	内外面口縁部タテミガキ、口縁端部ヨコナデ、のち櫛歯刺突列。	・橙色 ・やや密 ・良	口縁端部に粘土貼付痕あり
91	37－2	N 5 S D103 No.19	壷 A 1	口 13.0 — —	口縁 1／2	外面口頸部貼付凸帯のちヘラ刺突列、内外面口縁部ミガキ、口縁端部ヨコナデのちヘラ刻目。	・黄褐色 ・密 ・良	
92	98－1	N 5 S D103	壷 A 2	口 14.5 — —	口縁 3／4	外面体部不明、口縁部タテミガキ、口縁端部ヨコナデ、頸部から体部オサエ、ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	外面体部磨耗激しい。頸部しぼり痕あり
93	45－1	N 3 S D103	壷 A 2	口 19.8 — —	4／5	外面体部から口頸部ミガキ、口縁部ヨコナデ。内面口頸部ミガキ、体部ナデ、下半ハケメのちナデ。	・黄褐色 ・密 ・良	
94	89－1	N 2 S D103 No.82	壷 A 2	口 13.7 高 25.1 底 5.8	完形	外面底部ナデ、体部ミガキ、口頸部中央ナデ、上半タテミガキ、口縁部ヨコナデ。内面口頸部ハケメのちナデ、体部ナデ、底部ハケメ。	・黄灰色 ・密 ・良	
95	79－1	N 6 S D103	壷 A 2	口 11.8 高 16.9 底 4.5	1／3	外面底部ケズリのちナデ、指ナデ、体部下半タテミガキ、上半ハケメのち一部ミガキ、頸部ヨコナデ、口縁部ミガキ、端部ヨコナデ、内面体部上半ユビオサエ、ナデ、下半から底部ハケメ	・橙 ・やや密 ・良	体部に黒斑あり
96	133－1	M 5 S D103	壷 A 3	口 20.9 高 44.9 底 6.9	3／5	外面底部ケズリ、ナデ、体部から口縁部タテミガキ、端部ヨコナデ、内面口縁部から頸部ナデ、体部上半ナデ、下半から底部ヨコハケ。	・明褐色 ・やや密 ・良	
97	100－1	N 6 S D103	壷 A 3	口 15.0 高 27.6 底 4.5	3／5	外面底部ナデ、体部から口縁部ハケメのちタテミガキ、端部ヨコナデ、内面口縁部ハケメのちミガキ、頸部から体部ユビオサエ、ナデ、底部ハケメ。	・赤褐色 ・やや密 ・良	内面体部に粘土接合痕あり
98	48－1	N 6 S D103 No.7	壷 A 3	口 12.6 — —	口縁 完	外面体部上半ミガキ、頸部ヨコナデ、口縁部タテミガキ、端部ヨコナデ、内面口縁部ヨコミガキ、頸部から体部ユビオサエ、ナデ。	・黄橙色 ・密 ・良	外面口縁部ヘラミガキの前にハカメか？
99	48－2	N 6 S D103 No.5	壷 A 3	口 13.5 — —	口縁 1／5	外面頸部から口縁部ヘラミガキ、端部ヨコナデ、内面口縁部ナデ、頸部ユビオサエ、ナデ。	・橙 ・やや密 ・良	内面に粘土接合痕あり
100	54－4	N 4 S D103 No.41	壷 A 3	口 10.0 高 12.1 底 3.7	完形	外面底部から体部イタナデ、体部上半から頸部ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面ナデ、一部ハケメ。	・暗黄褐色 ・密 ・良	外面に煤付着
101	44－3	N 3 S D103	壷 A 3	口 14.8 — —	口縁など 1／3	外面体部から口縁部タテミガキ、端部ヨコナデのち横線1条、内面口縁部タテミガキ、頸部ユビオサエ、ナデ、体部ヨコハケ。	・黄褐色 ・密 ・良	ヘラ記号「キ」あり
102	67－1	N 2 S D103	壷 A 3	口 10.9 高 26.8 底 5.6	4／5	外面底部ケズリ、ナデ、体部から口縁部タテミガキ、端部ヨコナデ、内面口縁部タテミガキ、体部上半ナデ、ユビオサエ、下半ハケメ。	・黄橙色 ・やや密 ・良	ヘラ記号「キ」あり

第24表　阿形遺跡弥生土器観察表（7）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
103	137－1	N5 SD103	壷 A3	口 14.0 高 28.0 底 6.1	完形	外面ハケメのちミガキ、口縁部ヨコナデ。内面体部から底部ヨコハケ。	・橙色 ・密 ・良	体部に穿孔あり
104	69－1	N3 SD103 No62	壷 A3	口 12.1 高 19.6 底 5.9	2／3	外面体部ハケメのちミガキ、口縁部ハケメ、端部ヨコナデ。内面体部上半ナデ、下半ハケメ。	・橙色 ・粗 ・良	体部に黒斑あり
105	153－2	N2 SD103 No117	壷 A3	口 11.1 高 17.0 底 5.2	完形	外面タテミガキ、口縁部ヨコナデ。内面体部から底部ナデ、イタナデ。	・黄橙色 ・密 ・良	粘土接合痕あり 口縁部にヘラ記号?あり
106	31－1	N3 SD103	壷 A3	— — 底 5.4	体部など 1／2	外面体部ハケメ、一部のちケズリ。内面口頸部ハケメのちユビオサエ、体部ハケメのちナデ、イタナデ。	・黄灰色 ・密 ・良	
107	135－1	N3 SD103	壷 A3	口 11.7 高 24.3 底 5.0	2／3	外面体部ハケメのちミガキ、口縁部ハケメ、端部ヨコナデ、外面底部ヘラケズリ。内面口縁部から底部までハケメ。	・黄橙色 ・粗 ・良	
108	90－1	N3 SD103	壷 A3	口 13.2 高 28.0 底 5.5	完形	外面体部ハケメのちナデ、口縁部ミガキ端部ヨコナデ。内面口縁部ミガキ体部ハケメのち一部ミガキ。	・黄褐色 ・密 ・良	粘土接合痕あり
109	88－1	N4 SD103 下層	壷 A3	口 12.9 高 25.8 底 4.0	完形	外面底部から口縁部ミガキ、一部ハケメのちミガキ、口縁端部ヨコナデ。内面口縁部ハケメのちミガキ、体部上半ナデ、下半ハケメ。	・黄褐色 ・密 ・良	粘土接合痕あり
110	86－1	N2 SD103	壷 A1	— — —	体部 1／4	外面櫛描横線、同波状文、竹管の刺突列。内面ハケメ。	・乳褐色 ・密 ・良	パレススタイル壷 外面に朱
111	141－1	N3 SD103 下層	壷	— — 底 5.8	体部など 4／5	外面タテハケ、口頸部櫛歯刺突列。内面ナデ、一部工具によるナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	粘土接合痕あり
112	188－1	N5 SD103 No20	壷 A4	口 14.3 — —	体部など 4／5	外面底部ハケメ、体部から口頸部ミガキ、口縁部ヨコナデ、内面体部ハケメ	・灰白色 ・やや粗 ・良	粘土接合痕あり
113	143－3	N3 SD103 No87	壷 A4	口 7.9 高 13.2 底 4.6	完形	口縁部ヨコナデ。内面体部板状工具によるナデ。	・暗褐色 ・密 ・良	口縁部に焼成前穿孔両端に2つずつ4つ、体部に焼成後穿孔1ヶ所
114	191－3	N4 SD103	壷 A4	口 10.9 高 16.5 底 5.8	4／5	外面体部ハケメのちミガキ、口縁部ヨコナデ、外面底部ケズリのちナデ。内面ヨコハケ。	・橙色 ・やや密 ・良	
115	154－1	N2 SD103	壷 B1	口 11.2 高 16.9 底 4.2	2／3	外面体部ヨコミガキ、口頸部タテハケのちヨコナデ、口縁部タテハケのちヨコミガキ、端部ヨコナデ。内面口縁部ヨコミガキ、体部ナデ、ヨコハケ。	・橙色 ・密 ・良	
116	149－2	N3 SD103	壷 B1	口 12.3 高 16.5 底 4.9	1／4	外面体部タテミガキ、口頸部ハケメ、口縁部タテミガキ、端部ヨコナデ。内面口縁部タテミガキ、口頸部ユビオサエ、底部ハケメのちナデ。	・灰褐色 ・粗 ・良	
117	54－3	N4 SD103	壷 B2	口 9.0 高 10.0 底 2.5	完形	外面ハケメのちミガキ、口縁端部ヨコナデ、内面口縁部から口頸部タテミガキ。	・明褐色 ・密 ・良	
118	138－1	N5 SD103 No22	壷 B2	口 7.6 高 10.3 底 3.6	完形	外面タテミガキ、口縁端部ヨコナデ。内面口縁部から口頸部タテミガキ、体部ナデ、オサエ。	・橙色 ・やや密 ・良	
119	53－4	N4 SD103 下層	壷 B1	口 7.3 高 9.9 底 3.5	4／5	外面体部下半タテミガキ、上半から口縁部ハケメ、口頸部ハケメのちヨコナデ。	・黄橙色 ・やや密 ・良	粘土接合痕あり

第25表　阿形遺跡弥生土器観察表（8）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
120	74－2	N4 SD103	壷 B1	口 8.1 高 12.9 底 4.5	完形	外面底部オサエ、体部から口縁部タテミガキ、端部ヨコナデ。内面口縁部から体部上半ユビオサエ、ナデ、下半工具によるナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
121	56－1	N4 SD103	壷 B1	口 10.4 高 13.3 底 4.0	完形	外面ミガキ、口縁端部ヨコナデ、内面口縁部ヨコミガキ、体部下半ハケメ。	・明褐色 ・やや密 ・良	体部に黒斑あり
122	74－3	N2 SD103 下層	壷 B1	口 8.5 高 12.3 底 3.7	完形	外面体部から口縁部ミガキ、一部ハケメのちミガキ、端部ヨコナデ。内面口縁部ミガキ、体部ナデ、ユビオサエ。	・橙色 ・やや密 ・良	体部に黒斑あり
123	152－2	N5 SD103	壷 B3	— — 底 5.8	脚など 1/2	外面脚部タテミガミのち櫛描横線4本透孔3ヶ所、体部タテミガキのちケズリ。内面ナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	
124	53－2	N3 SD103 No.105	壷 B3	口 11.2 — —	口縁など 4／5	外面脚部櫛描横線、透孔3ヶ所、体部から口縁部タテミガキ、口頸部ヨコナデ。内面口縁部ヨコミガキ、体部工具によるナデ。	・黄橙色 ・やや密 ・良	体部内面に工具痕あり
125	144－1	N4 SD103 No.103	壷 B3	口 12.1 高 23.2 底 12.0	完形	外面タテミガキ、脚部ミガキのち櫛描横線、櫛歯刺突列、櫛歯羽状文、透孔3ヶ所。内面口縁部ヨコミガキ、体部下半ハケメ。	・黄褐色 ・密 ・良	
126	166－1	N3 SD103 No.64	壷 B3	口 9.8 高 19.4 底 8.7	1／2	外面タテミガキ、脚部に透孔3ヶ所。内面ナデ、ヨコナデ。	・黄橙色 ・密 ・良	体部に黒斑あり
127	74－4	N3 SD103 下層	壷 B3	口 7.7 高 13.3 底 8.0	完形	外面ハケメのちタテミガキ、口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	・橙色 ・やや密 ・良	
128	71－1	N4 SD103	壷 B3	— — 底 13.2	脚完	外面脚部タテミガキのち櫛描横線3段、のち櫛歯刺突列2段、のち透孔3ヶ所。内面ナデ。	・橙色 ・密 ・良	
129	140－1	N4 SD103	壷 B3	— — 底 11.3	脚完	外面脚部タテミガキ。内面杯部ナデ脚部ナデ、しぼり痕跡あり	・橙色 ・やや密 ・良	
130	167－1	N2 SD103	高杯 A1	口 22.6 高 17.9 底 13.6	4／5	外面タテミガキ、脚部のみミガキのち櫛描横線のち透孔3ヶ所。内面脚部ハケメ。	・淡黄色 ・やや粗 ・良	
131	142－1	N4 SD103 下層	高杯 A1	口 24.8 高 22.5 底 15.8	2／3	外面ヨコミガキのちタテミガキ、脚部のみミガキのち櫛描横線4段のち透孔3ヶ所。杯部内面ミガキ。	・黄褐色 ・密 ・良	
132	153－3	N2 SD103	高杯 A1	— — —	脚のみ 1／2	外面タテミガキのち櫛描横線4段の透孔3ヶ所。内面ナデ、しぼり痕あり	・橙色 ・密 ・良	
133	57－3	N3 SD103	高杯 A1	— — —	脚のみ 1／2	外面タテミガキのち櫛描横線5段、のち透孔3ヶ所。内面ナデ、一部ハケメ	・橙色 ・やや密 ・良	黒斑あり
134	146－1	N4 SD103	高杯 A1	口 27.6 高 22.0 底 15.2	完形	外面脚部ハケメのちタテミガキのち櫛描横線3段のち、透孔3ヶ所、杯部タテミガキ。内面杯部ハケメのちミガキ、脚部ハケメ一部ナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	
135	120－1	N6 SD103	高杯 A1	口 25.8 高 22.0 底 14.2	2／3	外面脚部タテミガキのち櫛描横線4段、のち透孔3ヶ所、杯部ハケメのちミガキ。内面杯部ミガキ、脚部ナデ。脚部にしぼり痕あり。	・茶褐色 ・密 ・良	
136	169－1	N6 SD103	高杯 A1	口 26.3 — —	杯部など 1／4	外面脚部ハケメのちタテミガキのち櫛描横線4段、杯部タテミガキ。内面杯部ミガキ、脚部ハケメ、脚部にしぼり痕あり。	・黄橙色 ・やや密 ・良	

第26表　阿形遺跡弥生土器観察表（9）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
137	81－1	N 6 S D103 No.94	高杯 A 1	— — 底 16.6	脚部など 1／2	外面脚部タテミガキのち櫛描横線4段のち透孔4ヶ所、杯部内外面ミガキ。内面脚部イタナデ、ナデ、一部ハケメ。	・黄褐色 ・密 ・良	脚部に穿孔しようとした円筒状の痕跡あり。
138	24－1	N 4 S D103	高杯 A 1	口 28.4 — —	杯部のみ 完	外面杯部ミガキ。内面ミガキ一部のちナデ。	・黄橙色 ・やや密 ・やや不良	
139	99－1	N 2 S D103	高杯 A 1	口 24.8 — —	杯部のみ 1／3	杯部内外面ミガキ	・黄橙色 ・やや密 ・良	
140	66－1	N 3 S D103 No.86	高杯 A 1	口 28.5 — —	杯部など 4／5	外面脚部ハケメのちタテミガキのち櫛描横線3段のち透孔3ヶ所。杯部内外面ミガキ、内面脚部にしぼり痕あり。	・橙色 ・やや粗 ・良	
141	118－1	N 4 S D103 下層	高杯 A 1	— — 底 20.2	脚部のみ 完	外面脚部タテミガキのち櫛描横線5段のち櫛歯刺突列4段、透孔3ヶ所。内面脚部ハケメ一部ナデ。	・黄橙色 ・やや密 ・良	
142	36－1	N 4 S D103	高杯 A 2	— — 底 14.8	脚部など 1／2	外面脚部タテミガキのち透孔3ヶ所。杯部内外面ミガキ内面脚部ナデ、しぼり痕跡あり。	・茶褐色 ・密 ・良	
143	172－1	N 4 S D103	高杯 A 2	口 18.6 高 16.5 底 11.5	3／4	外面脚部タテミガキのち透孔3ヶ所、内外面杯部ミガキ、内面脚部ナデ一部ハケメ。	・橙色 ・やや密 ・良	
144	73－1	N 4 S D103	高杯 B 2	口 18.2 高 16.9 底 12.4	完形	外面脚部タテミガキのち透孔3ヶ所、杯部内外面ミガキ、内面脚部ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
145	55－1	N 4 S D103 No.102	高杯 B 1	口 26.2 — —	杯部など 2／3	外面脚部タテミガキのち櫛描横線、のち透孔4ヶ所。杯部内外面ミガキ。脚部内面ナデ、しぼり痕跡あり。	・黄灰色 ・密 ・良	透孔は3個は3方に同じ高さに、1個はその上部に
146	87－2	N 3 S D103	高杯 C	口 27.8 — —	杯部のみ 1／3	外面杯部ハケメのちミガキ。内面ミガキ。	・茶褐色 ・密 ・良	
147	77－1	N 4 S D103 No.68	高杯 C 1	— — 底 16.5	脚部など 4／5	外面脚部タテミガキのち櫛描横線、のち透孔3ヶ所2段。杯部ハケメのちミガキ。内面脚部ハケメ、杯部ミガキ。	・橙色 ・やや密 ・良	
148	158－1	N 4 S D103 No.44	高杯 C 2	口 20.2 高 20.4 底 12.6	3／4	外面脚部ハケメのちミガキのち透孔3ヶ所。杯部内外面ミガキ、内面脚部ヨコハケ。	・橙色 ・密 ・良	
149	147－1	N 4 S D103 No.50	高杯 C 1	口 22.7 高 23.0 底 13.2	4／5	外面脚部ハケメのちタテミガキのち櫛描横線4段のち透孔3ヶ所。内外面杯部ミガキ。内面脚部ナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	口縁部内面に煤付着
150	93－2	N 5 S D103 No.8	高杯 C 1	— — 底 12.3	脚部のみ 完形	外面脚部タテミガキのち櫛描横線、のち透孔3ヶ所。内面杯部ナデ、イタナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
151	43－2	N 3 S D103 No.78	高杯 C 1	口 24.4 高 23.3 底 13.4	2／3	外面脚部タテミガキのち櫛描横線2段、のち透孔3ヶ所を2段。杯部内外面ハケメのちミガキ。内面脚部ハケメ。	・橙色 ・やや密 ・良	透孔3ヶ所2段
152	22－1	N 3 S D103 No.53	高杯 C 2 ?	口 21.4 高 21.5 底 14.2	2／3	外面脚部ミガキのち透孔3ヶ所、杯部内外面ミガキ一部ヨコナデ、ナデ。内面脚部ハケメ、一部ナデ。	・黄灰色 ・やや粗 ・不良	透孔の位置は3つのうち1つだけ低い位置にある
153	95－3	N 4 S D103 No.51	高杯 C 2	口 21.0 高 18.9 底 10.2	2／3	外面脚部ハケメのちタテミガキのち透孔3ヶ所。内外面杯部ハケメのちミガキ。内面脚部ナデ、一部ハケメ。	・橙色 ・やや密 ・良	

第27表　阿形遺跡弥生土器観察表（10）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
154	35－1	N 3 S D103 No.65	高杯 C 2	口 14.3 高 13.0 底 8.0	完形	外面脚部タテミガキ、内外面杯部ミガキ。内面脚部ハケメ、一部ナデ。	・灰褐色 ・密 ・良	杯部外面に煤付着
155	184－1	N 2 S D103 No.116	高杯 C 2	口 17.7 — —	杯部のみ完	杯部内外面ミガキ。	・黄橙色 ・密 ・良	
156	172－3	N 3 S D103	高杯 E	— — —	杯部など 1／3	外面脚部から杯部までハケメ、内面杯部ハケメ、脚部ナデ。	・橙色 ・やや密 ・やや良	杯部に貼り付け凸帯あり
157	128－2	N 2 S D103	高杯 E	口 10.8 — —	杯部のみ 1／4	内外面ミガキ。	・茶褐色 ・密 ・良	
158	16－1	N 2 S D103 No.84	高杯 E 1	口 23.2 高 22.7 底 12.9	2／3	外面脚部タテミガキのち櫛描横線4段、櫛歯刺突列4段、のち透孔3ヶ所。杯部タテミガキ、内面杯部ナデ、一部ミガキ。	・赤褐色 ・密 ・良	
159	183－2	N 3 S D103	高杯 E 1	口 17.4 — —	杯部など 1／3	外面脚部櫛描横線2段以上のち櫛歯刺突列。杯部内外面ミガキ、内面脚部ナデ一部ハケメ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
160	192－2	N 4 S D103 No.35	高杯 E 2	口 17.3 — —	口縁など 3／4	外面脚部タテミガキ、杯部内外面ともハケメのちミガキ、内面脚部ナデ、ユビオサエ。	・橙色 ・やや密 ・良	
161	62－4	N 5 S D103 No.98	ミニチュア B	口 10.3 高 7.8 底 6.7	4／5	外面脚部タテミガキのち櫛描横線2段のち透孔3ヶ所。内外面杯部ミガキ、内面脚部ナデ、しぼり痕跡あり。	・橙色 ・やや密 ・良	透孔は外から内へ
162	191－2	N 3 S D103 No.61	高杯 E 1	口 16.3 高 14.3 底 12.5	4／5	外面脚部タテミガキのち櫛描横線、のち透孔3ヶ所。内外面杯部ハケメのちミガキ脚部内面ハケメのちナデ、しぼり痕跡あり	・橙色 ・やや粗 ・良	
163	168－3	N 6 S D103	高杯 E 2	口 15.7 高 11.0 底 11.6	2／3	外面ハケメのちミガキ、内面杯部ミガキ脚部ナデ、一部ハケメ、しぼり痕あり。	・橙色 ・やや密 ・良	杯部に煤付着
164	129－3	N 2 S D103	ミニチュア B	— — 底 8.2	脚部のみ 1／2	外面脚部タテミガキのち透孔3ヶ所。内面杯部ミガキ、脚部ナデ、ユビオサエ。	・茶褐色 ・密 ・良	
165	177－2	N 5 S D103 No.95	高杯 C 1	— — 底 13.7	脚部のみ 2／3	外面脚部タテミガキのち櫛描横線、のち透孔3ヶ所。内面杯部不明、脚部工具によるナデ、一部ハケメ。	・橙色 ・密 ・良	磨耗激しい
166	178－3	N 2 S D103 No.83	高杯 E 1	口 12.6 高 10.4 底 9.9	完形	外面脚部ハケメのちナデ、杯部ハケメのちミガキ。内面杯部ミガキ、脚部ハケメのちナデ。	・橙色 ・密 ・良	
167	129－1	N 2 S D103	高杯 F	口 22.0 — —	口縁など 1／3	外面体部ハケメのちミガキ、口縁部ヨコナデのち口唇部ヘラ刺突列。内面ミガキ。	・黄褐色 ・密 ・良	
168	114－4	N 3 S D103	高杯 F	口 8.8 — —	口縁など 1／3	外面体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面ナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	
169	170－3	N 4 S D103	甕	口 34.1 — —	口縁のみ 1／7	外面体部から頸部ハケメ、口縁部ヨコナデのち端部に櫛歯刺突列。内面ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
170	164－1	N 4 S D103 No.25	甕 B 1	口 26.9 — —	2／5	内外面ハケメ。	・灰褐色 ・やや密 ・良	粘土接合痕あり

第28表　阿形遺跡弥生土器観察表（11）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
171	165－1	N 4 S D103	甕 B 1	口 19.0 — —	1／2	内外面ハケメ	・橙色 ・やや密 ・良	
172	132－1	N 2 S D103 下層	甕 B 1	口 18.2 高 26.7 底 7.6	2／3	内外面脚部ナデ、外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面体部ハケメのちナデ。	・茶褐色 ・密 ・良	体部に煤付着
173	33－1	N 3 S D103	甕 B 1	— — 底 9.0	体部など 4／5	外面脚部ナデ、体部ハケメ、内面ハケメのちナデ、脚部板状工具によるオサエ。	・赤褐色 ・密 ・良	体部に黒斑あり
174	175－2	N 4 S D103 下層	甕 A 1	口 14.5 高 20.5 底 4.6	完形	内外面ハケメ。口縁部ヨコナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	内面に液状の痕跡 外面に煤付着
175	156－1	N 4 S D103	甕 A 1	口 17.8 高 26.6 底 4.7	完形	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部上半ハケメ、下半ナデ。	・茶褐色 ・密 ・良	外面に煤付着
176	64－1	N 4 S D103	甕 B 1	口 17.6 — —	体部など 4／5	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部ハケメ、下半工具によるナデ。	・淡黄色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
177	148－3	N 3 S D103 No.73	甕 B 1	— — 底 6.5	体部など 1／2	外面脚部ナデ、体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部上半ナデ、下半ハケメ、脚部ナデ。	・黄橙色 ・密 ・良	粘土接合痕あり
178	152－1	N 3 S D103 No.63	甕 B 1	口 17.2 高 23.1 底 7.3	3／5	外面体部ハケメ、脚部不明、口縁部ヨコナデ。内面体部ハケメ、のち一部ナデ、脚部ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
179	14－1	N 2 S D103	甕 B 1	口 17.3 高 26.8 底 8.0	4／5	外面脚部ハケメ、体部から口縁部ハケメのち櫛描横線、櫛歯刺突列。口縁端部櫛歯刺突列、内面体部ハケメ、一部ナデ。	・黄灰色 ・密 ・良	粘土接合痕あり 外面に煤付着
180	61－1	N 4 S D103 No.32	甕	口 15.5 高 21.1 底 6.5	完形	外面底部ユビナデ、体部から口縁部までハケメのちナデ。内面体部上半ハケメ、下半工具によるナデ。底部に粘土を足した跡。	・黄橙色 ・やや密 ・良	内面に炭化物？付着、粘土接合痕、煤付着痕あり
181	29－3	N 3 S D103	甕 B 1	口 12.3 高 15.5 底 5.4	3／5	外面脚部ナデ、体部ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面体部から底部ハケメ、脚部内面ナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	粘土接合痕あり 外面に煤付着
182	190－1	N 4 S D103	甕 B 1	口 14.4 — —	体部など 1／3	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面体部ヘラ状工具によるナデ。	・橙色 ・やや密 ・不良	粘土接合痕あり
183	92－1	N 4 S D103 No.42	甕 B 1	口 15.5 高 17.9 底 8.2	完形	外面体部から頸部ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面体部ハケメのち一部ナデ。	・橙色 ・やや密 ・やや不良	粘土接合痕あり 体部に黒斑
184	43－1	N 3 S D103	甕 B 1	口 11.9 高 15.4 底 6.1	4／5	外面体部ハケメのち、頸部に櫛歯刺突列、口縁部ヨコナデ、内面体部ハケメ。	・黄橙色 ・やや密 ・良	体部に焼成後穿孔 体部に煤付着
185	182－1	N 3 S D103 下層	甕 B 1	口 12.4 高 17.0 底 5.8	完形	外面体部ハケメ、内面口縁部ヨコハケ、体部上半ユビオサエ、下半ハケメ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
186	138－3	N 5 S D103 No.9	甕 B 1	口 11.8 高 18.0 底 6.2	体部など 4／5	外面体部ハケメ、内面口縁部ヨコハケ、体部上半ナデ、下半ハケメ。	・橙色 ・やや密 ・良	
187	125－2	N 2 S D103	甕	口 11.6 高 16.3 底 6.4	1／2	外面体部下半ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、ナデ。	・灰白色 ・やや密 ・良	粘土接合痕あり

第29表　阿形遺跡弥生土器観察表（12）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
188	163－1	N 4 S D103 No31	甕	口 13.4 高 18.7 底 6.5	1／2	外面脚部ユビオサエ、体部ハケメ、内面口縁部ハケメ	・橙色 ・やや密 ・良	粘土接合痕あり 黒斑あり
189	155－3	N 3 S D103	甕 A 1	口 17.2 高 19.2 底 4.2	1／2	外面体部下半ハケメのちヘラケズリ、のち上半ミガキ、口縁部ヨコナデ、内面体部下半ハケメのちナデ	・灰褐色 ・やや粗 ・良	
190	148－2	N 3 S D103 No58	甕 B 1	口 14.3 高 18.8 底 4.8	口縁など 3／5	内外面体部から口縁部ハケメのちナデ	・灰褐色 ・やや密 ・良	粘土接合痕あり
191	153－1	N 3 S D103 No104	甕 B 1	口 11.6 高 16.0 底 4.5	完形	外面体部ハケメのち下半タテケズリ、口縁部ヨコナデ	・黄橙色 ・密 ・良	体部に煤付着
192	139－2	N 2 S D103 No91	甕 B 1	口 15.0 高 18.7 底 6.6	3／5	外面底部ナデ、ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面体部ハケメのちイタナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
193	156－2	N 4 S D103	甕 B 1	口 13.3 高 16.0 底 7.4	完形	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ	・茶褐色 ・密 ・良	体部に黒斑あり 粘土接合痕あり
194	168－2	N 6 S D103	甕 B 1	口 15.0 高 14.6 底 5.7	4／5	外面体部ハケメ、口縁部ハケメのちナデ、内面体部ハケメ	・黄橙色 ・やや密 ・良	底部に粘土接合痕あり
195	149－1	N 3 S D103	甕 B 1	口 15.4 高 17.8 底 6.8	3／4	外面底部から体部ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面体部ハケメ、	・橙色 ・やや粗 ・良	
196	37－3	N 4 S D103 No49	甕 B 1	口 11.4 高 12.9 底 5.4	2／3	体部内外面ハケメ、口縁部ヨコナデ	・赤褐色 ・密 ・良	粘土接合痕あり
197	175－1	N 4 S D103	甕 B 1	口 14.2 — —	体部など 4／5	外面体部ハケメ、内面口縁部から体部ハケメ	・橙色 ・やや密 ・良	
198	80－2	N 4 S D103 No34	甕 B 1	口 14.4 高 15.6 底 7.2	完形	外面体部ハケメ、内外面口縁部ハケメ	・橙色 ・やや密 ・良	内面に炭化物痕跡あり 外面に煤付着
199	151－1	N 3 S D103	甕 A 2	口 15.2 高 21.9 底 3.2	4／5	外面体部下半ハケメ、上半櫛描波状文、櫛歯刺突列、頸部櫛描横線、口縁部ヨコナデ、のち櫛歯刺突列、内面ハケメのちナデ	・黄橙色 ・やや粗 ・良	外面に煤付着
200	84－1	N 3 S D103	甕 A 2	口 13.7 高 22.5 底	完形	外面体部ハケメのち櫛描横線２段、櫛歯刺突列、口縁部ヨコナデのち竹管刺突列、内面ナデ一部ハケメ	・茶褐色 ・密 ・良	外面に煤付着
201	91－1	N 2 S D103	甕	口 13.8 — —	口縁のみ 1／3	外面体部ハケメのちヘラ刺突列、口縁部ヨコナデのち櫛歯刺突列、内面体部ハケメ	・黄橙色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
202	76－2	N 3 S D103	甕	口 15.4 — —	口縁のみ 1／3	外面体部から口縁部ハケメのち櫛歯刺突列２段、櫛描横線、内面頸部ハケメのちナデ	・黄灰色 ・やや粗 ・良	
203	91－2	N 3 S D103	甕	口 15.5 — —	口縁など 2／3	外面頸部から口縁部ヨコナデのちヘラ刺突列２段、内面頸部から体部イタナデ	・橙色 ・やや粗 ・良	粘土接合痕あり
204	32－1	N 4 S D103 下層	甕	口 16.6	口縁部など 1／2	外面体部ハケメのち櫛歯刺突列、口縁部ヨコナデのち櫛歯刺突列、内面頸部ハケメのちユビオサエ、体部ハケメのちナデ	・黄褐色 ・密 ・良	外面に煤付着

第30表　阿形遺跡弥生土器観察表（13）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
205	140－2	N 2 S D103 No.112	甕 B 2	口 16.8 高 26.6 底 8.4	3／5	外面頸部から脚部ハケメのち貝殻横線、貝殻刺突列、口縁部ヨコナデのち櫛歯刺突列。内面体部ハケメ	・黄橙色 ・やや粗 ・良	外面に煤付着
206	155－2	N 2 S D103	甕	口 16.8 — —	口縁など 1／3	外面体部から口縁部ハケメのち櫛歯刺突列2段、櫛描横線2段。内面ハケメのちナデ。	・淡黄色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
207	162－1	N 3 S D103 No.56	甕	口 18.3 — —	口縁など 4／5	外面頸部から体部タテハケのち頸部ヨコハケ、のち櫛歯刺突列。口縁部ヨコナデのち櫛歯押引列。内面体部ハケメのち一部ナデ	・黄橙色 ・やや密 ・やや不良	外面に煤付着
208	29－1	N 3 S D103	甕 B 2	口 16.0 — —	口縁など 2／5	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデのち櫛歯刺突列、内面体部ハケメ一部工具によるナデ。	・灰褐色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
209	139－1	N 2 S D103 No.79	甕 C	— — —	体部など 3／5	外面脚部から体部タテハケのち体部上半ヨコハケ2段。内面ハケメ。	・黄橙色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
210	179－1	N 2 S D103 No.90	甕 C	口 14.4 高 20.8 底 6.9	2／3	外面タテハケのち頸部ヨコハケのち櫛歯刺突列。内面ハケメ。	・灰白色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
211	78－4	N 4 S D103	甕	口 10.3 — —	口縁のみ 1／4	外面口縁部ヨコナデのち口唇部ヘラ刺突列。内面ナデ。	・赤褐色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
212	60－1	N 4 S D103 下層	甕	口 17.6 — —	口縁のみ 3／5	外面頸部から口縁部ハケメのち口唇部ヘラ刺突列、内面口縁部ハケメ。	・褐色 ・やや密 ・良	外面に煤付着
213	24－2	N 2 S D103	甕 C	口 17.8 — —	体部など 1／2	外面頸部から体部ハケメのち頸部ヘラ状工具によるナデ、体部上半櫛描横線、口縁部ヨコナデのち櫛歯刺突列。内面頸部ヨコナデ、体部一部ケズリ。	・黄橙色 ・やや粗 ・良	外面に煤付着
214	170－2	N 4 S D103	甕	口 21.4 — —	口縁など 1／8	外面体部ハケメのち頸部ヨコハケのち体部櫛描波状文。口縁部ヨコナデのちヘラ刺突列。内面体部ハケメ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
215	82－1	N 3 S D103	甕 C	口 17.4 高 29.6 底 7.9	2／3	外面ハケメのち口縁部と体部上半櫛歯押引列、頸部と体部上半ヨコハケ。	・黄灰色 ・密 ・良	外面に煤付着
216	136－1	N 3 S D103 No.67	甕 C	口 17.8 — —	口縁など 1／5	外面体部タテハケのち頸部ヨコハケのちヘラ刺突列。口縁部ヨコナデのち櫛歯押引列。内面体部ハケメ、のち一部ナデ。	・淡黄色 ・密 ・良	外面に煤付着
217	145－2	N 3 S D103	甕 A 2	口 15.4 高 18.4 底 4.8	1／3	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部ハケメ。	・黄橙色 ・やや粗 ・良	
218	144－2	N 4 S D103	甕 A 2	口 17.8 高 22.8 底 5.3	完形	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面頸部から底部ハケメのち一部ナデ。	・黄灰色 ・密 ・良	体部に黒斑あり 粘土接合痕あり
219	36－2	N 4 S D103 下層	甕	口 15.9 — —	体部より上のみ 完	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデのち内面口縁部ハケメ。内面体部ナデ。	・黄灰色 ・密 ・良	外面に煤付着
220	29－2	N 4 S D103 下層	甕	口 15.8 — —	体部など 4／5	外面体部ハケメ、一部ナデ。口縁部ヨコナデ、のちヘラ刺突列。内面体部ハケメ。	・橙色 ・やや密 ・良	・外面に煤付着 ・接合痕あり
221	94－1	N 3 S D103	甕	口 25.2 — —	口縁など 1／3	外面体部ハケメのちヘラケズリ、頸部ハケメ、口縁部ヨコナデのち櫛歯刺突列。内面頸部ハケメ、体部ヘラケズリのちハケメ。	・橙色 ・やや密 ・良	外面に煤付着 粘土接合痕あり

第31表　阿形遺跡弥生土器観察表（14）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
222	25－1	N 3 S D103 No106	甕 B 2	口 16.4 高 24.0 底 10.0	完形	外面脚部から頸部ハケメ、のち脚部工具によるナデ、口縁部ヨコナデ。内面ハケメ。	・茶褐色 ・やや密 ・良	外面に煮こぼれの跡あり。 外面に煤付着
223	119－1	N 5 S D103	器台	口 21.6 — —	上半のみ完	外面脚部タテミガキのち櫛描横線3段のち透孔3ヶ所3段。杯部口唇部上下にヘラ刻目2段。中央に凹線4本のち円形浮文	・黄褐色 ・密 ・良	内面杯部櫛描波状文、ミガキ、脚部ナデ、一部ハケメ
224	54－1	N 4 S D103 No24	鉢 B 1	口 11.9 高 5.6 底 4.0	完形	外面底部ヘラ切り、体部ミガキ、口縁部ヨコナデ、内面ミガキ。	・明褐色 ・密 ・良	片口らしきものあり 内面に朱あり 外面に煤付着
225	98－4	N 3 S D103	鉢 B 1	口 13.2 高 7.0 底 4.5	4／5	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ、内面不明。	・橙色 ・やや粗 ・良	磨耗激しい
226	95－2	N 4 S D103	鉢 A 1	口 12.6 高 7.5 底 3.7	2／3	外面体部ナデ、口縁部ユビオサエのちヨコナデ、内面体部上半ヨコハケ、下半工具によるナデ。	・灰褐色 ・やや密 ・良	
227	37－1	N 5 S D102	鉢 A 1	口 18.5 高 16.0 底 5.0	4／5	外面タテハケのち頸部ヨコハケ、脚部ユビオサエ。内面口縁部ヨコハケ。	・茶褐色 ・密 ・良	外面に煤付着
228	71－4	N 4 S D103	鉢 A 1	口 16.4 — —	口縁など1／2	内外面ハケメのちヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	・赤褐色 ・密 ・良	外面に煤付着
229	18－2	・N 2 S D103	鉢 A 4	口 7.7 高 10.3 底 5.5	完形	外面体部ミガキ、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ。	・黄褐色 ・密 ・良	粘土接合痕あり
230	166－3	N 4 S D103 No52	鉢 A 4	口 17.7 高 21.5 —	2／3	外面体部下半ハケメのち上半ミガキ、内面体部上半ナデ、下半ハケメ。	・橙色 ・密 ・良	粘土接合痕あり
231	70－2	N 4 S D103 下層	鉢 B 3	— — —	口縁など1／6	外面体部ミガキ、口縁部ヨコナデ、のち貼りつけ把手2ヶ所、オサエ、ナデ。内面ミガキ。	・橙色 ・やや密 ・良	把手付鉢 外面に煤付着
232	186－1	N 2 S D103	鉢 B 2	口 22.8 高 13.2 底 4.8	1／3	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面体部ハケメ。	・橙色 ・やや粗 ・良	底部穿孔
233	171－1	N 3 S D103	鉢 B 2	口 19.4 高 15.2 底 4.8	3／5	外面ナデ、オサエのち一部ミガキ。内面体部ハケメのち口縁部ヨコナデ、体部下半ユビオサエ。	・灰白色 ・やや粗 ・良	底部穿孔
234	76－1	N 6 S D103	鉢 B 2	— — 底 4.3	体部など1／5	外面体部ハケメ。内面体部ハケメのち一部工具によるナデ。	・橙色 ・粗 ・良	底部穿孔
235	102－1	N 5 S D103 No12	鉢 A 2	口 13.5 高 9.9 底 4.8	完形	外面体部下半ナデ、オサエ、上半ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面ナデ、一部工具によるナデ。	・黄褐色 ・密 ・良	底部穿孔 外面に煤付着
236	168－1	N 6 S D103	鉢 A 2	口 13.8 高 11.2 底 4.6	1／3	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面ハケメ一部ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・密	底部穿孔
237	73－2	N 2 S D103 下層No119	鉢 B 2	口 15.3 高 13.3 底 3.5	完形	外面底部と口縁部ナデ、ユビオサエ、体部ハケメ。内面体部ハケメ。	・橙色 ・やや粗 ・良	底部穿孔 粘土接合痕あり
238	143－1	N 4 S D103 No46	鉢 B 2	口 15.6 高 13.5 底 3.6	完形	外面体部ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面ハケメ。	・黄褐色 ・密 ・良	底部穿孔6ヶ所

第32表　阿形遺跡弥生土器観察表（15）

番号	整理番号	出土遺構・位置および取上げ番号	器種 器形	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	遺存度	成形・調整技法の特徴等	色調 胎土 焼成	備考
239	96－1	N4 SD103	蓋	口 17.0 高 5.9 底 5.4	1／3	外面口縁部ヨコナデ、天井部ハケメ、天井部上部ナデ、つまみ部ユビオサエ、内面天井部下部ハケメ、天井部上部ユビオサエ、ナデつまみ部ユビオサエ。	・褐色 ・やや粗 ・やや不良	つまみ部にモミガラ痕？あり
240	69－3	N4 SD103	蓋	口 18.6 高 5.3 底 4.5	1／2	外面口縁部ヨコナデ、天井部ケズリのちミガキ、つまみ部ユビオサエ、ナデ。内面天井部ハケメ、天井部ナデ。	・褐色 ・やや粗 ・良	天井部内面に煤付着
241	131－1	N4 SD103	手焙	— — —	鉢部など 2／5	外面胴部、蔽部ともハケメ、のち胴部に貼付凸帯、のちヘラ刻目3段、胴部口縁部ヨコナデ。内面胴部蔽部ともハケメ。	・灰白色 ・密 ・良	蔽部から胴部にかけて半円形の刻目突帯あり
242	130－1	N2 SD103	手焙	— — —	鉢部など 1／3	外面口縁部ヨコナデ、口縁部下部櫛歯刺突列、胴部上半櫛描横線、鉢部上部櫛描横線、櫛描波状文、下部ハケメのち刻目突帯、内面蔽部櫛描横線、鉢部ナデ。	・黄灰色 ・密 ・良	
243	57－4	N4 SD103	ミニチュア A	口 2.9 高 5.5 底 2.5	完形	外面口縁部と底部ユビオサエ、体部ミガキ、内面ナデ。	・橙色 ・密 ・良	歪み大きい
244	10－2	N5 SD103 下層	ミニチュア A	— — 底 3.0	体部など 4／5	外面体部ナデ、底部ユビオサエ。内面口縁部ヨコハケ、体部ナデ。	・赤褐色 ・密 ・良	黒斑あり
245	95－1	N4 SD103	ミニチュア C	口 4.9 高 5.2 底 3.0	体部など 4／5	外面ナデ。内面ナデ、一部ユビオサエ。	・橙色 ・やや密 ・良	外面に指紋あり
246	117－1	N3 SD103	ミニチュア A	— — 底 4.0	体部など 完	外面底部ケズリ、体部ハケメのちミガキ。内面体部ナデ、底部イタナデ。	・赤褐色 ・やや密 ・良	
247	48－4	N6 SD103 No.4	ミニチュア A	— — —	体部など 4／5	外面底部ミガキ、体部ナデ。内面底部工具によるナデ、体部ユビオサエ、ナデ。	・橙色 ・密 ・良	粘土接合痕あり 底部丸底
248	74－1	N3 SD103 No.108	ミニチュア A	口 4.6 高 6.9 底 3.3	完形	外面体部ミガキ、口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	・橙色 ・やや粗 ・良	
249	50－3	N5 SD103	ミニチュア A	口 4.8 高 3.4 底 1.5	完形	外面底部ナデ、体部から口縁部ユビオサエ、ナデ。内面工具によるナデ。	・橙色 ・やや密 ・やや良	
250	170－1	N4 SD103	ミニチュア C	口 7.0 高 7.3 底 4.4	完形	外面底部ナデ、体部ミガキ、口縁部ナデ。内面ナデ、一部ミガキ。	・橙色 ・密 ・良	黒斑あり 粘土接合あり
251	53－3	N4 SD103 下層	ミニチュア	口 7.5 高 7.9 底 3.2	完形	外面底部ナデ、体部ハケメ、口縁部ナデ。内面体部工具によるナデ、底部ナデ。	・橙色 ・やや密 ・良	
252	18－3	N3 SD103	ミニチュア	口 7.3 高 6.9 底 3.7	完形	外面ナデ、口縁部粘土をつまみ上げるようなナデ。内面強いユビオサエ、ナデ。	・黄褐色 ・密 ・良	粘土接合痕あり
253	114－2	N3 SD103	ミニチュア	口 7.1 高 6.9 底 3.7	4／5	外面体部ユビオサエ、ナデ。底部ケズリのあとナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ。	・橙色 ・密 ・良	粘土接合痕あり
254	50－2	N5 SD103	ミニチュア	口 4.8 高 3.4 底 2.2	完形	外面ユビオサエ、ナデ。内面工具によるナデ。	・橙色 ・密 ・良	
255	143－2	N4 SD103	土玉	径 2.9×3.0	完形	ナデ。	・黄褐色 ・密 ・良	焼成前の穿孔φ2㎜あり

5．古墳時代以降の遺構

当地区の土層の基本層序は上から第一層；暗黒土（耕土）、第二層；灰色土（床土）、第三層；灰褐土（遺物包含層）、第四層；黄色土（地山）であるが、調査区の中央部から南側（山側）の地山は砂混じりの白褐色砂質土になる。耕土から地山までの深さは40～70cmであるが、場所によっては耕土直下に地山が見られるところもある。遺物包含層には、土師器皿・土師器鍋など中世遺物が中心であるが、台付き甕、高杯などの弥生土器もある。中世と弥生を層位的に区分することはできなかった。検出された遺構には、弥生時代後期の溝五条、古墳時代の土坑１基、平安時代後期～室町時代の掘立柱建物12棟、柵２条、多数の井戸、溝、土坑がある。

A．建物

平安時代後期から室町時代後期までの掘立柱建物12棟、うち総柱建物3棟、庇付きの掘立柱建物1棟を検出した。棟方向は平安時代後期の建物はE37°Nであり、室町時代の建物はN49°～N53°Wとそれに直行するⅠ群とN41°～N43°Wとそれに直行するⅡ群とにわかれる。柱穴の形は大半が30cm～50cmの円形又は楕円形であり柱根跡を残すもの（ＳＢ１３８）もある。

平安時代後期

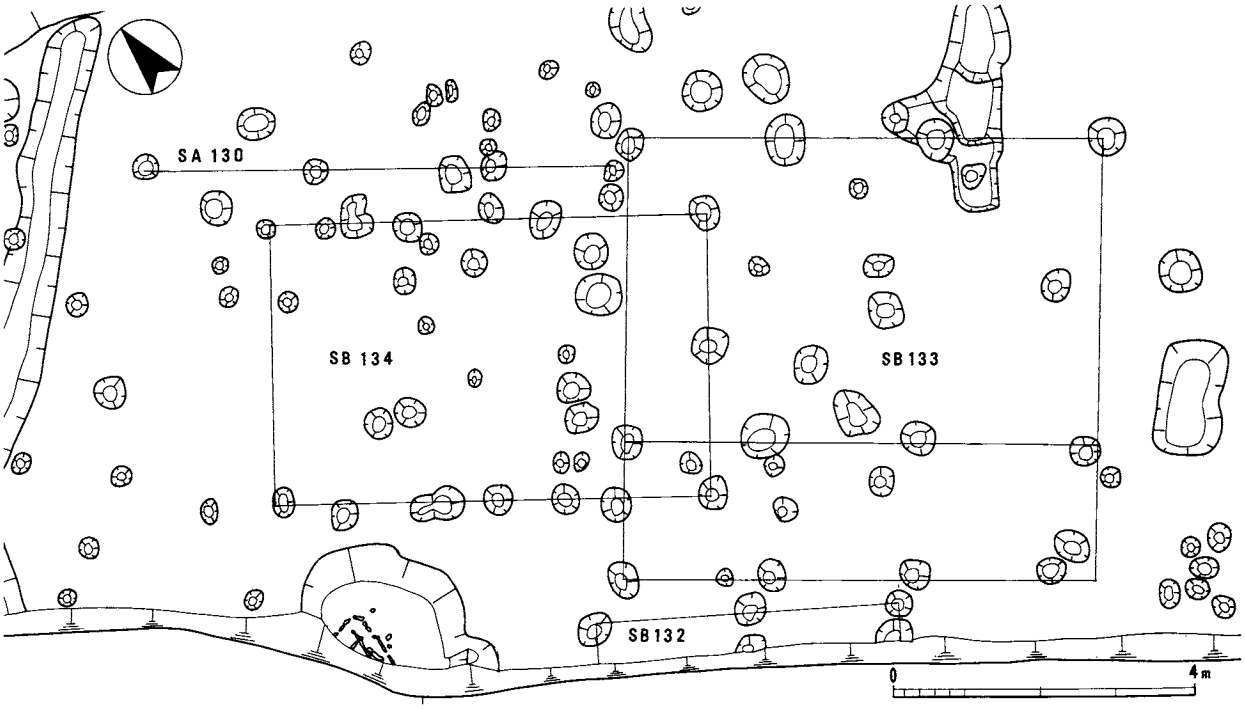
ＳＢ１４４（第75図）　室町時代の土坑に南東隅をきられている。柱掘形は西から1列目は径40cm程の円形、2列目は長辺50cm、短辺40cm程の方形をしており、3列目は土坑にきられ形は不明である。

第33表

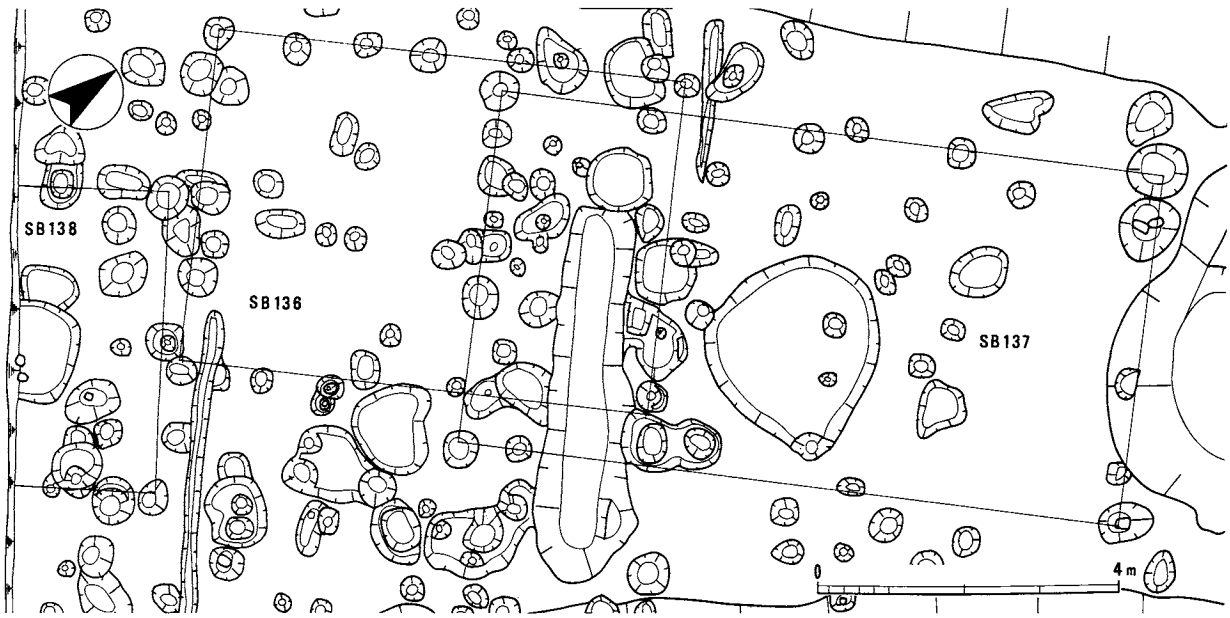
ＳＢ番号	規模 間数	規模 桁行(m)	規模 梁行(m)	規模 面積(㎡)	棟方向	柱間寸法 桁行(m)	柱間寸法 梁行(m)	時代	出土遺物	備考
144	2×2	4.1	3.4	13.94	E37°N	1.9+2.0	1.7+1.7	平安時代後期	土師器長胴甕	総柱
133	3×2	6.2	5.8	35.96	E40°S	2.0+2.0+2.2	4.0+1.8	室町時代後期	土師器皿(314) 土師器鍋	庇付き建物
137	4×2	8.8	4.7	41.36	N41°E	2.0+2.1 +2.1+2.7	2.7+2.0	室町時代後期	土師器鍋 土師器皿(348)	南の桁方向は柱穴検出できず
134	3×2	6.7	3.7	21.09	E39°S	1.8+1.8+2.1	1.8+1.9	室町時代後期	土師器皿	
136	3×2	6.3	4.3	27.09	N41°E	2.0+2.0+2.2	2.2+2.2	室町時代後期	土師器皿 土師器鍋	
132	不明×2	不明	4.0	不明	E37°S	不明	2.0+2.0	室町時代後期	土師器皿	調査区外にのびる
138	1以上×2	2以上	4.0	不明	N37°E	1.5+不明	2.0+2.0	室町時代後期	土師器鍋	調査区外にのびる
139	2×2	4.2	3.7	15.54	E41°N	2.1+2.1	1.8+1.9	室町時代後期	土師器鍋	総柱
142	3×2	5.7	4.3	24.51	N41°W	1.8+1.8+2.1	2.2+2.2	室町時代後期	土師器皿 土師器鍋	
141	2×2	3.8	2.8	10.08	N43°W	1.8+1.8	1.4+1.4	室町時代後期	土師器皿(14) 土師器鍋	
135	2×2	4.7	4.0	18.8	E37°S	2.3+2.3	2.0+2.0	室町時代後期	土師器皿	総柱
143	3×2	4.7	4.2	19.74	N42°W	(東)1.3+1.4+2.0 (西)2.9+1.8	2.1+2.1	室町時代後期	土師器片	

第34表

ＳＡ番号	規模 間数	規模 長さ(m)	軸方向	柱間寸法(m)	時期	出土遺物	備考
131	南北13 東西３以上	南北26 東西5.8以上	南北E39°S 東西N39°E	南北2.4+2.0+1.8+3.6+1.8+1.8+1.8+1.8 +1.8+1.8+1.8+1.8+1.8 東西1.8+2.0+2.0	室町中期	土師器皿 土師器鍋 山茶椀	東西は調査区外にのびる
130	3	6.1	E39°S	2.2+1.8+2.1	室町後期	土師器片(皿、鍋)	



第73図　ＳＢ132, 133, 134, ＳＡ130実測図（１：100）



第74図　ＳＢ136, 137, 138実測図（１：100）

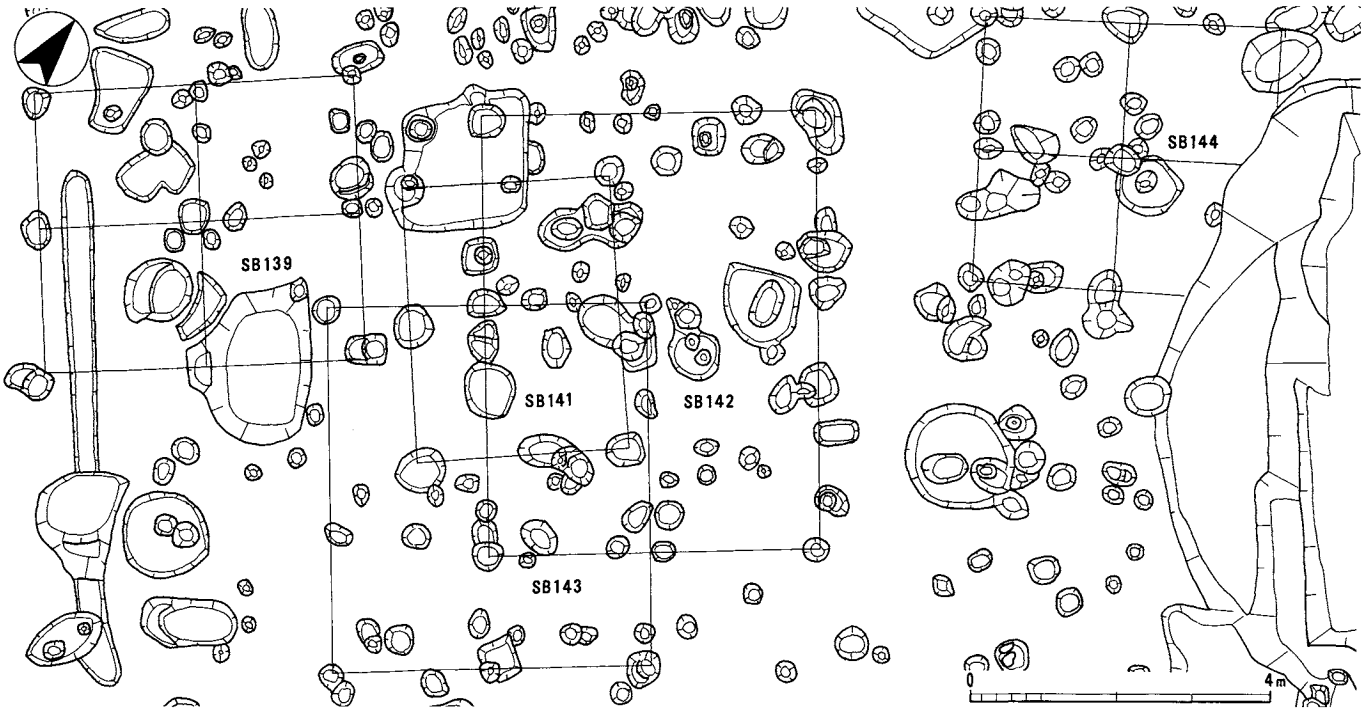
室町時代後期

ＳＢ１３３（第73図）　棟方向はＥ40°Ｓ（Ⅰ群）である。柱穴は検出できないのもあったが、径30～50cm程の円形であり埋土は暗褐色土であった。南側が調査区外にきられるため確認できなかったが、梁方向がのび東西棟の総柱建物になる可能性がある。柱間寸法の梁行が4.0m＋1.8mと不揃いであるが、南側に庇をもつ建物であるためと思われる。

ＳＢ１３７（第74図）　棟方向はＮ41°Ｅ（Ⅰ群）である。桁行の南側で柱穴は検出できなかったものもあるが、柱掘形の大半は径30～40cmの円形であり、東面では柱掘形が径80cm程の円形になる。

ＳＢ１３４（第73図）　棟方向はＥ39°Ｓ（Ⅰ群）である。梁方向西側で柱穴を検出できなかったものもあるが、柱掘形は径20～40cmの円形であり、埋土は暗褐色土である。

ＳＢ１３６（第74図）　棟方向はＮ41°Ｅ（Ⅰ群）である。柱掘形は、他の遺構と重なって形がはっき



第75図　ＳＢ139, 141, 142, 143, 144実測図（１：100）

りしないものもあるが、径30cm程の円形にまとまる。柱穴からの出土遺物から、ＳＢ１３７より新しいと思われる。

ＳＢ１３２（第73図）　調査区西隅で、径約40cmの円形の柱穴を２mの間隔をあけて２間分検出した。出土遺物は土師器細片しかなく時期は決定できない。建物の規模も調査区外にきられるため確定できないが、梁行が２間の４mであり棟方向E37°Ｓ（Ｉ群）と思われる。

ＳＢ１３８（第74図）　調査区外にきられるため規模は確定できないが、棟方向はN37°Ｅ（Ｉ群）と思われる。断面の厚さ10×９cm程の方形の柱根が、束柱部分で出土したが、土坑にきられていたため、柱掘形は検出できなかった。切り合い関係及び出土遺物からＳＢ１３６より新しいと思われる。

ＳＢ１３９（第75図）　棟方向はE41°Ｎ（Ⅱ群）である。柱掘形は20～40cmの円形をしており、埋土は暗褐色土である。ＳＢ１４２と1.8m程離れて棟方向が直行しており、出土遺物が同時期のものである。ＳＢ１４２と並立していたものと思われる。

ＳＢ１４２（第75図）　棟方向はN41°Ｗ（Ⅱ群）である。柱掘形は径20～70cmの円形、又は楕円形をしており統一していながら、梁行中央の柱穴が小さい。埋土は暗褐色土である。

ＳＢ１４１（第75図）　棟方向はN43°Ｗ（Ⅱ群）である。柱掘形は他の遺構にきられて検出できないのもあったが、径20～70cm程の円形又は楕円形をしており、桁行の柱穴は大きく梁行中央の柱穴は小さい。埋土は暗褐色土でありＳＢ１４２の柱掘形と似かよっている。

ＳＢ１３５　棟方向はE37°Ｓ（Ｉ群）である。柱掘形は他の遺構と重なって形のハッキリしないものもあるが、径40～50cmの楕円形であり、埋土は暗褐色土である。他の建物とは離れた場所に建つ。

ＳＢ１４３（第75図）　棟方向はN42°Ｗ（Ⅱ群）である。柱掘形は検出できないのもあったが、径20～50cmの楕円形であり、埋土は暗褐色土である。

Ｂ．柵

室町時代中期

ＳＡ１３１　南北に13間（26m）、北で西に折れて３間（6.1m）の柵を検出した。西側が調査区外になるため西にのびる柵は３間以上になる可能性がある。柱間は溝との重なりで検出できなかったのもあるが、大半が1.8mの等間隔であり西に曲がる北端で2.4mと広くなる。

室町時代後期

ＳＡ１３０（第73図）　ＳＢ１３４の南側を60cm程離れて平行にはしる３間（6.1m）の柵であり、隠

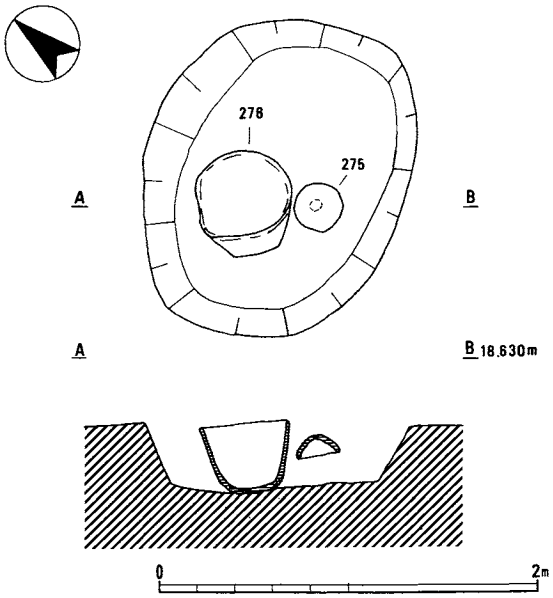
し塀になっていたとも思われる。

C．土坑

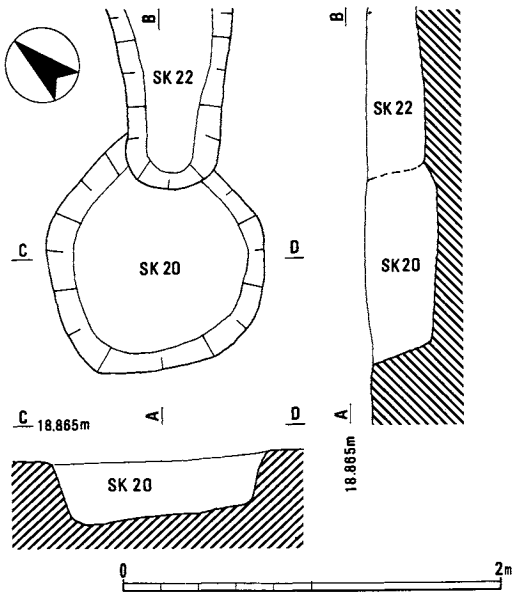
総数73の土坑を検出した。ほとんどが平安時代後期から室町時代にかけてのものであるが、古墳時代の土坑もある。埋土は全体的に暗褐色土であり、時代による埋土の違いは認められなかった。

古墳時代

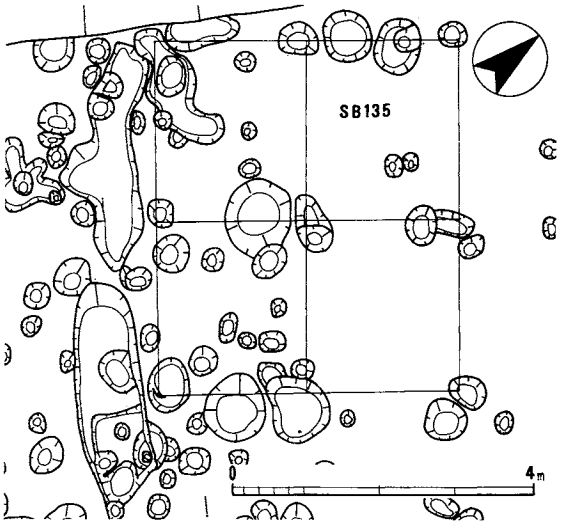
ＳＫ１１５（第76図）　長辺84cm、短辺71cm、深さ40cmのやや楕円形の土坑である。土坑の底に接して、上を向けておかれた様に出土した片口土器（276）と、底から20cm程上方で、下を向けて伏せた形で出土した土師器椀（275）がある。



第76図　ＳＫ115実測図（１：40）



第77図　ＳＫ20実測図（１：40）



第78図　ＳＢ135実測図（１：100）

第35表　溝一覧

遺構番号	幅(cm)	深さ(cm)	主軸方向	時期
ＳＤ１	210	85	N15°E～N18°S	室町
7	100	30	E23°N	室町
9	120以上	25	E18°N	鎌倉
17	280	75	E23°N	室町
21	600	190	E16°S～E9°N	弥生
26	170	50	E28°S	室町
28	50	30	N40°E	室町
31	140	60	E28°S	室町
34	80	40	E21°S	室町
36	200	80	N30°E	弥生
37	70	40	E30°S	室町
38	40	20	E30°S	室町
40	40	15	N20°W	室町
45	35	10	E30°S	室町
56	60	15	E40°W	室町
57	40	20	N36°E	鎌倉
61	200	95	E35°S	室町
65	50	20	E15°S	不明
78	80	50	N10°E	室町
84	320	130	N34°E	弥生
95	600	200	N40°E	弥生
103	250	100	N40°E	弥生
105	70	40	N45°W	室町
117	120	90	N39°E～N28°S	室町
124	75	20	E35°N	室町

第36表　土坑一覧

遺構番号	形　状	規模（cm）	深さ（cm）	時　期
ＳＫ３	楕円形	280× －	25	室町
4	楕円形	200×200	50	室町
6	不整楕円	170× 50	28	室町
10	楕円形	300× －	25	室町
11	隅丸方形	280×120	58	室町
12	溝状	270× 70	36	中世（室？）
13	楕円形	120× 90	10	室町
15	楕円形	200× －	22	中世（室？）
18	溝状	100× －	20	室町
19	溝状	－ × 70	15	室町
20	円形	120×120	35	南北朝
22	溝状	250× 60	30	室町
23	楕円形	260×200	15	中世
25	隅丸方形	160× 80	35	鎌倉
27	不整楕円	300×250	60	室町
29	楕円形	130× －	35	室町
30	楕円形	220× －	30	室町
32	方形	110× 80	20	中世（室？）
33	溝状	－×－	10	時期不明
35	不整楕円	120× 70	55	室町
41	不整楕円	200×150	30	室町
43	方形	80× 50	15	室町
44	隅丸方形	100× 40	15	室町
47	円形	110×110	15	中世（室？）
50	不整方形	100× 50	10	室町
51	隅丸長方形	170× 70	50	室町
53	隅丸長方形	120× 60	20	室町
54	方形	90× 60	15	室町
55	方形	90× 70	20	室町
58	不整楕円	300×300	30	室町
59	溝状	530× －	15	室町
60	溝状	1,000× 50	90	室町
63	円形	140×140	15	中世（室？）

遺構番号	形　状	規模（cm）	深さ（cm）	時　期
ＳＫ66	隅丸長方形	140× 90	50	室町
67	隅丸長方形	170× 60	30	中世（室？）
68	不整方形	240×200	30	室町
69	円形	90× 80	30	中世
70	方形	90× －	15	中世
71	方形	120× 90	25	中世
72	隅丸長方形	190× 80	25	室町
74	隅丸長方形	300×180	70	室町
75	隅丸方形	420×350	60	室町
76	楕円形	130×110	20	中世（室？）
77	溝状	100× －	25	中世
79	方形	200× －	35	室町
80	楕円形	160×140	15	室町
ＳＸ81	隅丸長方形	320×200	60	室町
ＳＫ82	楕円形	－ × －	30	時期不明
85	隅丸長方形	240× 80	15	室町
87	溝状	300× 60	30	鎌倉
89	楕円形	160×120	60	室町
90	方形	140×120	10	室町
93	溝状	330×150	20	室町
96	楕円形	160×100	20	鎌倉
97	隅丸長方形	120× 60	22	南北朝
104	溝状	120×－	20	室町
106	溝状	500×100	40	室町
111	楕円形	130× 70	20	室町
114	不整形	－ × －	40	室町
115	楕円形	80× 70	40	古墳
118	隅丸長方形	450×200	30	室町
120	楕円形	550× －	50	室町
122	溝状	300× 70	30	室町
125	楕円形	430×210	40	室町
126	隅丸長方形	250×110	15	時期不明
127	長方形	200×100	15	平安後期

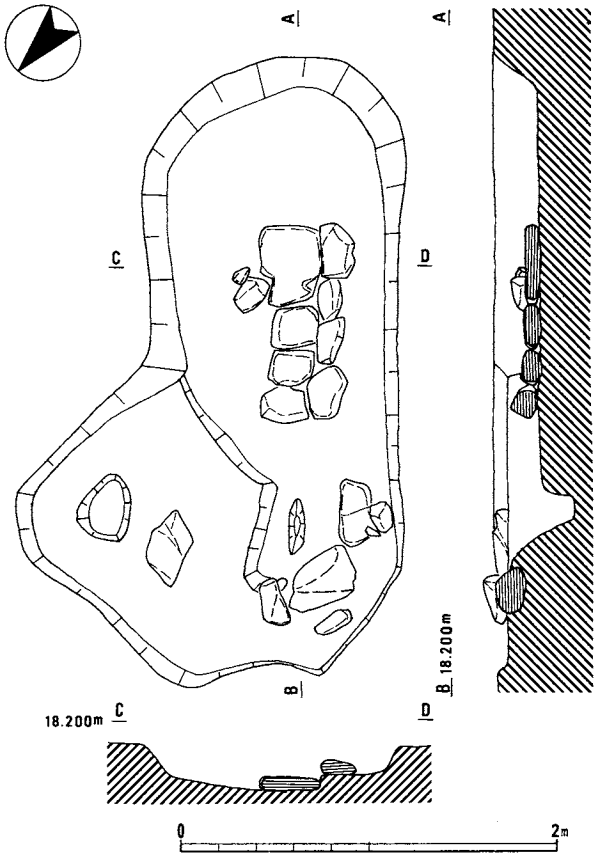
室町時代前期（南北朝時代）

ＳＫ２０（第77図）　径20cm程の楕円径の土坑であり、室町時代後期の土坑（ＳＫ２２）に北東隅をきられている。土師器皿（295～298）、土師器鍋（300, 301）、山茶椀（299）がこの土坑より一括して出土した。南北朝期の遺構と思われる。

室町時代後期

ＳＫ７４（第80図）長辺3.0m、短辺1.8m、深さ17cm程のやや隅丸の隅丸長方形の土坑である。埋土は暗褐色の砂質土である。深さ５cm程の所から底にかけて土師器皿が何枚も重ねた形で出土した。

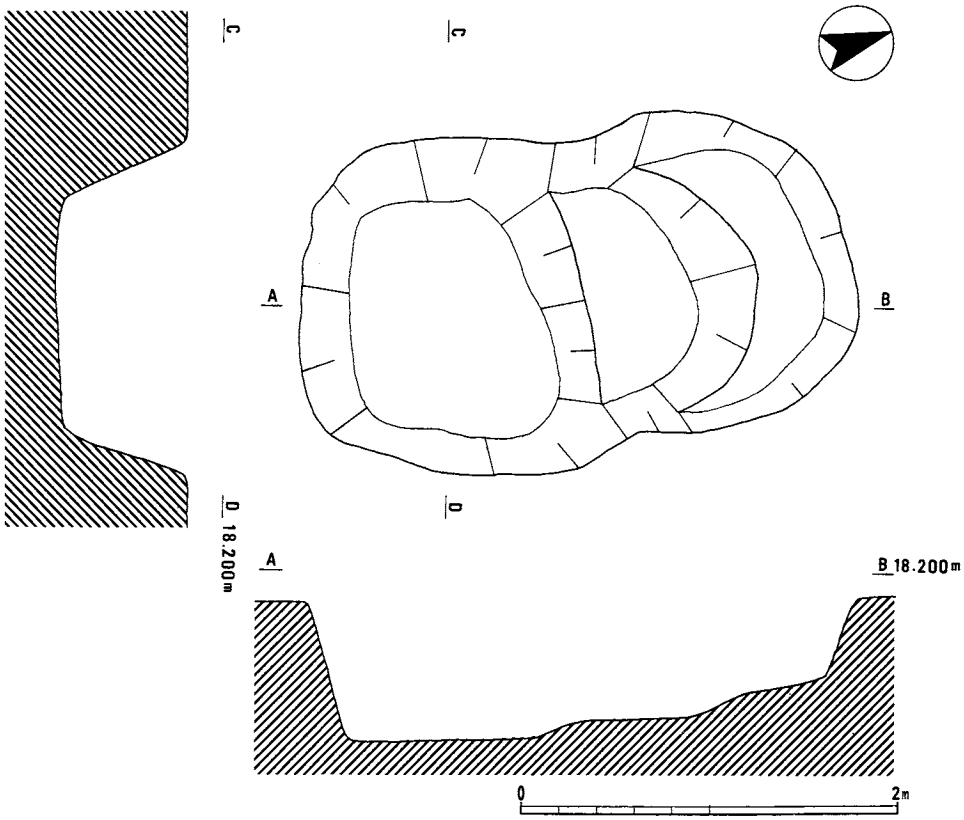
ＳＸ８１（第79図）　長辺3.2m、短辺1.3m～2m、深さ60cm程の隅丸長方形を呈する土坑墓である。深さ約20cmの所で、上を平坦にした径20～40cm程の石を長方形に組んだ石組が、縦約1.0m、横約40cm程の範囲で土坑に沿って南北に組まれており、北西側はコの字状に石を組む。埋土は暗褐色土であり、石組付近からは多量の炭が混じる。出土遺物には土師器皿（324）、土師器鍋があり、コの字状の石組付近からは小刀の柄の部分が出土した。北西側を頭にした火葬土坑墓と思われる。



第79図　ＳＸ81実測図（１：40）

Ｄ．井戸

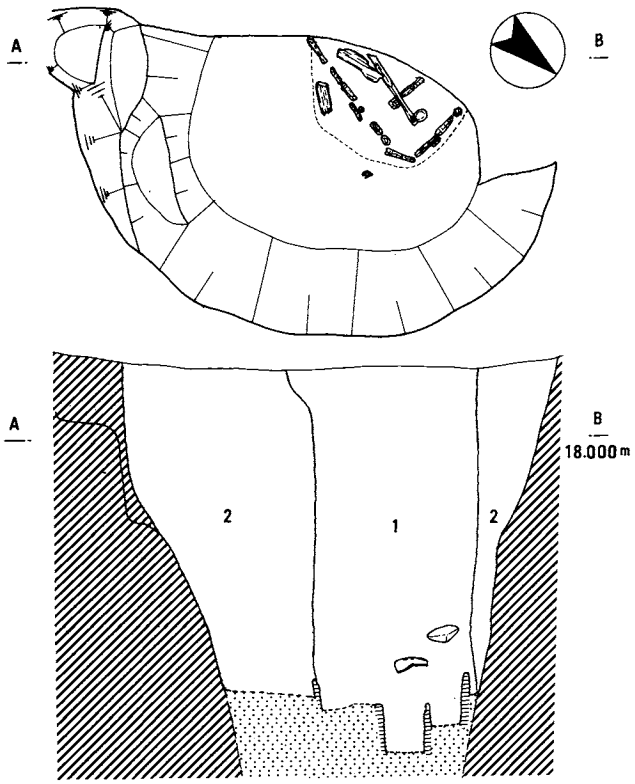
総数17基の井戸が検出された。構造から、Ａ：石組をもたないもの、Ｂ：石組をもつものに大きく分類できる。Ａはａ：底に木枠を用いたもの、ｂ：底に木枠を用いないものに細分できる。またＢもａ：石組だけのもの、ｂ：木枠を用いるもの、ｃ：くり抜きの木を用いるもの、ｄ：井戸の底に曲物を用いるものに細分できる。



第80図　ＳＫ74実測図（１：40）

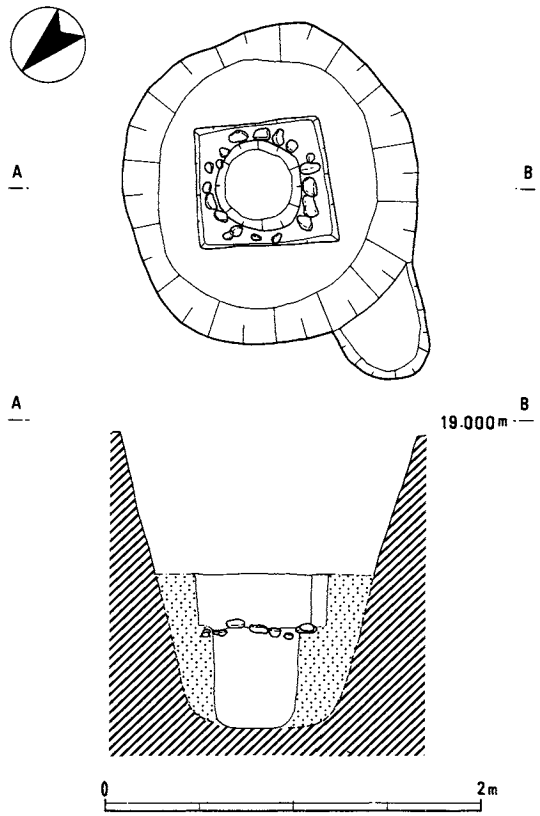
第37表　井戸一覧表

名称(SE)	掘形径(cm)	井戸径(cm)	深さ(cm)	形態	出土遺物	時代
123	(円　形) 一辺 (230※)	(方形) 一辺 (80※)	210※	素掘りの下に縦板を方形に二重に組む	・土師器皿 (4,5)　・甕の把手 ・土師器鍋 (6,7)	平安時代前期
128	(円　形) 長辺 (170)、短辺 (155)	(方形) 長辺 (170)、短辺 (65)	155	素掘りの下に方形の木枠痕跡があり、その下に小石を敷き、その下に円形の素掘り	・ロクロ土師器皿　・土師器鍋 ・山茶椀	平安時代後期
91	(楕円形) 長辺 (340)、短辺 (280)	(方形) 長辺 (76)、短辺 (70)	220	素掘りの下に縦板と横板を方形に組む	・山皿 (8.9)　・山茶椀 (11～14)　・白磁 (15) ・ロクロ土師器皿 (10)　・土師器鍋 (16)	平安時代後期
98	(楕円形) 長辺 (370)、短辺 (260)	(円形) 長辺 (90)、短辺 (85)	225	石組の下に曲物を二重に組み、その下に曲物を組む	・山茶椀　・常滑甕	鎌倉時代後期
94	(円　形) 長辺 (300)、短辺 (280)	(円形) 長辺 (100)、短辺 (96)	240	石組の下に曲物を二重に組み、その下に曲物を組む	・土師器皿 (17)　・土師器鍋 (19)　・山茶椀 (18) ・山茶椀質のねり鉢 (20)　・井戸枠 (166, 167)	鎌倉時代後期
73	(方　形) 長辺 (360)、短辺 (200)	(円形) 長辺 (90)、短辺 (84)	200	石組の下に曲物、その下に井桁を組む	・土師器皿　・羽釜　・常滑甕 ・山茶椀　・井戸枠 (168～171)	室町時代中期
24	(円　形) 長辺 (360)、短辺 (350)	(円形) 長辺 (115)、短辺 (110)	200※	石　組	・土師器皿　・土師器鍋 ・山茶椀	室町時代中期
52	(円　形) 一辺 (360)	(円形) 長辺 (100)、短辺 (95)	120※	石　組	・土師器皿　・土師器鍋 ・常滑甕	室町時代後期
110	(円　形) 一辺 (280※)	(円形) 長辺 (95)、短辺 (90)	250	石　組	・土師器皿 (49) ・土師器鍋　・呪符	室町時代後期
83	(方　形) 長辺 (360)、短辺 (200)	(円形) 長辺 (90)、短辺 (84)	200	上から石組、下に二段に縦板を組む	・土師器皿 (48) ・茶釜	室町時代後期
121	(円　形) 一辺 (236)	(円形) 長辺 (95)、短辺 (90)	230	石組の下に方形に縦板と横板を組む	・土師器鍋　・石臼 (164) ・常滑甕	室町時代後期
101	(方　形) 一辺 (400※)	(円形) 長辺 (90)、短辺 (86)	270	石組の下に丸太のくり抜きを組む	・土師器皿　・土師器鍋　・羽釜 ・漆器　・円形加工陶器 (154)　・井戸枠 (172)	室町時代後期
99	一辺 (470※)	※	100※	※土坑であるが恐らく井戸と思われる	・土師器皿 (40, 41) ・青磁	室町時代後期
39	(円　形) 長辺 (340)、短辺 (300)	(円形) 長辺 (85)、短辺 (75)	200	石　組	・土師器皿 (95～97)・土師器椀 (98)・土師器鍋 (100) ・土師器茶釜 (99)・瓦質火鉢 (101)・常滑甕 (102)	室町時代後期
129	(円　形) 一辺 (290※)	(円形) 一辺 (85※)	135※	石　組	・土師器皿 (138)・土師器鍋 (134～136) ・施釉おろし皿 (137)・常滑甕 (139)・石臼 (161)	室町時代後期
16	(円　形) 長辺 (330)、短辺 (240)	(円形) 長辺 (115)、短辺 (110)	160※	石　組	・土師器鍋 (118)・土師器羽釜 (117) ・土師器茶釜 (119)・天目茶椀 (121)・常滑甕 (120)	室町時代後期
※は危険のため完掘できず						



1．暗褐色土（井戸埋土）
2．黄色ブロック混じり
　暗褐色土（井戸掘形）

第81図　ＳＥ123実測図（１：40）



第82図　ＳＥ128実測図（１：40）

平安時代前期

ＳＥ１２３（第79図）（Ａ－ａ）小石混じりの砂地層に掘られた、石組をもたず底部に木枠を用いた井戸である。深さ160cm程の所で、方形に組まれた木枠を検出した。危険のため完掘出来ず、構造は明らかでないが二重に木枠を組み、外枠と内枠の間は20～30cmであり青灰色粘土で固定している。

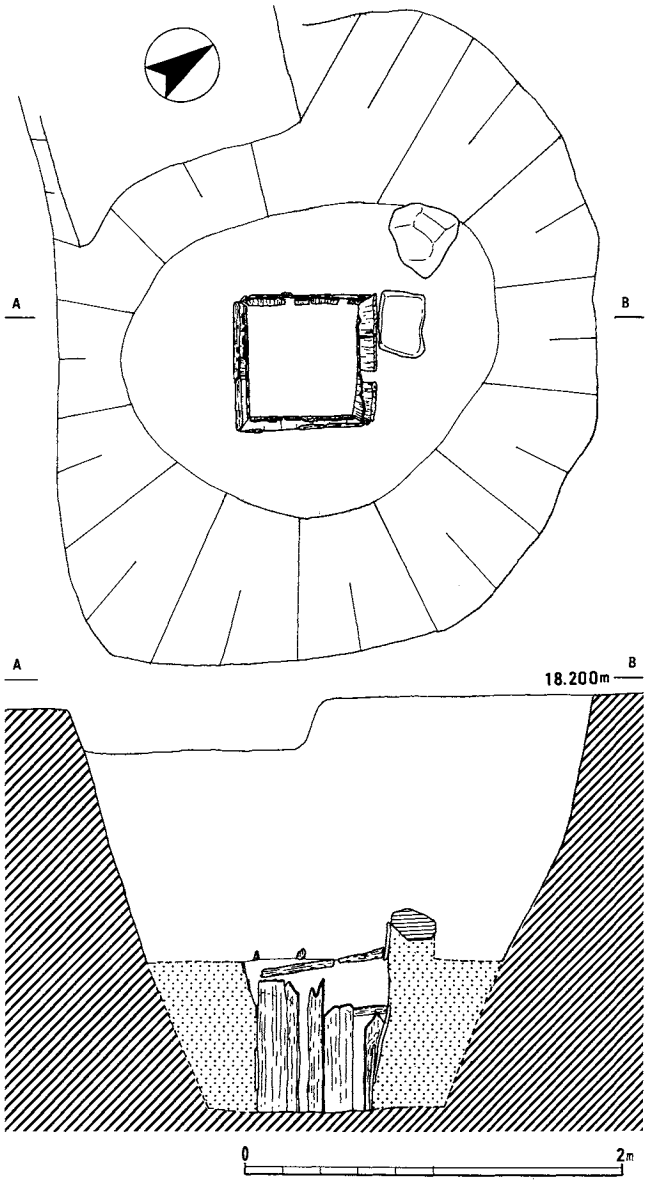
平安時代後期

ＳＥ１２８（第82図）（Ａ－ａ）砂地層に掘られた石組をもたない井戸である。深さ70cmの所に木枠痕が残り、深さ1.0m程の所に拳大の川原石を平坦に敷きつめ、底は円形の素堀となる。出土遺物は少ないが、ロクロ土師器が含まれることから井戸の使用時期は平安時代後期と思われる。

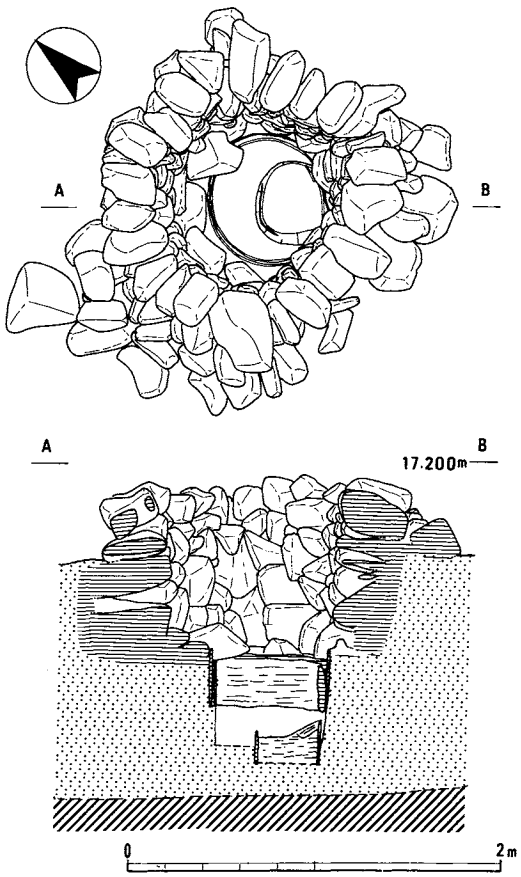
ＳＥ９１（第83図）（Ａ－ａ）石組をもたず、底部に木枠を用いた井戸である。深さ約130cm程のところで、長辺76cm、短辺70cmの方形の木枠を検出した。遺存状態が良好でないので、部分的にしか構造は明らかでないが、掘形底部の周壁から40cm程の位置に厚さ４～６mm、幅8～20cmの板20枚程を一列に直立させ、東西南北の側板となし井筒を構成している。井戸底部には四隅を組み継いだ横桟の痕跡が残り、縦板の上部にも横桟を組んだ痕跡がのこる。また、横桟を支える支柱らしき痕跡が北隅に残ることから「方形横桟支柱型」[1]の構造をもつものと思われる。木枠内から底部に「十」の墨書がある山茶碗が出土した。

室町時代前期（南北朝時代）

ＳＥ９４（第84図）（Ｂ－ｄ）円形の石組井戸であり、底部に曲物をくむ井戸である。地山面から深さ約90cm～180cmに人頭大の川原石を乱石積みし、その下に径約69cmの外枠（439）と径約63cmの内枠（440）の曲物を二重に組み、間を青灰色粘土で固定



第83図　ＳＥ91実測図（１：40）



第84図　ＳＥ94実測図（１：40）

している。さらにその下に径約34cmの曲物を井戸最低部までおき湧水層の井筒としている。隣接するＳＥ９８と井戸構造、出土遺物が似かよっている。

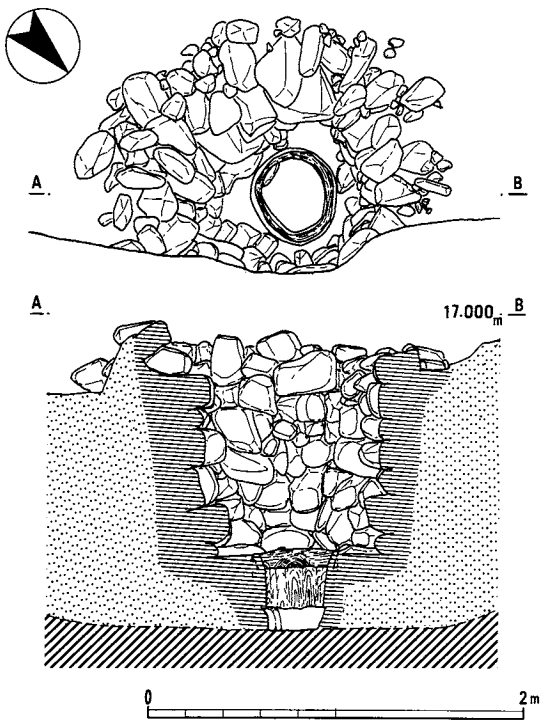
室町時代中期

ＳＥ７３（第86図）（Ｂ－ｄ）円形の石組井戸であり、低部に曲物その下に井桁を組む井戸である。内径約90cmの円形の乱石積みを拳大から人頭大の川原石で、深さ約170cmまで垂直に積みあげ構築されており、その下に径約70cmの曲物が拳大の川原石に外壁を固定され組まれている。その下、井戸最低部には厚さ４mm程の長方形の板四枚（441～444）を組み合わせた井桁が、上部の曲物と中心部がずれる形で組み込まれており（Ｂ－ｂ）、井桁が埋没した後、それを修復するために上部に曲物をおいたと考えられる。

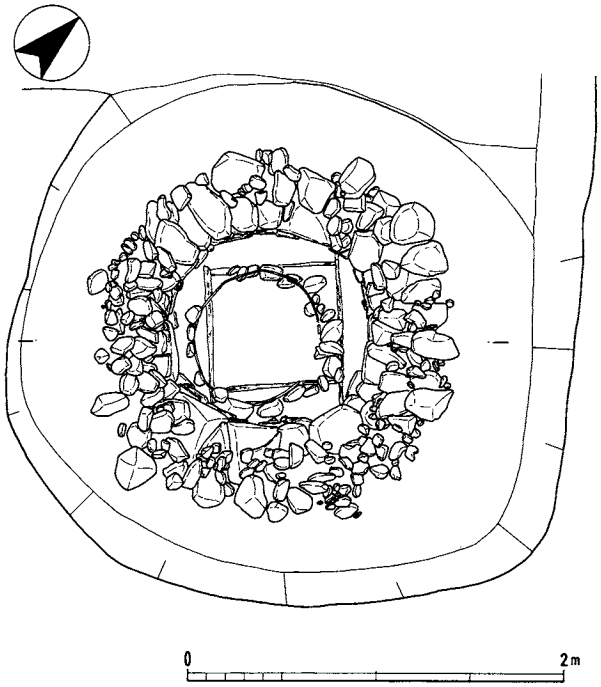
室町時代後半

ＳＥ１１０（第87図）（Ｂ－ａ）円形の石組井戸であり、拳大から人頭大の川原石を積み上げている。積石の断面は、底から一段めは上部が平坦な大石を井戸径より30cm程内側に組み、二段めから最上段にかけてはやや開き気味に組まれている。

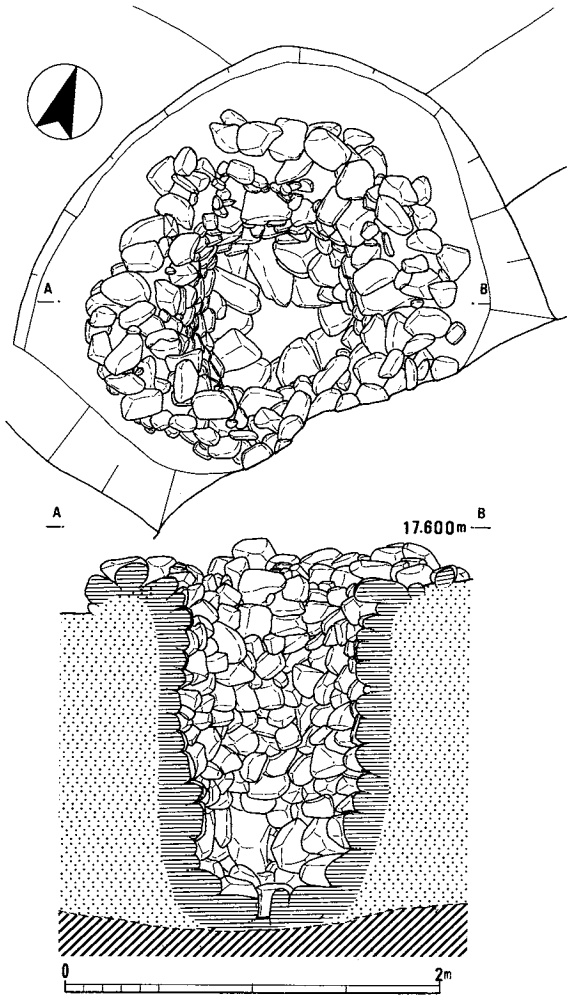
ＳＥ１０１（第85図）（Ｂ－ｃ）円形の石組井戸であり、低部に丸太のくり抜きをもつ。地山面から深



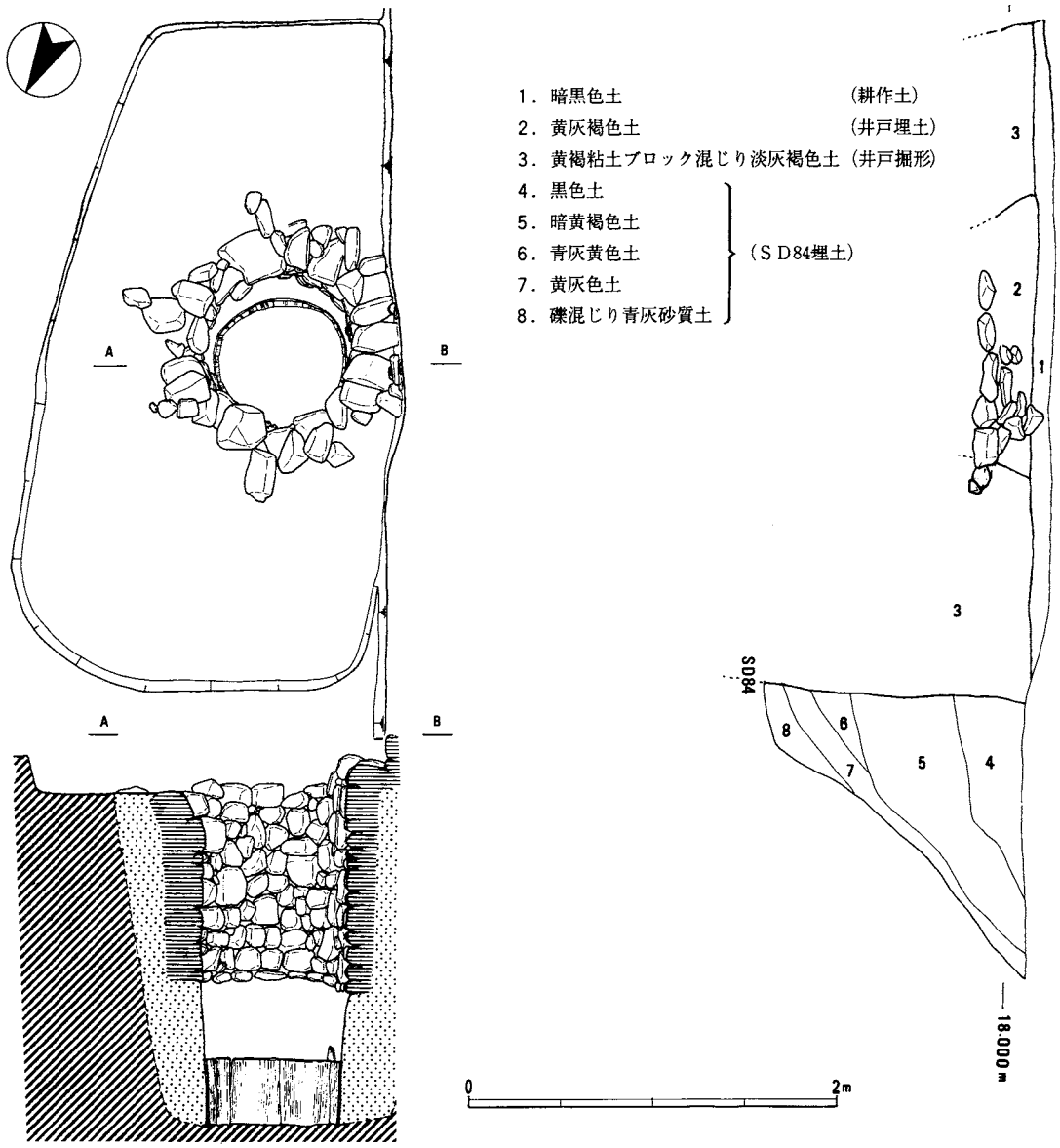
第85図　ＳＥ101実測図（１：40）



第86図　ＳＥ73実測図（１：40）



第87図　ＳＥ110実測図（１：40）



第88図　ＳＥ83実測図（1：40）

さ約120～230cmまで川原石を積み上げ、その下に上部は斜めに下部は垂直に削ぎ落とした長径約54cm、短径48cmの丸太のくり抜き（445）をおき、その下に丸太を支える石を湧水層におく。

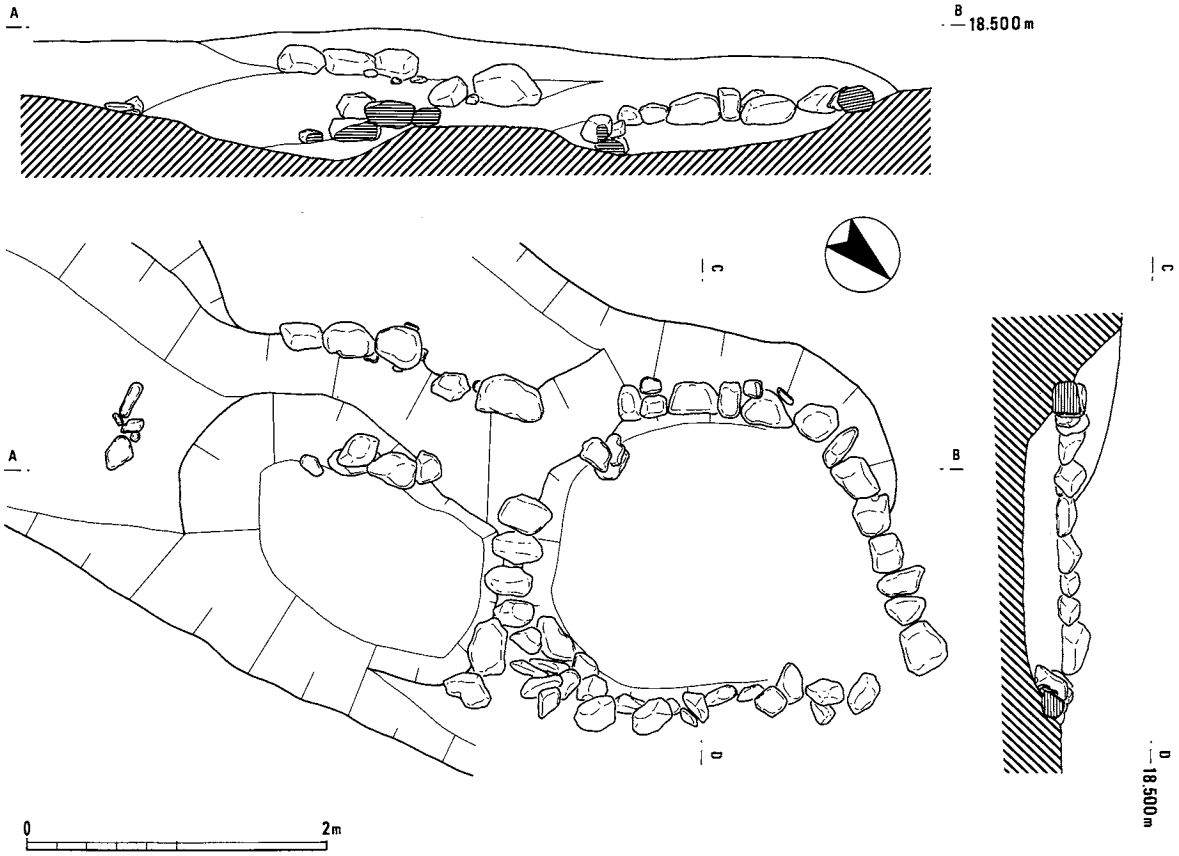
ＳＥ８３（第88図）（Ｂ－ｂ）円形の石組井戸であり、低部に二段の縦板を組む。川原石を深さ約140cmの深さまで垂直に組み、最低部の石は厚さ５cm程のそろった石を平行に組んでいる。石組から下へ深さ約180cmまでは空白となっているが、組まれていた縦板がとれたものと思われる。下段に組まれた縦板は残りがよく、厚さ1.5cm程の板を約17枚で径約70cmの円形に組んであり、下層の青灰色粘土によって固定している。

Ｅ．石積遺構

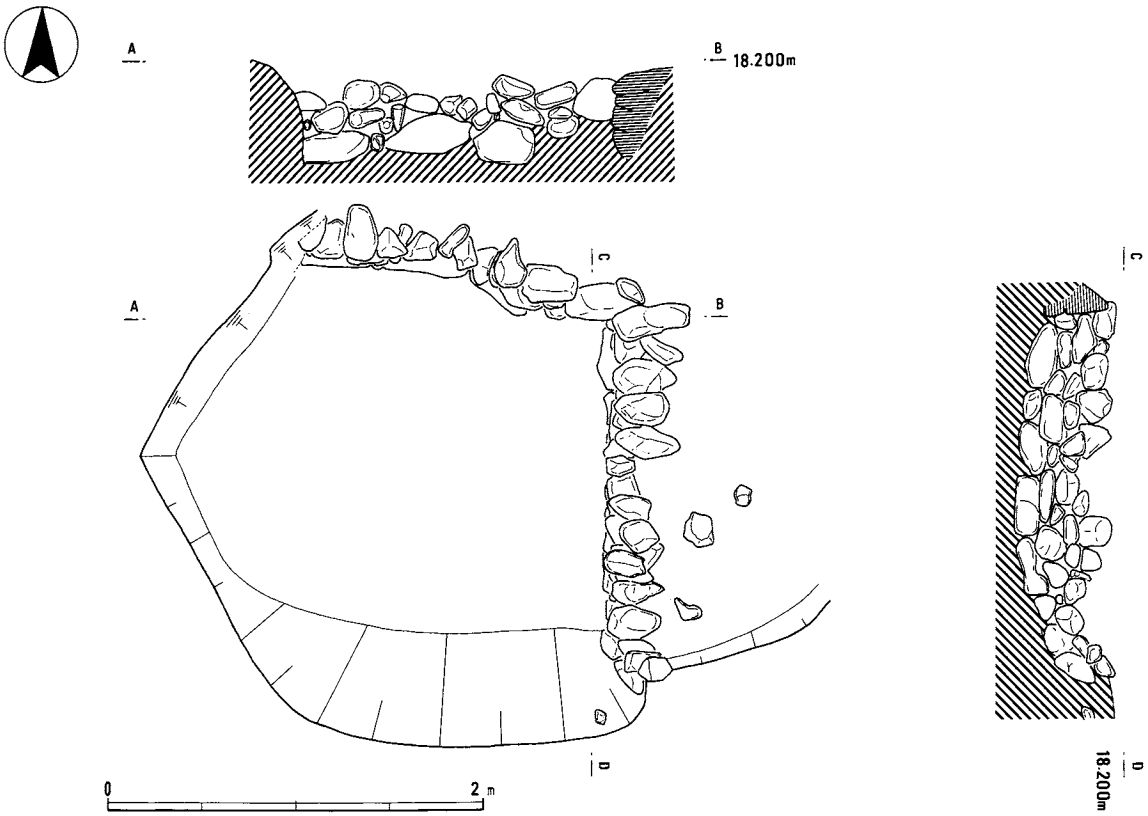
室町時代後期

ＳＤ１１７（第89図）溝の北側（下流部）に、深さ約50cmの楕円形の落ち込みが２ケ所あり、それぞれ落ち込みの壁面に人頭大の川原石がほぼ１列分検出できた。ここからは崩れたと思われる状態で川原石が他にも多数見つかっていることから、数段の石積み遺構であったと思われる。出土遺物には、土師器鍋（345）、土師器茶釜（346）がある。

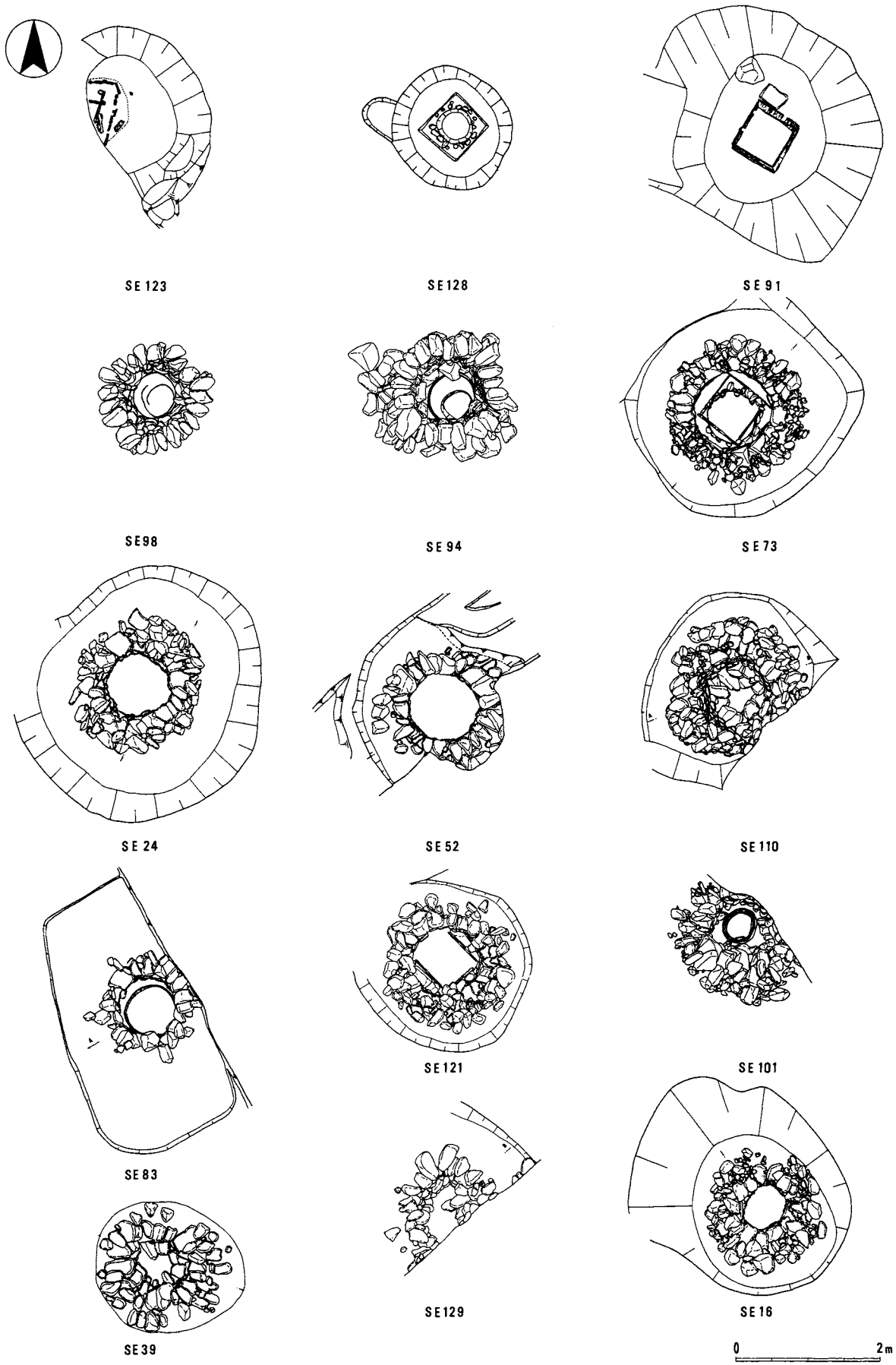
ＳＫ２７（第90図）土坑の壁面に、人頭大の川原石がＬ字状にほぼ４段に組まれており、出土遺物には、土師器皿（378）がある。北端を調査区によって切られるため、全容は明らかでないが、溝の下流部に位置すると思われ、ＳＤ１１７の下流部石積遺構と似た性格をもつものと思われる。



第89図　ＳＤ117集石部分実測図（１：50）



第90図　ＳＫ27集石遺構（１：40）



第91図　井戸平面実測図一覧（1：80）

6．古墳時代以降の遺物

古墳時代以降の遺物はコンテナバットにして約200箱あり、その大部分が中世の土器類である。その他には3箱分の石製品と井戸枠を中心とした木製品、鉄鍋などの少量の鉄製品がある。それぞれの詳細については観察表を参照されたい。

古墳時代

A．SK115出土遺物

土師器椀（275）口縁部がゆるやかに内弯し、体部が半球形のものであり、底部に若干の面を持つ。内部全面には、ヘラミガキがなされており、内側のほぼ全面に朱が付着している。口縁部を下に向け、伏せた形で、（276）と共に出土。

土師器鉢（276）口縁部にゆるやかなU字の片口を持つ大型の土師器であり、口縁部を上に向け土坑の底におかれた形で出土。

B．Pit出土の石製品

石製紡錘車（277）滑石製の有文紡錘車であり、側面上部と下部の境が稜を持ち側面傾斜は52°である。尚、出土したPitは建物にならない。

平安時代前期

SE123出土遺物

土師器杯（278）底部からやや内弯しながら立ち上がる。

土師器皿（279）ほぼ平らな底部からやや外反気味に直立し、口縁端部は丸くおさまる。

土師器甕（280、281）体部最大径と口径はほぼ同じ大きさであり、口縁端部は外側に面を持つ。

平安時代後期

SE91出土遺物

土師器皿（284）底部が内側に向かって肥厚し、底部糸切りのロクロ土師器である。

土師器鍋（285）口縁端部が丸く肥厚し、内側に折り返しがある。伊藤編年の（仮）A段階に比定できる。[2]

陶器皿（山皿）（282，283）ロクロ水挽き形成であり、（283）は、貼り付け高台が付く。

陶器椀（山茶椀）（286～289）共に井戸枠内下層部から出土した。（287）の底部外面には、「＋」の墨書が明瞭にのこる。（288，289）は、底部から体部にかけての立ち上がり部分が切断されており、内面が非常に滑らかである。使用痕は明瞭ではないが転用硯として用いられたと思われる。

白磁（290）口縁部が玉縁になっており、全体に施釉されている。

鎌倉時代後期

SE94出土遺物

土師器皿（291）ゆるやかに内弯しながら立ち上がり、口縁端部はヨコナデされている。

土師器鍋（292）伊藤編年の第2段階cに比定できる。

陶器椀（山茶椀）（293）井戸枠内下層部から出土し、高台に籾殻痕が残る。藤澤編年の第Ⅲ段階第7型式に相当するものであろう。[3]

陶器ねり鉢（294）山茶椀質のねり鉢である。

室町時代前期（南北町時代）

SK20出土遺物

土師器皿（295，296）口径が8.0cm前後であり、歪みが大きい。

土師器皿（297，298）口縁部はやや内弯し、直角に近い立ち上がりをする。

土師器鍋（300，301）口縁の折り返しの形状がほぼ同一であるが、（300）は口縁部と体部の間に窪んだ形状があり、頸部内面の稜線が明瞭である。伊藤編年の第3段階bに比定できる。（301）は体部から頸部にかけての屈曲が弱く、頸部外面に指オサエが認められる。伊藤編年の第3段階aに相当するものと思われる。

陶器椀（山茶椀）（299）　高台は付かず、体部は直線的に立ち上がる。藤澤編年の第Ⅳ段階9型式に相当し瀬戸産である。[4]

室町時代後期

弥生の遺物を除いて大半の遺物は、この時期のものであり土師器皿、土師器鍋、土師器羽釜、については以下の様に分類する。土師器皿は形態と口径から3類に分類できる。Ⅲa：口径7.1cm以下のものであり、底部を指オサエ、その他はナデにより成形されており、口縁部のヨコナデは明確ではない。底部が丸みをもち緩やかに立ち上がるものと、底部が平らな面をもつものとがある。Ⅲb：口径8～9cm前後のものであり、　底部が平らな面をもつように指

オサエがなされ、口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整がなされている。皿ｃ：口径10.0～12.8㎝、底部から体部にかけて指オサエがなされ、そのため体部中程に段ができ、口縁部は、ヨコナデがなされている。土師器鍋については、伊藤編年の第４段階に相当し、口縁部を中心とした形態的な特徴からa.b.c.d.e.fの６形式を伊藤裕偉氏の「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」からそのまま引用する。[5] 但し、半球形体部をもつものはこのかぎりではない。羽釜は口縁部の手法的特徴から、擬口縁を作り、その上端を包むように素地を付加するもの（口縁部ａ手法）。口縁部を外側に折り返し、広い面をもつもの（同ｂ手法）。口縁端部を折り返すことなく、方頭状に収めるもの（同ｃ手法）の３手法がある。

Ａ．ＳＫ７４出土遺物

土師器皿（303～311）　口縁の大きさが同じ様なものを何枚も重ねた形で出土した。

土師器皿は口径10.0㎝以上の大皿、径8.0㎝大の中皿、径6.0㎝代の小皿の３種類に分けられる。

数量は破片が多く正確な数は特定できないが、口縁部のある破片から３種類に分け、その数を算出すると、少なくとも大皿は32.6枚、中皿が73.7枚、小皿が28.9枚あり、それ以外に種類分けできない破片が1,442ｇ（中皿換算で約62枚分）あった。

（303，304）は皿ａ、（305，306，310，311）は皿ｂ、（307，308）は皿ｃにあたる。　どの種類の土師器皿にも灯明皿として使用したと思われる煤が付着したもの（305，306，308）が多数出土した。

又、底部内面に「乾」（310）・「艮」（309）・「坤」（311）などの陰陽道の八卦をあらわしたと思われる墨書が出土した。（309）の墨書は「良」と読めるが、おそらく書き手の間違いであったものであろうか。このような墨書土器を含む土師器皿の多量出土から祭祀に使った道具を一括廃棄した土坑と考えられる。その他出土遺物に鉄鍋（447）があり、注目される。

Ｂ．ＳＤ１出土遺物

土師器皿（328，329）皿ｂにあたる。

土師器鍋（332，333）（333）は鍋ｂにあたり、（332）は半球形体部のものであり、鍋ｃに対応するものと思われる。共に外面に煤が付着する。

土師器茶釜（331）口縁部がやや外弯しながら立ち上がり口縁端部が肥厚する。上半２カ所に把手状の偏平な突起が付く。

陶器壺（334）赤褐色の鉄釉が全面にかかり、外面の一部に灰白色の釉だれが残る。瀬戸産と思われる。

Ｃ．ＳＤ３１出土遺物

土師器鍋（336）半球形体部のものであり、鍋ｄに対応するものと思われる。

土師器把手付鍋（335）口頸部がやや外反しながら立ち上がり外側に折り返しが認められる。把手は貼り付けられた後、ナデられている。

土師器羽釜（337）口縁端部に凹があり、口縁部ｃ手法である。

Ｄ．ＳＤ３７出土遺物

土師器皿（339，340）皿ｂにあたり，（340）は口縁部に煤が付着する。

土師器鍋（342，343）（342）は鍋ｂにあたり、（343）は鍋ｃにあたる。共に外面に煤が付着する。

土師器茶釜（341）　口縁部が直口し、口縁端部が内側につまみだされている。

陶器甕（344）全面に鉄釉がかかり、常滑産と思われる。

Ｅ．ＳＤ１１７出土遺物

土師器皿（347）は皿ｂ、土師器鍋（345）は鍋ｂ、土師器茶釜（346）は口縁部がやや内弯して立ち上がる。

Ｆ．ＳＤ６１出土遺物

土師器皿（349～351）（349）は皿ａ、（350）は皿ｂ、（351）は皿ｃにあたり、（350）は口縁部に油煙が残る。

土師器鍋（352，353）共に体部が半球形のものであるが、（352）は鍋ｄ、（353）は鍋ｃに対応するものと思われる。

土師器茶釜（354）口縁部が直口し、口縁端部を外側に折り返す。

瓦質火鉢（355）口縁部はやや内弯して立ち上がり口縁端部は平らな面をもつ。

陶器甕（356）「Ｎ」字状の口縁が密着している。常滑産と思われる。

G．ＳＫ１１出土遺物

土師器鍋（358）鍋ｂにあたり、外面に煤付着。

土師器羽釜（357，360）口縁部ｃ手法である。

陶器甕（359）「N」字状に口縁部が垂下している。常滑産と思われる。

陶器椀（山茶椀）（361）外面底部に解読不能の墨書がある。貼り付け高台の形状から14世紀前半のものと思われ、混入したものと思われる。

陶器皿（362）口縁部に灰釉がかかる。瀬戸、美濃産と思われる。

陶器香炉（363）口縁部から体部外面にかけて淡緑灰色の灰釉がかかる。

H．ＳＤ３４出土遺物

土師器皿（367）は皿ａ、土師器鍋（366）は鍋ｃ、陶器盤（368）は内外面に灰釉がかかる。瀬戸、美濃産と思われる。

I．ＳＥ３９出土遺物

土師器皿（369～371）（369，370）は皿ａ、(371)は皿ｂにあたる。

土師器椀（372）貼り付け高台のみを残す。

土師器鍋（374）鍋ｃにあたる。

土師器茶釜（377）口縁部がやや内弯して立ち上がり、口縁端部を内側に折り返す。

瓦質火鉢（375）外面体部上方に２列の貼り付け凸帯を持ち、その間に雲形のスタンプを連続して押印する。３本のネコ脚を持つ。井戸中程より出土。

陶器甕（376）口縁部を外側に折り返し、外側に平な面をもつ、「N」字状口縁が垂下したものと思われる。常滑産と思われる。

J．ＳＫ３５出土遺物

土師器羽釜（377）口縁部がやや内弯して立ち上がり、口縁端部を外側につまみだす。

K．ＳＫ２７出土遺物

土師器皿（378）皿ｂである。

土師器鍋（381）体部が半球形のものであるが、鍋ｄに対応するものと思われる。

陶器香炉（379）体部はほぼ直口して立ち上がり、口縁部は外側につまみだし上面に面をもつ。

円形加工磁器（380）青磁椀の底部をほぼ円形に割り落としている。

L．ＳＫ１０６出土遺物

土師器皿（382～386）（382）は皿ｂ、(383，384)は皿ａ、解読不能の墨書が内面底部に残る（386）は皿ｃにあたる。（385）には、「祐」の字と解読不能の墨書が残る。

土師器椀（387）貼り付け高台をもち、外反して立ち上がる。外面底部に墨書痕が残る。

円形加工磁器（388，389）（388）は甕の底部、(389)は天目茶椀の底部である。

陶器こね鉢（390）体部は直線的に外側にひらくもので16世紀代の大窯期のものであろう。

M．ＳＥ１６出土遺物

土師器鍋（393）　体部が半球形のものであるが、鍋ｄに対応するものと思われる。

土師器羽釜（391，392）いずれも口縁部ｂ手法であり、（391）は端部上面にひろい面をもつ。

陶器甕（394）「N」字状の口縁が密着するが、折り返し部分に空間ができる。常滑産と思われる。

天目茶碗（395）体部下方はやや丸みを帯び、口唇部は僅かに直立し端部は外反する。瀬戸大窯編年の第２形式に相当する。[6]

N．ＳＤ６０出土遺物

土師器鍋（397）は鍋ｃに相当し天目茶椀（396）は小振りであるが、形態は（395）と類似し、瀬戸大窯編年の第２形式に相当する。

O．ＳＤ１２４出土遺物

土師器皿（400）皿ａにあたる。

土師器鍋（398，399）体部が半球形のものであるが、鍋ｃに対応する。

天目茶碗（401，402）（401）は瀬戸大窯編年の第５形式に相当し、（402）は瀬戸大窯編年の第６形式に相当する。

P．ＳＫ１２０出土遺物

土師器鍋（403，404）（403）は鍋ｃ、（404）は鍋ｅに相当する。

Q．ＳＫ１０４出土遺物

土師器鍋（405）は鍋ｂであり土師器羽釜（406）は口縁部ａ手法ある。

R．ＳＥ１０９出土遺物

土師器皿（412）皿ｂにあたる。

土師器鍋（408～410）（408）は鍋ｃ、(409，410)は鍋ｄである。

陶器おろし皿（411）明褐灰色の灰釉がかかり、内面底部に刻目がある。

陶器甕（413）「N」字状の口縁が密着し、口縁部は体部から緩やかに内弯して立ち上がる。常滑産と思われる。

S．SD17出土遺物

土師器鍋（416）は鍋d、土師器羽釜（417）は口縁部a手法であるが、最初口縁端部を外側に折り返すb手法で成形し、その後、上に素地を付加して、上面に面をもつ口縁端部を成形したと思われる。

T．SD118出土遺物

土師器鍋（418～420）（418）は鍋e、（420）は鍋c、（419）は体部が半球形のものであるが、鍋dに対応するものと思われる。

U．SK19出土遺物

土師器鍋（422）は鍋dであり、陶器甕（421）は「N」字状の口縁が密着し、折り返し部分に空間ができるものである。

V．SK75出土遺物

土師器皿（424～426）（424，425）は皿bにあたるが、（425）は器壁が厚く立ち上がりが直線的である。（426）は皿cにあたる。

土師器鍋（423）鍋bにあたる。

円形加工磁器（427）甕の底部と思われる。

W．SE101出土遺物

円形加工磁器（428）山茶碗の底部である。

X．SK58出土遺物

土師器鍋（430，431）（431）は鍋eであり、（430）は半球形体部のものであるが、鍋cに対応するものと思われる。

陶器こね鉢（432）体部が外側に直線的に開き、口縁部は外側に面をもち端部は上方につまみあげられる。

陶器甕（433）口径70cmの大型の甕であり、常滑産と思われる。

Y．その他の遺構出土遺物

土師器皿（312～320，322～327）と（314，322，323）は皿aにあたり、（323）は焼成後内から外へ向いて開けられたと思われる穿孔が3つある。（312，313，315，316，319，320，324，325）は皿bにあたり、（319）は体部中程にナデの差によると思われる段がつく。（317，318，326，327）は皿cにあたる。

土師器鍋（302，407）鍋cにあたる。

青磁椀（321）貿易陶磁であり、明代のものと思われる。

石製品（434～438）

茶臼（434）下臼のうけ皿部と思われ、SD17から出土した。外面はたがねにより成形している。

石臼（436～438）殻磨用のもので、蒲鉾縁を持つ上臼の一部である。下面には擂目がのこるが、いずれも磨耗が激しい。（436）はSD17から出土し、下面中央に径4.5cm、深さ3cm程の半球径の孔があり、「横打込み式引き手」[7]が付いていたと思われる四角い孔の痕跡が側面に認められる。又、殻落しの孔の痕跡が割れ目の断面に認められる。（437）はSD1から出土し、径5cm程の殻落しの孔があり、下面中央に径3.5cm、深さ2cm程の円形の孔がある。「切線主溝型」とよばれる溝が彫られており、8分割と推定される。[8]（438）はSE121から出土し、側面に「横打込み式引き手」が付いていたと思われる四角い孔がある。

時期不明の石臼（435）上面部と思われる面を、ほぼ平らに磨き、径約5～7cm、深さ約1～2cmの楕円形のくぼみが4ヶ所敲打によって成形されており、下面は、推定口径12cm、深さ3.5cmの楕円形のくぼみが敲打により加工してある。徳島県の若杉山遺跡から出土した石臼と形状が似かよっており、[9]確証はないが、弥生時代の朱を作るための石臼とも考えられる。

木製品（439～446）

井戸枠（439～445）

曲物（439，440）SE94の石組井戸の下層から出土し、（440）は内枠、（439）は外枠である。共に厚さ3cm程の薄い板材を円筒形に丸め、桜の樹皮と思われるもので紐状にして縫い合わており、さらにその外側を、（440）は両端に二つ、（439）はほぼ中央部に幅10cm厚さ3cm程の薄板を桜の樹皮と思われるもので紐状にして縫い合わせている。残りは良好で、ほぼ完全な形で出土した。

側板（441～444）SE73の石組井戸の最下層から、4枚の板を組み合わせた形で出土した。各法量をみ

ると全長（441，442）は約74cm・（443，444）は約80cm、幅約40cm、厚さ約2.5cmである。４枚共中央部に径３cm程の楕円形の孔があいている。

丸太のくり抜き（445）ＳＥ101の石組井戸の最下部から出土した。長径54cm短径48cmの楕円径の丸太の内側を、上部から５cm程の所までは斜めに、その下からは垂直に削ぎ落としてあり、鋭利な道具の使用を窺わせる。又、上部から20cm程の所に、人工的に開けられた径１cm程の孔が３つある。

呪符（446）ＳＥ110出土の高さ17cm、幅6.1cmの杉板を使った呪符である。板材の下部は切れ目を入れて意図的に折ってある。表面に「蘓民将来子徒也」の文字が墨書され、裏面には安倍清明判のセーマンが記されている。また、表面の文字の上面には墨痕が４か所４点の中心に向かうかのように記してある。セーマンは初筆が最上部より始まり左下に下がっていき、終筆が再び最上部に戻る一筆書きとなっている。

鉄鍋（447）ＳＫ74出土。直径約50cmほどの大型の鉄鍋と思われるものである。残りが悪いが、鍔様のものがつく。（石川隆郎）

［註］

① 斉木秀雄「井戸の発掘」『よみがえる中世３』平凡社　1989年

② 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory vol.1』三重歴史文化研究会　1990年

③ 藤澤良祐「穴田南窯址群発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗史料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館　1983年

④ 藤澤良祐氏のご教示による。

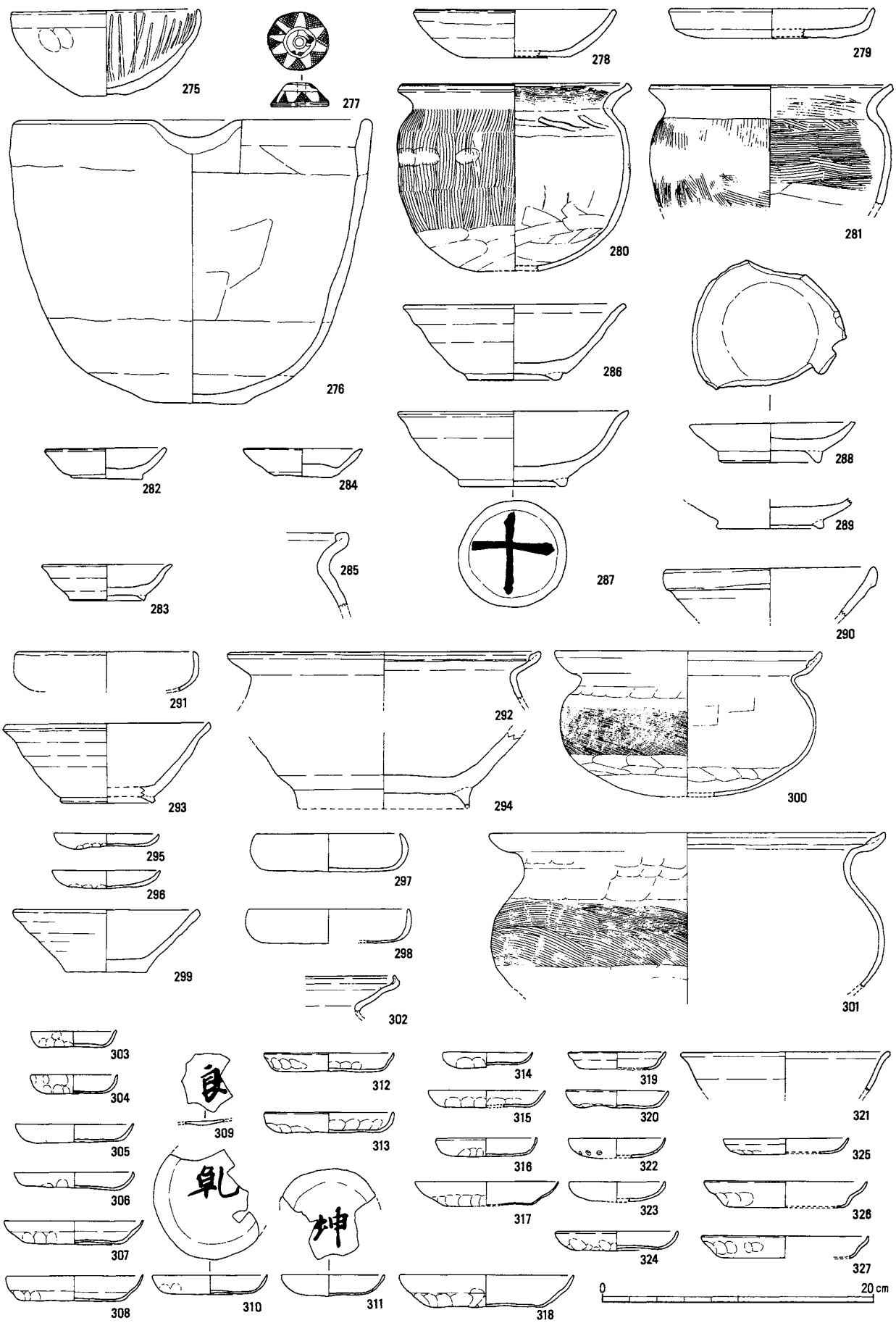
⑤ ３と同じ

⑥ 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗史料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館　1986年

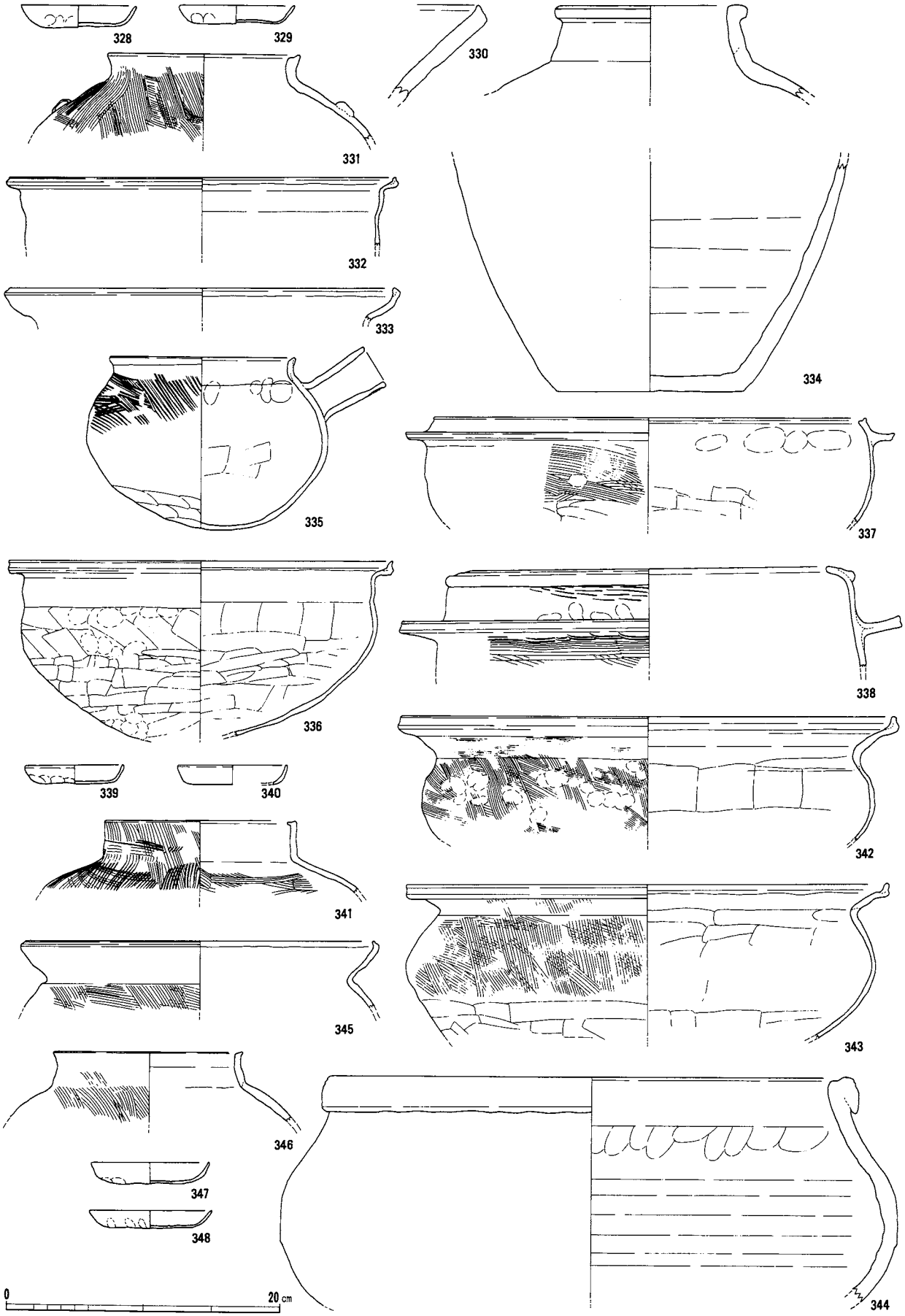
⑦ 田村陽一・増田安生「古市遺跡」『昭和59年農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』三重県教育委員会　1985年

⑧ 三輪茂雄「粉の文化史からみた民具」『民具が語る日本文化』河出書房新社　1989年

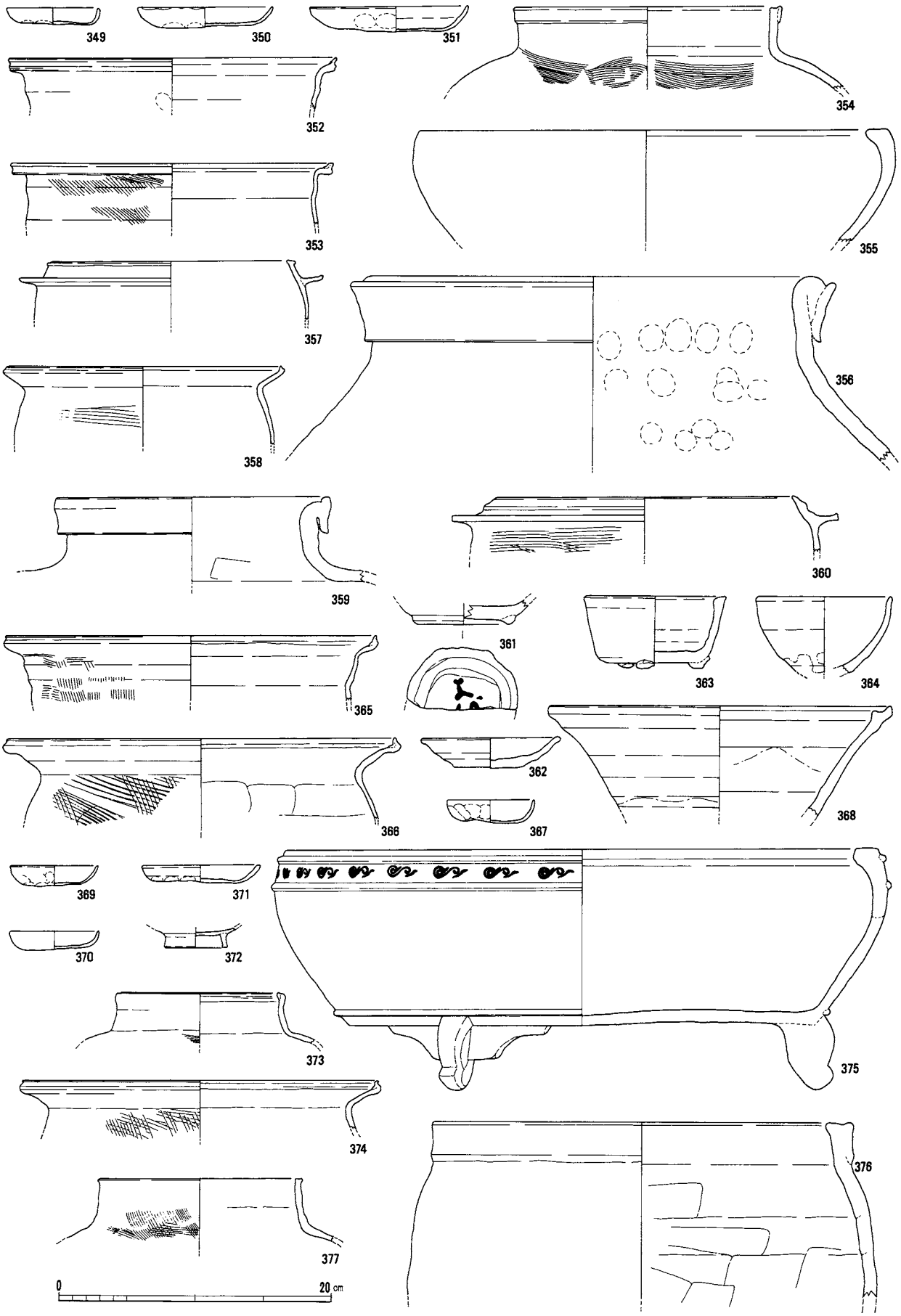
⑨ 絹川一徳ほか『若杉山遺跡発掘調査概報』徳島県教育委員会　1987年



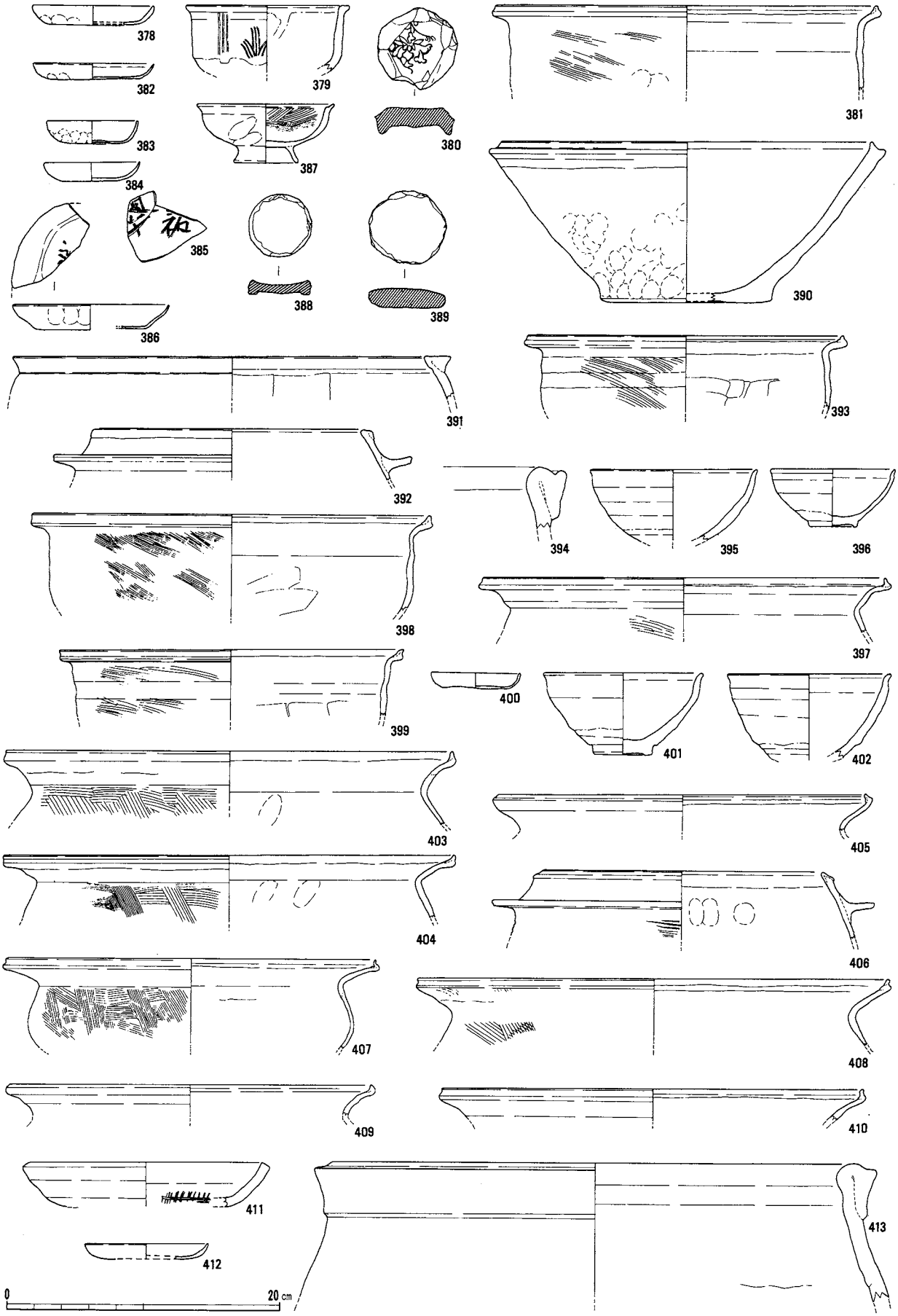
第92図　遺物実測図（１：４）



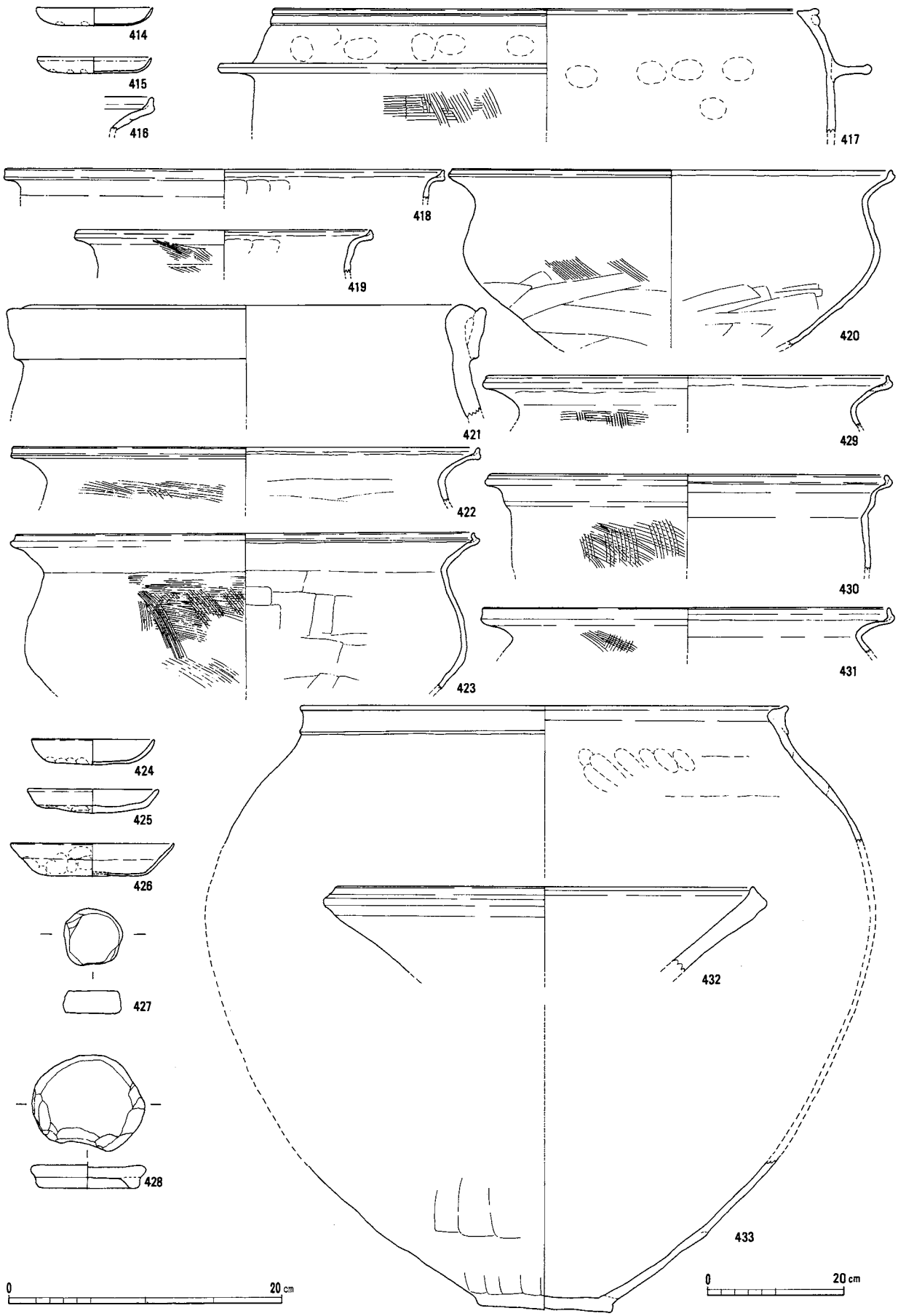
第93図　遺物実測図（１：４）



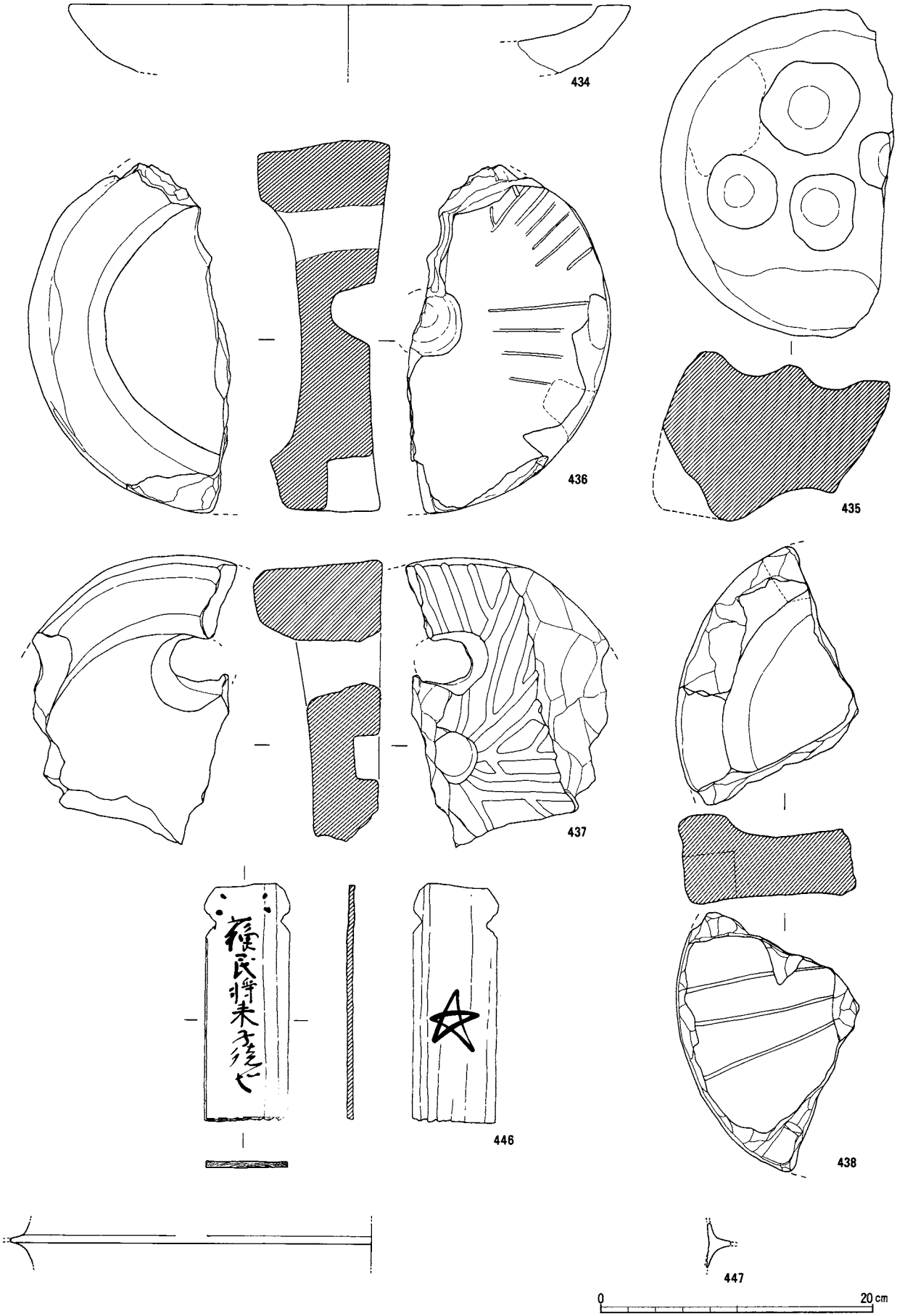
第94図　遺物実測図（１：４）



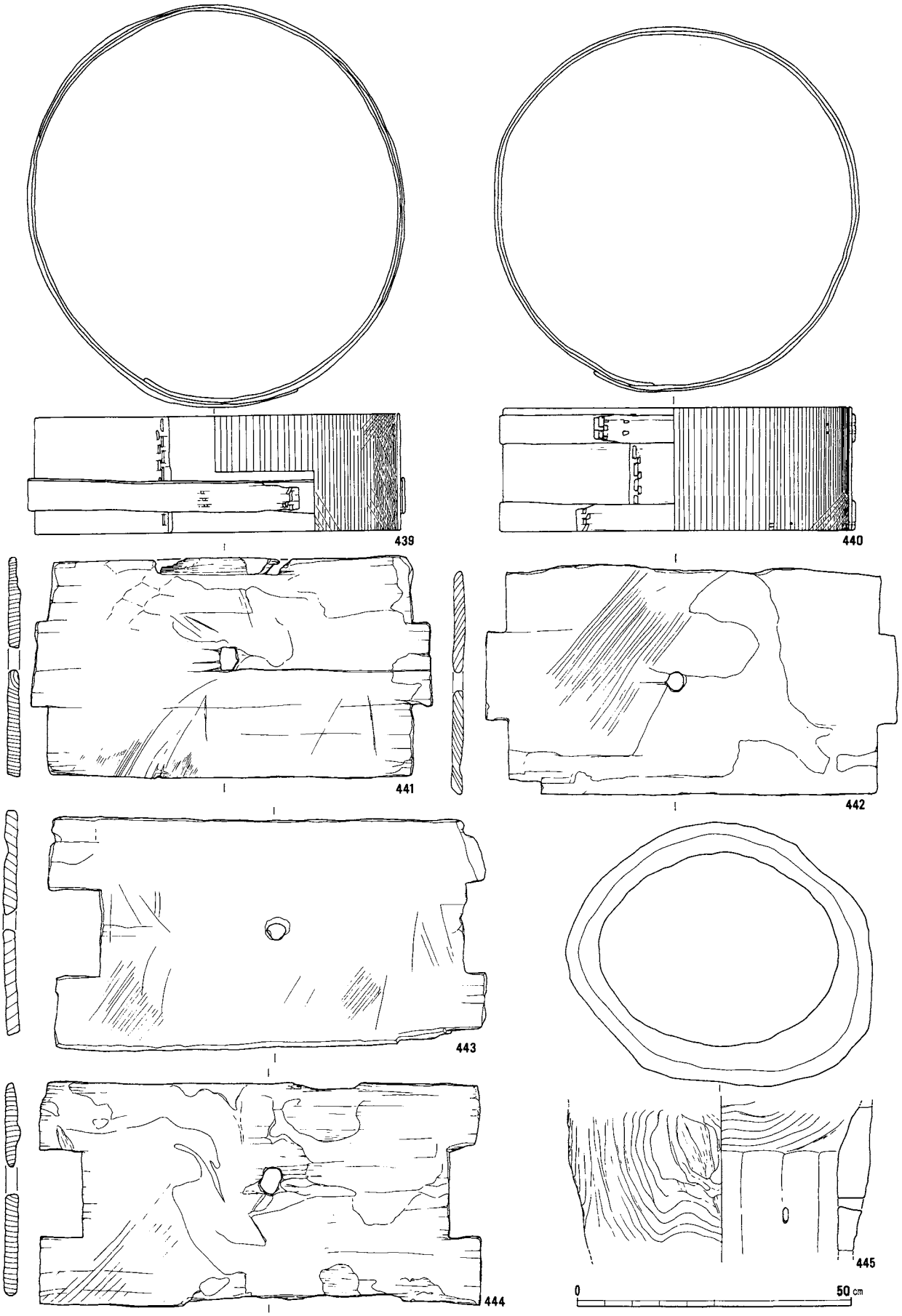
第95図　遺物実測図（１：４）



第96図　遺物実測図（１：４），ただし433は（１：８）



第97図　遺物実測図（１：４）



第98図　遺物実測図（１：８）

第38表　遺物観察表１

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(mm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
275	217-3	土師器椀	M18 SK115	13.5	6.2		内：ミガキ　口：ヨコナデ 外：ナデ	やや密（0.5mm程の小石）	良	灰褐色	完形	内面に朱を塗る 外面に煤付着
276	258-1	土師器鉢	M18 SK115	26.2	21.0		内：工具によるナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	粗（1～3mm程の小石）	良	赤橙色	完形	粘土を4段にまきあげる
277	25-2	石製紡錘車	M5 P12	底径4.3 頂径2.0	1.8	傾斜角 52°	滑石製であり、鋸歯文が施されている			白灰色	完形	
278	226-2	土師器杯	I23 SE123	14.6	3.5		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	やや密（0.5mm程の小石）	良	浅黄橙色	1／5	
279	226-3	土師器皿	I23 SE123	15.0	2.2		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、ケズリ	やや密（0.5mm程の小石）	良	浅橙色	1／5	
280	245-11	土師器甕	I23 SE123	17.0	13.7		内：ケズリ、板ナデ、ハケメ後ナデ 口：ヨコナデ、外：ハケメ、ケズリ	粗（1～3mm程の小石）	良	黄橙色	4／5	口縁部内側に煤付着 体部中央に指オサエ
281	225-1	土師器甕	H22 SE123	17.8			内：板ナデ、ハケメ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（1.0mm程の小石）	良	浅黄橙色	1／5	外面に煤付着
282	250-4	陶器皿	J5 SE91	8.8	2.3		（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り	密（0.5mm程の小石）	良	灰白色	4／5	山皿、内側に緑灰色の自然釉
283	250-3	陶器皿	J5 SE91	9.4	2.6	高台径 5.5	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り、貼付高台	密（0.5mm程の小石）	良	灰色	2／5	山皿
284	250-2	土師器皿	I5 SE91	8.6	2.1		（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り	やや密（1.0mm程の小石）	良	灰色	完形	ロクロ土師器
285	250-6	土師器鍋	I5 SE91				内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：板ナデ	やや密（1.5mm程の小石）	良	黄橙色	口縁 1／10	
286	259-3	陶器椀	I5 SE91	16.0		高台径 6.8	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り、貼付高台	密	良	淡灰色	1／2	山茶椀、内側に煤付着
287	264-4	陶器椀	I5 SE91	16.7	5.5	高台径 7.9	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り、貼付高台	密	良	灰白色	1／2	山茶椀 底部外面に十の墨書
288	259-1	陶器椀	I5 SE91			高台径 8.0	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り、貼付高台	密	良	灰白色	4／5	山茶椀質の転用硯
289	250-5	陶器椀	I5 SE91			高台径 8.0	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り、貼付高台	密（0.5mm程の小石）	良	灰白色	底部 完形	山茶椀 高台に籾殻痕
290	259-2	白磁	I5 SE91	15.0			（内、口、外） ロクロナデ	密	良	白灰色	口縁 1／5	
291	225-5	土師器皿	J5 SE94	12.8			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	やや密（0.5mm程の小石）	良	浅黄橙色	口縁 1／5	
292	226-1	土師器鍋	K5 SE94	23.0			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	やや密（1.0mm程の小石）	良	灰橙色	口縁 1／6	外面に煤付着
293	225-4	陶器椀	K5 SE94	15.2	5.8	高台径 7.0	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り、貼付高台	やや密（1.0mm程の小石）	良	灰白色	1／5	山茶椀、歪みあり 高台に籾殻痕
294	225-6	陶器ねり鉢	J5 SE94			高台径 12.1	（内、口、外） ロクロナデ、底部へラケズリ、一部未調整	粗（最大8mm程の小石）	良	暗青灰色	底部 3／5	山茶椀質
295	203-1	土師器皿	F30 SK20	7.8	0.9		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密（砂粒含む）	良	白褐色	完形	歪大
296	203-2	土師器皿	F30 SK20	8.0	1.3		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密（砂粒含む）	良	白褐色	完形	歪大
297	203-7	土師器皿	F30 SK20	11.0	2.7		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ後ナデ	密（0.5mm程の小石）	良	淡茶白色	1／3	
298	203-4	土師器皿	F30 SK20	12.0	2.5		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ後ナデ	粗（1.0mm程の小石）	軟	淡茶白色	1／3	内面に炭化物付着
299	203-3	陶器椀	F30 SK20	13.8	4.5	底部径 6.0	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り	密（1.0mm程の小石）	良	淡灰白色	1／2	山茶椀
300	203-6	土師器鍋	F30 SK20	19.5	10.6		内：ケズリ、板ナデ　口：ヨコナデ 外：オサエ、ハケメ、ケズリ	粗（1.0mm程の小石）	良	茶灰色	口縁 4／5	
301	203-5	土師器鍋	F30 SK20	29.0			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：オサエ後ナデ、ハケメ、ケズリ	粗（1.0mm程の小石）	良	淡褐色	口縁 2／5	
302	215-1	土師器鍋	F14 SD26				内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密	良	黄白色	口縁 1／15	
303	232-6	土師器皿	F2 SK74	6.2	1.4		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	9／10	
304	232-5	土師器皿	F2 SK74	6.4	1.1		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	9／10	
305	237-6	土師器皿	F2 SK74	8.6	1.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	灰褐色	完形	口縁から内面底部に煤付着
306	232-4	土師器皿	F2 SK74	8.8	1.2		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	9／10	口縁部3ヶ所に煤付着

第39表　遺物観察表２

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量（mm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
307	242-8	土師器皿	F２ SK74	10.3	1.7		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	完形	
308	242-4	土師器皿	F２ SK74	10.0	1.8		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	３／５	口縁部に煤付着
309	237-3	土師器皿	F２ SK74				ナデ	密	良	浅黄橙色	底部 １／２	底部内面　墨書「良」
310	242-5	土師器皿	F２ SK74	8.6	1.4		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	７／10	内面に墨書「乾」
311	242-1	土師器皿	F２ SK74	7.6	1.6		内：ナデ 外：ナデ	密	良	浅黄橙色	２／５	内面に墨書「坤」
312	235-6	土師器皿	E10 SK54	9.6	1.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密（0.5mm程の小石）	良	黄灰色	２／５	
313	235-7	土師器皿	E10 SK54	9.6	1.5		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	黄灰色	１／２	歪大
314	217-6	土師器皿	K２ SE99	6.6	1.2		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅橙色	１／２	
315	217-5	土師器皿	K２ SE99	8.4	1.2		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅橙色	４／５	
316	252-3	土師器皿	C３ SK66	7.3	1.4		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ後ナデ	密	良	灰褐色	４／５	
317	252-4	土師器皿	C３ SK66	10.6	1.7		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	やや密	並	淡茶白色	１／３	
318	210-1	土師器皿	M14 SD26	12.8	2.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	黄灰色	１／２	歪大
319	235-9	土師器皿	B９ SK59	7.2	1.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密	良	灰白色	１／３	
320	235-8	土師器皿	B９ SK59	7.6	1.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	灰黄色	１／３	
321	235-3	青磁椀	B９ SK59	15.4			（内、口、外） ロクロナデ	密	良	淡緑青	口縁 １／５	
322	225-2	土師器皿	H６ SE83	7.0	1.4		内：ナデ 外：ナデ	密	良	灰褐色	１／５	焼成後内から外へ穿孔３つ
323	225-3	土師器皿	N４ SE110	7.1	1.4		内：ナデ 外：ナデ	やや密（0.5mm程の小石）	良	灰褐色	１／６	
324	248-3	土師器皿	H５ SK81	8.8	1.4		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	やや密（1.0mm程の小石）	良	浅黄橙色	１／２	口縁部に煤付着
325	256-3	土師器皿	F10 SK41	9.2	1.1		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	口縁 １／６	
326	256-4	土師器皿	F10 SK41	12.0	1.9		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	口縁 １／４	
327	245-2	土師器皿	B10 SK44	12.2	1.6		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	赤褐色	口縁 １／４	
328	233-1	土師器皿	G49 SD１下層	8.4	1.6		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	やや密（1.0mm程の小石）	良	浅黄橙色	３／５	
329	233-2	土師器皿	G49 SD１下層	8.2	1.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	４／５	
330	224-4	土師器ねり鉢	G47 SD１				内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	やや密（1.0mm程の小石）	良	淡橙色	口縁 １／10	口縁部に灰茶褐の釉がかかる
331	229-1	土師器茶釜	G47 SD１	14.0			内：工具よるナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（1.0mm程の小石）	良	黄橙色	口縁 １／３	外面に煤付着
332	224-1	土師器鍋	H48 SD１	28.2			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：オサエ後ナデ	密（0.5mm程の小石）	良	灰褐色	口縁 １／６	外面に煤付着
333	224-2	土師器鍋	G47 SD１	28.0			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密（0.5mm程の小石）	良	黄橙色	口縁 １／10	外面に煤付着
334	231-1	陶器壺	G47 SD１	14.0		底部径 12.4	（内、口、外） ロクロナデ、内面底部ヨコ方向の強いナデ	密	良	赤褐色	２／５	瀬戸鉄釉が全面にかかる
335	223-1	土師器 把手付鍋	F13 SD31	13.6	12.6		内：板ナデ、ナデ、指オサエ　口：ヨコナデ 外：ハケメ、オサエ後ナデ、ケズリ、把手貼付	密	良	黒褐色	３／５	口縁部歪大
336	221-1	土師器鍋	G13 SD31	27.8			内：板ナデ、ケズリ、ナデ　口：ヨコナデ 外：板ナデ、ケズリ、オサエ	密（0.5mm程の小石）	良	黄橙色	７／10	外面に煤付着
337	215-3	土師器羽釜	G13 SD31	31.6			内：板ナデ、オサエ　口：ヨコナデ 外：ナデ、ハケメ、ケズリ	密	良	暗褐色	口縁 １／６	外面に煤付着
338	253-1	土師器羽釜	N２ SD105	25.8			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：指オサエ、ハケメ	粗（３mm程の小石）	軟	淡灰色	口縁 １／10	羽より下に煤付着

第40表　遺物観察表３

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量（mm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
339	244-4	土師器皿	C11 SD37	7.2	1.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	灰褐色	1／3	
340	244-5	土師器皿	C11 SD37	8.0	1.4		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	黄灰色	口縁 1／3	口縁部に煤付着
341	235-2	土師器茶釜	G11 SD37	14.0			内：ハケメ、ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	黄橙色	口縁 1／5	
342	257-1	土師器鍋	D11 SD37	35.8			内：板ナデ、ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ、指オサエ	やや密（0.5mm程の小石）	良	灰褐色	口縁 1／2	
343	261-1	土師器鍋	D11 SD37	35.0			内：ケズリ、板ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ、ケズリ	密	良	黄橙色	3／5	
344	244-1	陶器甕	C11 SD37	36.8			内：ナデ、指オサエ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密	良	赤茶褐色	口縁 1／6	全面に鉄釉 常滑産？
345	219-2	土師器鍋	M20 SD117	26.0			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（0.5mm程の小石）	良	浅黄橙色	口縁 1／6	外面に煤付着
346	220-1	土師器茶釜	M20 SD117	13.8			内：工具によるナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密（0.5mm程の小石）	良	黄橙色	口縁 9／10	外面に煤付着
347	206-4	土師器皿	M20 SD117	8.6	1.5		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	黄橙色	1／3	
348	204-3	土師器皿	L4 P3 SB137	8.9	1.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	灰茶褐色	2／5	内面に炭化物付着
349	211-4	土師器皿	E4 SD61	6.7	1.2		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	9／10	
350	211-1	土師器皿	E5 SD61	9.8	1.5		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	4／5	口縁部に煤付着
351	211-2	土師器皿	D5 SD61	12.8	1.9		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	1／2	
352	216-3	土師器鍋	F6 SD61	23.8			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、オサエ	やや密（0.5mm程の小石）	良	浅黄橙色	口縁 3／5	
353	230-3	土師器鍋	F6 SD61	23.6			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	明黄褐色	口縁 1／6	
354	235-1	土師器茶釜	D5 SD61	19.6			内：ハケメ、ヘラナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	黄褐色	口縁 1／5	
355	211-3	瓦質火鉢	D5 SD61	37.0			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密	軟	灰白色	口縁 1／10	半焼成の状態
356	222-1	陶器甕	F6 SD61	35.2			内：指オサエ、ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密（1.0mm程の小石）	良	灰褐色	口縁 1／6	常滑産
357	241-2	土師器羽釜	G37 SK11	17.2			内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：工具によるナデ	密	良	淡黄橙色	口縁 1／6	外面に煤付着
358	268-1	土師器鍋	F37 SK11	20.0			内：工具によるナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（0.5mm程の小石）	良	灰黄橙色	口縁 1／6	外面に煤付着
359	243-2	陶器甕	F37 SK11	19.6			内：工具によるナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密（0.5mm程の小石）	良	赤褐色	口縁 1／6	
360	254-5	土師器羽釜	F37 SK11	23.4			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（0.5mm程の小石）	良	黄灰白色	口縁 1／6	
361	242-7	陶器椀	F37 SK11			高台径 7.4	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り、貼付高台	密（1.0mm程の小石）	良	灰白色	底部 1／2	山茶椀 底部外面に墨書
362	256-2	陶器皿	F37 SK11	10.2	2.2	底部径 7.1	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り	密（0.5mm程の小石）	良	灰黄色	1／2	口縁部に灰釉 瀬戸、美濃産？
363	241-3	陶器香炉	G37 SK11	10.3	5.2	底部径 7.8	（内、口、外） ロクロナデ、底部糸切り、貼付三足	密	良	灰白色	1／2	口縁部から体部にかけて淡緑灰の灰釉
364	210-3	天目茶椀	F12 SD34	10.0			体部外面下半にロクロケズリ	密	良	黄褐色	1／3	全面に黒褐色の鉄釉
365	233-3	土師器鍋	G48 SD2	27.0			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	黄橙色	口縁 1／10	外面に煤付着
366	210-5	土師器鍋	F12 SD34	29.0			内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	黄灰色	口縁 1／7	外面に煤付着
367	210-2	土師器皿	F12 SD34	6.9	1.7		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	黄白色	完形	
368	215-4	陶器盤	F12 SD34	23.0			ロクロナデ 体部外面下半にロクロケズリ	密	軟	灰白色	1／10	瀬戸美濃産 内外面に灰釉
369	257-3	土師器皿	E11 SE39	6.5	1.5		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密（0.5mm程の小石）	良	黄橙色	完形	
370	257-2	土師器皿	E11 SE39	6.4	1.4		内：ナデ 外：ナデ、オサエ	密	良	灰褐色	9／10	口縁２ヶ所に煤付着

第41表　遺物観察表 4

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量（mm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
371	257-4	土師器皿	E11 SE39	8.5	1.4		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密（0.5mm程の小石）	良	浅黄橙色	完形	口縁1ヶ所に煤付着
372	257-5	土師器椀	E11 SE39			底部 4.6	ナデ、貼付高台	密	良	浅黄橙色	底部 3／5	
373	257-6	土師器茶釜	E11 SE39	11.4			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	浅黄橙色	口縁 1／6	
374	264-1	土師器鍋	E11 SE39	26.0	12.5		内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（0.5mm程の小石）	良	淡橙色	口縁 1／6	外面に煤付着
375	202-1	瓦質火鉢	E11 SE39	43.6	17.5	底部 34	内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ヘラナデ、貼付突帯、貼付ネコ足3ヶ所	密	良	内:黒灰色 外:灰白色	1／2	内面に布の痕跡
376	260-1	陶器甕	E11 SE39	31.6			内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密	良	赤褐色	口縁 1／4	常滑産（？）
377	256-1	土師器茶釜	F12 SK35	15.0			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（0.5mm程の小石）	良	浅黄橙色	口縁 1／10	
378	251-3	土師器皿	G16 SK27	8.8	1.4		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	灰黄橙色	口縁 1／6	
379	251-1	陶器香炉	G16 SK27	11.9			ロクロナデ	密	良	灰白色	1／10	外面に線刻文 口縁から体部に黒褐色の鉄釉
380	251-4	円形加工磁器	G16 SK27			径 5.1	ロクロナデ、高台ケズリ出し	密	良	灰緑色	底部 完形	青磁を加工 内面に花がらの文様
381	255-1	土師器鍋	G16 SK27	27.6			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ、指オサエ	密	良	黄橙色	口縁 1／4	外面に煤付着
382	251-2	土師器皿	M4 SK106	8.7	1.2		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密	良	明褐灰色	2／5	
383	249-4	土師器皿	L4 SK106	6.6	1.7		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	やや密	良	浅黄橙色	完形	歪大
384	205-4	土師器皿	M4 SK106	7.0	1.4		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	やや密	良	灰白色	2／5	
385	217-4	土師器皿	M4 SK106				ナデ	密	良	浅黄橙色	底部 1／4	内面底部に墨書「祐」
386	217-2	土師器皿	M4 SK106	11.4	1.9		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	1／5	内面底部に墨書
387	217-1	土師器椀	M4 SK106	10.0	4.3	高台径 5.1	内：ナデ後ハケメ　口：ヨコナデ 外：ナデ、貼付高台	密	良	浅黄橙色	1／4	外面底部に墨書痕
388	249-6	円形加工陶器	L4 SK106			径 4.5	ロクロナデ、高台ケズリ出し	密	良	赤褐色	底部 完形	黒褐色の釉がかかる 天目茶椀を加工
389	249-5	円形加工陶器	L4 SK106			径 5.0	ナデ	粗（1mm程の小石）	良	黄橙色	底部 完形	甕を加工
390	249-3	陶器こね鉢	M4 SK106	26.8	11.7		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：工具によるナデ、指オサエ	粗（2mm程の小石）	良	赤褐色	1／5	内面底部に使用痕あり
391	212-6	土師器羽釜	F23 SE16	32.0			内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	やや密（1.5mm程の小石）	良	浅黄橙色	口縁 1／6	
392	213-3	土師器羽釜	F24 SE16	19.1			内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ	やや密（1mm程の小石）	良	浅黄橙色	口縁 1／10	
393	212-4	土師器鍋	F23 SE16	23.5			内：ケズリ、ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	黄橙色	口縁 1／5	器表に煤付着
394	213-5	陶器甕	G23 SE16				（内、口、外） ロクロナデ	やや密（1mm程の小石）	良	赤褐色	口縁 1／10	口縁部に自然釉 常滑産？
395	213-4	天目茶椀	F24 SE16	12.2			（内、口、外） ロクロナデ、外面底部ロクロケズリ	密	良	赤橙色	口縁 1／4	黒褐色の鉄釉
396	252-2	天目茶椀	D1 SK60	7.1	4.2		（内、口、外） ロクロナデ、ケズリ出し高台	密	良	灰白色	2／5	暗茶褐色の鉄釉
397	266-1	土師器鍋	D6 SK60	29.0			口：ヨコナデ	密	良	淡茶白色	口縁 1／6	外面に煤付着
398	218-1	土師器鍋	G22 SD124	29.0			内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（0.5mm程の小石）	良	灰褐色	口縁 1／6	外面に煤付着
399	218-2	土師器鍋	G21 SD124	25.0			内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	灰褐色	口縁 1／6	外面に煤付着
400	206-3	土師器皿	G22 SD124	6.4	1.1		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	橙色	1／3	
401	206-1	天目茶椀	G22 SD124	11.6	5.9	高台径 4.3	（内、口、外） ロクロナデ、ケズリ出し高台	密	良	黄橙色	1／2	黒褐色の鉄釉
402	206-2	天目茶椀	G22 SD124	11.9			（内、口、外） ロクロナデ、外面底部ロクロケズリ	密	良	灰褐色	2／5	黒褐色の鉄釉

第42表　遺物観察表５

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量（mm） 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
403	205-2	土師器鍋	M23 SK120	32.6			内：指オサエ、ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	灰白色	口縁 1／10	
404	205-1	土師器鍋	M23 SK120	32.8			内：指オサエ、ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	浅黄橙色	口縁 1／6	
405	253-3	土師器鍋	N2 SK104	26.6			口：ヨコナデ	密	良	明黄灰色	口縁 1／10	外面に煤付着
406	253-4	土師器羽釜	N2 SK104	20.2			内：ナデ、オサエ　口：ヨコナデ 外：ナデ	密	軟	淡灰白色	口縁 1／10	
407	268-2	土師器鍋	G50 SK3	26.8			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	黄橙色	1／10	外面に煤付着
408	207-2	土師器鍋	M38 SE129	34.2			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	橙色	口縁 1／8	外面に煤付着
409	207-1	土師器鍋	M37 SE129	26.4			口：ヨコナデ	やや密（0.5mm程の小石）	良	浅黄橙色	口縁 1／10	外面に煤付着
410	207-3	土師器鍋	M37 SE129	30.6			口：ヨコナデ	やや密	良	浅黄橙色	口縁 1／10	
411	209-1	陶器おろし皿	M38 SE129	18.0			（内、口、外） ロクロナデ、外面底部ロクロケズリ	密	良	灰白色	口縁 1／10	明褐灰色の灰釉 内面底部に刻目
412	207-4	土師器皿	M38 SK129	9.0	1.1		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、オサエ	密	良	浅黄橙色	口縁 1／3	口縁に煤付着
413	209-2	陶器甕	M37 SE129	41.0			（内、口、外） ロクロナデ	やや密（1mm程の小石）	良	赤褐色	口縁 1／10	
414	204-1	土師器皿	J23P6 SB133	8.5	1.3		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	淡褐色	2／5	
415	204-4	土師器皿	D10P1 SB141	8.3	1.2		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	淡灰褐色	2／5	口縁に煤付着
416	240-2	土師器鍋	F29 SD17				口：ヨコナデ	密	良	淡橙色	口縁 1／15	
417	240-3	土師器羽釜	F29 SD17	39.4			内：ナデ、指オサエ　口：ヨコナデ 外：指オサエ、ハケメ	密	良	浅黄橙色	口縁 1／7	羽の下の外面に煤付着
418	208-6	土師器鍋	M18 SK118	32.0			口：ヨコナデ	密	良	浅黄橙色	口縁 1／12	外面に煤付着
419	208-5	土師器鍋	M18 SK118	21.4			内：ナデ、オサエ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	浅黄橙色	口縁 1／12	外面に煤付着
420	219-1	土師器鍋	M20 SK118	32.0			内：ケズリ、ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ、ケズリ	密	良	灰褐色	1／4	外面に煤付着
421	250-1	陶器甕	G22 SK19	35.0			（内、口、外） ロクロナデ　口：口縁折り返し	密	良	暗赤褐色	口縁 1／10	常滑産 器表に釉（緑灰）
422	254-1	土師器鍋	G23 SK19	34.0			内：板ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（1mm程の小石）	良	黄橙色	口縁 1／7	外面に煤付着
423	247-1	土師器鍋	G3 SK75	33.4			内：ケズリ、板ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	浅黄橙色	1／2	外面に煤付着
424	246-1	土師器皿	F3 SK75	9.0	1.8		内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	4／5	
425	246-3	土師器皿	G3 SK75	9.6	1.8		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	黄褐橙色	3／5	
426	246-2	土師器皿	F3 SK75	12.0	2.4		内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ナデ、指オサエ	密	良	浅黄橙色	1／3	
427	246-6	円形加工陶器	G3 SK75			径 4.2	ロクロナデ	密	良	橙色	底部 9／10	甕を加工
428	227-5	円形加工陶器	M2 SE101			径 8.4	ロクロナデ、貼付高台	やや密（0.5mm程の小石）	良	灰白色	底部 9／10	山茶椀を加工
429	208-3	土師器鍋	N4 SK108	29.4			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	やや密（0.5mm程の小石）	良	淡黄色	口縁 1／10	外面に煤付着
430	267-1	土師器鍋	F7 SK58	28.8			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	灰黄橙色	口縁 1／2	外面に煤付着
431	266-3	土師器鍋	E6 SK58	29.8			内：ナデ　口：ヨコナデ 外：ハケメ	密	良	黄橙色	口縁 1／2	外面に煤付着
432	252-6	陶器こね鉢	F6 SK58	30.0			内：使用のため磨耗　口：ヨコナデ 外：ナデ	やや密（2mm程の小石）	並	赤茶褐色	口縁 1／10	常滑産
433	263-1	陶器甕	SK58	70.0	推定 87.2	底部径 19.1	内：ナデ、指オサエ　口：ヨコナデ 外：ナデ、ケズリ	密	良		口縁 1／2 底部完	

7．環濠電気探査結果

応用地質株式会社歴史環境部
坂山利彦　田村晃一　軽部文雄

1．調査件名　阿形遺跡発掘調査環濠電気探査

2．調査内容　直流比抵抗法電気探査
（比抵抗マッピング）

3．調 査 地　三重県松阪市阿形町地内
（図106参照）

4．調査期間　平成４年１月30日～３月10日
（現地測定：平成４年２月17～20日）

5．調査の方法

［比抵抗マッピングの探査原理と調査方法］

地盤には比較的良く電流が流れる。

物質の電気の流れやすさを導電率σ（mho／m）といい、その逆数を比抵抗ρ（Ω・m）という。

$$\rho\ (\Omega \cdot m) = \frac{1}{\sigma\ (mho/m)}$$

地盤の比抵抗は、土の種類、土の締め固め度を表す間隙率、含水率などの相違に応じて変化するため、比抵抗分布を把握することにより、地盤内の状況を推定することが可能である。

土の種類からみると、比抵抗は、粘土分の多い土ほど小さく、砂の多い土ほど大きい。また、間隙率が小さく含水率が大きい土ほど比抵抗は小さくなる。したがって、比抵抗値は、自然の堆積、浸食作用、地下水分布などのほかに、耕作地、道路といった地盤の利用状況や、歴史的な遺構の分布状況にも左右される結果となる。比抵抗マッピングは、地盤表層部の比抵抗分布を平面的に測定し、土質の分布や遺構の存在の可能性などを推定するものである。

全く平坦な地面に電流電極を設置し、その電極から電流Ｉを流すと、地盤が一様な場合には図99のように放射状に電流が流れる。そのときの地盤内での等ポテンシャル（電位）面は電流電極を中心とする同心円になる。

電流電極からの距離ｒにある点における電流密度ｉは、

$$i = \frac{I}{2\pi r^2}$$ となる。

その点における電位勾配ｄＶ／ｄｒは電流密度ｉに比例し、その比例定数が比抵抗ρである。

地盤に流す電流Ｉと、それから距離ｒだけ離れた地表における電位Ｖを測れば、地盤の比抵抗は次式から求めることができる。

$$\rho = 2\pi r \frac{V}{I}$$

このようにしてもとめられる比抵抗は、深さ約ｒまでの平均的な比抵抗を示すものと考えられ、この値を見掛け比抵抗という。

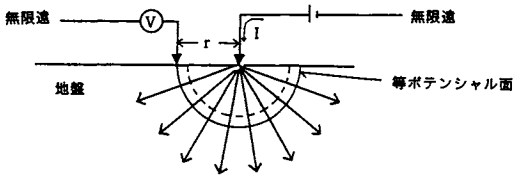
比抵抗マッピングの測定器（resistance meter）と、電極枠からなっている。電極枠には電流電極と電位電極が取り付けてあり、これを地表に設置することによって測定を行う。

比抵抗マッピングの測定点は調査地全域を面的に網羅するために、１ｍないし２ｍ格子に設定する。次に、十分遠方に、電流電極、電位電極各一本を固定設置し、それらをケーブルで測定器に接続する。測定は、各測定点ごとに測定器を移動、設置し、測定値をそれぞれ記録するものである。

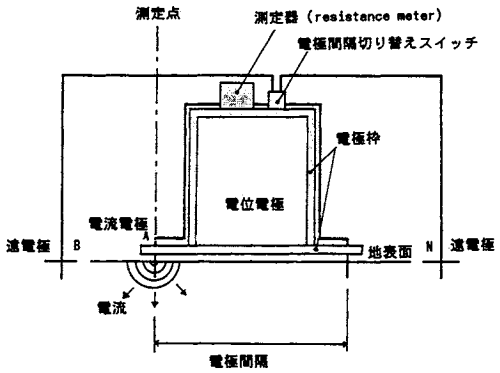
こうして得られた測定値（Ｒ＝Ｖ／Ｉ）を見掛け比抵抗値に換算し、見掛け比抵抗分布図を作成する。これによって、比抵抗分布状況が把握される。考古学上の遺構など、周囲とは異なる地盤構造の存在は、比抵抗の高低差や変化となってあらわれるため、そのような箇所に着目し地盤状況を推定する。

なお、解析には計算機を使用する。

また、探査に使用した測定装置の主な仕様を表に示す。



第99図　地盤の比抵抗の測定原理



第100図　比抵抗マッピングの測定装置

第43表　探査装置仕様

大地比抵抗計　ＲＭ－４　英国 Geoscan社製	
測定レンジ	0 ～2000・0 ～200 ・0 ～20　Ω
最小表示単位	1・ 0.1 ・ 0.01　Ω
最大接地抵抗	40ＫΩ
フィルター	２段スイッチ切り替え
	fast- rural モード
	slow- urban モード
外部出力	アナログ出力　２V_{o-p} ／レンジ
	レンジステイタスビット信号付き
消費電力	230 mW
	（完全充電状態で約22時間連続測定可能）
動作温度範囲	0～50℃
函体寸法	85×80×160 cm
重量	890 g（バッテリー込み）

6．探査区域および測定数量

本調査区における比抵抗マッピングの測定区域を図106に示す。

測定区はＡ～Ｆ区の計６区に分けて設定した。これらの測定区は、環濠の分布状況を把握するために、先の発掘調査の結果からみて、できるだけ溝状遺構（環濠）の拡がりが想定されるような区域を選定したものである。測定点はいずれも１ｍ間隔の格子状とした。また、探査深度は1.2mである。

各区ごとの測定数量は、以下のとおりである。

第44表　測定数量表

探査区	面積	測定点数
Ａ区	46×15＝690 ㎡	752
Ｂ区	30×25＝750 ㎡	806
Ｃ区	30×25＝750 ㎡	808
Ｄ区	44×10＝440 ㎡	495
Ｅ区	25×10＝250 ㎡	286
Ｆ区	12×10＝120 ㎡	143
計	3000㎡	3288点

7．調査の結果

各探査区ごとの結果を第101図～図105に示す。これは、深度1.2mまでの平均的な比抵抗の分布である。また、図106は、Ａ～Ｆ区の結果をまとめて俯瞰したものである。なお、溝状遺構の推定位置を図中の矢印によって示すこととした。

全体としてみると、Ａ区南西部やＢ区北西部など、さきに発掘調査がなされた区域の付近では、200Ω・ｍをこす高比抵抗域が卓越して見られる。これに対し、より北側または東側の探査区では100Ω・ｍ程度もしくはそれ以下の低い比抵抗値が得られていて、とりわけＡ区北東域とＤ区では、50～70Ω・ｍとなっている。広範囲のスケールでみられるこうした比抵抗の著しいコントラストは、かつての旧地形の変化にともない、地表付近の土質状況が広域規模で異なっていることを反映した結果と推定される。近くを流れる阪内川が、かつてその流路を変化させてきた結果であることも考えられ、このような大局的傾向は、環濠遺構の分布を推定する際にも、その影響を無視することができない。

すでに、５．調査の方法　でも述べたとおり、一般的には粘性に富み、含水率の高い土壌ほど低い比抵抗値を示し、逆に砂礫分の多い土壌は高比抵抗域となって現れてくる。今回の探査の対象である弥生時代の環濠についてみると、想定される溝幅が２～６ｍ、深さ１～２ｍと、遺構としてはかなり大規模な溝ではあるが、遺構覆土内の土壌物性の違いや、周囲の地盤の土質傾向との相対的な関係などによって、比抵抗分布の表われ方も大きく左右されるため、環濠（溝状遺構）が必ずしも常に同様の分布パターンをとるとは限らない。

結果のうち、環濠遺構の分布状況を考える上で最も注目されるのは、Ｂ・Ｆ区である。Ｂ・Ｆ区の北

西部は高比抵抗が卓越しているものの、東西に走向を有する低比抵抗帯がみられ、さらにこれと直交するように、南北方向の高比抵抗域が断続的かつ帯状に連なっている。これらの分布は、既に発掘で確認されている溝のうち、北から伸びてきて南東方向に屈曲しているものと、西から伸びているものの双方がここで互いに交差している可能性を示唆するものと考えられる。

A区の高比抵抗域は、前述したような全体的傾向の一部と考えたほうが自然で、遺構の存在に直接結びつくとは思われない。むしろ、その西側の相対的な低比抵抗域が南北方向の溝跡に比定しうるものとみられ、その位置関係から、発掘により確認された平行な4本の溝のうち最も西側の溝との連続が想定される。

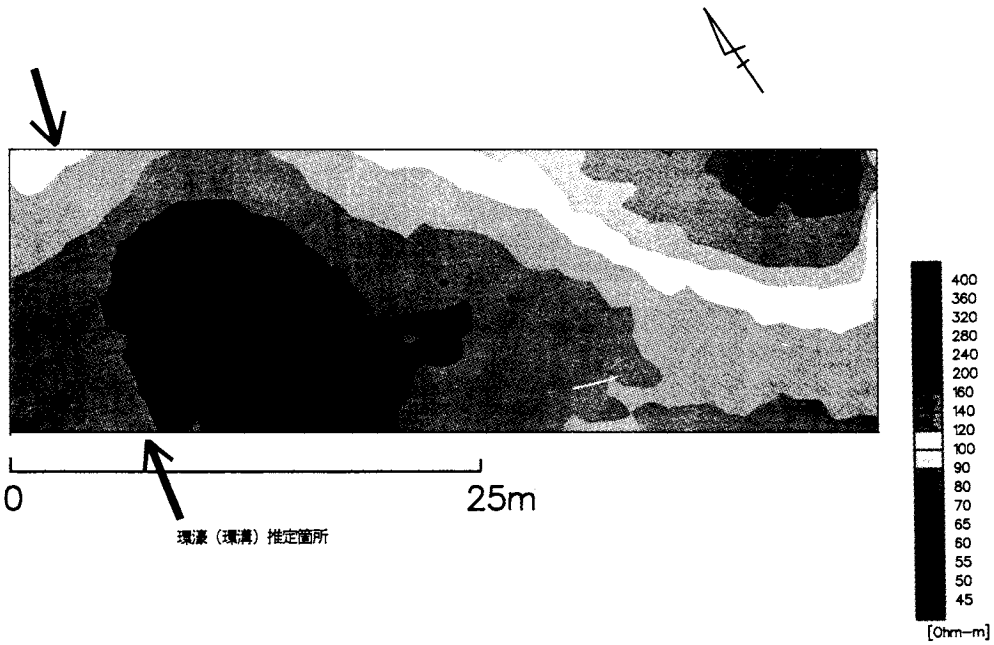
一方、これと逆に、120Ω・m以下の低比抵抗域がほとんどを占めているD区では、探査区の北西部を帯状に横断している相対的な高比抵抗域が、溝状遺構と相関関係があると考えられる。発掘された環濠のうち最も幅の広い溝は、A区・D区にそのつながりを明瞭にみとめることはできない。もし、この溝が北東から東方向へ屈曲しているとすれば、E区北端部の高比抵抗域はこれを捕捉したものとかんがえることができる。

C区においては、ほぼ全域にわたって平均的に、100～120Ω・m程度の比抵抗値が得られ、おおむね一定しており、遺構の存在を積極的に示唆するような分布結果とはいえない。

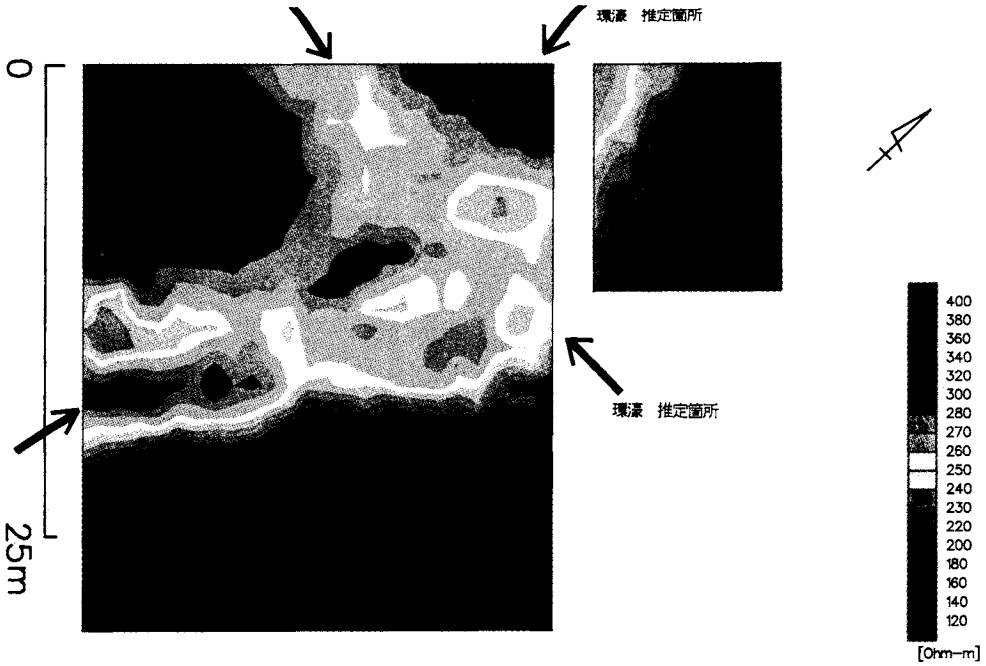
以上のような推定結果をまとめ、環濠の分布状況の想定を試みたものが図107である。

8．地下レーダー探査について

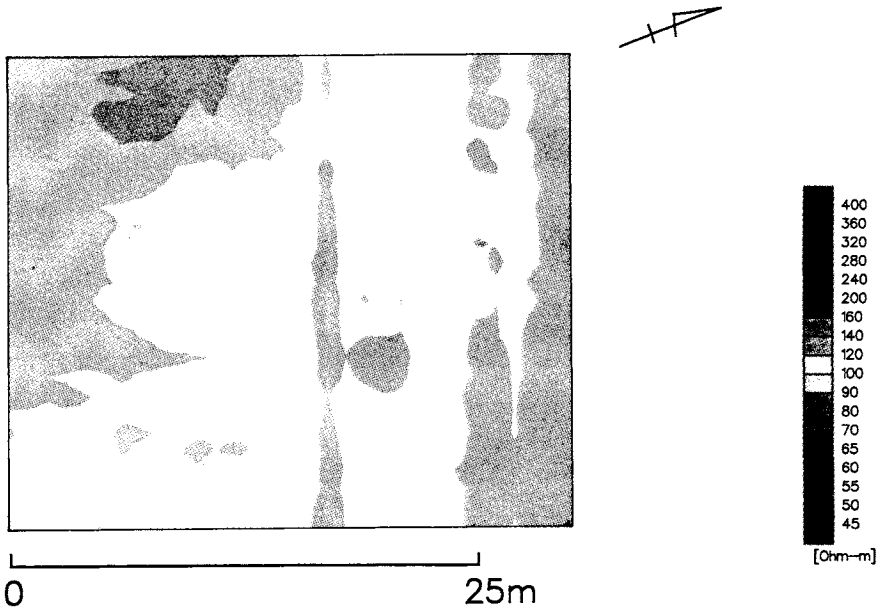
電波探査と同時に地下レーダー探査を実施した。探査区域は環濠の広がりの想定される地点を中心に行われた。結果は図109のようになり、電波探査と同じような結果になった。



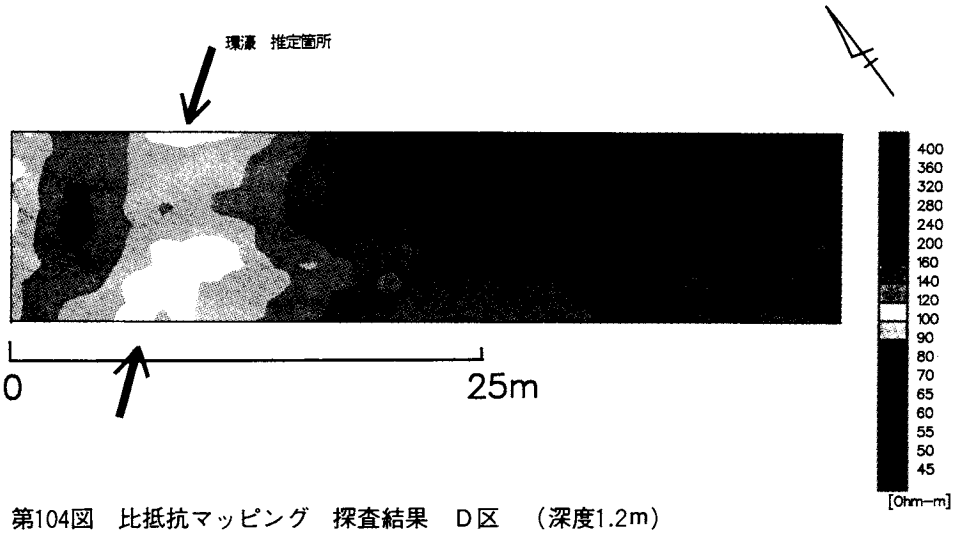
第101図　比抵抗マッピング　探査結果　A区　（深度1.2m）



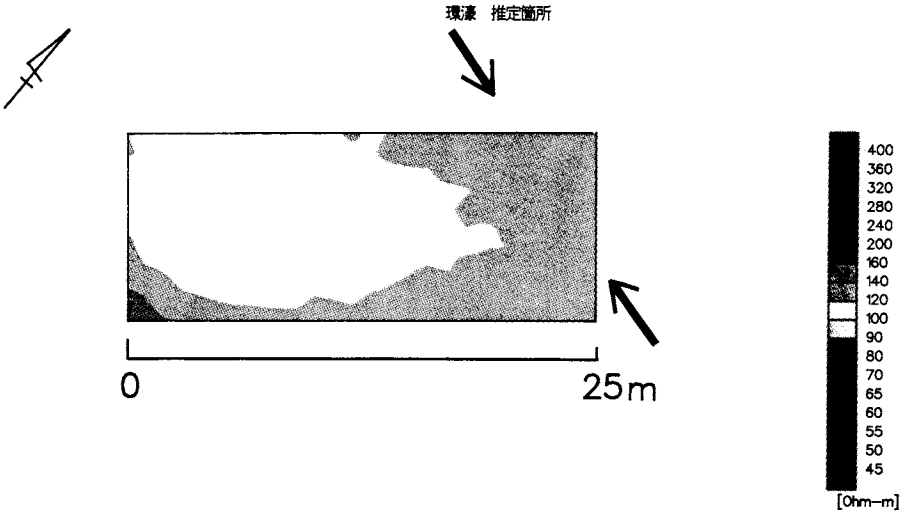
第102図　比抵抗マッピング　探査結果　B・F地区（深度1.2m）



第103図　比抵抗マッピング　探査結果　C区　（深度1.2m）



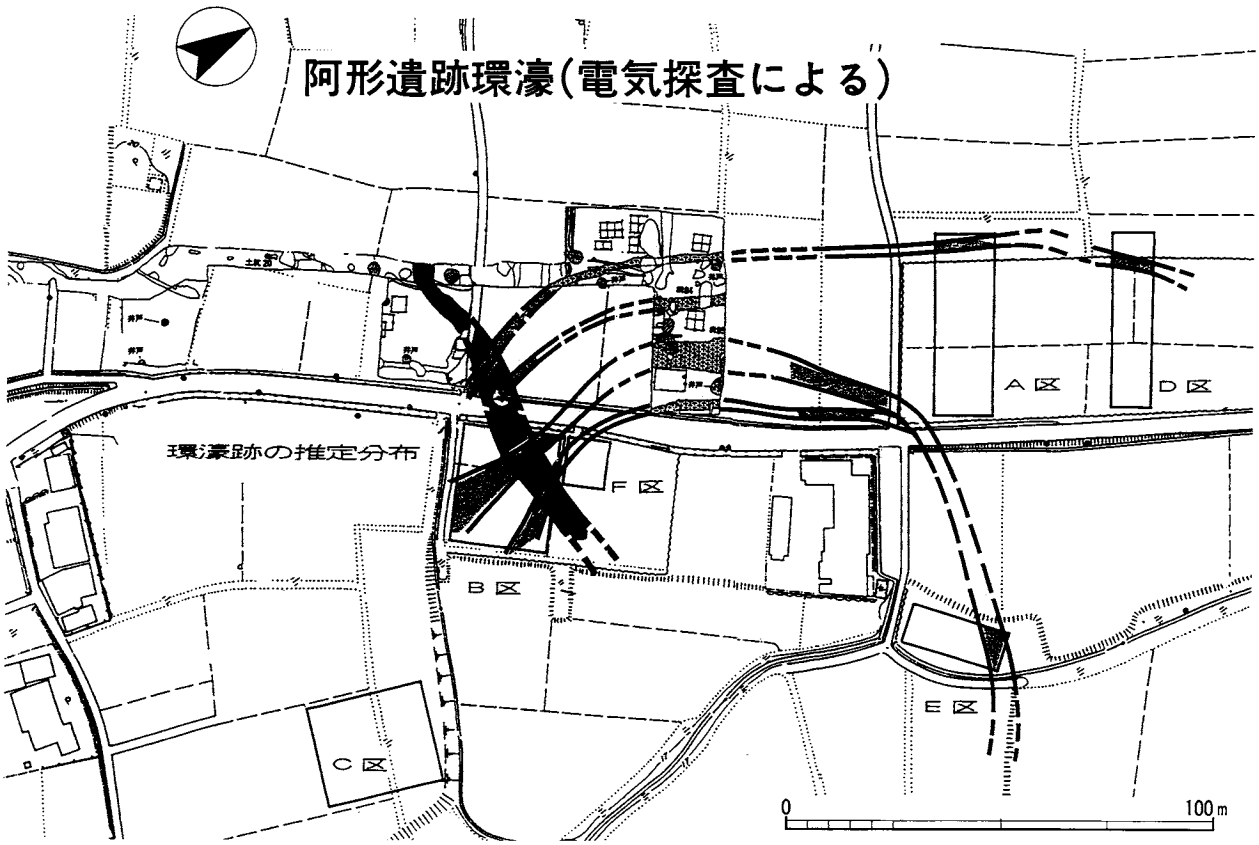
第104図　比抵抗マッピング　探査結果　D区　（深度1.2m）



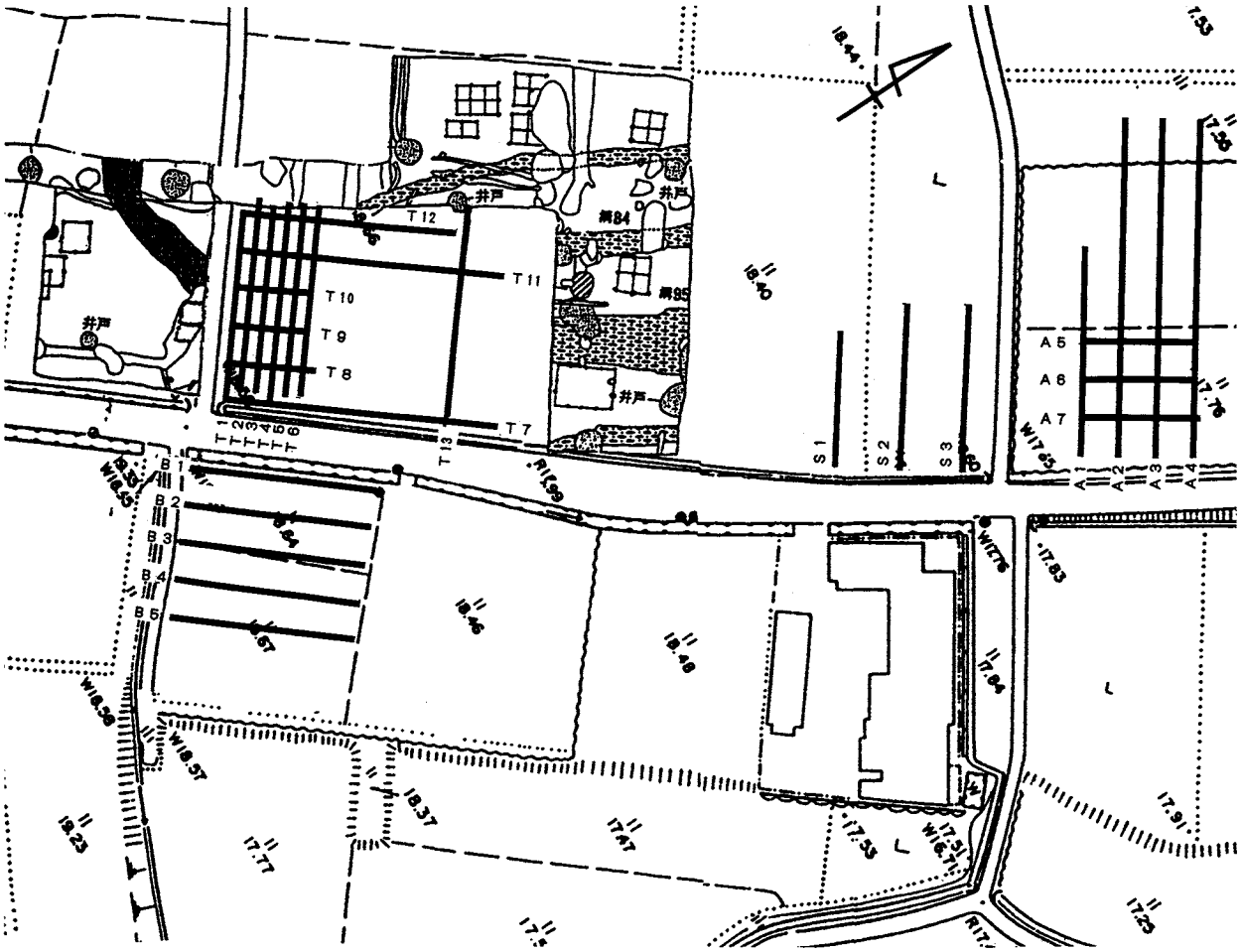
第105図　比抵抗マッピング　探査結果　E区　（深度1.2m）

第106図　比抵抗マッピング　探査結果　A～F区（1：1000）

凡例
環濠 推定箇所

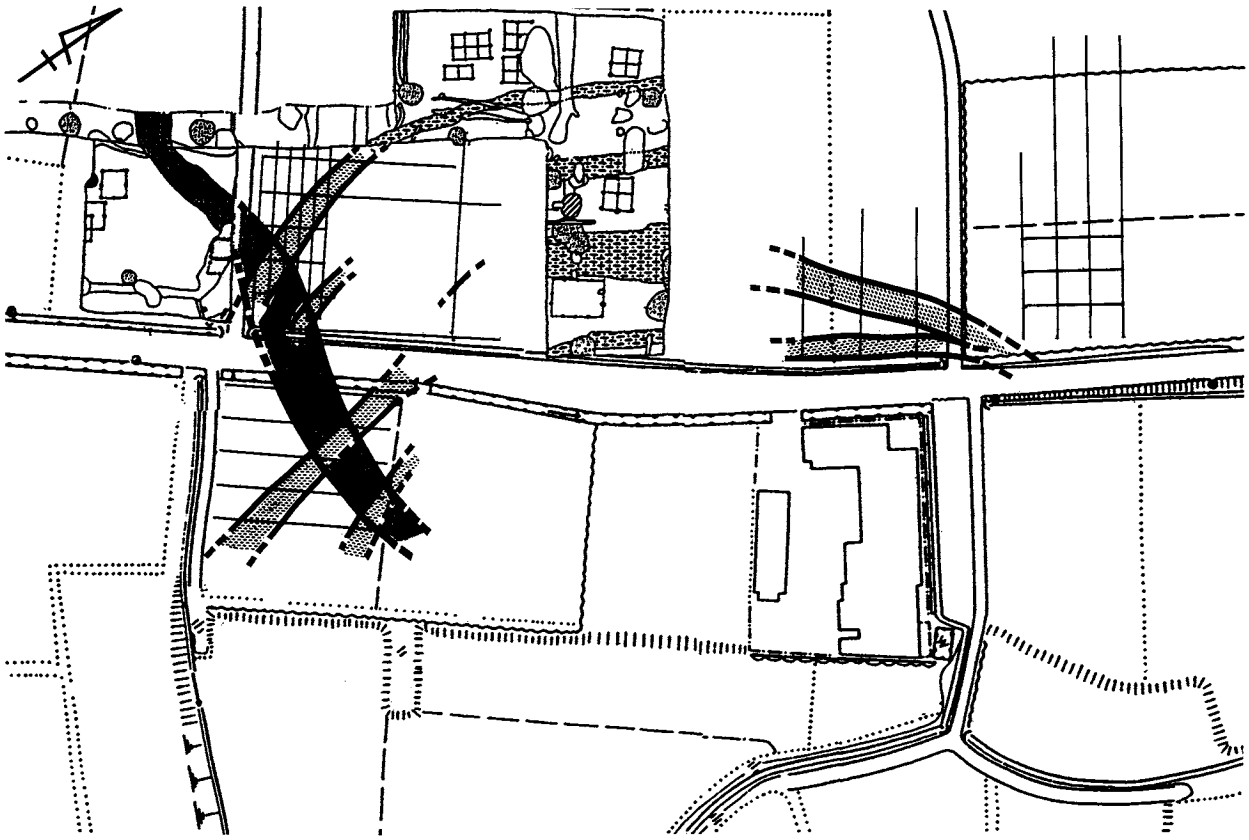


第107図　遺構分布推定図（1：500）



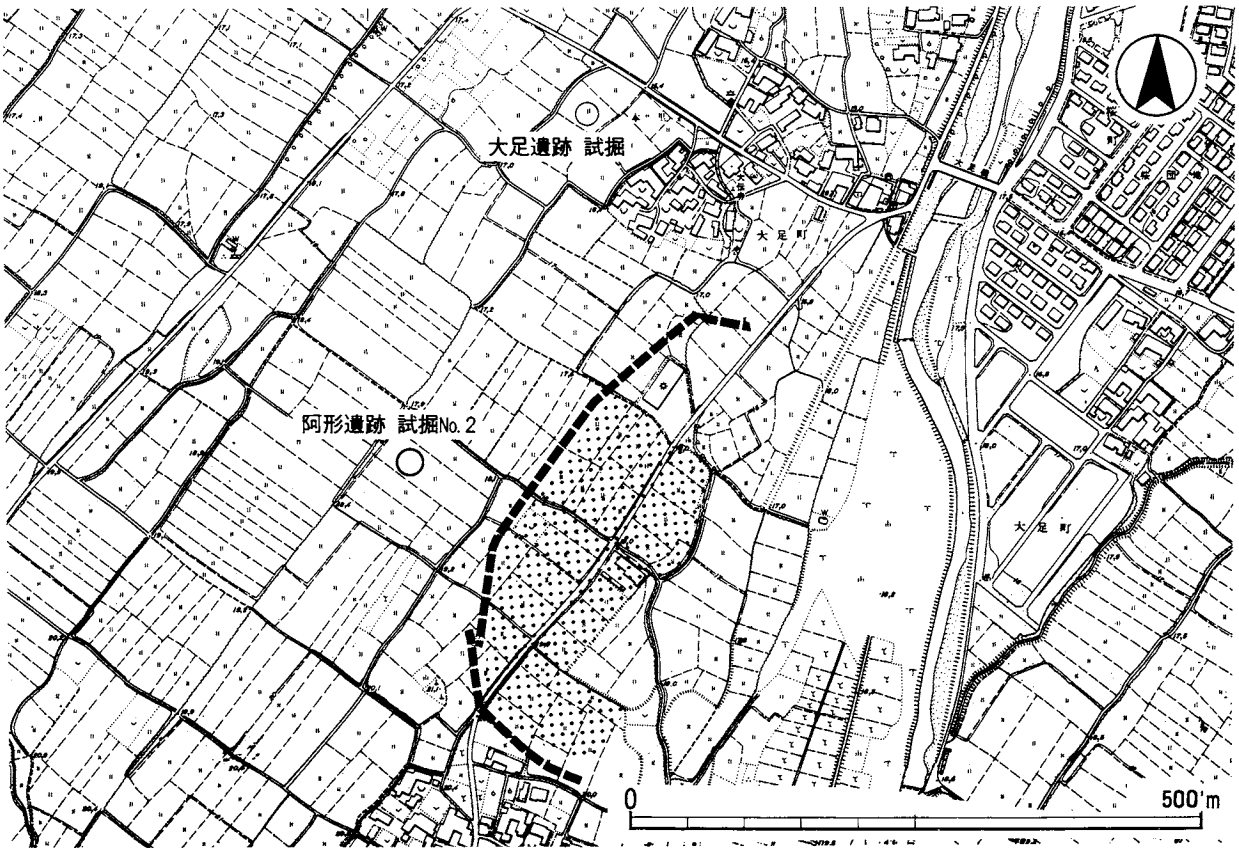
第108図　地下レーダー探査　測線位置図（1：500）

地下レーダー探査測線



第109図　地下レーダー探査　結果図（1：500）

溝跡（環濠）と推定される箇所



第110図　環濠推定範囲（スクリーントーンは遺構が確認されたところ）

5．結　語

1．環濠について

ＳＤ36、ＳＤ84、ＳＤ95、ＳＤ103の４本の溝は以下の特徴をもっている。

Ａ．いずれも弥生後期の遺物を含んでいる。

Ｂ．一定の間隔で平行して溝が掘られている。

Ｃ．防御施設を想定する程深く掘られている。

Ｄ．溝の両端で標高差がほとんど見られない。

Ｅ．溝の断面が逆台形やＶ字形をしている。

このような特徴から、この溝は集落の周囲を巡らす環濠である可能性が大きいと思われる。

環濠の時期としては、遺物の状況からＳＤ36・ＳＤ95が山中期に掘削され短期間で廃絶したと思われる環濠第１期、ＳＤ84・ＳＤ103が山中期に掘削され、欠山期に埋没した環濠第２期に分けることができる。また、短期的には４本の溝の同時存在も考えられる。環濠に伴う土塁等は土層からは認められなかった。また、土層を見るかぎり再掘削がはっきり読み取れるものはない。

出土土器は一番内側と思われる環濠ＳＤ103からが最も多く、外側の溝にいくに従って少なくなっているのは、ＳＤ103が最も集落に近い位置にあったからだと思われる。

ＳＤ103は土器が溝の最上面から、中位程まで密集していたことから、山中期中葉から欠山期にかけて継続的に投棄されていたことが考えられる。

また、標高差のあるＳＤ21はこれらの環濠が造られる以前に、西から阪内川の方向に流れていた人工的な溝と考えられる。

なお、上記の溝が環濠か否かを特定するため、調査区外での溝の状況およびそのひろがりを機械探査を導入して確認することとした。

調査は平成４年２月17日から２月20日までの４日間現地でおこなった。調査地は環濠の推定される区域を選定し、その区域を比抵抗マッピング測定と地下レーダー探査を併用して結果を出した。（７．環濠電気探査結果参照）

予想したように、ＳＤ21は４本の溝（環濠）を横切る形で先行している。環濠は径南北約100ｍ程の規模があり、ＳＤ103の東側では集落の可能性が推定出来よう。平成２年度の試掘調査において、環濠と同時期の土器を伴う遺構が多数確認されているところから、おそらくその部分に環濠に囲まれた集落が存在すると考えられる。なお、集落推定地域についてはすべて盛土保存となったため詳細は不明である。

当遺跡は、松阪市内で調査された環濠をもつ遺跡としては最初の例である。環濠をもつ弥生時代の遺跡は、地域の拠点的集落が想定できる。しかし遺物から見て、弥生時代後期中葉から後期後葉の時期に限定できるため、短期的な環濠集落であって、津市にある納所遺跡[1]のような弥生時代を通して連綿と存在した遺跡とは異なるものである。

2．弥生土器について

５条の溝から出土した弥生土器は、一部中期後葉のものが見られるが、ほとんどは後期に属するものであり、伊勢湾西岸における、この時期の土器編年を考察する上で、良好な資料を提供することになった。

ここで、近在の川原表Ｂ遺跡[2]や草山遺跡[3]の弥生土器と比較してみる。近接する川原表Ｂ遺跡は標高70ｍ程の丘陵の尾根の平坦面に位置する。ここでは、竪穴住居が６棟検出されているが、阿形遺跡とは異なる高地性集落的な要素をもつ。

川原表Ｂ遺跡の土器は、壺類では体部が算盤玉状に膨らむ器形が目立ち、細頸をもつものが目立つ。高杯は柱状部がいずれも円筒形を呈するか、杯部上段が小さく、大きく外傾する中空脚をもつものであり、阿形遺跡の初現と思われる高杯Ａ類も見られない。甕類で注目できるものは台付甕が非常に少ないことである。器台も受部と脚部がはっきりしているものが多い。以上のことから、阿形遺跡が山中式後期に始まるのに対して、川原表Ｂ遺跡は山中式前期には終末を迎えると思われ、両遺跡の併存期間はなかったものと思われる。

ミニチュア土器や甑形鉢が阿形遺跡で多数見られたものが、川原表Ｂ遺跡でははっきり確認できるものはいずれも１点ずつに過ぎない。このことは遺跡の性格の違いからくるものであろうか。

次に草山遺跡と比較してみる。台地上に位置する

草山遺跡は、後期に属する竪穴住居127棟、掘立柱建物111棟、方形周溝墓28基等が検出されている。

土器類は極めて似ている。壺・高杯・甕などいずれも阿形遺跡に存在するものである。特に高杯A・C類や台付の甕Bなど共通するものである。

その意味で当遺跡と草山遺跡とは、併存期間が推定できよう。

伊勢湾西岸に位置する当遺跡の弥生土器は東海西部系の影響が強く、畿内の影響は薄い。甕には畿内的要素をもつタタキ甕が見られるが、全体の中に占める割合は極めて低い。南勢地域と呼ばれる雲出川以南の弥生後期の遺跡を見ると、タタキ甕は当遺跡の東約3㎞に位置する草山遺跡ＳＸ114の台付甕、ＳＢ89の甕があるが、いずれも阿形高杯C類とともに出土している。伊勢市の野垣内[4]ＳＸ23出土の鉢も二重口縁壺や阿形高杯C類よりやや新しいものと共伴している。伊勢市中楽山遺跡[5]ＳＸ１出土の甕、三雲町貝塚遺跡[6]の甕は、いずれも阿形高杯C類と同じかやや新しい部類に属する。

阿形ＳＤ95出土のそれは高杯A類と共伴関係にあり、やや古いものである。いずれにしても、どの遺跡も極めて少ない出土例は、畿内との接触を考える上で数少ないものである。

南勢地域に特徴的な土器の流れについては、今回溝からの出土ということもあり、詳しい前後関係を追うのは難があろう。ただ、甕について山中期も欠山期のにも台付と台の無いものがいずれも存在するが、時期が新しくなるに従い、台付甕が増えてくるように見える。

後期中葉の山中期の甕については類例が少なく言及しにくいが、後期後葉の欠山期には、同じような体部や口縁部、調整であっても底部に台が付くものとそうでないものがある。また、その中間に位置すると考えられるような、粘土を足しただけのものやわずかに上げ底になっている底部形態のものも存在する。その意味で、煮沸形態も含め今後土器の型式変化を検討していく必要があろう。

以上、とりあえず弥生土器についての問題提起とし、詳しい分析・検討については、機会を改め報告したい。　　（福田哲也）

3．「蘓民将来」の呪符について

阿形遺跡の、15世紀末から16世紀前半頃に埋没したと考えられる井戸（ＳＥ１１０）の最下部から出土した木札には、墨痕跡も鮮やかに「蘓民将来子徒也」の文字が記されていた。近年全国的に出土例が報告されつつあるこの「蘓民」札が、疫病に対して身を護るための呪符であったと言うことについては、既に水野正好氏、野村史隆氏などにより明らかにされている。[7] よって周知の事実も多いものと考えるが、重複を恐れず、且つこれら先学の研究成果に導かれながら、以下「蘓民」札について若干の検討を加えてみることとする。

「蘓民将来」の文言が、今も三重県の度会郡を中心とした南伊勢や志摩地域の正月の門飾りに見られることは、民俗学的によく知られている。近頃では「笑門」の木札を掛ける家も多くなっているが、他の地域が概ね松の内で外してしまうのに対し、この地域では一年間玄関に飾るのを通例としている。このことは、文言が変わっても、一年間その家を疫病等の災難から護ると言う呪符の機能が、未だに失われていないことを示している。因みに野村氏は、「笑門」の文言は、「蘓民将来子孫門」の転化したものであるとされている。[8]

志摩の坂手町では「蘓民」の木札の裏面に「急々如律令」の文言と、「畊」・「☆」の記号を書いている。この事例では、裏面に「☆」を入れている点で、阿形遺跡出土の木札と非常に共通している。志摩地域では、「畊」・「☆」は海女具にも見られ、前者を「ドーマン」、後者を「セーマン」と呼んでいる。[9]

阿形遺跡出土の木札にも見られた「☆」は、「五行」を表したものである。五行説は古代中国の周朝末頃に成立したとされる思想で、「木・火・土・金・水」の５元素の運行で、時空などの全ての現象を表現しようとしたものである。その後陰陽思想と習合し、我が国には「陰陽五行説」として、７世紀初頭頃に伝わったと考えられている。例えば前近代において、年月日・時間・方位などを十二支十干をもって表していたことはよく知られているが、これもやはり「陰陽五行説」に基づくものである。

五行説には「相生説」と「相克説」がある。「相

生説」の配列は「木・火・土・金・水」で、その関係は「木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ」と言うもので、そして水は木を生じて切れ目なく循環している。それに対し「相克説」は「水は火に勝ち、土は水に勝ち、木は土に勝ち、金は木に勝ち、火は金に勝つ」と言うもので、その関係は丁度「相生説」の形成する五角形の対角を一筆で結んだものとなる。それが即ち「☆」である。県内出土の遺物の中では、平成元年度調査の下川遺跡ＳＤ37出土の16世紀中頃に比定される天目茶椀の外面底部に、漆と考えられるもので書かれていたのが唯一の事例である。[10]

次に「畊」は「九字」を表している。「九字」とは「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前」で、主として修験者が用いた護身呪法である。また「急々如律令」は古代中国において天子の出す文書の末尾文言に系譜が求められるもので、その後道教に取り入れられ、願いがいち早く達成されるための呪文に転化したものであると言う。これらの文言や記号は、慶長年間（1596～1614）筆写の『まじなひ秘伝』[11]にも頻々と見られ、中世以降の「まじない」で最も一般的に用いられてきたものである。こう言った点からすれば、坂手町の門飾りは、まさに呪符そのものと言うことができる。

さて「まじない」とは、基本的に神仏などの「世の常ならざる力」によって、尋常では知り得ないことを知り、また願いを達成させるための種々の方法であると言える。そしてそれは、概ね「占」と「呪」に大別集約することが可能であろう。勿論「占」と「呪」は不可分の関係にあるのだが、中世における「呪術」の担い手として直ぐさま思い浮かぶのが密教僧、それと密接な関係にある修験者、そして陰陽師であろう。

陰陽師は、律令制下においては陰陽寮に属し、専ら「占」を司ってきた。その際の占いの体系はまことに複雑で、中でも「式盤」については未だ不明瞭な点が多く、必ずしも解明されていない。

陰陽思想によれば、万物は「大極」が起点になると言う。それが陰陽の「両儀」に分かれ、更に「四像」、「八卦」に細分されてゆく。それらは陰陽の組み合わせであり、「八卦」を２つ合わせた「六十四卦」の運行で吉凶を占うのである。

「八卦」は、陽のみの組み合わせから順に「乾・兌・離・震・坎・艮・坤」の文字が当てられている。小松和彦氏によれば、北東の方向が「鬼門」となったのは、十二支での北東が「丑寅」即ち「艮」で、「八卦」の大凶に当たっているからだとされている。阿形遺跡の土坑ＳＫ74から一括して出土した16世紀中頃の数百枚もの土師器皿の中に、「乾」・「艮」・「坤」の墨書のあるものがあった。これなどはまさに「八卦」と考えられ、当時この地で陰陽道に基づく呪術が行われていたことを想起させ、興味深い。

ところで、律令制下においては、「占」が陰陽師であったのに対し、「呪」は呪禁師によって行われれていた。呪禁道自体はやがて廃れてゆくが、その呪詛法を取り入れた陰陽道が、平安時代の中頃から「呪」を専らとするようになって行く。つまり、中世の「呪」の担い手は、前述した様に陰陽師のみではなく、密教僧や修験者もいた。しかし彼らは、それぞれ独自の呪法を持ちつつも複雑に習合しあい、我が国独特の「呪」の世界を形成してゆくのである。先に見た坂手町の門飾りも、それらの複合体であった。従って「蘇民」札は、それが疫病に対するものであることは明らかだが、その成立過程において、やはり種々の思想や信仰が幾重にも折り重なっていたものと言うことができる。

今に伝わる「蘇民将来」の伝承の中で、現在のところ最も古い形を有していると考えられるのが『備後国風土記』である。その逸文を載せる『釈日本紀』の成立が13世紀後半であるところより、この伝承は遅くともそれ以前には成立していたと言うことができる。概略は、来訪した「武答神」が彼を疎略に扱った「弟将来」に復讐し、貧しいながらも「武答神」を饗した「蘇民将来」の家族のみは救うと言うものである。その中で「蘇民」札の呪符としての性格を最もよく示しているのが「武答神」の、「後世に疫病が発生した場合、蘇民将来の子孫と言って茅輪を腰に着けたならば、疫病から免れる」と言う言葉である。「蘇民」札の呪符としての性格の起源は、まさにこの言葉に凝縮されていると言えよう。

ただ、ここで注意しなければならないことは、疫病会費の具体的な方法が、この説話では「蘇民」札

ではなく、「芽輪」であったことである。「芽輪」も、疫病の会費や延命の呪法として広く普及していた。従って、「蘇民」札の成立を、単純に「芽輪」からの転化という図式で理解することはできない。つまり、『備後国風土記』の伝承は、「芽輪」の系譜譚でもあったのである。勿論、「蘇民」札もこの伝承の系譜上に位置することは確かであるが、「蘇民」札の成立自体には、更に他の要因が複雑に関係しているものと考えられる。今この問題に答える準備がない。今後の課題である。

ところで「武答神」は、自ら「速須佐雄神」と名乗っている。この「須佐雄」が、紀記の神話に登場する「スサノオ」を指していることは言うまでもない。「蘇民」説話が日本にその期限を持つかについては大いに疑問であるが、その中に、我が国の在来祭祀が加味されていた可能性も否定できない。

かつて宮田登氏は、「祀り上げ」と「祀り捨て」による「神」から「怪」へと言う、我が国在来神の有する両儀性を明らかにされた。[12] この特質は、饗した「蘇民将来」にとっては「守護神」となり、それを拒んだ「弟将来」には荒ぶる「疫神」となった「武答神」にそのまま当てはまるものである。

ただ「スサノオ」が何故「疫神」と同一視されるようになったのかについては、今のところ不明であると言わざるを得ない。しかし「スサノオ」が「荒神」の象徴的存在であること、また他界と同質と見做される「根国」の主でもあると言う属性と無関係ではないと考えられる。猛威を振るう疫病とその死のイメージが、ある時期「スサノオ」に重なったとしても、決して不思議ではない。

それに対し、やはり「蘇民」伝承を載せる『祇園牛頭天王縁起』[13] によれば、来訪した神を「武答天王」の子の「牛頭天王」としている。「牛頭天王」は道教の神で、八将神と八万四千六百五十四神王をその眷属に持つ「疫神」である。恐らく「スサノオ」から「牛頭天王」への転化は、「疫神」と言う共通性を介してのものと思われる。

以上「蘇民」札は、その基となった伝承においては在来祭祀と道教の、そして呪符としては更に陰陽五行や修験道をも取り込むと言う、非常に複雑な成立過程を有していたのである。

さて、『御湯殿上記』大永7年（1527）正月4日条に「きおんのそみんしやうらいまいる」（祇園の蘇民将来参る）とあるのが、管見内での文献史料上の初見である。ただ、長享2年（1488）正月5日の条にも「きをんより御まほりまいる」（祇園より御守参る）とあり、同義と見てよく、更に初見例を遡らせることも可能であろう。また明応9年（1500）正月4日条には「きおんより五れう御まほりまいる」（祇園より御霊御守参る）ともあり、疫病の流行が所謂「御霊信仰」とも密接に繋がっていたことを如実に示しており、興味深い。

これらの事例は、現在の民俗事例と用法的には殆ど同じであったと見てよい。阿形遺跡の呪符も上両端部に繰り込みがあり、柱などに括り着けることを意図していたと思われる。もっとも、『御湯殿上記』内での事例の場合、大永8年正月6日条に「きおんのそみんしやうらい五わうまいる」（祇園の蘇民将来牛王参る）とあり、或いは阿形遺跡のような木札ではなく、「牛王宝印」の紙札ではなかったかとも考えられる。

以上の点からすれば、阿形遺跡出土の呪符は年代的にも『御湯殿上記』の事例に合致しており、新年の到来と共に廃棄されたものと見なければならないであろう。反面井戸からの出土を、それがたまたま井戸に捨てられ、有機質ゆえに、偶然井戸遺構内に残存していたと即断することもできない。

現在でも御守や御札を他のゴミと一緒に捨てたりせず、相応の寺社境内で焼却されることは、通常目にする行為である。南伊勢でも、一年間飾られていた門飾りは大晦日頃に、近くの神社で焼却されるのである。この場合は火による浄化、即ち「送り」の行為と見做すことができる。そして阿形遺跡の場合も、同一線上で捉えるべきと考える。つまり、井戸に投げ入れることが、言わば「送り」と観念されていたと言うことができる。

例えば、全国的に見られる「虫送り」の事例の場合、「御霊」である斎藤実盛を村域から追い出すことで儀礼が完結している。これは即ち「御霊」の「異界」への「送り」であり、村の境界が即ち「異界」の境界と観念されていたことを示している。そして実盛の「御霊」を川に流す事例の存在は、川が、

ひいては水の存在自体が「異界」の境界と観念されていたことをも示していると言うことができる。

近年、井戸や泉、河川・池などの水に関連する場所での祭祀が注目され、多くの優れた成果が蓄積されている。[14] 中でも水自体に神格を見る「水霊信仰」の探究が中心となっているが、人形や人面墨書土器などの事例から、「祓」の場としての水の重要性も指摘されている。[15] こうした「禊」の場合、水に「穢」を除去する浄化能力があると信じられていたことによると考えられるが、飲んだり、それを以て煮炊きをすることで邪気を祓い、若返ると言う「若水」にも合い通じる「聖水・神水」観念と位置付けることができるであろう。

それに対し、海や川などが「異界」との境界として機能し、水を媒介として「異界」と通じることができるとの観念のあったことも指摘されている。つまり、水に流す行為は「異界」へ「送る」ことに通じる。阿形遺跡の井戸の場合も、「神の物」としての呪符の「送り」の場として選定されたと考えることができるであろう。　　（小林　秀）

付．阿形遺跡周辺の試掘結果

阿形遺跡から後の時代は、やや北西に広がっていくことが伺える。そのことは試掘調査[16]が物語っている。（第110図）

阿形遺跡の調査区の北西側では、弥生後期の高杯（256）を出土した試掘坑（試掘坑№60）がある。高杯の柱状部のみの出土であるが、環濠の時期に一致することが分かる。

それに対し、壺（257）、甕（258）、籠目模様を底部にもつ壺か甕の底部（259）、高杯（260～261）、ミニチュア土器（263～266）、有孔円盤（267，268）はすべて一括して別の土坑（試掘坑№2）からの出土である。籠目模様をもつ土器については、県下では天道遺跡[17]など、現在のところ数える程である。この土坑からの出土した土器は、すべて並べられたようなかたちで出土した。高杯から判断して古墳時代はじめごろの土坑であろう。有孔円盤やミニチュア土器の出土から考えて、祭祀的な意味合いの強い土坑と言えよう。

また、阿形遺跡に近接する大足遺跡の試掘調査では、同じように弥生時代後期から古墳時代はじめの遺物が出土している。（第111図参照）

（269～271）は高杯であるが、（269，270）が三方透孔をもつのに対して、（271）はそれをもたない。また（271）は柱状部でやや膨らみをもつ。（272～274）はS字甕である。（269～274）は一括して一つの土坑（試掘坑№17）からの出土である。

良好な資料の出土したところは、阿形遺跡も大足遺跡もすべて盛土保存となった。そのため、詳細は不明のまま残ったわけであるが、良好な遺構が埋まっていることを、ここに明記するものである。

（福田哲也）

［註］

① 三重県教育委員会『納所遺跡－遺構と遺物』1980

② 松阪市教育委員会『川原表Ｂ遺跡』「中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告」1990

③ 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報№1～№10』1982～1985

④ 三重県教育委員会『野垣内遺跡』「昭和48年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告」1979

⑤ 三重県教育委員会『中楽山遺跡』「昭和47年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告」1973

⑥ 三重県教育委員会『貝塚遺跡』1976

⑦ 水野正好氏「招福・除災－その考古学－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集　1985年）
野村史隆氏「伊勢・志摩海民の漁撈と信仰」（海と列島文化第８巻『伊勢と熊野の海』小学館　1992年）

⑧ 野村氏前掲論文

⑨ 志摩の民俗事例につては、野村氏の御教示を得た

⑩ 『平成元年度農業基盤整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告書－第２分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1990年

⑪ 国立国会図書館所蔵

⑫ 宮田登氏「祀り上げ祀り棄ての構造」（『国文学』第20巻第１号　1975年）

⑬ 『続群書類従』第３輯上所収

⑭ 主なものに、岡田精司氏「大王と井水の祭儀」（講座日本の古代信仰第３巻『呪ないと祭り』学生社　1980年）、駒見和夫氏「井戸をめぐる祭祀－地域的事例の検　討から－」（『考古学雑誌』第77巻第４号）がある。

⑮ 金子裕之氏「平城京と祭場」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集　1985年）

⑯ 三重県埋蔵文化財センター「平成３年度試掘調査結果」による　1990

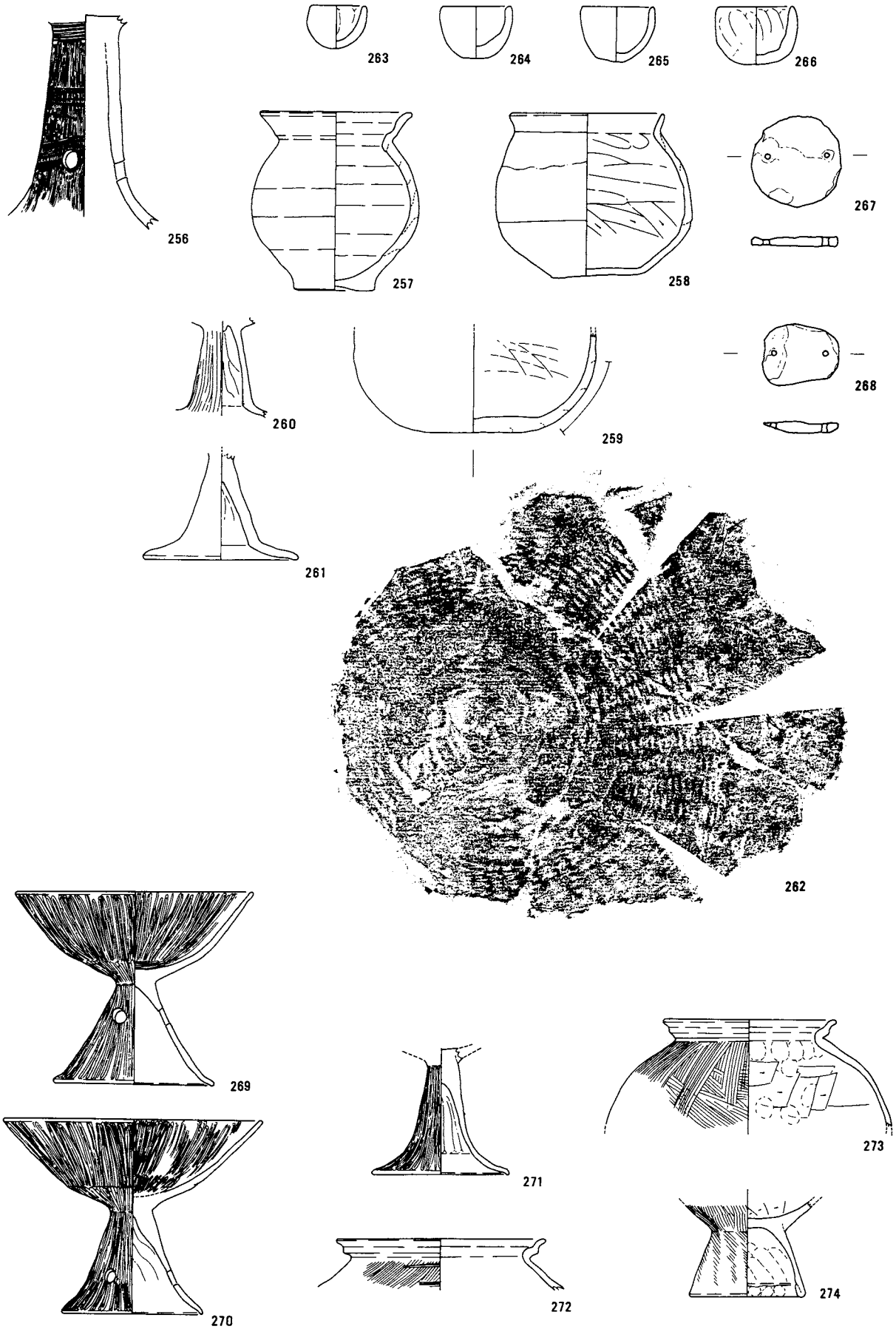
⑰ 三重県教育委員会『天道遺跡』1989

＜参考文献＞

・松阪市教育委員会『松阪市史　第２巻資料編』1976
・松阪市教育委員会『粥鍋遺跡』1987
・伊勢市教育委員会『隠岡遺跡発掘調査報告』1987
・愛知県埋蔵文化財センター『山中遺跡』1992
・愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990
・愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡』1982
・東海埋蔵文化財研究会『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』1990
・寺沢薫、森岡秀人『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅰ・Ⅱ』木耳社
・　同上　『弥生土器の様式と編年－近江編』木耳社
・小松和彦氏「呪術の世界」（講座日本の古代信仰第３巻『呪ないと祭り』学生社　1980年）
・「魔と妖怪」（日本民俗文化大系第４巻『神と仏』小学館　1983年）
・中村義雄氏『魔よけとまじない』塙新書　1978年

＜参　考＞

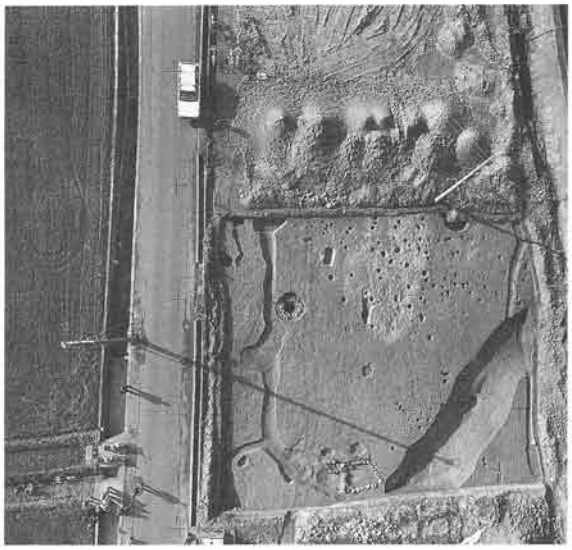
遺物№9の石の実測及びトレースは久保勝正氏による。



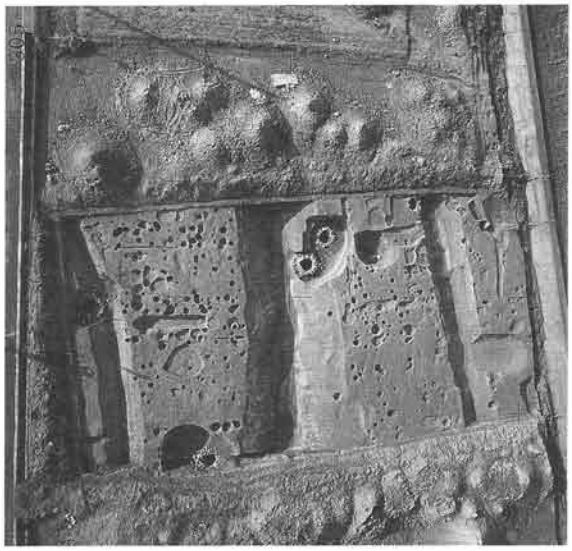
第111図　試掘坑出土遺物（256は阿形No.60，257～268は阿形No.2，269～274は大足No.17）（石製品及び拓本は1：2，その他は1：4）

遺跡全景（北から）

南側面調査区（北から）



中央面調査区（上空から）



北東側面調査区（上空から）

北西側面調査区（北から）

ＳＤ103北側断面

図版19

ＳＤ103遺物出土状況（北から）

ＳＤ103（北から）

ＳＤ95（北東から）

ＳＫ115（南から）

ＳＥ128（北から）

ＳＥ91（西から）

ＳＥ98（手前）、ＳＥ94（西から）

ＳＥ73（北から）

ＳＸ81（東から）

ＳＤ117石組（東から）

図版21

11

12

16

17

26

21

27

29

37

39

68

65

55

56

75

45

94

104

73

80

103

93

図版23

117

105

108

113

112

119

134

121

127

124

125

131

143

144

149

151

154

158

161

166

172

174

175

179

図版25

180

224

243

196

218

198

200

223

205

229

230

240

227

248

254

237

275

280

276

283

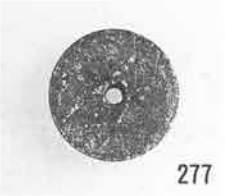
286

295

298

299

287


277

314

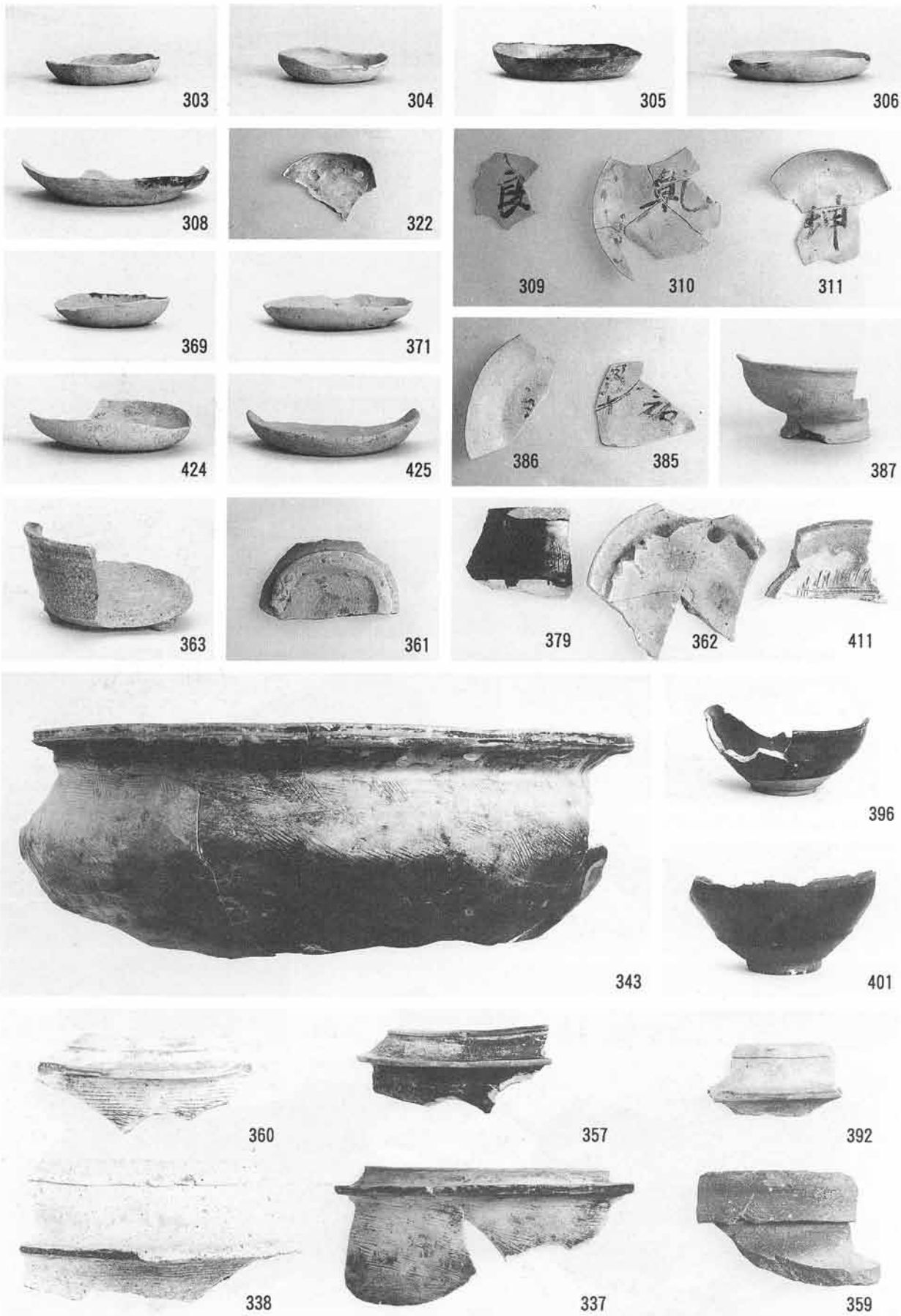
349

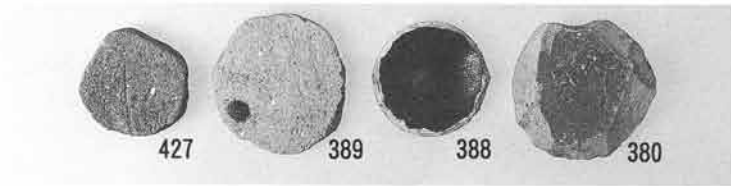
351

335

300

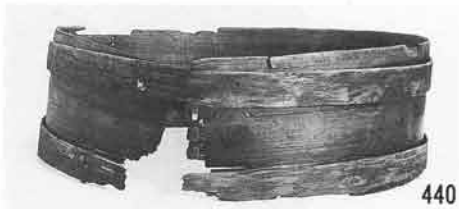
図版27


303
304
305
306
308
322
309
310
311
369
371
424
425
386
385
387
363
361
379
362
411
343
396
401
360
357
392
338
337
359


427
389
388
380

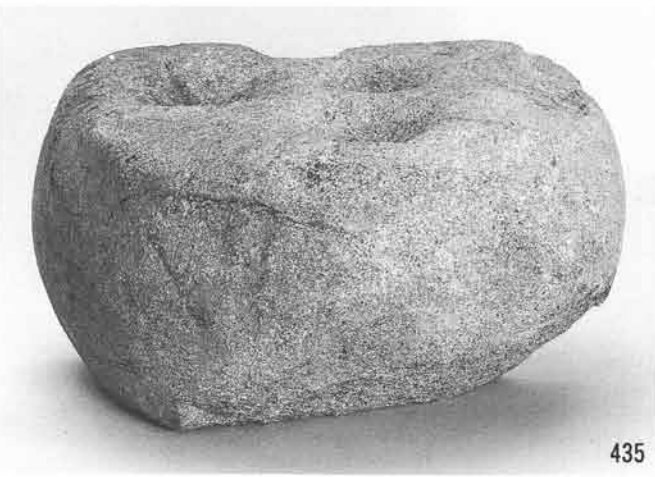
439

296


440

336

441
～
444


435

437

435

437

図版29

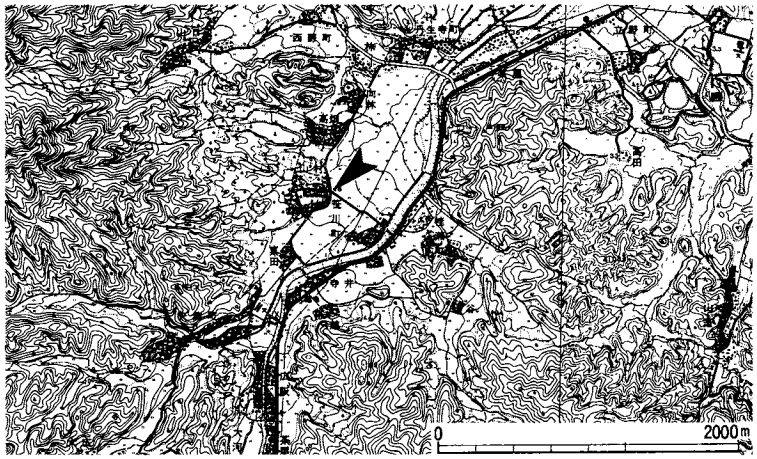
446

447

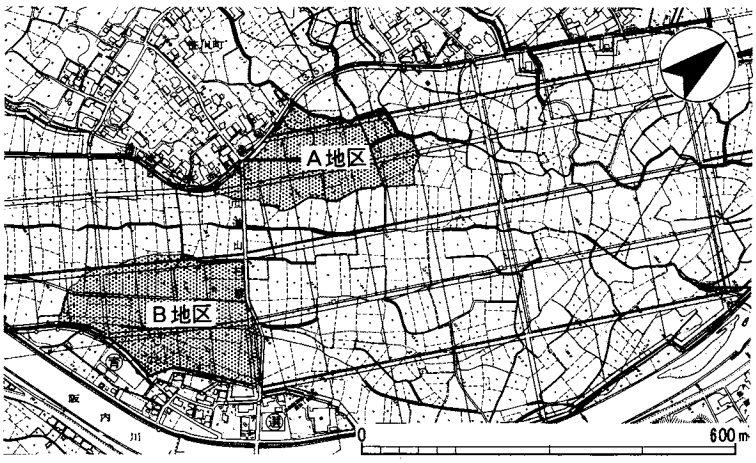
375

446は赤外線写真、447はＸ線写真

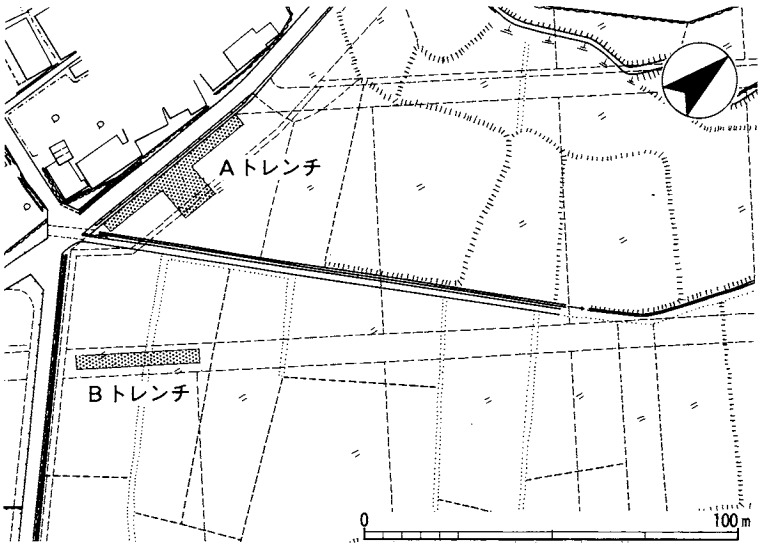
V. 松阪市笹川町　下恵本遺跡



第112図　遺跡位置図（1：50,000）



第113図　遺跡範囲位置図（1：12,000）
A地区＝下恵本遺跡　B地区＝笹川遺跡



第114図　調査区位置図（1：2,000）

当遺跡は松阪市笹川町（八幡沖地区）に所在する地形的には阪内川上流域左岸の緩やかな河岸段丘上（標高約48m）に位置し、現況は水田である。当遺跡周辺には左岸山麓に多くの遺跡の所在が確認されている。

平成3年2月に行った第一次範囲確認調査の結果2,000㎡にわたって遺跡が所在することが判明。平成3年度県営ほ場整備事業にかかわり、第二次調査を実施。調査期間は平成3年9月4日～12日まで行い、面積は約260㎡である。調査は、排水溝に沿って南北方向と南東方向とに各々トレンチを入れA区・B区として遺跡の確認を行った。以下、A・B区について概述する。

A区

南北に延びる排水路部分で、幅2m、長さ46m、一部方形（9m×10m）になる調査区である。調査面積は182㎡である。調査区の南側は湿地であり地山面から水がしみ出てくる。調査区土層の基本的層序は第Ⅰ層；耕土（暗灰色土）、第Ⅱ層；青灰色土、第Ⅲ層；黄色土、第Ⅳ層；黄灰土、第Ⅴ層；黄褐色土（地山面）であり、この第Ⅴ層で遺構を検出する。耕作土から遺構検出面までの深さは、約47cmで、包含層の厚さは17cmである。

検出した遺構は、溝1条、掘立柱建物2棟（内1棟は南東隅に土坑をもつ）、焼土坑3基、小穴等があり、これらの遺構の時期は、遺物より平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半）にかけてのものと考えられる。

SD1は深さ約30cm、幅不明。東西に延びる溝の一端を検出する。溝底より甕の頸部が出土。

SK2は溝状になった遺構の中央付近

で検出したが直上部に耕土が混っており後世においての攪乱の跡がある。また、この土坑には炭化物がみられ、灰釉陶器の底部片が出土した。

ＳＫ３は短辺２m、長辺4.5m、深さ７cm程度の隅丸長方形の土坑である。南北両端に炭化物を含んだ焼土がみられ、土師器の皿（1，4，5）、椀（6，3）、甕（7）、灰釉陶器壺（2）、などがある。

ＳＫ６は調査の北側へ延びるため正確にはわからないが、直径1m、深さ約20cmの炭化物を含む土坑である。山茶椀の底部片が出土した。

ＳＢ４は桁行４間（9.3m）×梁行３間（7.0m）の東西棟の総柱建物である。建物内の南東隅に隅丸方形の土坑を伴い、この土坑は建物内の１間×２間の範囲におさまる。棟方向はE7°Sである。柱間寸法は、桁行が2.3m等間で、梁行が2.3m等間となっている。柱掘形は径30cm程の円形で、柱穴よりＳＫ３と同時期の土師器椀の底部片が出土した。

ＳＢ５は桁行３間（約7.0m～）以上×梁行２間（約5.0m）の南に延びる南北棟の総柱建物である。棟方向はN16°Eである。柱間寸法は桁行が2.0m＋2.2m＋2.7m、梁行が2.4m等間で、柱掘り方は径30cm～50cmの円形である。柱掘形より土師器杯、皿、山茶椀などが出土した。

出土遺物の大半は平安時代後期（11世紀後半～12世紀前半）のもので、以下遺物観察表を参照されたい。

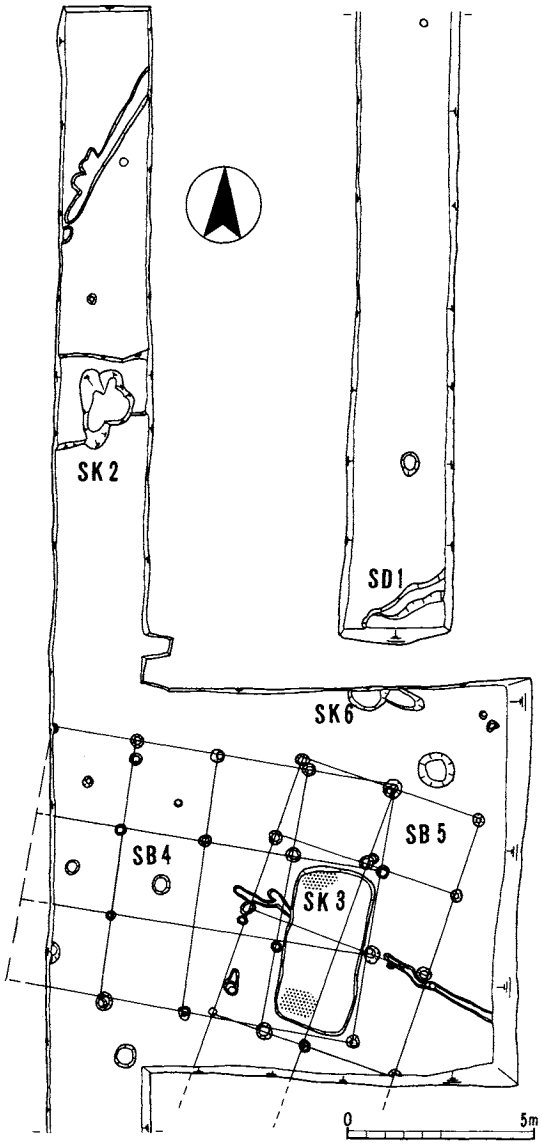
Ａ区における南東隅に土坑を伴う東西棟の建物は三重県各地で検出されている。これらの建物は平安時代後期～鎌倉時代に見られる住居の一形態となっており、土坑の機能と建築構造の画一性が注目されている。

当遺跡においてもＳＫ３からの出土遺物によりＳＢ４は平安時代後期の建物と考えられる。また、柱穴に根石を持たないことからも鎌倉時代以前の建物と見ることができ、遺物の時期と呼応する。

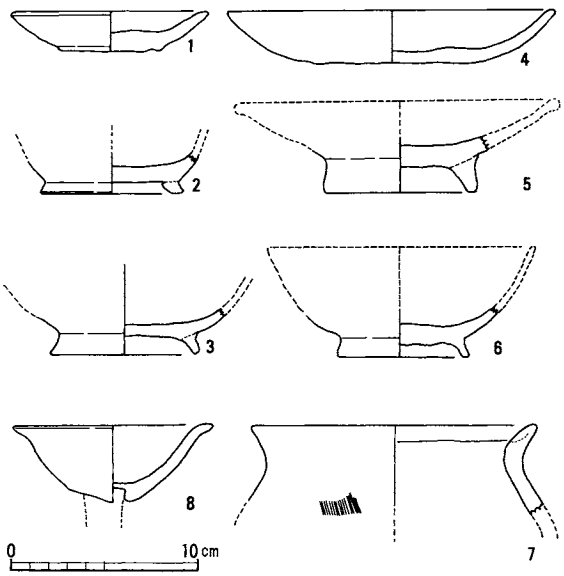
Ｂ区

北東方向に延びる排水路部分で、幅約2.5m、長さ32mの調査区である。調査面積は80㎡である。

検出した遺構は、溝３条、土坑１基である。溝は３条とも深さ２～８cm、幅20cm程度であり、１m強の等間隔な平行した溝であり、南北方向に調査区外



第115図　Ａトレンチ遺構図（１：200）　▒…焼土



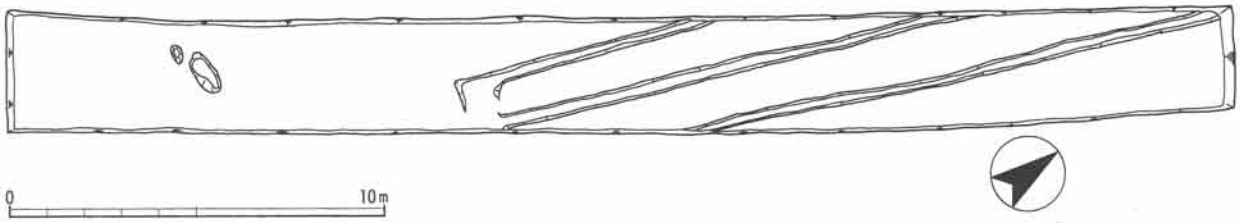
第116図　ＳＫ３からの出土遺物（１～７）
・表面採取（８）（１：４）

へ延びている。溝からの遺物はない。

土坑は長径1m、短径50cm、深さ5cmの窪み状になった長円形である。土坑からの遺物はない。

遺構にともなう遺物はないが、包含層より奈良時代の遺物が若干出土するが、細片のため実測は不可能である。また、ここでは試掘の段階で古墳時代と思われる高杯（8）が採取されている。

B区における3条の溝はその形態から規格性が高く人為的につくられた溝のようである。ただし、浅いため溝としての機能には疑いがあり溝上部が削平されたとも考えられる。また、古代の耕作にともなうものとも考えられる。　（吉澤　良）

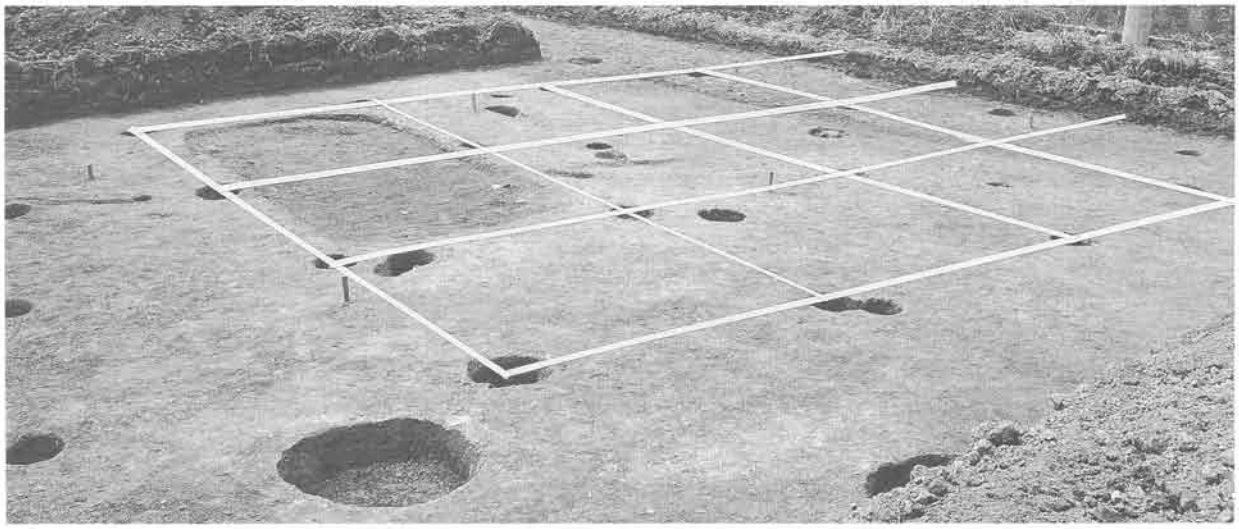


第117図　Bトレンチ遺構図（1：200）

第45表　Aトレンチ出土遺物観察表

No.	登録No.	器種	出土位置 遺構	法量(cm) 口径	器高	その他	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	02-01	ロクロ土師器	SB4　SK3	10.5	2.1		・内外面ロクロナデ、底部糸切り痕 ・底内面指オサエ	密	良	淡茶灰色	口縁部一部欠	
2	02-04	灰釉陶器　壺	SK2	－	－		・ロクロ水引、糸切り痕 ・底部上外面に釉薬カブル	〃	硬	灰白色	底部のみ	
3	02-03	ロクロ土師器椀	SB4　SK3	－	－		・内外面ロクロナデ ・底部糸切り痕	〃	軟	〃	〃	
4	03-02	〃　皿	〃	18.4	2.7		・底部内面指オサエ、内外面ロクロナデ ・外面底部回転糸切り痕	〃	良	淡茶褐色	口縁部～体部	
5	03-01	ロクロ土師器台付き皿	〃	－	－		・内外面ロクロナデ ・外面底部回転糸切り痕	〃	〃	〃	底部のみ	
6	02-02	土師器　甕	〃	－	－		・内外面ロクロナデ ・底部糸切り痕	〃	〃	赤褐色	〃	
7	02-05	土師器　甕	〃	15.2	－		・口縁部ヨコナデ ・体部外面ハケメ	やや密	〃	淡褐色	口縁部	煤付着
8	03-03	〃　高杯	表面採取	10.7	4.7＋α		・内面ナデ、外面板状のナデ ・底部に脚欠部痕あり	密	〃	淡黄褐色	脚部欠	

図版30



SB4近景

Ⅵ. 一志郡嬉野町　宮野広遺跡

宮野広遺跡は一志郡嬉野町宮野に所在し、雲出川の支流中村川左岸の河岸段丘上（標高43.1m）に位置する。現況は水田及び畑地である。

県営ほ場整備事業にともない平成３年２月に第一次範囲確認調査を実施した。その結果、縄文時代の溝、小穴などの遺構と共にほぼ同時期の土器が出土し、約19,000㎡にわたる遺跡であることが判明した。

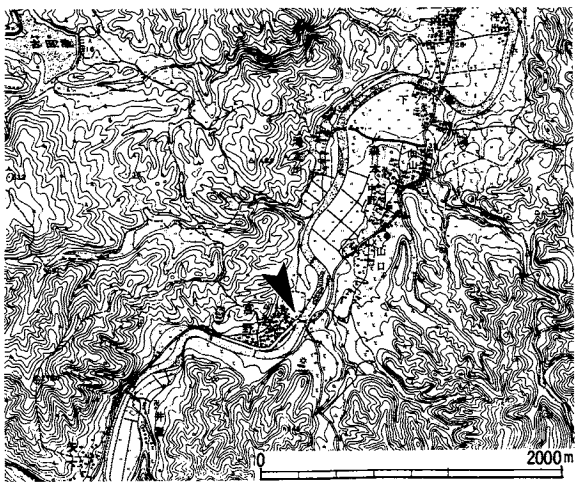
そのため、事業地内の削平を受ける部分について第２次範囲確認調査を実施。調査は、ほ場整備により削平を受ける排水溝部分約190㎡について実施した。期間は平成３年９月24日～25日の両日をもって終了。

調査は排水路部分に沿い東西に38×2.5m、31.5×３mのトレンチを各々入れ、Ａ区・Ｂ区とする。検出した遺構はＡ区で土坑７基（長軸１～２m、短軸70cmの楕円形の土坑。いずれも遺物なし。）、溝３条である。Ｂ区は調査区東端の自然の落ち込みを除いて人為的な遺構は検出されなかった。

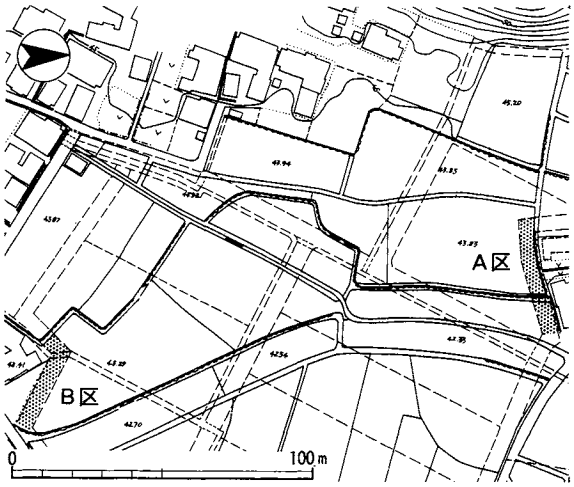
Ａ・Ｂ区の基本的な土層層序はＡ区では、第１層＝耕土（暗灰色土）、第２層＝暗黒色土、第３層＝黄褐粘質砂土（検出面）である。遺構までの深さは耕作土から検出面まで約60cmであるが、地山面はトレンチ東から西に向かってなだらかに傾斜する。その比高差は約70cmで西側がやや微高地となっている。また、トレンチ中央付近では田の畦や排水路が通るなど盛り土や攪乱が著しい。

Ｂ区は耕土より約40cm～50cmで地山に達し、淡黄褐色（礫混じり）土を呈する。

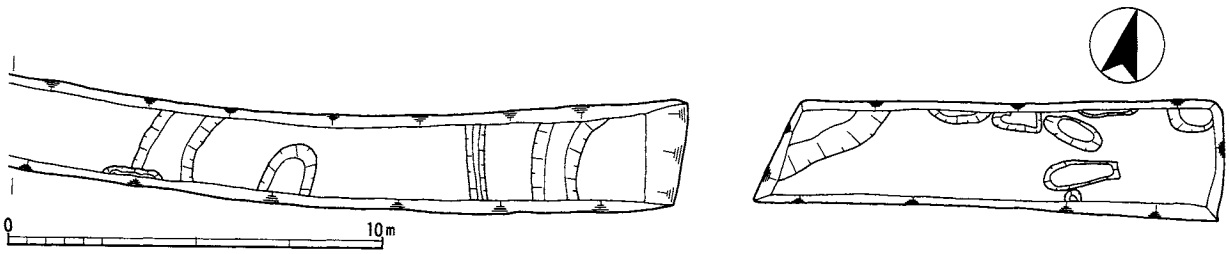
遺構の時期は遺物を伴わないため不明であるが、１次の確認調査（当遺跡の北東150mの所で試掘を入れており、全体の65％の試掘箇所で縄文時代の遺物が出土している。）の結果を踏まえると、当遺跡周辺にはかなり濃密な縄文時代の遺構があると思われる。　（吉澤　良）



第118図　遺跡位置図（１：50,000）



第119図　調査区位置図（１：2,500）



第120図　Ａトレンチ遺構図（１：200）

平成4(1992)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデーター化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告９９－２

ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか

1992年３月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　光出版印刷株式会社